

奇譚クラス

奇譚
ク
ラ
ブ



五
角
四
分

5



新時代の娯楽雑誌

1053.5

美の縛緊



断片



痛苦の欽慕

怪奇画集



★ 奇譚クラブ 五月号 目次 ★

プリストートルとジイルス

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場
口絵 荒縄による緊縛感のスポット

高月大三

塚本鉄三

怪奇画集 (ドイツのグロテスク画集より)

奇書紹介 マゾヒストの會

ソフィア伯爵夫人著
沼正三訳 (16)

風流責各態

吾妻新 (29)

捕縄雜考

嶽收一 (34)

僕の記録 (完結篇)

黒井珍平 (38)

らぶ・すれいぶ

鬼山絢策 (48)

家出の味

牧さち子 (152)

雌獸の手記

近見啓 (98)

女王様ごっこ

飛田良二 (54)

偽われる殉教者

成瀬亮 (60)

好淫動物の挿話

谷純一 (68)

續・硝子便所

芳野眉美 (70)

道徳的な物語

笹田豊 (76)

私の歎び

瓜生珠子 (76)

マゾヒズムの極致

中康弘道 (82)

少年及び女性の切腹

ある女のドレイと
なつた男の手記

角田平八 (92)

淫

松井籟子 (166)

吊られた白鳥 (被つた日記帖より)

川端多奈子 (108)

魔都上海の思い出から

姫宮四郎 (116)

奴隸の安の記

中野安太郎 (125)

縛られた妻以前

早川新二郎 (132)

盲いたる手

藤安節子 (140)

川端多奈子さんへ

矢作生 (81)

眞空地帯の一挿話

養六平 (149)

暴帝イワン罪惡史

高取辰治 (160)



戦後の挿繪に現れた女の責め場

構成・高月大三

股旅小説

血化粧

やくざ

橋爪彦七

伝三お一馬



「戦後に発行された大衆小説の挿繪に現れた女の責め場は無数にあつて、とてもこのスペースだけでは収容し切れるものではないが、其の一部をこゝに取り上げて読者の参考に供したいと思う。

いつの世でも嗜虐の美を追究する大衆の心理をキヤツチして、それに応じる為に小説や挿繪には、種々の責めの情景が現われて来るものであるが、大局的に見て時代物が其の過半数を占めているのは「責め」の持つ雰囲気時代小説とマッチしている故であらうか。

とりあえずそんな意味で、こゝには特に時代物を取りあげてみることにした。

前頁の上図は、娯楽倶楽部二七年十月号所載、橋爪彦七氏作「血化粧やくざ」絵は三谷一馬氏の筆である。同じく前頁の下図は、りべらる二七年十二月号所載「足利義満」の挿絵中尾進氏の筆になるもの。



中図は前記「血化粧やくざ」の一場面で、土地の親分仁右衛門が、土蔵の中でおむらと云う娘を無理矢理にわがものにしようとするところである。その数行を書き抜いてみよう
 「『どうだ、うむ？ もういいかげんに観念しねえか。いくら泣こうが、喚こうが、外へは少しも洩れないのだ。くたびれるぜ、強情を張るということは』」

上図は読物と講談二六年五月号所載、丸尾長頸氏の小説「情怨浪花屋お北」の一場面、絵は木俣清史氏の作品である。



ぼん——と吐月峯の音をさせて、仁右衛門いやな奴でじつとおむらの身体を眺めているのだ。くら……となるほどな女の体臭が、甘酸っぱく彼の鼻を衝つ。
 「良い肌アしているなア。……」
 猫じやらしに、仁右衛門の手が、おむらの何処かへ触れようとしたが、咄嗟に、後手のまゝのおむらは、ぱつとうしろへ飛び退つた「けだもの！」必死の叫びだつた、が、周囲は厚い塗籠の壁である。以下略
 下図は小説倶楽部二八年新春特別号の連載小説「白蠟小町」作者は角田喜久雄氏、絵は富永謙太郎氏。

怪談作者

鶴屋南北



上図は、東京クラブ二十七年十月臨時増刊号所載、邦枝完二氏の「鶴屋南北」挿絵は三谷一馬氏、三谷氏の縛り絵はどちらかと云うと緊縛感が無いようである。中図は前記の「白蠟小町」の一場面。

下図の右は娯楽倶楽部二十八年一月増刊号所載、「蛇姫異変」絵は三谷一馬氏、左は講談倶楽部二十八年四月号所載、山手樹一郎氏の「野ざらし姫」絵は岩田専太郎氏のもの。





此処にあげた四枚の挿絵は、姿態がよく似ているので、比較して戴く参考にと、わざと一ヶ所に集めてみた。この他にも吊し責めのポーズや、後手の絵の各画家の描きぶりなども研究してみると面白いので



あるが、スペースの都合でまたの機会にゆずることにする。
 右上は、中一彌氏筆、左上のものは、木俣清史氏筆。右下は三谷一馬氏、左下は富永謙太郎氏である。



右図は主婦と生活二十七年十月号所載、山手樹一郎氏作「夫婦八景」に於ける挿絵、文中では全裸にされるところがある。
 志村立美氏の筆。
 左図は、小説の泉所載の、中一彌氏筆の挿絵。
 晴雨、玲子、の両氏の作品は後日対照して読者と共に研究してみたいと考えている。



アリストートルとファイルス 一五二七年グリーン作

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

五 月 号

第七巻 第五号 通刊第五十五号

Une Société de Masochistes

奇 書 紹 介

足 舐 め 小 説

マ ズ ヒ ス ト の 會

ソフィア伯爵夫人・著

沼 正 三 譯

まえがき

マゾヒストの一人として私は奇譚クラブに注目して来た。今迄日本で出た雑誌の中では一番マゾヒズム関係の記事に富むといつてよい。読者層も可成り高級な所にあると見てよいようである。そこで私も少し書いて見て反響を見ようという氣になつた。では「生活告白記」といこうか。それもよい。私は在外中、捕虜になつた時、相手の司令官夫人から訓練を受けて生れもつかぬマゾヒストとして復員して来たのであるがそれ以来の性遍歴は読者の一讀を博しうる自信がある。

然し初めて書くのだから少し異色あるものにしたいと思ひ、考え直して、私の性生活に於て一つの転換点となつてくれた小説を諸君に紹介することにした。

どうしても私自身の生活に触れることになるが、我がマゾヒスト一般となつたことは云うまでもないとして、その中でも特にエプロウラゲニストに仕込まれて来た。(緊縛せられることにはそれほどの興味を持っていない)

復員後の大学生活中も私は一方図書館のあらゆるマゾヒズム文献を読破したが、他方ウロラゲニストとしての実践からどうしても抜け去ることができなかった。(四月号の芳野眉美君への手紙参照)

三年前に今の家内と結婚した。勿論私はマゾヒストとしての理想の夫婦生活を作るべく努力して来た。所が結婚と同時に公務員アパートに入つたが、これは水洗便所であるので私としては一番強い欲求が満たされない。……そこへ私はこの本を手に入れたのである。

後に解説的に紹介するように、この本は「足舐め」に対して異常な偏執を示している。いずれ「マゾヒズム講座」と題してウロラゲニスを傾けようかとも思うが、足舐めもエプロ・ウロラゲニーもいずれもビヤチスムス現象として共通の面がある。そこで私はウロラゲニーの代償物として足舐めを始めた。

ウロラゲニーの方は流石に家内にもいない。隠れてネクター採集するしかないのであるが、足舐めであれば隠れてはやれない。と同時に、ウロラゲニーと違つて、



Pour la moindre désobéissance, elle le souffletait. (P. 14.)

- ① ほんの一寸した不従順にも彼女は彼を平手打した。

家内をそこへ誘導することは何でもない。殊に私の家内などは素質もあつたのである。うか。小説の女主人公と同様、これの愛好者（舐めさせる方の）となつた。私にしても救われた思ひである。そして、足舐めにはネクターとは又異つた味があること。無念無想に舐めていることによつて精神の浄化まで期待できるのではないかと思えるほどであることを読者に体験から断言できる。

さて、かように「足舐め」というものの

効用を、或は酔心地を知つてから世間のマゾヒストを見ると、どうも皆さん、この妙味をご存じない方が多いようである。よしではこの小説を紹介しよう。

読者諸君の中には必ず私の受けたと同様の、又それ以上の利益をこれから引出される方があるであらう。というので私がこの本を選んだ理由である。

この本の原題は (Comtesse Sofia, Une Societe Le masochistes. である。有名な Librairie Franco-anglaise という書

肆から出ている Ouvrages Illustres sur la Flagellation (挿絵附鞭打小説叢書)

の一冊である。序でながらこの叢書の書名だけを紹介しておこう。(訳名のみ)「主人と奴隸」「女主人と奴隸」「宗教審問の鞭の下に」「笞によつて」「漂泊の鞭撻者」「鞭の勝利」「ナナ・サヒブ」「トルケマード」「チベリウス帝の快楽」「ハツムの神秘」「女性鞭打に関する理論と実践の教程」「神秘的な鞭撻」「皇室の贅沢」「ヴェネゼラの審問官」「領主の権利」「苦痛の洞穴」「マゾヒストの会」(本書)「奴隸の肉」「苦痛、拷問、刑罰に関する史論」「鞭打主義者のクラブ」「奴隸商人」「奴隸制地方」「シジ、ベン、アルと三人の婦人」「エヴリナ伯爵夫人」「ハッチー」「赤いスルタン」等である。この中では特に「女主人と奴隸」(Maitresse et Esclave) というのが名高く、「Gynecocracy」と題された小説と並んでよく引用されるものだが、私は二つとも読んでいない。(お読みになつた方の紹介を期待する。)

この本は九章に分れていて全部で二四八頁。全訳は到底余暇が許さないし、載せて

貰う紙面も問題だし、又重複した描写も多いことだしするので、第二章だけを稍詳しく紹介し、あとは殆んど割愛した。

然しこれでもこの小説の持味は分るであろう。小説とはいっても足舐めの詳しい指示などは、私の実験して見たところから考へても、作者自身の実験なしに書けるものでないと思われるから、広い意味でのヒューマン・ドキュメントたることを失わない

もし評判が良く、全訳を希望される向きがあれば少し宛、全部訳して見ても良いと思つてゐる。又この種の小説をもつと知りたいという人が多ければ、手許にあるマゾッホの小説で日本に未だ紹介されてないものを片端から紹介しても良い。読者諸君も愛蔵の秘書あれば、紹介の筆を惜しまないで欲しい。

小説の時代は一九〇八年から数年に互る場所はフランスかスペイン。

梗概

女主人公はソフィアという二十一才の令嬢である。父母と共に住んでいる。母はローザ刀自という名の貴夫人。父はフェデリ

コというが、ローザの尻に敷かれ、召使の地位に転落している。

ソフィアはその一人娘で、幼い時からこの雰囲気になり、妻は夫を躰け、支配するものと考えている。ジャンという三十才の青年が求婚者となる。ソフィアのあらゆる気紛れに応じて下男仕事に耐えたが(挿画)ある時コーヒの給仕をさせられ、ローザ刀自の膝にこぼしたとて平手打を喰わされたので、

「あなたには私を罰する権利はありません



.. elle obligea Juan à poser le front par terre (31.)

② 彼女(ローザ)はジャンをして余儀なく土下座させた。

ん」

と反抗し、絶交するとして出てゆく。然し

三ヶ月後、

「お嬢さん、負けました。あなたなしにはやつてゆけません。もう一度お目にかゝらせて下さい。木曜の三時に参りますから。いと卑しげにあなたの足にキスします。一九〇八年五月十二日。ジャン」

という手紙を出して降伏する。これを受けとつてソフィアが微笑するところからこの小説は始まつている。



... elle levait la main et l'abattait avec force. (P 61.)

- ③ 彼女(ソフィア)は手を振上げ力任せに振下した。

ソフィアは母を侮辱されたのでジャンをこらしめてやろうと決心し、

「私ね、ジャンが私の完全な奴隷になるという条件附で会つてやることにするわ」

と母にいう。そして定刻にやつてきたジャンに対し、自分と母とに対し生涯の奴隷となることを厭わぬならば、鎖と犬の首輪(自分の首に合せた)と鞭とを持つて今晚七時にもう一度やつて来い。そして玄関から入ったら一言もいわずに、上衣とズボンを取つて脆いて前進せよ……等の命令を与

える。ジャンは了承して帰る。これで第一章が終つてゐる。

七時になるとジャンは命ぜられたものを用意してやつて来る。ソフィアは母と面白い話をしてゐるので、平気で待たしておく九時になるとソフィアは父に命じて玄関の戸を開けさせる。ジャンは次の間に命ぜられたなりをして坐つたまゝ更に待たされるその間、ソフィアは母と雑談し、自分の夫たる者は奴隷であり、マゾヒストでなければならぬが、ジャンは理想的だなどと話

し合う。

十時になつてソフィアは次の間に行く。ジャンはふるえている。ソフィアは彼に平手打を食わせて床に転がし、その頸に足をのせておいて、

「いわれた通りもつて来たか？」

「はい、御女主人様」

ジャンを四ツ這いに這わせ、首輪をつける。そして一方の手に首輪の鎖を持ち、一方の手に鞭を持ち、着物の裾をジャンの口にくわえさせて、ローザのいる座敷に戻る椅子にもたれたローザの前にジャンは四ツ這いのまゝ引張つてゆかれる。

この間の失言に対する「一寸した」折檻が始まる。(挿画2)ジャンは額を床につける。鞭と足蹴。シャツを下して裸にした上で打たれるのである。ソフィアは母の鞭の間、自分の足でジャンの肩を抑えつけている。

「これ、母様が御仕置をなさる間、もういゝつておつしやる迄、母様の足を舐めなさい。そうく。段々上の方へ。趾の股に舌を入れなくちや駄目よ。夏の暑さと埃りで溜つた汚れが取れないからね。お前の舌で

掃除させようと思つて洗つてないんだよ。
上手におやりよ」

ジャンはローザの足に対して、命ぜられた仕事を始めた。鞭打ちが続けられ、結局ローザは手がくたびれたといつてやめ腰かける。ソフィア「お礼をおい、けだもの」

「ありがとうございます。奥様」

ローザ「今度は許したげる、けど仕事は続けよ」

ジャンはローザの足を舐めることを又始める。暫くするとローザは足を引いて、もう一方の足を出し、そのまゝ娘と話し続ける。両足ともきれいになると、ローザはそれをジャンの肩の上に乗つける。そして今度はソフィアが椅子にかけたまゝ左足を出す。つまり長椅子に二人でかけて話している二人のレディの前に犬のように四ツ這になつたジャンが足を一本宛なめていくのである。ソフィアはジャンを仕込み出す。

「そうやるのじゃないよ。今日は初めて、ご主人様の足を舐めさせたわけだから下手でも許してあげるけど。よく私の言うことをきいておくのよ。私は一回ごとに私の



Elle le frappait encore en criant : « Attrape cela ! » (P. 78.)

- ④ 彼女はつかまえたわよと叫びながら又彼を打撃した。

やり方を説明するのはごめんなんだから。今度失敗したら鞭で矯正するよ。……ちがうつたら。舌の腹は使わないの。私はくすぐったいのはきらい。舐めるためにはね、舌は味がよく分る丈に鋭敏でなければならぬ。又うるおいがあつてさっぱりした感じを持たせる丈に濡り気も必要よ。趾の間に入れる時には静かにね。一番うまいやり方は二本の趾を一緒に口に含んで、よく吸つてきれいにしてから、気をつけて舌をその二本の間に入れるの、さっぱりした感

じがするようにして。そう、そうやつて吸つて……おしやぶり貝みたいに。……それから足の裏だけだね。くすぐったくないように気をつけるのよ。歯でもつて、たこをけずつてごらん。痛くないようにね。初めに舌で充分うるおうまでなめて、それから歯で少しづつ静かにけずるのよ……齧る足にくついたらいたいじゃないの……どうした、何故やめるの？」

「もうできません」
ソフィアは鞭をとつてピシリと打つた。



.. l'homme embrassant et léchant les pieds de la terrible présidente. (P. 104.)

⑤ 恐ろしい女議長の足を抱擁しなめている男

「お許し下さい。く」
「アア、何てこと。お前の舌を先刻見たいに活潑にするのには一発でいゝんだね。私がいゝというまで止めちやいけないよ、さもないと、又お前の舌を活動的にするのに鞭を使わなくちやならない。女主人様の足に充分敬意を表するのよ、よくつて」
ソフィアが両足を引いたのは十一時だ。
「お立ち。服を着て。コーヒーを出して給仕なさい。跪いて」
ジャンに給仕させながら、ソフィアはジ

ヤンが彼女と結婚して、彼女の奴隷となる意志があるかどうかを問う。
「結婚すれば、こゝに住むんだから、お前は自分の道具を皆こゝに持つてくるのよ。パパは年を取ったから私達は手伝の女中にジョセファをやとうわ。私が不在の時はお前はジョセファの指図を受ける。ジョセファが台所をして、パパが手伝つて、お前が下働きの見習いよ。結婚した日から、重要な事は全部私が取り仕切るわ。お前が意見をいうのは私が求めた時だけ。お前はいつ

も家にいるの。外出したり友人を呼んだり遊んだり出来ないのよ。けどよく働いて私がほめてやろうと思う時には私の伴させて外につれてくかも知れないわ。お前の仕事は家事よ。男の仕事は必要なし。男の娯楽や嗜好も許さないわ、財産は全部証券類に代えて私に贈与するのよ……煙草は結婚第一日から葉巻も紙巻もいけない、この家で吸えるのは母様と私だけ、毎朝、夜が明けたら、自分の髪を調べて、ひげを剃るのよ。私の肖像入りのメダルを首から鎖をつけて吊りなさい。家の中で仕事する時は、エプロンをするこゝとよ。お客のある時、私が許したら平服になつてよし。私の男友達の前では慎ましく程を弁えてるのよ。結婚式の時も、私は白衣裳を着たり、ローソクを持つたりするのは、私の威厳を損ずるから、しないわ。お前は私の部屋で寝ていゝけど、床に畳を置いてお寝よ。」
「それでも私は本当の夫なんですか？」
「お前がそれに値すると見極めをつけたら夫にしてあげる。だけど

私がお前の妻であるより前に、お前の支配者で主人なんだということを忘れちゃだめよ……」

長い説教のあとで、ソフィアは三枚の紙片を示す。ジャンの「義務」と「罰」とを記したものである。

第一枚目は「義務」で、

第一条、家庭生活において私は常に、「これこれしたい」という、お前は常に「はい、いたします」と答えよ。

第二条、台所と階段の掃除は女中の指示に従うこと。

第三条、私の寝室の手入れはいつも一番気をつけ、小綺麗に、清潔に、私個人の好みに合せてせよ。

第四条、冬は六時に、夏は五時に起きよ

第五条、身だしなみが終つたら定めた仕事をし、八時になったら、私の部屋に朝食を持って来ること。私の靴と服を手入し、私が起きて服を着るのを手伝うこと。火曜と金曜には私の足を洗い、爪を截ること。木曜には風呂を沸し、私の身体を洗つたりマッサージしたりすること。毎朝私の用便や化粧に侍り髪を結うこと。



il se débattait en suppliant : maman ! maman ! (P. 120.)

第六条、私の服を洗つたり、繕つたりしその他私の教えることをすること。

第七条、病気の時だけはもう少しおそく起きてもよい。

第八条、食事の時には私の食卓と一緒に食事する光栄を許された召使としての態度を示すように。私のやつたものは何でも喜んで食べ、気を配っていて私が口に出さないでも食卓の用がすべて足りるように気をつけよ。

第九条、裁縫、つくろい、洗濯、等お前に

関係のある仕事は、すべてエキスパートになるように。

第十号、夜も私の命じた仕事を終る迄は寝てはならない。記憶せよ、私はお前がぼんやり怠けているのを見たくないのだし、又、一家の中にはいつでもなすべき仕事は見つかるものだということを。私が芝居とか散歩とかに出かけた時には、お前は玄関の控の間で私を待ち、私が帰つて来た時、扉をあける迄に私を待たせることのないようにせよ。

⑥ 彼はジタバタもがきながら哀願した。ママ、ママ



Théodore dut, comme pénitence, rester une heure attaché à un arbre avec les reins nus. (P. 145.)

⑦ テオドルは時として腰まで裸になつたまゝ、一時間にわたり木につながれていなければならなかつた。

第十一条、お前はいつでも愉快に振舞い

決して腹を立ててはならない。これは召使たるものの第一の心得である。

第十二条、朝晩の私への挨拶は、手と足にキスしてすること。私が外出する時、戻つた時には私を抱擁すること。

第十三条、私が昼寝したり、本を読んだりする時、私を扇ぐこと。

第十四条、(省略)

第二枚目は「罰」である。

第一条、鞭を受ける時、一撃毎に深い卑

下を以て許しを乞うこと。私が口に出していわなくても、鞭を握つて、お前の耳を抓つたら、手を合せてじつとして仕置をうけよ。私が「伏せ」といつたら、地べたに長くなつて鞭をまつこと。

第二条、刑期の間は、私のベットの裾に私の足がお前の胸に乗るような位置で眠れた時には、首輪をつけ鎖でベッドの足に繋がれて眠れ。私は又、首輪つき、或は首輪

なしで、床の上に眠らせることもできる。

第四条、私の足をなめること。

第五条、私の身体をなめること。第六条、私を拝むこと。そのために、跪いて、私の身体のだんな部分をでも、私の命ずるままに……すること。

第七条、私が合図したら口を開いて私の吐く痰唾をうけること。私はお前の顔に吐くこともできる。又地面に吐いたものをなめさせることもできる。

第八条、私の靴の底をなめること。

第九条、跪いて私の着物の裾を捧げて仕えること。

第十条、私の踏んだ地面をキスすること
第十一条、地面に寝て私の台になること
第十二条、右の姿勢で、私の好きな本を私に読んできかせること。

第十三条、(省略)

第十四条、鞍やくつわをつけて四ツ這いとなつて私に馬として仕えること。

第十五条、(省略)

第十六条、私が食事する時、卓の下に犬のように寝たり這つたりし、私の足を身体の上に乘せて支えること。

第十七条、(省略)

第十八条、私が犬にやるように、ほつてやる食物を地面から食べることに。私の食べ残りの皿は云うまでもない。私の化粧に使った水を飲むこと。

第十九条、地面に横になつて皿から食べることに。

第二十条、第二十五条、（省略）

第三枚目は、閨房内の義務と罰に関するが、これも省略する。

これらの条件を出して承知なら明日返事せよと考慮期間を与えるのである。

ジャンは翌日、承諾の意を伝える。

「十二日後に結婚が行われる。ソフィアは平服で簡単にやつてしまふ。つまりこの結婚はジャンにとつてこそ一生の束縛を意味するが、ソフィアにとつては、一人の召使をやとい入れる位の気持ちしかないので真剣になれないのである。

ジャンはソフィアから肖像入りのメダルと、「ソフィア（所有）のジャン」の文句及び結婚日附をほつた指輪とを与えられる。そしてジャンはソフィアの家に取り取られることになる。

ソフィアの部屋に導かれると、彼はソフ



Elle lui mit la corde au cou, l'attachant au pied du lit, pendant que, prostré, il lui léchant les pieds. (P. 202.)

⑧ 彼女は彼の頸に縄をつけてベットの脚につないだ。その間すっかり降参した彼は彼女の足をなめた。

ィアの前に跪いて足にキスし、贈物をする一つは全財産を金に代えた証券類である。もう一つは過去の思い出のものはすべて処分した中で只一つ残した例の犬用の首輪、鎖、鞭を入れた小箱である。そして自分はソフィアの夫であるよりも奴隷であることを欲すると誓う。

これに対し、ソフィアは彼に召使の服を着せ、靴磨道具、床掃き道具、其他一式を贈つていう、

「さあ、これが家庭の人になる者にとつては最良の贈物よ。實際的で毎日のことに役に立つからね。これが明日朝五時からお前の仕事を、初める時にお前が掛けるエプロンよ。……え、何でびつくりして私を見るのさ、新婚旅行にでもゆくと思つたのかい。とんでもない。良い習慣は第一日からつけなくちや。旅行のためお前が仕事しないで休むのは良くないわ。働かなくちやお前は食べさせて貰えないんだよ」

更に彼女は彼に祈りの文句として、彼女



Emilia poussa Hugo à coups de pied. (P. 216.)

- ⑨ エミリアはユーゴーを足蹴にして進ませた。

の美に対する臣従をたたえた文句をジャンにおぼえさせる。そして初夜が来る。以上が第二章である。

第三章は三年後になっている。ジャンは申分なく訓練された理想的な奴隷として日夜ソフィア母娘に奉仕している。母娘がカーニバルで連夜外出し、朝になつて帰つても、ジャンは寝ないで控えの間につくろい物などして、足音の聞えるのを待っているといった工合だ。どこへいったか、どんな男友達と遊んだか、どんな遊びをしてるか

ソフィアはいいもしないし、ジャンもきかない。というより、ジャンはきくべからざることだと思つてゐるのだ。

「こうやつて完全に夫を支配して見ると、ソフィアには世間の、夫に気兼ねしている女性が可哀想になり、それを救おうという気になる。」

「そこで遊び仲間の中、男を尻に敷ているもの、敷こうとする気持のあるものを集めて同志を糾合し、これが『マゾヒストの会』と名付けられる。男と女が対に入会する

のが原則で、夫婦者は二人一人なるを要する。男は

「お前が女主人を持つたら、掃除したり、働いたりはお前がするか?」

「お前は女主人を持ちたいか?」

「お前は支配的女性の会の中に奴隷として入会したいか?」

と三つの問を出され、駄目を押されてから入るのである。

三章から四章にかけてはケルトルドとギレルモのエピソードである。(以下各章とも大体新会員に関するエピソードを記している。)

ケルトルドは昔ギレルモが若旦那として手をつけてから見捨てた小間使である。彼女はその美貌である貴族と婚し、今は若い富んだ未亡人となつてゐる。ギレルモは医者として成功しているが遂にケルトルドに復讐される。作者の好みなのである、矢張り足舐めが初まる。(挿画5) 皆の見てゐる前で彼は犬にされるのである。

「ワンワンや(Mon Petit chien) こちらへおいで、私のこの足が見

えるかい。一月も洗つてないんだよ。私が休んでコーヒー飲んでる間にお前がそれを綺麗にするのよ。二三日立てば雪みたいに白くなるわよ」

ギレルモは仕事を始めた。その間他の男共は女主人達にうやうやしくコーヒーを給仕し、いろいろの命令を直ちに実行する。

レイ達は閑談したが、ゲルトルドだけは奴隷に指示する。

「趾の間よ。おいしいお菓子があるわよ。」

本物のビスケット見たいな塊りが、押さないうで、それをすつかり真白になさい。よしもう一度趾の間。塩辛いだろ。どう、御馳走かい、味も、匂いも良いわね。オードコロンより良い匂よきつと。そのビスケットをもつと舐めつづけて、……舌はね、けだもの、静かに、軽く使うものよ、……そこで強く使つて……」

コーヒーが終つて、男達は床に横になつて、彼等の女主人達の足に対して足台となつて奉仕するのだつた。ゲルトルドは更にギレルモを辱めるため皆の前で、今迄レイ達の食事したあとの食器を洗わせる。昔の若主人はもとの小間使から鞭で監督さ

れつつ、前掛をつけて皿洗いにいそしむ。そしてそのあとで汚い水を飲まされる……

結局ギレルモは今迄の医師としての社会生活を全部抛つて（今迄独身）翌日からゲルトルドの家の下男とされるのである。

（これはこの作者が与えた一番苛酷な刑罰であるといつてよい。他のは皆結婚で終つてゐるのだから）

もとの召使の召使になるという効果と、現在のゲルトルドがレイディとして富家の未亡人として持つてゐる効果とが錯綜するのでこのギレルモのエピソードは割合面白く読める。五、六、七、八章でも新入会員が沢山入る。名前は一々列挙せぬが、全部で三十対位の男女が出て来る。ごく短くて済む人も多いが、とにかく、新入婦人会員は必ず相棒の男子会員を使つて新趣向の責め手を紹介して見せねばならぬことになつてゐるのである。一寸変つた趣向としてイサベルという会員の別荘に会員が春籠りする所がある（第六章）

マゾヒストの夢想する女性天国が実現する。ふだんから会員の間では男子はその女主人の姓で呼ばれてゐる。（甲野花子が乙

山太郎と婚して乙山花子となれば、普通は乙山太郎夫人と呼ぶ。それをここでは乙山太郎のことを「甲野花子さんの夫」というように呼ぶわけである。）のだが、ここでは夫たる地位も失つて単に共通の男奴隷とされる。婦人達は只遊樂のみ、共通の一切の雑用は男がする。のみならず、婦人は各人毎に傘をさしかけさせたり、足台にしたりする男奴隷も持ちうる。男は又交替に番犬の小屋に入つて不寝番をし、婦人達の出入毎に吠える。更に婦人達は娛樂にあきると男をリンチする（挿画7）リンチ用にも当番の男がいるのである。（然し殺したり傷害したりはしない。）或は馬の代りに人間が馬車を挽く場面もある。

今迄夫に頭の上らなかつた妻がソフィアの所で男の征服法を教わり、遂に夫を征服し、翌日から一切夫に家事をやらせるようになるエピソードが挿画8、である。説明の文句でも分るように今迄のと同じ場面が多いからこれは省略しよう。

注目すべき倫理観として、このように女性に絶対の権力を与えながら、妻の貞操義務を強調するのである。アイーダという二



Elle se laisse adorer par Juan, toujours agenouillé à lui lécher les pieds. (P. 248.)

- ⑩ 彼女はジャンをして自分を崇拜せしめた。ジャンは跪いたま、彼女の足をなめた。

十八歳のドイツ女はエドアルドというイギリス人の夫を酷使している。入会を申し込んで、資格がありそうであるが、その晩アイダの宅にソフィア外三人の婦人が招待された。アイダはズボンをはき、男装し葉巻をふかしながら出て来る。一同を玄関に迎えた女中が実は女装のエドアルドと分る。彼は更に飲物を運んでくる。その物腰もすつかり女中である。自分が望むのでなく、アイダに仕込まれて、女中の行儀作法を身に付けさせられているのである。

所がアイダが席を外した間に彼に質問した結果、アイダには他に情人があることが分る。自分のベットに繋いでおいて、情人と二人楽しんだあとの始末まで彼にさせているのである。そのためアイダはソフィアに長々と説教を食う。然しこの倫理観は、マゾヒストにはあまりいただけない代物である。

会はマゾヒストの未婚者も沢山かかえている。夫婦生活の是正のみでなく、マゾヒストの夫を求める女の処へは、希望の男性

を配給するわけである。夫の在世中は少しもくつろげなかつた未亡人が、今度は自分の楽でできるようにと年下のよく働くマゾヒストを再婚の相手として注文してくる。周旋してから工合を聞くと

「とても良いわ、昔の私よりおとなしいの働き手としても忍耐強くて従順ね。日の出前に起床するように慣らしつけたの。牛の乳を搾りにいつたり毎日の食事のバターパンを用意したりするにも大騒ぎなんかしないで羽根見たいに静かよ。掃除と来たら、あとを舐めてもいい位にするしね。八時は私が死んだ夫（この人は私を四時に起したけど）の前に朝のものをもつてく時る間だったけど、今はロザリオが私の前に、ミルクとコーヒーを持ってくるわ。それから台所にいつて、洗濯して、アイロンをかけて、繕い物をして、ミシン縫いをして。……首をあげる暇もないのよ。一寸でもものんびりしてたら庭仕事とか何とか、なすべきことを私が見付けてやるわ。それから食事の仕度食器の整頓、充分召使二人分の仕事をするわね。私は何にもすることがないから、死んだ夫見たいにタバコ吸ってるの……」

「挿画10」は最後の場面で、再びジャンとソフィアが登場人物となる。

その日マゾヒスト会のメンバーは芝居にいった。さじきを買って外から見えないのを幸い、女性達が椅子によつて楽々と観劇すると、男はその椅子の下に腹這いになつて、背中を女主人達の足台に提供しながら芝居を味つたのであつた。所がこの時、ソフィアは着物に引掻きを作つた。すぐジャンに針と糸を要求したら、彼は忘れていたのである。

外出の時のジャンの身だしなみとして、忘れてはならない筈のものを忘れたのであるから、帰ればお仕置である。芝居の終る迄、ソフィアは自分の足台が戦慄してゐるのを感じる。

帰宅するとジャンは跪いて詫びるが許されない。首輪と鎖（絵にはないが）でベツトにつながれてしまう。そして鞭うたれた末、足をなめさせられる。ソフィアは足をなめさせるのが好きで、足をなめさせている中に頭がさえていい考えが浮ぶので何か書く時はいつもなめさせるのである。

この日もベツトに入つたまま書けるデス

クでなめさせつつ著述する。書きながらうとうとしてしまう。十時から朝三時迄及ぶジャンはその間もたゆまずなめているのである。何回か彼女はまどろみからさめた。その度にジャンが、額に汗しながら、忠実な犬の仕事に精出してゐるのを見出した。顔をつけたり、なめたり、濡らしたあとを乾かすため、頬をさしよせたりしている。ジャンは彼女の足を崇拝している。なめながらこういう。

「私はあなたの美しい足を愛しているのです。これを象牙のように白くしたのは私の唇なのです。私があなたの所に参つたとき、この足にはタコがありましたね。私の歯です。けずり方が悪いとて私は足蹴を受けたのです。然し私の舌の愛撫は、今やそれを女神のような足にしてみました。でもそれが足蹴によつて私を罰する時にはどうか昔のように力強くあつて下さい……」

ソフィアは目ざめてジャンに視線を投げける。彼は額をあげず、その仕事に注意深く打ちこんでいる。彼女は書物机をしまわせトルコ煙草を吸い出すが、ジャンには依然

として足をなめさせている。（これが挿画10、の場面である）静寂はキスの音と男につけられた首の鎖の音とでのみ破られる。己が足によつて男を奴隷にし、「会」の数多の弟子にも己の教義を吹き込んだ自覚で満ち足り、再びソフィアは寝込んでゆく。ジャンは依然として跪き、つかれ果てながらも、女主人の命令が出ない以上、夜がすつかり明ける迄、彼女の足を注意ぶかくなめて、その眠りを快いものにしてゆかねばならない。

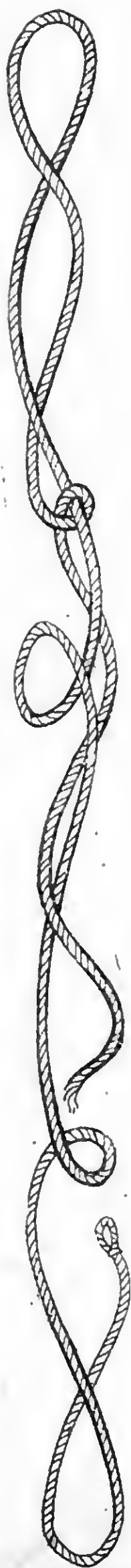
以上で第九章全二四八頁が終つてゐる

沼正三氏の担当

○あるマゾヒストの

手帖から○

マゾヒズム講座の第一回として次号より連載いたします。マゾヒズム小説の翻訳やマゾヒズムの本質に関するエッセイについて鶏助的なものだけを集めてマゾヒストのための共通の広場の建設にこの講座の欄を埋めて頂きます。



○風流責各態○

吾妻

新

これは「風流猿轡」とおなじときの産物で、かなりできたのですが、Z談のグループのため同好異曲のものが多く、左に選んだのはその一部です。おもしろいタイプのものでもあまり技巧的にひどいものはやはり省いたので、サディズムの全貌を描くなどというものではありません。ただズボンを穿かせたり股間を縦に縛ったりするのは、あるいは一般の読者に目新しいのではないかと思えます。これらの趣味は同人のすべてがもっているわけではありませんが、われわれは全部それを知っており、理解もしています。言うまでもなく、猿轡に関するものは除きました。この前と同様に、なるべく類型的にまとめてみます。

細引を出せば都合よく手を合せ

男が気味の悪いほどしずかに落ちついているので、ああ今日は何もされないだろうと安心してしていると、いきなり細引を持ち出されて、思わず「ゆるして！」と手を合わせます。そのポーズがそのまま役立って、すぐに両手首を縛られるのです。

足首も手首も上を向いている

同人の解釈に二種あり。一つは、俯伏せにして後手にしぼり、足を折り曲げてくる図です。これでも成り立つのですが、作者は宙吊りを考えていました。序でに言いますと、サードの作品の挿絵に、滑車に綱を通してこのポーズで吊るのがありますが、あれは手と足のみを縛っています。だが実際は非常に苦痛なので、われわれは必ず胴をさらに吊します。さらに股間を通してよいのですが、その場合はそこに全然体重を加えません。この点に古いサディズムと新しいサディズムの根本的相違があるので、サードはただ苦しめればよかったのでしようが、私たちは縛つたり吊すこと自体に苦痛を与えぬよう細心の注意を払います。つまり凌辱するためにやるのです。折檻は、こうした基本的ポーズを前提として、それからはじまります。

まんなかの紐は股から吊してる

これは右の説明で十分でしょう。

細引は手足のほかにもうんと要る

股間を縦に縛ることを示しています。やり方は通常、ゆるい大きな輪をつくて首にかけ、背面はズボンのバンドを通して股をくぐらせ前にまわし、バンドの下をくぐらせて輪に結びつけます。したがって前もうしろもY字形になり、股間の部分は二本になります。

猿廻し太鼓のバチは軟らかく

股間を通した紐をさらに長く延ばし、猿廻しが猿を踊らせるようにいろんな動作をさせます。バチはもちろん鞭で、しなやかな細い革をよしとする意味です。

尚、「サデイズムの精髓」でかいたように、股を縦に縛る場合はかならずズボンを穿かせます。

結び目が急所に当る縛りよう

股をしぼるひとつの型で、二本の紐をそろえ、中央に二カ所の結び目をつくつて首をさしこみ、前後の紐をそれぞれズボンのバンドをくぐらせて、ちようと股に当るように結ぶのです。その場合、紐を少し長くしておいて、幾重にも結び目を大きくしなければ効果ありません。そのために犠牲者は身動き一つしても刺戟され、永くこの姿に放置しておいても羞恥心が鈍化しないのです。

さらに实际的に言いますと、このときの紐の締めかたは、股の結び目を中心として尻にかけてはうんと強く締めて弛まぬように腰のバンドにしぼりつけ、前のほうはただバンドをくぐらせただけで緩急自在にすると、もつとも感覚を刺戟します。またこのポ

ーズで俯伏せにして縛つたときは、結び目をやや前方にムリに引きます。すると、紐は尻の割れ目につよく食い入り、股の結び目はシートにぶつかつて部分を圧迫し、それだけで絶えず身もたえなければなりません。ただし、そのとき前方の紐はかならず弛めておきます。前と後と両方を強く締め上げるのは、みた目にはさも悩ましそうですが、圧迫感が単調で苦しみが平凡であり、しかもすぐ馴れてしまうことに注意すべきです。

手ごたえが一目でわかる十センチ

これにも二通りあります。いずれも俯伏せにした場合の足の縛りかたですが、洗練されたサデイズトは決して固定しないのです。一つは両脚を左右の環から長い紐でつなぎ、ピンと張つた場合でも足と足が十センチほど開くようにします。折檻——のようなとき、女は必死に腿を合せようとするが、それがわずかな間隔を残して出来ません。もがけばただヨリ以上に足を開くことになるだけのです。

いま一つは、足をぐつと開くのですが、環に結びつけた各々の紐の長さが十センチしかないのです。これは右足も左足も十センチ以内の活動が許されていることです。

いずれの場合も、足をもがかせることによつて見た眼を楽しませ折檻の効果の反応がすぐわかるという点で意味が深いのです。

「大して感じないらしいね。よし、もう少し足を動かしてあげようか」といった工合に。

やわ肌をくねらす紐は生きている

締めばなしでなく、強めたり弛めたりすべきだ
という教訓。

うつぶせの指でシーツは皺になり

男装は縦に縛るが定法なり

かわいそうにと言いなから紐をぐツと締め

いずれも単純、説明の要なし。

うしろ手は乳房の指を見るばかり

後手に縛りあげて、乳房を指で……………そ

れをうつむいて眺めながら、どうすることもでき
ない。

雨の日は音が鈍いよと尻に言い

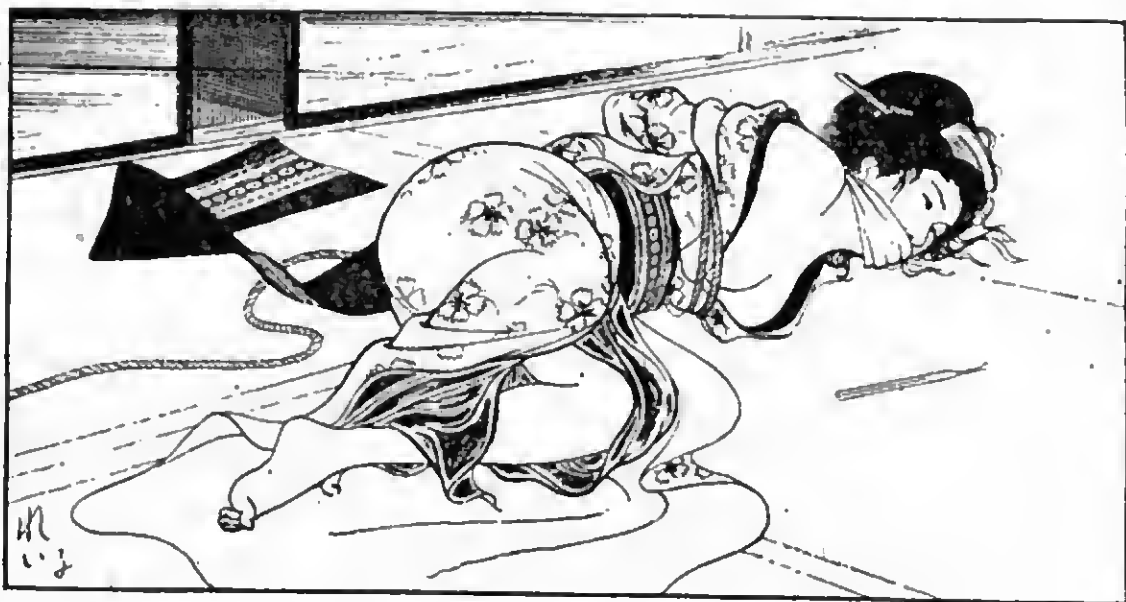
鞭でたたきながらいう責め言葉。折檻にはあら
ゆる口実が利用される。雨が降っている日はいい
音がしないと云つて、きつとこの作者は言い渡し
た数より多く叩くのでしよう。

うしろ五十と前を十五と選ばせる

そろそろグループの面目を発揮するようになりました。鞭で打
つことを宣言してから、さて尻にしようか前にしようかと哀れな
犠牲者に相談するのです。

「尻なら五十回、前だつたら十五回だが、お前の好きなほうにし
てやるよ」

前部を叩かれるほうがずつと差かしくもあり苦痛でもあるので



すが、それをこのような数字の比較で出すのです
でに心理的サディズムです。なぜなら、犠牲者は
その受ける苦痛を想像し、思い出し、悩まねばな
らず、また絶対に比較できぬものを比較して、叩
いてもらうようにたのまねばならないからです。

抓られてすみませんと泣くエチケット

折檻の時間がくると、たちまちいろんな嚴重な
エチケットが要求される。それはあらかじめ表に
つくつて渡されています。たとえば、裸になつた
ら直立不動の姿勢をとつてまず身体検査を受けね
ばならないとか、縛る縄にはそれぞれ名称があつ
て、命令されたらすぐそれを持つて渡さねばなら
ないとか、猿轡を湯氣に当てて用意しておくとか
この場合もその一つで、ツネるのは恩恵とされて
います。だからツネられるたびに、すみませんと
礼を言わされるのです。

打つは初手二はツネり三はこすり上げ

真打は指でこまかく泣かせてる

共に、単純な苦痛よりも心理的汚辱の深さを求めたもので、打
つことはいちばん平凡です。ツネるのは打つよりも持続的でどの
ようにユツクリとやることもできます。腿や股をこすり上げるの
は痛くはないが完全な汚辱であつて、あらゆるヴァリエーション
を伴うため、デリケートな高い方法ということになります。

鞭の音きこえぬときはツネつてゐる
説明の要なし。

欲深は左でさぐり右で打ち、

俯伏せの姿勢です。左手は下へ、右手は上で……。

四本まで開いてああと声を出し

これが心理的にいちばん堪らないと申します。手足も縛らず、猿轡もはめず、ただ頭の高さに渡してある横木を両手で握らせるのです。しかし眼の前の台には縄も猿轡も、あらゆる責道具が用意してあります。彼女はどんな場合にもそのつかんだ手を離すことは禁じられています。さて、徐々にあらゆる羞かしめが加えられてゆきます。乳房をつかみ、……からだの隅々まで執拗にオモチャにされ、ときにはツネつたりも鞭打したりもしますが多くの場合は指先だけで足りる。彼女は悶え苦しみ、足をよじらせたり胸を反らせたりするのですが、ついに堪らなくなつて手をはなします。すると、第一の罰として猿轡をはめられ、またもとのボーズをとらされます。そしてまたいじられるのです。こうして足を縛られ、股間を縛られ、最後に両手を縛られる順序となり、不柔順であつた罰として改めて徹底的な折檻を受けることになるのです。

結局、どんなに耐えてみたところで、手を離すまではやられるのですから、早く離してしまえばよさそうなものですが、順次束縛されてからのあとの折檻がおそろしく、少しでもその現実をおくらせようと必死になるから妙であります。この句はその心理的矛

盾（あるいは必然でしょうが）を働いたもので、さんざん身悶えした揚句、堪らなくなつて四本まで指をひらきながら、あとの一本を棒にからませて思わず叫び声を出す情景です。われわれの句会ではこの句に一位を呈しました。だがこのような世界を知らぬ一般人にはなんの意味だか分らないでしょう。

おそいよと言うたびに足の紐を詰め

足と足との間を五寸位あけてつなぎ、部屋のなかでいろんな用事を言いつけるのです。彼女は命ぜられたものを急速に運んでこなければなりません。ヨチヨチ歩きなので走れません。そのたびに罰として一寸ずつ間隔を詰められます。これを二、三回くり返すともう歩くこともできません。それから両手を縛つてころがし、折檻がはじまるのです。

二番めにかならず当る鬼の番

これもサデイステイックな遊びの一つで、五六人で鬼ごつこをやるのですが、鬼になつた男は眼隠しをして、狭い部屋の中を追い廻し、つかまえたものを手で探つて当てなければなりません。ところが犠牲者になる娘は最初からきまつてゐるので、鬼は他の男をつかまえてもすぐ離してしまい、彼女だけを追い廻す。男たちも彼女をつかまえてムリに押し出すから、結局二番めにはかならず鬼にされる。しかも捕えられたときに女だということはすぐわかるのに、ねじ伏せられてしつこい検査をされます。さて鬼になると、こんどは誰を鬼にすることもできません。なぜなら捕まえても寄つてたかつて引き離してしまふし、名を言つても間違ひ

次 号

六月号

予 告

本誌の誇る新鋭傑作陣

秘武虹静	家男色の	安劇場	後日譚	松井籟子	女子史を	困んで	オニ回読者座談會	由紀子	のお仕置	幸福なる	隷属の告白	拷問と倒錯	の根源探求	淫	火	（第六回）	アブノーマル・ファンタジック	らぶ・すれいぶ	（6）	あるマゾヒストの手帖から	（一）	クリスチーヌの受難	（一）
戸崎馬	泉辰之助	宮四郎	箕田京二	大川由紀子	鐘坊巡	翁要吉	松井籟子	岡田咲子	鬼山絢子	松井籟子	吾妻新三	キドロドシユトツク	沼正三	松井籟子	岡田咲子	鬼山絢子	大川由紀子	鐘坊巡	翁要吉	松井籟子	沼正三	吾妻新三	キドロドシユトツク

◀特別会員の機関誌▶

KK通信第八号出来！

読みごたえのある主な読物

- 年令と好みの差……………高月大三
- 読者からの通信交々……………塚本鉄三
- サディズムの演劇……………吾妻新三
- 罪の椅子(二)……………飛田良二
- ボクの責め方(三)……………宝塚二三夫
- 四月号の迷評……………一迷評家
- 続錯乱の倫理(二)……………近東視矩也
- 特別会員制に対する或る提唱
- 伊呂波仁補遺抄、会友通信、代理部便り久留木栄氏筆、"縛られた女"短信往来、読者の声ABC、編集部便り等々

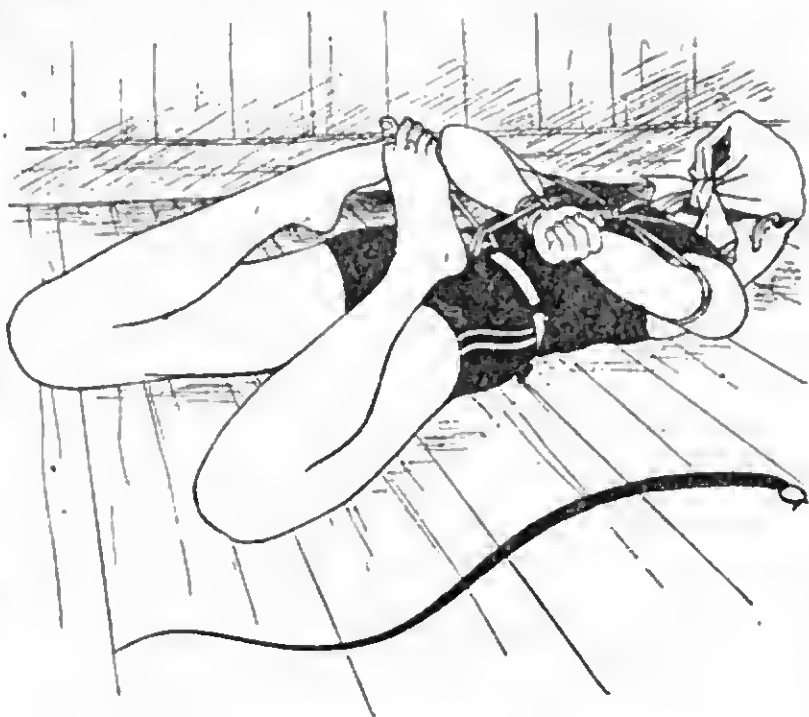
◎定価一部二十円 ◎半年分百円
旧号は第四号以前は全部品切れです。
見本は送共切手三十円にて急送します。

だとされるから。そして眼の見えない彼女は、おろおろしながら絶えず男たちに攻撃を受け、防ぐことができないのです。これはいわば前戯ですから、さんさん弄ばれてから、もちろん本格的な折檻がはじまるわけです。

以上でわかるようにここには逆さ吊りや海老責めのごときものは扱われていません。それは幾度も書いたように、私共にとつては無趣味に感ぜられるからです。いかなる拷問の絵を見ても私共

は感動しません。われわれの好むのは拷問でなく折檻であり、したがって通常の家庭では備えられないような複雑な道具も目立つような設備もいらないます。しかもその効果は百パーセントに満喫することが出来ます。犠牲者に傷を与えることもほとんどありません。また、こうした行為によつて狂暴な線に発展してゆくおそれもあります。この快楽はきわめて持続的です。私はサディズムという言葉から、不合理な残虐や犯罪的な観念を追い出したいと常にねがっている一人です。





私は前にも書いた通り同性より縛られる事が大好きであるがそう何時もそんな良い機会はあるわけではないので自然と縛られている人物の絵を見る事を好むようになり、そしてその一番よいものを土曜日に自縄自縛してみてもその感じをいろいろと味っているが特に昔の江戸時代のものが一番良い様に思う、色々の書物をさがしたあげく或書物に絵と次の説明が書いてあった。

捕縄——人を捕えて縛る縄、又、早縄とも

捕 縄 雑 考

嶽 收 一

称す、麻の三繰の縄を用い特に柔かにして丈夫なる事をよしとす、これ縛られた者を傷つけざらしむると、縄を解くに困難を生ぜざらしめん等の為なり。麻縄（細引）をしてこの目的に適せしめんとするには縄終りたる後よく揉みて酢の中へ入れて煮乾かしめ更に柔かになる迄揉むなり、捕縄に用うる麻は三河国宝蔵寺の産有名なれど関西地方の産なれば一般に良好なり、縄の種類を分ちて早縄、鈎縄本縄の三種とす、其長短は捕縄術の流派によりて多少の相違あらんも早縄、鈎縄は共に長さ二尋半乃至三尋半、本縄は三尋半、五尋、七尋半、九尋、十一尋等、掛け方によりて別あるを普通とす、其他三寸縄、五寸縄の如く短きものもあり、早縄は普通の縄にして蛇口のあるものとなきものとあり。されど初より作り設けたる蛇口は其太さ大抵縄の半以上とすること難きを以つて時としては切斷する憂

なきにしもあらず、これを以つて別に蛇口を作る事なく縄の端を適當に折曲、其中央をしかと結び随時に蛇口を作ること便なりとする。本縄も早縄も変る事なし、然るにその名称の異なる所以は掛方の煩雜なると従つてその長さの異なるに存するなり。

鈎縄はよく鍛えたる鋼製の長さ一寸七分ばかりなる鈎を縄の一端に附着し他端は蛇口あるものなり、鈎縄の一種とも見るべきものに早手錠縄あり、固木にて造りたる手錠様のものを縄の両端に固く結びつけたるものなり、其手錠様の固木はもとより使用する者の自由なりともいへども凡そ二寸ばかりのものを最も善しとす。

捕縄は携帶上の便宜の為多く巻かるゝを常とす、其の巻方には蛇口の附きたる方より三寸ばかりにて幾重にも折り曲げ其の上を巻くものと蛇口を拇指にはめ、小指と拇指との間

男性MASO

に綾にとり其中間を横に巻きて端を其間に挟止むると又蛇口の三、四回折り曲げ其上より左右左右と綾にくみて巻き止むるとの三種あれど急に臨みて最も解き易き点よりしては第二の巻方を最も勝れりとすべし、第三の巻方は現今多く用いられず、只普通に縄をしまいくくに用いらるに過ぎず、用心の為携帯するには上述の如くすれど捕縄すべき者の所在體かなる時又は途中にて遭遇すべき自信ある時は捕縄を蛇口に通して右の二の腕の処にかけ縄を袖の中に蓄うるなり。

さて捕うべき者に逢いたる時其の者の右の拇指を我が拇指と食指との間に入れ食指以下の四指にて其の者の四指を外より固く握り同時に相手が我が方に引き腕の延びたる所へ我が左の手にて我が右手に懸けたる輪を移し其のまま相手の手を後に廻し相手の帯又は衣服と共に纏む、又左の手にて持ちたる縄を相手の左手の方より咽喉部へかえ右肩に縄を廻し先の縄の下を通してこれを其帯にかたく縛るなり。もし左の方より咽喉部へかけ右の肩に廻したるのみにて右手より左に廻したる縄の下を通さざれば如何に引締むるも逆に右廻に廻れば縄は自然に離るゝ恐れありとす。

捕縄の掛方には其の種類多く又流派によりて名称一定せず、図に示せるは方円流の掛方十八種なり――。

以上の様に書いてあるが文中の三寸縄、五寸縄と称する縛り方は色々他の本を見て考えると捕縄の長さではなく咽喉部より後へ小手を縛つた縄間のむすび目よりむすび目迄の寸法を言うらしいようである。江戸時代は武士庶民、等の階級によつて縛り方も異つていた様である。

将真総角、士行総角、輕卒草総角の三つは字でもわかるように士分の者に用いたもののようにある。これは戦場に於て捕虜になつたものの縛り方のようにある。士分のもものは小手を特に寛待の意でゆるく縛つたものらしい。本陽十文字以下十五のものは庶民のものである。この中で早の字のつくものはすべて早縄である。早陽十文字、早陰十文字、早陽菱、早陰菱、早蟹絨、早猿結、早蜘蛛糸、はこれにぞくする。図をみてもわかる様にその他のものは非常にむすび目が多く、余程時間的なゆとりと又被縛者を絶対反抗せしめない条件がないと出来ない。これより判断すると初め犯人を捕える時は早縄を用い引立て、番所の

ように一寸被縛者が逃げる事が出来ないような条件の所で本縄にかえ、留置し又、奉行所で裁判したようである。

江戸時代は犯人を留置する時は大抵の場合捕縄で縛つて繋いだものらしく今の様に唯監房の中へ入れておくのと大分趣を異にしたようである。

さて、私は十五種類は他人より施縄してもらつて一つ一つどの様な感じがするかと言うことを体験したのでそれについて一寸のべてみよう。いずれの縛られ方にも共通した事は手を動かせば首がしまる事である。又實際は二の腕と小手が必ず鋭角になる様にしなければしまらないから余計に首がしまる。此の中で一番苦しく又快いのは「女五六」でこれは首を捕縄が一回廻つてゐるし高手も二回まいてあるので捕縄から下が紫色に交りものの一時間もすると手首二の腕の感じはなくなり首がしまり頭はがんがんするし、全く苦しい快感の域に達するのも早かつた。

次は簡単のようであつたが早蟹絨、これは小手を縛らないから施縄者がしめるだけしめるので小手を動かしても苦しく羽を結ばれた鶏のようでも腕は痛むしものの一時間もすれば全身油汗でびしょくになる。次は引

渡鎖掛でこれは高手を二ヶ所も縛るが見かけより楽で二時間は楽にしのべた。これは手を動かしてもさして首はしまらない。これと同じ位の苦しさが先五形仕込みであるがこれは二の腕に相当こたえる。次は長袖鱗掛でこれは二の腕の下の方で大して苦しくはないが胸にかけての十字字がしまるので首のつけ根をおさえる所が一寸苦しい。その次は早陽十字字でこれは早蟹緘の小手を後でとめたような形であるが相当二の腕にもこたえ苦しい。これに後で示す足留を付すと誠によい縛り方となる。次の同じ位の程度が本陽十字字、本陽十字陰、早陽十字字、本陽菱、本陰菱、楽なのは早陽菱、早陰菱でこれなれば一日中縛られ

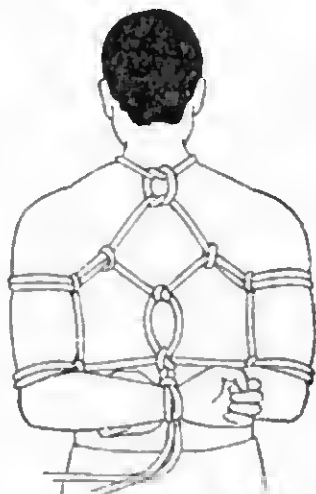
ても一寸手がのばせないのがつらい位で何ともない。この二つのものであれば私は縛られたまま寝ることも出来る。楽なものである。一寸手が痛いのが早蜘蛛糸で一番楽なのは早猿結びである。

題目カットの図が私の一番好きな早陽十字字に足どめをした図で小手を縛つたあまりで図のようにうつぶせにし足首が尻につく迄おさえ指を縛りつけるのである。この恰好では足がもとへもどろろとする力が働くので首

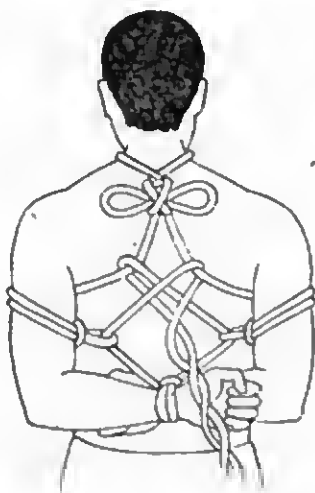
十

八

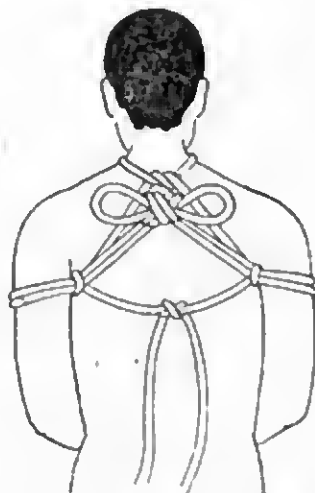
型



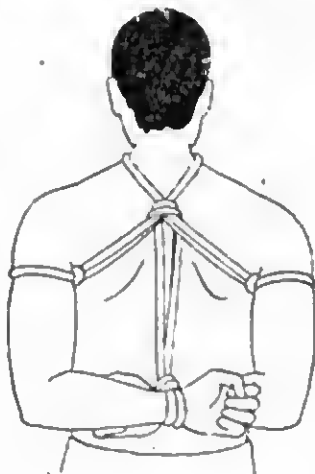
軽卒草總角



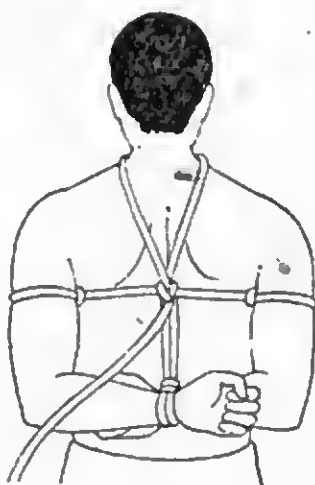
土行總角



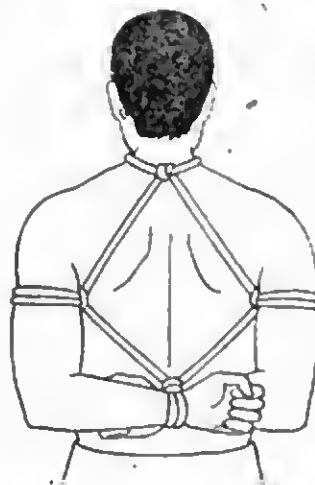
將真總角



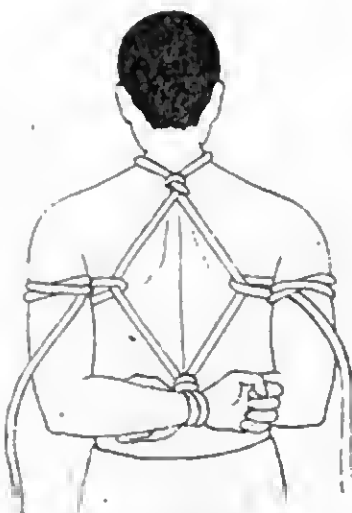
早陰十字



早陽十字



本陰菱



先三形仕込



早蜘蛛糸



早猿結

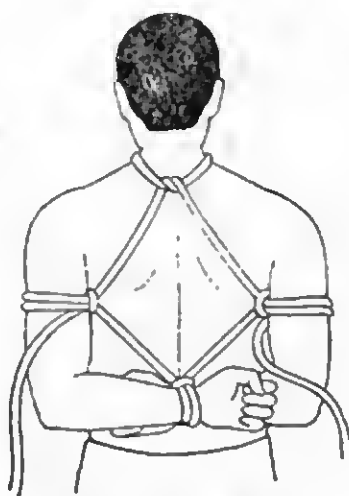
がしまるしどうしてものる形となるので非常に苦しくものの二十分もすれば快感の域に達する。これは他人より縛つてもらわなければとても出来ない。この図の服装は私の一番このむところの一度体験記でのべた事のある服装で赤の番号のぬいつけられたランニングシャツを着、赤のなるべく肌をしめつけるようなみじかいパンツをはきそして縛れることで、こうすればうつぶせになるので実に快い、

足首の上に施縄者に座つてもらつた事があるがそうすれば何とも言えない気持ちになる。尙頭の布はこんなアブノーマルな遊びをする時は必ず白布で頭をきつちり覆つておかないと髪がたれたりして折角の心がちつて台なしに

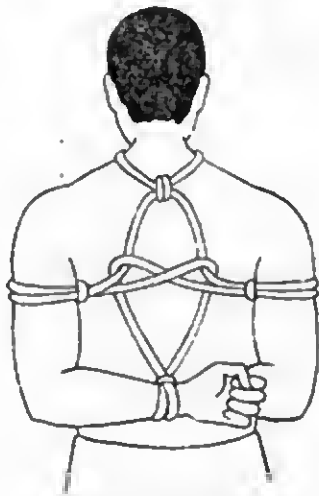
なるので用いたものである。以上は私の縛られた体験であるが同じ趣味をもたれたアブノーマルフレンドの御批評を是非頂きたい。尙方円流は伊予の回吉部丈夫とか言う人がもとであるそうだが伊予の方々

のよりくわしい御発表あらんことを望む次第である。又近頃KKにもぼつぼつのついている男性のヌード写真の縛り方にこの方法をもちいてきちんと縛つたのが望ましい。

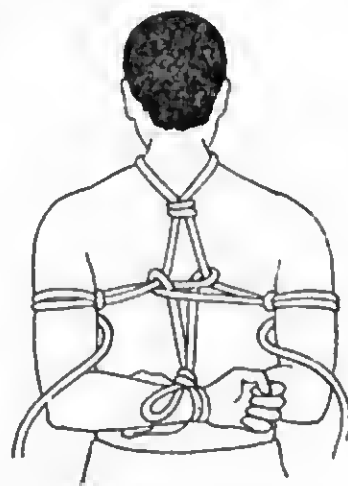
方 円 流



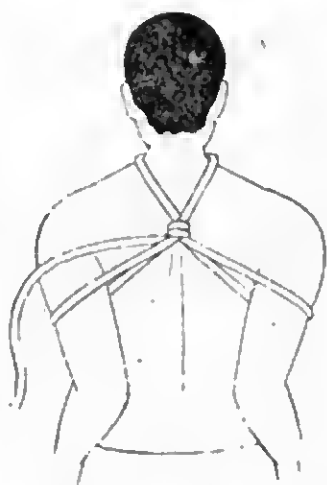
本 陽 菱



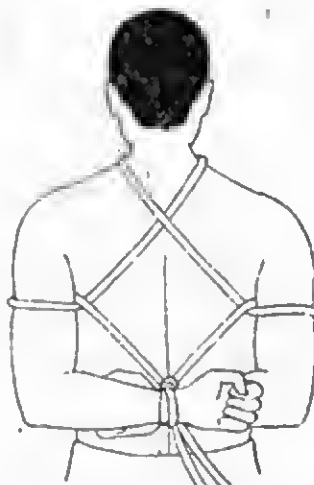
本 陽 十 文 字 陰



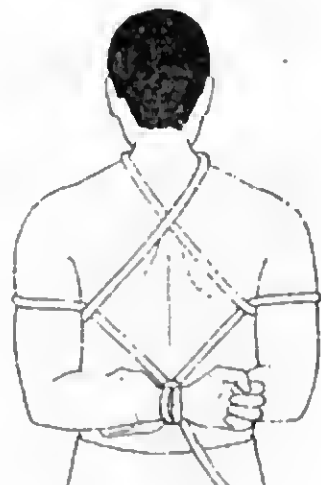
本 陽 十 文 字



早 蟹 織



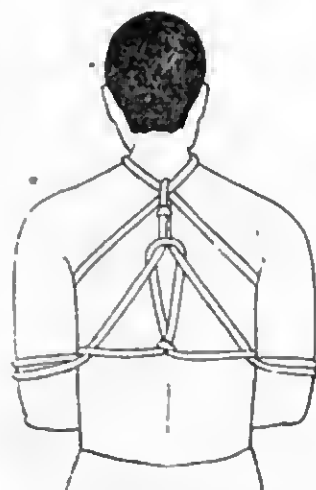
早 陰 菱



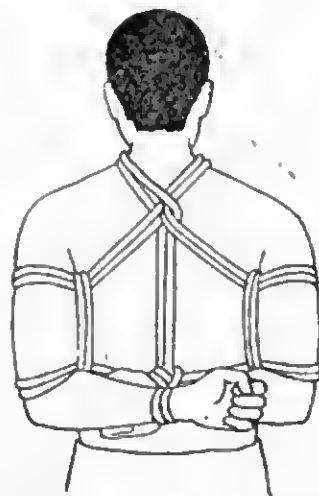
早 陽 菱



女 五 六



長 袖 鱗 形



引 渡 鎖 掛

僕 の 記 録

(完 結 篇)

黒 井 珍 平

プ ロ ロ ー グ

罪悪と云う觀念を一度も意識した事の無かつた僕が、カトリック教会に一寸した動機で入り、その後五年間を此の罪惡觀の為に、モミクチャにひつかき廻された事は、思い出しでもぞつとする。

その時の僕の人間性が宗教的罪惡觀のおかげで、如何に矛盾し、多面性を帯び、奇妙奇天烈な反応を起したかを書いて見ようと思う

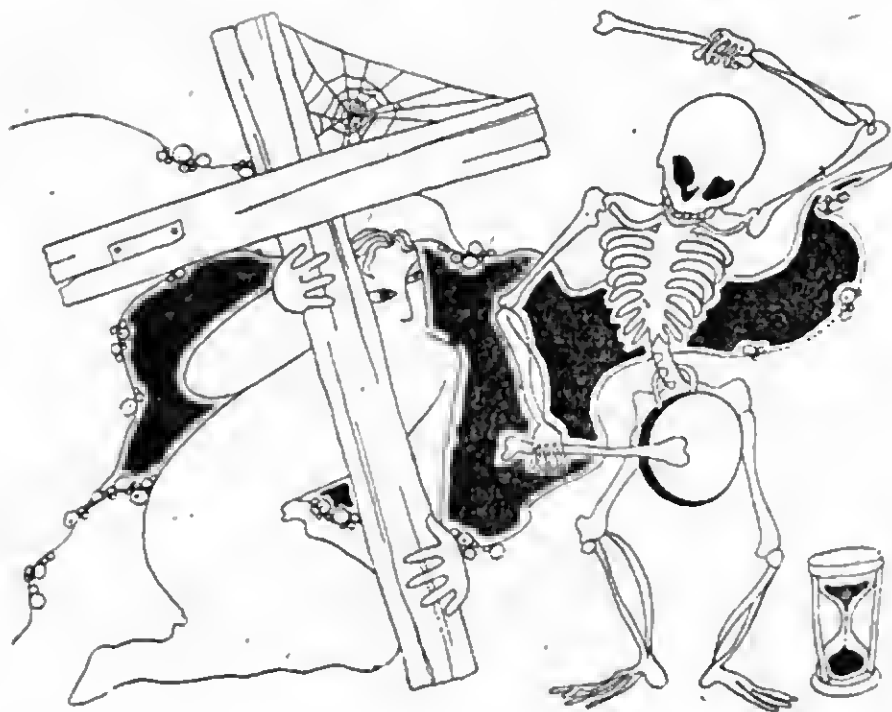
一、受 洗 前

明日、洗礼を受けると云うのに、僕は神父さんの「心得」を何人かの信者と一緒に聞き乍ら「心」は今買つて来た「妖奇」に飛んで居た。

終戦後三年目の事である。あの雑誌の真中あたりに覆面作家の小説が出て居た。(まだ全部読んでない)素晴らしい挿画だった。一寸電車の中で、表紙が見えない様にして読んだのだが、恐い秘密のキャバレーで、売られた女が、一枚々々着物をはがれて行く、裸にむかれて天井に吊下げられた挿画、壁に映つた其の影が実に好かつた。

こんな状態を何と説明したら好いか、洗礼を受けるのは嘘なのか、只見得の為なのか。否——本気なのだ。其の癖(戦後流行し出した)エロ雑誌を書店でめくつて、後手に縛られた女の絵や、小説を見つけると(それ故に買ったので、他に僕にとつて何の価値も無かつた)ジーンと体中が火照り出し、手先が震え出し、目の前の像が、ぐらり／＼揺れ出す。そして何時か金入れを取出して買つて終つて居る。

こう云う状態に入つた時は、其の日寝る迄(否、寝てからも)別人の様になる。洗礼もへつたくれもなくなる。完全な二重人格と云つても好い。こんな事はもう、教会へ通い出してから一年間に何十回となくあつたのだ。それで、その興奮が醒めて後は、大變な反省をしなければならなかつた。



然しそれはまあ好かつた。生れてから今迄犯した凡ての罪は、明日の洗礼で許される。亡き父に犯した親不幸の罪も、女中をひつぱたいた事も、嘘をついた事も皆許される。(不思議な事に「責」趣味については考えなかつた。即ち重大な過失は今迄は何とも思わなかつたが、これからの神の掟に依つて必ず犯すであろう性慾について考えなかつた事だ)そしてセンチな嬉しさにひたつて居たのだ。何と恐ろしい事だつたらう。罪惡とは、人間が自然に「あゝ悪かつた」と思う心の反省であり、永遠に消えるべきものではないのに、たつた一度の水をたらす儀式で忘れても好いとは、何と云う宗教のカラクリであつたらう。然しその時の僕は、父への親不幸(死ぬ間際に恐がつて看病しなかつた事)をしたと云う罪惡觀念が明日から忘れられると喜んで居たのだ。責任を神に転化しようとして居たのだ。その方がずっと「罪惡では無かつたか」虫の好い恥しらずであつた。然し、それが宗教の甘い汁なのだ。阿片なのだ。

二、受 洗 後

僕は洗礼を受けた。教会堂の廻りに真紅の椿が咲き乱れる中で讃美歌に包まれ乍ら……

そして過去の罪を洗い流した代りに、此の瞬間から死ぬ迄の、凡ゆる犯した罪を一つ残らず書き留めて、毎週神父の前に告白し、只の一つ云い残す事があつても、永遠にゲヘナの火に入れらるべく宣告されたのだ。それが如何に恐ろしい事か僕は気が付かなかつた。大した事は無いと高をくつて居た。自分が(他人は知らず)そんな戒律を耐え忍べる人間か如何か考えもしなかつたのだ。

始めの一、二週は何事も無く過ぎた。「人の悪口を一寸三回申しました。煙草を一本叔父のポケットから失敬しました。」

そしてこれは云い難くかつたけれど

「女の人を見て心に姦淫しました。それが三回ありました」

それは、しやがんだ女学生のスカートからちらりと洩れた太ももの白さを見てゾクゾクとしたり、電車に坐つた僕の前に立つた婦人が袂で押えて、隠そうとするむき出しの腕の美しさに、又混雑した電車の中で、すれ違いに、水色のスエーターの女の胸乳に押され、ビクリとした何秒間かを指すのだ。

それさえも実に悪い罪惡を犯したと、神に謝罪した。然しこれは洗礼の時の清い興奮が二週間許りの間支配して居たからだ。やがて

—あの敵—「性慾」が押し寄せて来た。

三、惑 乱

悪い事に、半年ばかり前から、二十才になつて覚えた自慰行為への誘惑が頭をもたげ出した。段々々々、遠くから慾望の洪水が押寄せて来る。そのごろ／＼とした音をじつと聞いて居る様な気がした。

すると、ツーツと背筋が寒くなり恐怖感が走つた。自分は恐らく、いや、きつとこれに抵抗出来まい。洪水の中に巻き込まれて終うその時「しまつた——」と云う思いが全身鈍い音となつて絶えず我が耳に聞こえて来た。何故自信もないのに教会に入り、足にがつちり喰い込む鉄枷の様な「洗礼」を受けて終つたのか。「失敗つた／＼」と思つた事、その事が最早敗北の兆しであつた。取返しがつかない。

僕はヘナ／＼と崩れ去つた。最早アツプ／＼する許りで、教会から脱出する力もなく(云うに云われぬ様々な重圧があるのだ。)又熱心な裏のない信者になる勇氣も無く、五年間、宗教と云う牢獄の中で七転八倒していたのだ。

其の最大の恐怖は(僕を鎖で繋いだものは

カトリック教会の発する魅惑的な不気味な「真理」なるが故に、此の宗教こそ「真理」なるが故に、と云う言葉だった。勿論何回も立上ろうとした。如何しても告白して終おうと雨のザア／＼降る夜中に起きて出掛けて行き、神父を叩き起して告白した事もある。今告白しなかつたら、もう自分は救われないと思つたからだ。何時も偽善者であつた訳ではない。然し「手淫しました」と云う事を一回云うのが如何に辛かつたか。外人の副司祭に告白して一寸笑い声で「シェインテスカ」と聞かれた時は、もう二度と告白すまいと迄思つた。

神父は只、神の取次者であつて、人間に告白していると思つてはならないのだが、如何しても人間的な羞かしさを覚えたのだ。けれど神父も人間である。で一年近く貯めて置いて、百位の罪を一度に告白した事もある。（此処で告白すべき罪とは、本人が「罪だ」と思つた事ではなくして、教会で定めた条項の範囲内なのである。）

又、如何しても云いたくない事を云わずに次々に飛ばして行つて、五つの罪を三つだけにして、その幾つかゞ氣になつて／＼然も如何しても云えず、そんな事が重なり合つて、

自分で自分の首を締めて居た。

「爪が一本異にかゝつても、もう小鳥の命はお終いだ」（トルストイの「闇の力」より）

四、責／＼と罪惡觀

此処で大切な事は形式主義のカトリックの中にあつた僕は「責」が罪であると云う事が（流石に変態性慾に迄は）教会の掟に含まれて居るが為に妙な心理状態だが「女を心に姦淫した」とは告白しても、それは縛つた女故に興味を持つたと云う事は決して云わなかつたのである。

それは、罪ではないと云う心理と、単なる姦淫の罪以上に、いまわしい、恐ろしい罪惡かも知れないから、告白すれば何事も許されると云つても、人間である神父の前で如何してこんな羞かしい事が告白出来よう。

「理論と結びつき、理論を骨格にした信仰の中では、理論と形式に合致すれば、ある行為が善である。人情や人間的共感から自然に生れるヒューマニズムはそこでは虐殺される。」

その理論と形式に形式的に合致する範圍では殺人も又惡ではない、という思想を産み出す。ある行為がどうしても實際的に善だと思われても、その信仰の命ずる理論と形式に合

致しない場合、その善を認識される行為を行うことはできなくなる」

これは「ジョイスとグリーンの場合」（文芸）に於て伊藤整氏が、カトリックに就いて書いた通りである。全く正しい意見である。

五、カトリックの加虐と女性

又、前号に書いた如く、自分が後手に縛つた女を好み、それ以外に魅力を感じなかつたと云う事が、十字架や鞭うちのキリストや、其の他様々の殉教図を見ても（噫、何とサデイストの喜びそうな材料ばかりキリスト教には揃つている事だろう）又それ等が、男性なるが故に、それに就いて姦淫の罪（手淫）を犯す氣遣いがなかつたからである。

これはほんの紙一重の違いである。僕が後手でなく、若し十字に縛る事、又男色にも興味を持つて居たら、僕はキリストをも慾望の対象とする恐ろしい地獄行きの大罪（教会で云う）を犯したかも知れないのである。そしてそれは大いに有り得る事なのだ。キリスト教信者の中で無意識にも陶醉して居る人がないとは断言出来ない、否それこそ宗教的情熱かも知れない。

教会に於ては、あの虫も殺さぬ女性にさえ

も、信仰心をかきたてる為にキリストが囚われの身となり、ギリ／＼と荒縄で縛られ、衣を剥がれ、泥だらけとなり、肉体を露出して鞭うたれ、傷だらけとなり、血みどろになり其の体に重い十字架を纏つきの儘背負い、苦しみあえぎつゝ、滑り転んで道を歩き、十字架に両手両足を釘うたれ、血をしたゝらせつゝ衆人注視のもとに槍で腹を突かれて、はりつけの身を悶え苦しみつゝ死ぬ迄の（僕等には身の毛もよだつ許りの、又サディストには無類の歓喜である所の）情景を繰り返しく／＼思い浮かべよ、と命ずるのである。それが正しい信者の生活なのである。

此の様な恐ろしい事は、只血だらけのビフテキを食つてゐる西洋人には信仰を高める元となるかも知れないが、お茶漬の味を知るアツサリした我々日本人には、とてもあくど過ぎ、加虐の対象にはなつても、キリストへの愛なんて何処かへ吹き飛んで終うのだ血だらけのキリスト像より、のんびり構えた大仏さんの方が有難く思うのだ。

それなのに、噫それなのに、あの美わしき（蛙の死体を見ても卒倒しそうな）お嬢さんがキリストのそんな場面を、思い浮かべて恍惚として居る。なんと恐ろしい事だと考え

ていたのである。

教会を五年後に脱けた理由の中には罪惡感に耐え切れなくなつた事と同時に、共產主義者がソ連邦を祖国だと云うのと同じく、信者が皆祖国は天国でなくて、ローマにありと云わん許りに西洋かぶれして居るのがいやらしかつたからでもある。芥川龍之介の「神々の笑い」に於ける「日本への優情」と云つたようなものだ。

然し人間にかゝる加虐、被虐の本能、慾望がある以上、その製造元の様なキリスト教から、僕がその方で（鞭うちや十字架縛りが好きになると云つた）何も得なかつたのは不思議な位である。それ程、仏教、儒教と違つて肉感的な粘つこい宗教には違ひない。

此の様にゆがめられたキリストよりも、カトリックを脱出した現在の方が、ずっとキリストを愛して居る。奇蹟も偶像も取去つた時キリストの慈愛溢れる言葉が、真理の光を放つて僕を励まし暖ためてくれる。

六、一寸一言

はつきり云つて置く、僕は教会を攻撃し、悪口を云う為に書いたのでは無い。「僕」という一個の人間が教会の掟に入つた時、斯か

る反応を示したと云う事実を書いた迄だ。むしろ僕自身の欠点、弱さを見つめる為だ。然しその責任を全部僕の罪（弱さ）に転嫁されるのは承服出来ない。矢張り弱い人間をそうならせた教会制度にも欠点があると思う。「否、教会が正しい、お前が悪いのだ。何故つて「真理」なるが故に」

と云う冷やかな一言を信者達は放つたろうが、それは信者である人間の声ではなくて、教会という城にたてこもつた信者という奴隷の声だ。

つまり、僕はそれ等不快な制度（形式）の凡てを取去つて終つたカトリック（キリスト教）には大いなる尊敬と共感を抱いている。キリストや創造主の偉さ、慈愛深さを著しく迷信的にゆがめているのは、人々に肩をひそめさせるのは、教会なのである。自分の悪いと思われる点は認める。さりとて教会制度の悪いと思われる点（少くとも僕にそう思われる点）も認める訳には行かぬ。

七、「聖アントワーンの

誘惑」(性的過敏症)

それは兎も角、性慾、責、手淫、女に対する行動（勿論、心を動かすさへ）凡ての快楽を

封鎖された為、出口を見つけ出そうとして四苦八苦した。もがいた。聖人の苦行法もやつて見た。興奮した邪魔物を冷水に漬けたりもした。何とか上人の様に、切り捨てたくもなつた。然しそれにも増して性慾は常人以上の性慾過敏症になつた。

「聖アントワーンの誘惑」そつくり。女と見れば性器が浮ぶ。自分でも嫌なのに婆さんの迄浮ぶ。男のもの迄浮ぶ。凡ゆる淫乱な場面が（彼の沙漠の聖者の如く）次から次へと機関銃の弾の様に襲いかゝる。禁慾すればする程、僕の頭は「性」の事で埋まつて終い、教会のミサで前に坐つた娘の肩の線や腰の妖しさから裸体を想像する。そして其処が聖堂であり、神の御前であるのに気づいてぞつとずるのだ。実に恐かつた。今にもキリストに殺されるかと思つた。

教会のこんな娘達は決して信仰の為でなく見得や、男をたぶらかす為に肉感的な服装でやつて来るのだ。男の色慾をふせぐ為のヴェールは、反つて男の色慾をそゝり、ヴェールをはがしてむき出しの女の顔を見たいといらだたせるのだ。

最早、告白も追いつかぬ。色慾の罪は一日三十回、四十回にのぼる（何しろ心に姦淫す

【読者通信】

（投稿歓迎）

奇クは我々好事家にとつて大なる福音であり毎月楽しみに拝見しております。編集部の先生方の御努力感謝の外ありません。少し希望を述べさせて頂き出来ればこの線に沿つて頂きたいと思ひます。（一）責めの口絵や写真をもつと沢山いれて貰いたい、そして口絵は色刷りにすること（二）責めの妙味はなんといつても、やわ肌を喰ひ込む緊縛とそれに伴う苦痛のため、のたうつ女体から発散するエロチズムにあります。ですから苦悶のたうつ表情とポーズに今一段の強化願ひます。（三）責めの効果を更に挙げ、るために色々の責め道具や腰巻等の着衣に

色々の工夫を必要とします。（四）次に責めの写真や絵をまとめて特集を発行して頂きたいと思ひます。（東京の或る愛読者より）（編集部から御返事）

御希望の向きは許される範囲内で最大の効果を挙げるよう努力致しておりますが何にしる目下の状況では涙をのんで掲載を放棄しなければならぬものが多く残念です。絵と写真の特集は玲子画帖第二集とコロタイブ印刷の写真集の発行を目下進行させておりますから御期待下さい。（二）の御希望のものは代理部の写真集で妙味を発揮して居りますからその方でお求め下さるようお願い致します。

るだけでもだから）三年目、四年目には、一週一回位しかやつて居なかつたのが連日続いた。罪の数を減らして告白する。都合の好い事だけ告白する。終いには告白を止める。

一度も欠かさなかつた日曜のミサも休む。

（一度休んでも地獄行きの大罪なのだ）キリスト教から見ても完全な偽善者となつた。特に此の記録は「責」が主であるからそれに就いて話そう。

八、その前に一寸

では何の為にこんなに苦しむべく教会に入

つたのか。それは矢張、此の世で少しでも幸福になりたいから、人生の目的を得たいから少しでも清い生活を送りたかつたからだ。神の愛にすがりたかつたからだ。

処が結果は如何か。人生の目的はあの世にあつた（鳶に油揚げさらわれた）。「此の世を不幸だと思へ」そして清いどころか陰惨極まりない人間になつた。「淫獣」になつた（僕だけでも知れない。―が兎も角、僕はのんびり毎日曜。ミサに来る善男善女を見て不思議に思つた。彼等は僕のように大して悩まずに生活しているのである。僕が神経質過ぎるのかとも

思つた。

幸福と云う鯛を釣りに行つて鯨を釣り上げたのだ。巨人ならワア一鯨だと大喜びだろう所が「禁慾」と云う大鯨を釣り上げた僕は、鯛釣りどころでは無く、海の中へザンプと引っぱりこまれ、アツプ／＼溺れてずぶ濡れになつて、それでも如何にか岸へ這い上つていたのだ。（既に教会から脱出したのだ。）

九、僕の「責」趣味について

「責」も此の時分になると、僕の本来である空想性から逸脱して現実性を帯びて来た。それは僕の好みが空想を楽しむ事から現実にならうと望んだと云うよりは、極度な禁欲の強迫が爆発口を見つけ出そうとしてあがいたと云つて好い。

即ち僕は、これと思つた肉感的な現実の女性を見た時、それをすつぱだかにむいて、後手にふん縛りたいと望んだし、夜は夜で其の女性を如何して誘惑するかに就いて工夫をこらした事もある。（只工夫する事を喜んだに過ぎなかつたが）部屋の柱に縛りつけた事にして、皮のバンドで空を切つた事もある。ビュン／＼とうなるその音に僕は興奮した。然し余りに強い禁欲への反抗はそんな事では治

まらぬ。様々の絵も描く。然し絵の下手な僕には雑誌から集めた切り抜き絵を楽しむのがせい一杯だ。

興奮が醒めると、嫌悪、漸愧に絶えず、切角集めた画を燃す。集めては燃やす、燃やされた何百枚の蒐集品は足に踏みこまれて空に舞う。燃やした後で又口惜しがる。我子を失つた様な気がするのだ。手のつけられぬ放蕩息子を追出した後の父親の様な気持がするのだ。小説も書いた。二、三紹介しよう。先ず小説を書くとなると如何しても筋が要る。すると嫌でも残酷な筋になる。でないと女を縛る口実が出来ない。

一つは、共産党集会所が警官に襲われ、逃げ遅れた三人の女党员が、四人の警官に責められる。三人共別々の責め方をされる。責め方は自分の創案と、「ガミアニ」や「バルカシクリーグ」等を元にして書いた。然し段々血なまぐさくなると書く氣力を失う。（ちやうど、美味い／＼と御馳走を食べているうちに食べ過ぎて吐きたくなる様に）

又、妾が旦那の留守に正妻に呼ばれて何日も半死半生にいじめられる。これも妾の思ひ出として、谷崎の「卍」調や舟橋調にして書いて見た。然しこう云う筋は僕の性に合はぬ

加虐のない然も女を縛る小説は、と色々考えた揚句、一代男風に書いて見た。

五つ、六つの少年少女が縛りっこする。

マ、母に裸にされて縛られ切檻されている女の子を見た、男の子がそれを見て、後でその女の子と縛りっこをして遊ぶのが機縁、谷崎の「少年」に似ている。この男の子が中学生になつて「解剖」が流行する。お互に腕白達と同級生を片っぱしから縛つて、マスターベーションの洗礼を授ける。皆飽きて女学校迄進出する。女学生のスベ公の大将が居て、男の生徒を客分にして、同級の女をいたづらして見せる。後でそのスベ公も男の子達にやられる。男の子は青年となる。或る夜強盗にいたづらされている女の子を隙間から見て、決定的に「責」のとりことなる。愈々本格的になる。

然しそれを書くのも、もどかしくなつて来た。（こんな事を書く、つまらん「記録」なんかよりその方が面白そうだ、書け、と云われるかも知れないが、現在そう云う創作には興味がないし、破つて捨てたし、第一書いても一度に発禁になりそうな代物だから、とでも／＼）

御承知の通りカトリックを脱してから「責

への傾向はぐんとうすくなり「奇ク」を読んで楽しむのが積の山になつてゐる。だから変態性慾者と云えぬ程現在はいうすいのだ。食うなと云われると食いたいが、食つてもいゝと云われるとさまで食いたくないのと同じである。

十、矛盾

読者諸君は僕の文章に多くの矛盾を見つけ出されるであらう。然し矛盾の無い人間があらうか？ いや／＼決して肯定したり、ふて腐れて居るのではない。大調和に達する為此こそ矛盾の振幅が必要なのである。むしろ矛盾が無いと云う人は、右か左かどちらかに極端に傾いて居るのであつて、何時か不自然さが現われ崩れ去るのである。

古今東西の尊敬すべき人物の中、一人だつて若い時の矛盾に悩まなかつた人は居ない。偉大な仕事をした人程その矛盾も大きかつたトルストイがあゝの思想（禁欲的キリスト教）にも拘わらず、モーパッサンに魅かれた事実には僕を感動させる。若しトルストイにして、異教的（ギリシヤ的）面を一切知らされず、石部金吉的面のみを知らされたとしたら、僕は彼を全然顧みないだらう。（そんな人こそ

偽善者に違いないから）

或る人々は、彼が謹厳である事を随喜の涙を流して聖人と拝むかも知れない。然し僕にとつて、トルストイの偉さは矛盾の大きさである。即ち人間的であつたと云う事である。彼が逃げずに悩んだ事である。

ドストエフスキーに至つては、ぞつとする様な悪魔と、素晴らしい神性が彼の全身に渦巻いてゐた。ゲーテも二つの矛盾（ギリシヤとキリスト）の大調和へ一生を捧げた。

「俺には何の矛盾も無い」と威張つてゐる人々こそ肩つばものである。そんな人は、自己について些かの反省もしない。心を痛めない冷たい人間である。僕は調和に達すべく、この矛盾を一つ一つ克服して行く積りである。

その斗争の過程に僕の人生の意義があると考へてゐる。

十一、實際行動

僕がこんな状態に在つたのに、空想から出ず、實際に女を縛つた事が無い、女と握手した事すら無いと云う事は、氣の弱い僕の性質にも依るのであらうが、又機会が無かつた事にも依る。求めようとしても、女等に近よる

環境になかつた。（それはもう年中、女に近づく事を恋いこがれていたのであるそんな僕が、真に皮肉にも自分に興味の無い「男色」によつて二回も實際的接触を余儀なくされたのだ。全く皮肉だ。僕の心の記録としてより不快な紀念物として、いや／＼ながら書く。

一回目は、学友と一緒に寝て、その学友に悪戯された。僕も儀礼的に？……………見たものゝ、氣持悪くて引つ込めた。それだけなし好かつたのである。只、年頃の性の悪戯として許せたかも知れない。

然し、後日ラブレターを貰つた時、「好きな女がいるが君のことも思い切れぬ」と云われた時位、羞かしく、いまわしく、火のついた様に腹が立つた事はない。（これは同性愛の方々には怒られそうだが、只その時の僕はそう思つたと書いたもので、現在はずと寛容になれた。同性愛の人々で、加虐をいとましく思われる方もあるだらうから）で、二人は絶交した。

もう一度は、汽車で実に巧妙な手段によつて、自分の氣ずかない中に、三十位の男に悪戯された事である。

後でこそ其の妙技に感心したが、その時は何故か処女の様にもじ／＼して終い、口も利

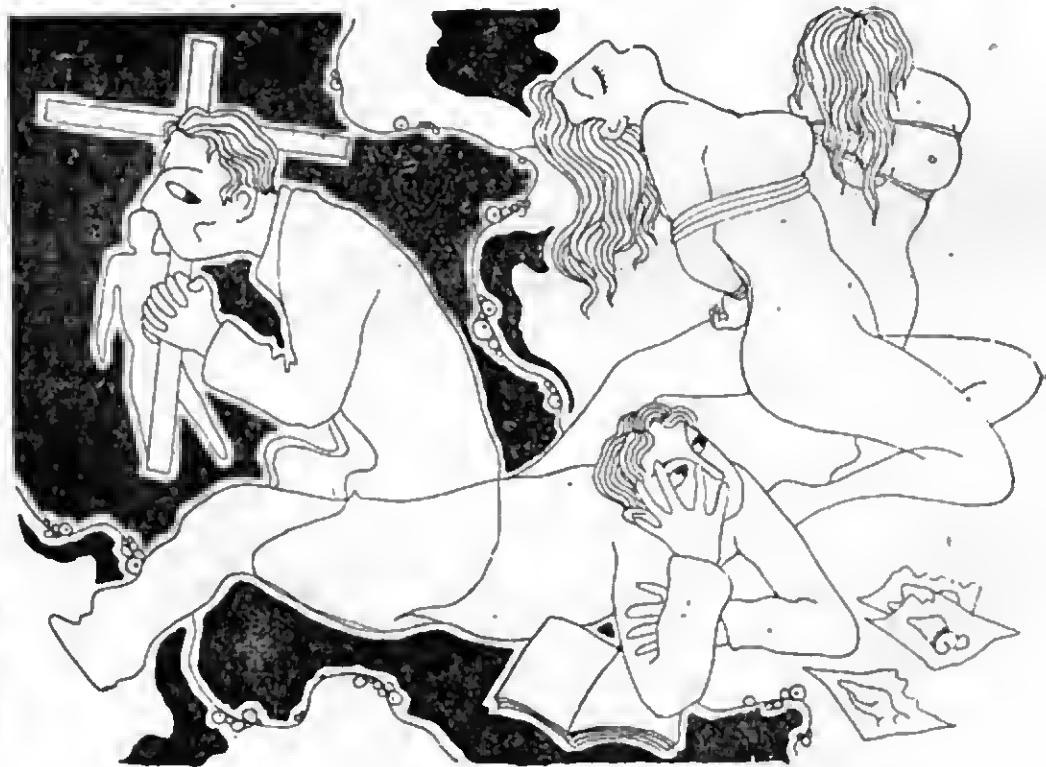
けぬ始末だつた。恐怖と、羞かしさと、腹立ちとで、頭は混乱していた。(お望みの方があれば、其の時の事をもつとくわしくKK通信に書いても好いが)

本や雑誌でだけしか知らなかつた同性愛者が現実には僕に向つて来たと云う事が、只もう如何したら此の恐い小父さんから逃げられるだろうと、只その事だけで一杯だつた。若しかすると、マゾヒスティックな快感も感じていたかも知れない。

それ以来、処女が強姦された話をきくと、それが少しは実感出来る様な気がするのである。(妙な倒錯心理だが) 以上二つの話は十九頃だつたと思う。

十二、罪惡に就いての考察

それ以前の僕は(受洗前)小、中学の修身課目、即ち根柢の無い倫理を習つたに過ぎない。然し宗教に於ては道德が定義され、目的を与えられる。「人の物を盗むな」と云う時何故盗んではいけないか学校では教えない。何故ならそれは判らぬから。いけないからいけないのだ。宗教はこれを笑う。そして定義する。人の物を盗めば地獄へ行く、神の掟にそむく。神を信じよ。地獄の存在を恐れよ、



それに依つて汝は天国に行ける。永遠の幸福を受ける。

世の中には宗教と云うと非合理的なものと思う人があるかも知れないが、現今のキリスト教は、迷信性をおぎなう為に最も合理的な仮面をかぶっている。然しこれには一面の真理がある。科学が未だ神の存在を立証しない以上、科学は宗教に頭を下げさす事は出来ない。

い。総明なる科学者程、神の前に頭を下げるのは(信仰を意味しない)彼が馬鹿で迷信好きだからではなく、科学の限界を認めているからである。そして科学が神を立証した時、宗教(信仰)はなくなる。(それを好い事に宗教が科学の上に君臨するのも困りものだが)唯物論者が神の存在を証明する科学的根拠が薄いと笑う以上に、神が存在しないと云う証明も亦、不完全極まりないものだ。信者が迷信的に神を信ずる様に、共產主義者は何の根拠もなく、無神を信じている。無神であることを迷信している。此の意味で無神、有神の違いこそあれ、カトリックもコムニズムも宗教であり、迷信である。

今の冷たい戦争は此の二つの宗教戦争とも云える。カトリックの此の理論的である所に重大な過失があるのだ。(若く理論好きであつた頃の僕は、その過失にこそ魅かれた) 神地獄、天国、靈、凡ての存在が理論科学的に証明され結論される。然し今の僕は神とか、罪惡とか、道德の基本とか、幸福とか、生きる喜びは決してそう云つた理論許りで解決出来るものでない事を悟つたのである。何々故何々の為、善を為す、これは決して真の善行に非ず。真善美はそんな愚かな人間のでつち

上げた合理性で解決出来はしない。もつと本源的な、人間の内部から、動物的にも見える人間の心の奥底から漲り出るものだ。祈らずにいらぬから祈る、善をせずに居れぬからする。美しいと思うから美だ。其の瞬間に於て神の存在も否定も問題にならない。善か悪か判断の暇はない。(宗教は是に真向から反対する)神の定めた(云い直せば教会が定めた)掟以外に人間が勝手に感ずる美も、善も、真もあり得ない。

人間が如何に裸婦を美と観じ、その行為を善としても、それは神の掟に反する限り、一秒眺める事さえも、地獄行きの大罪であり、悪魔の誘惑である。此処に宗教性と人間性、キリスト文化とギリシャ文化の斗争がある。昔から凡ゆる人が、此の両極に右往左往し又調和しようとしたが未だに実現しない。トルストイの様に宗教性に行き過ぎたり、ボードレールの如く人間的美(教会から見れば「悪の華」)に落ち過ぎたり。

然も彼等は、其の逆のものに魅かれる矛盾を持つてゐるのだ。僕も此の中間にあつて、その調和に突進している。僕は神を捨てる事は出来ない。真善美から眼をふさぐ事は出来ない。さりとてある恐ろしい罪惡の牢獄である

る宗教に帰りたいではない。僕は耽美主義のワイルドや又、ジードには魅かれない。ロマン・ローランやデュアメルに魅かれる。

人間として、凡そ裏腹な、そぐわない人間に見えるかも知れない。然し如何に笑止千万に見られても、僕は僕だ。如何にもならぬ。他人が笑う以上に、僕は僕自身の変な立場を笑い続けて居る。

十三、エビローグ(一) (一部)

の読者に告ぐ)

僕は此の文章に自己告白慾と虚栄が混つて無いとは云わない。然しそれだけではない。真実を知りたい。「僕の記録」はルソー風の懺悔録でも無ければ、悪徳讃美でも無い。さんざん悩まされた「告白」と云う言葉も使いたくない。

矛盾を統一して調和に達する為への、自己完成への考察である。(無論「奇ク」には僕の一部である「変態」に就いてのみ書いた訳で、将来何年か、かゝつて僕の凡ての面をみごとに統一した小説を書きたいと夢想しているが)そして又、世の中で、自分の心の矛盾に悩んでいる人、自己の異常性に絶望している人々に向つて、自己を語りたかつたからで

もある。少しでも真面目な一部の人々(例えば兵庫県のKO氏や、和歌山の佐渡氏の様な)に発言したかつたからである。勿論新年号の「僕の記録」は何の意図も無く書いたものだが、今度は違う。罪惡の泥沼に落ちこんで身をほろぼす人が一人でも少くなればと思つて此の記録を書いた。

十四、「最後に」エビローグ

(二)

これがカトリック當時に書かれたなら、僕は是を「記録」でなく、秘かな神への告白とするか、又は偽善者の二重人格者の惡徳の具としたであらう。然し今の僕はもつとのびく／＼している。僕の趣味(仮に「責」とする)を無闇と罪惡視しては居らない。罪惡かも知れないが、罪惡でない様にして見せる(と云うのは未だ時々、カトリックの罪惡觀が一部消えずに残つて居て、僕を恐れさせるからである)これから美化し高めてやる。其の第一歩の前提としてこれを書いた。「今迄はこうであつた、然しこれからは」と云う訳である。カトリックを思い切つて脱け出してから(共産党ではないからリンチこそ食わぬが近所に信者が多く精神的圧迫は随分ある)

一年間、人生の目的、基本の一部を失つて、ニヒルや実存に走り、絶望したり、死にたくなつたり、色々の思想を漁つた。そして新しい自覚を得た。それはトルストイやゲーテ等の力である。「奇ク」にめぐり合えた事も確かに一つの試練だつた。人間はどんなものでも試練として、それに打克つて見事に利用すべきである。甘えたり、しおれたりしてはならない。古釘一本でも見事に利用する人もあり、素晴らしい精巧な機械を買つても何一つ利用出来ない人もある。或る人々は笑うかも知れない。トルストイと「奇ク」妙な対照だと。然し僕にとつて「奇ク」と云う発表機関が出来た事も、トルストイやヒルティに劣らず大切な進歩への原動力だつたのである。「奇ク」の様な雑誌に眉をしかめる人々は沢山あろう。

僕が若し知人の誰かに本名を明かして「奇ク」を見せたら、僕はさぞ偏見視されるだろう。(彼等は表面的なものしか見てくれないから)又「奇ク」の同人の方からも善の見地からでなく、悪の見地から攻撃される方もあるかも知れない。「善人ぶるな、我々と同じ変態者の癖に」と、然し僕が「奇ク」に投稿するのは決して蛸が陸を歩く様な有り得ない

偽善的な行為ではない。偽善家とも(偽悪家とも矛盾家とも云わば云え、僕にもそんな面が多少ある以上決して否定はしない)

あれも僕、これも僕、それも僕である。そして——あれも、これも、それをも一つのもの、矛盾のない、常に一つの「僕」に統一して行きたい。出来ないかも知れない。それでも好い。其の過程に僕は生きたい。以上で「僕の記録」を終る。(完)

◎読者の告白、体験談を募る◎

- 一、本誌に適當と思われるものでしたら如何なる内容のものでも結構です。
- 一、用紙はどんなものでもよいですし、又枚数も別に制限は設けません。
- 一、誌上匿名にて発表しますし、本名其他の秘密は厳重に守りますから御安心して御投稿下さい。掲載の分には薄謝を呈します。

モデル募集

本誌に御協力願えるモデルの方を募集いたします。略歴記入の上御照会頂ければ詳細について御返事申し上げます。

(編集部 塚本鉄三宛)

美容整形の栞呈



術前

術後

永久不変

・内容・

隆鼻、短身、豊頬、二重瞼、わきが、キズアト、はげ、シワ若返り、肥り過ぎ、やせ過ぎ、過小乳房、不妊症、更年期障害、脳下垂体移植

大阪市梅田新道交叉点
東一丁電車道

三山醫院



アブニストの記

らぶ・すれいぶ

(五)

鬼山 絢 策

こんな恥かしい人にも言えない秘密の事柄を、衆人に読まれる雑誌に発表する事は、常人なら到底考えられないでしょうが、私にはこれも一種の快感を覚えるのです。

然しそれは現在の事で、春美に劇場であんな事をされた当時は、恥かしくてもしも人が見てやしないかと思うと、真暗で窮屈な場所で、身動きも出来ぬ身体を硬直させて、ハラハラしながら春美の命令に服して居たのでした。それで居ながら一方では、大勢の人々が私の哀れにも愚かしい有様を、指さして嘲けり笑う姿を想像して、理窟抜きでそれにエクスタシーを感じるのです。

春美も自分で提案した事だけに、このプレーは甚だ満足する結果が得られたと見えて、その証拠を私の頬に、唇に示してくれました。

肉体の首枷から許されて、この「狭い密室」から顔を出して見ると、既に舞台は幕がおりて、明るくなつて居るのにびつくりする事もありました。

春美は周囲が明るくなつた時を選んで許したのです。そんな時の春美の顔を見ると、ふてくさい凶々しさが、例の微笑の中に含まれて居て、それが又私には一きわ妖艶に見えるのでした。

私は春美と新宿御苑や、浜町離宮へ散歩に出かけた時も、春美は劇場でのプレーをさゝやくように命じました。此処は有名なランデヴーの場所で、チバリホトリと仲睦まじいカッブルが歩いて居るのを見受けます。

「こんな所でだつたら人に見られるじゃないか」
「見られたつていゝじゃないの、此処ではもつと恥かしい事でさえ方々で実演されて居るのよ」

「僕達の方が恥すべきプレーじゃないか」

「そうかしら、でもあなたより妾の方がもつと恥かしい筈よ。だつてあなたは顔が見えないけど妾は顔を見られるんですもの、その妾が平氣なんですもの、あなたはちつとも恥かしい事なんかないじゃないの」

これは私の想像もして居なかつた考え方でした。



「君は人に見て貰いたい気持があるんじゃない？」

「フ、そうかも知れないわ、悪い？」

私は反対してよいか賛成してよいか迷つて、黙つて居ました男性には「見たい」と言う欲望が潜在して居り、女性には「見せたい」と言う欲望が潜在して居るのだと、心理学者は言つて居ますが、「見たい」と言う方は殆んど能動的である場合に限られますが、「見せたい」と言う方の立場には「見せたい」と言う能動的な場合と、「見られたい」と言う受動的な立場と二種類あると思います。

ストリップバーが舞台で、衣裳を一枚々々脱いで行くのは、「見せたい」と言う能動的な気持が含まれて居ますが、一部の女性には医者診察を受ける時に、性的快感を受ける婦人があると言いますが、これなどは「見られたい」と言う受動的な立場にあるのだと思います。

春美と私の場合では、春美が能動的であり、私が表面波々ながらも春美の命令に服従して居るのは、心のどこかに、それを迎え入れるものがあるからなのです。だから私が受動的な位置に立つて居る事は明らかです。

この変型的なエキシビジョニズムが二人の間に益々募つて行つた結果は、後になつて私に大きな悲嘆を生むことゝなつたのですが、それがその頃から私にはおぼろ気ながら予感として居ました。

そうした無為の生活を半年も続けて居るうちに、私は経済的にも肉体的にも大きな打撃を受けて居る事をヒシ／＼と感

じて来ました。

こんな不健康な、不経済な生活を続けて居てはいけな！私の理性と良心は激しく私を叱咤します。然し私が勤めるようになつたら、春美は屋間の間淋しいだろうと思ひ、一面私のもつて生れた意気地なさと、懶惰とが、一日のぼしに決心を鈍らせて居たのでした。

それが春美から「この頃毎月赤字でしょう。あんたどこかへ勤めたらどう？」と言つてくれたのには、私を大いに励ます気持を起させたのでした。

それから私は職を探し始めました。池崎の所へは、私の代りを入れてしまつたのですから今更その椅子を返えしてくれとも言えませんし、余分な人を置く程今では彼の仕事も黒字にはなつて居ないので、他の勤め口を探して居ましたが、私のような怠け者には、朝九時迄にキチンと出勤して、夕方五時迄に帰ると言うような判こで捺したような勤め振りは出来ないで、勢い雑誌社のような、比較的ルーズな勤め振りで済むような所ばかりを探すことになるためなく／＼見つからなかつたのです。

池崎は時々私の家に遊びに来て居ましたから、私の事を心にとめて居てくれたと見えて、或る教育書籍の出版をやつて居る社に紹介してくれたのです。

行つて見ると、仕事も堅く面白い文章や活字の羅列、机を並べる連中も教員の古手ばかりで、さつぱりうるおいのない連中だし、従つて勤め振りも、キチンと型に嵌つた様子なので、気が進みませんでした。おまけにサラリーも少しいし、此



処へ勤めただけでは家計を黒字にする事は到底望めませんが嫌になつたらやめるとして、兎も角先方ではOKだったので暫らく通つて見る事にしました。

春美も喜んでくれて、始めて社へ出勤する日には、洋服にブラシをかけたたり、靴を磨いてくれたりして、サラリーマンの女房らしく振舞つてくれました。

彼女が私の靴を磨いてくれた事は、まことにもつたいない事だと私を感激させました。

(少し位辛くとも、彼女の励ましにこたえて、勤めなければならぬ)と決心したのでした。

同じ編集の仕事でも、方面が違つて、全然勝手が違つて、余計な所に神経を使うので、勤めた当初は非常な疲労と堅くするしい空気の中に一日坐つて居る辛さがこたえました。辛抱して勤めて居ました。

その代り帰つてくると春美がにこやかに迎えてくれる。それが楽しみで、やつぱり勤めてよかつたと思ひました。

馴れてくるに従つて、仕事の量も増えてきて、益々忙しくなり、責任も重くなつて来たので、今日は何して春美と遊ぶうかと毎日考へて居たルンペンの時と違い、家に帰つて来ても仕事の残滓が頭の隅に残つて居るため、春美への関心も薄くなり、春美には私の態度が冷たくなつたと見られはしないかと、時々落着まなく思うのですが、春美は別にそれに対して不満の色も見せず、疲労のひどい時にはあの妖美なブレーもお休みになる事があつても別に能動的にも出ずに居ました。そんな具合で、二、三カ月は忽ち過ぎてしまいましたが、

仕事が一段落ついて、暫らく息がつける見通しがつくと、私は春美に対して久し振りに激しい愛情を覚えました。

桜の花も散りかけた晩春の、土曜日の午後でした。今日は早く帰つて、二人で映画でも観て、お茶をのんだり散歩をしたりして、夜は悠つくり彼女と楽しいプレイを心行く迄堪能しようと思つて、家に帰つて見ると、戸締りがしてあつて、春美は留守でした。

瞬間、私の頭の中に黒い雲がおつかぶさるやうにのしかつて来ました。

春になつてから、春美は私の留守中チョイ／＼家を空けて私の帰宅時間迄に戻つて来て、何喰わぬ顔をして居る様子が見受けられるのでした。そんな時に私が「今日どこかへ出かけたの」と聞けば、「え、一寸買物に行つて来たのよ」と言つて別に外出を否定する事はありませんでしたが、聞かずに居れば自分からは「外出した」とは言わないのです。時には少し酔つて帰つて来たと思われる時もありました。

私はこれが氣にはなつて居たのですが、春美があまりに無邪気な表情で平然と答えるものですから、大して疑がいはしなかつたのですが、今現実に留守の所を見た時、私にはフツといやな予感がしたのです。あれ程精力的だつた春美が、私が「愛の奉仕」を怠つても、平気で居られたのも、今にして見れば思い当ります。

裏口から家の中に入つて見ると、雑然と取散らかされた中にテーブルの上にウイスキーグラスが二つと、二人分のチーズや南京豆を入れた皿がのつて居ます。この部屋は洋間



ではありませんが、私達の密室であり、秘密の楽苑で、来客用の室は、別の日本間があつて、かつてこの部屋は私達夫婦の他には誰も足を踏み入れた事のない部屋なのです、傍のダブルベッドの壁には、人に見せられない絵や写真迄貼つてあるのです。

ベッドの羽根蒲団も半分捲かれて、シーツが皺になつてゐるのを見た時、私は総べてを了解しました。

私の体内にガク／＼と熱い血が頭に上るのを感じました。

その時の私の気持を何と言つて表現したらよいのでしょうか。

それは憤りでもなければ悲しみでもないのです、何か私自身が、重大な過失を犯したような気持になつたのです。

恰度その時、私のその過失を嘲笑するかのような

「ウフ、、、バカ！」

と言う妻の声が室の外から聞えて来ました。

三

私は突嗟に身のおき所に窮しました。

合着のオーバーも着たなり、靴も持ったまゝの自分の姿を意識すると、私は素早くベッドの下に潜りこみました。

私はベッドの下で、空巢狙いが仕事の中で家人の帰宅に出会つた時みたいに、胸をドキ／＼させて、息を殺して扉の下の方を見つめて居ました。

その扉が乱暴に開いて、春美のナイロンの靴下をはいた足と、派手な紺色の格子のズボンにエンジ色の靴下をはいた男の足がもつれ合うようにして入つて来るのが見えました。

真直に此方へ向つて歩いて来た四本の脚は、何の躊躇もな

く、私の上のベッドヘッドシンと乱暴に二ツの尻を叩きつけたやうで、スプリングがギイツと鳴りました。

「まだ疑ぐつてんの。何でもないんだつてば。何だいあんなチンピラを気にするなんてサブラしくもないよ」

「俺の眼をごまかそうたつてだめだよ、長年その道で苦労して来た俺の眼から見りや、おめえがあゝの野郎と今迄何度あつて、何度寝て居るか迄一眼で分るんだ」

「何言つてやがんだい、占い者みたいな事言つてやがら。じやそうだつたらどうだと言うのさ」

「只じやおかねえ」

「男をかい、それとも妾を？」

「両方だ」

「フ、まるで自分が亭主みたいな事言つてやがら」

「俺が亭主じゃねえか」

「バカお言いでないよ。妾にや下条清二と言う立派な夫があるんですからね」

「フン、カンガン亭主か」

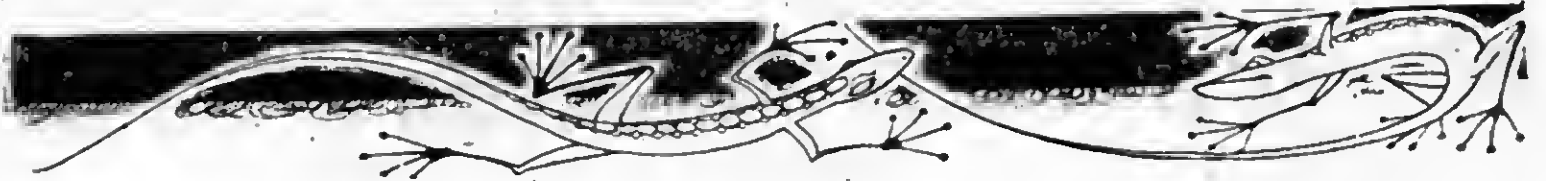
「カンガンだろうと何だろうと亭主は亭主だよ」

「うるせえ！おめえの亭主は日本中に俺一人だ！」

私の眼の前には春美の足が二本と、男の足が一本ブラ下つて居ました。男は片あくらでもかいて居たのでしよう。それがもう一本の足がおろされたと思うと、ベッドがギイツと鳴つて、春美が押し倒されたやうでした。

「いゝか、浮気をしたら承知しねえぞ！」

「分つた／＼、苦しいよ」



男がつと立つてテーブルの上のウィスキーとグラスを取上げたようです。

私は男の顔を一眼見たかったのですが、もしも私を発見されたら大変だと思つて、胸の辺り迄見上げましたが、顔を見る勇氣がありませんでした。男は紺のダブルの背広のボタンを外して赤いネクタイをして居ました。

誰だろう？大槻？私は直感的に大槻だと思いました。然し大槻にしては声音が少し太いように思えます。

「おい、早くしろい、俺ア忙がしい身体なんだ」

「女の子タラすのにだろ」

「バカヤロ、女をたらすのに金なんか要るもんか、四時迄に行くん」

「まだ大丈夫よ。ねえ」

「この次だ」

春美が立つて行つて男の首に両腕を巻きつけました。いつ洋服を脱いだのかスリッパ一つの裸の背中が上の方まで白く見えました。

春美は何枚かのお札を男に渡しました。男は片手で春美の背中をグイと抱き寄せたと思うと直ぐ離して出て行きました。春美はスリッパ一枚の姿でその後を追っかけて行きました。



春美が玄関の締りを開けに行つて居る間に私は裏口から外へ気ずかれずにとび出す事が出来ました。近所のコーヒー店へ飛び込んで、私は二人の会話をくり返して考えて見ました。

かんがん亭主！ 宦官亭主

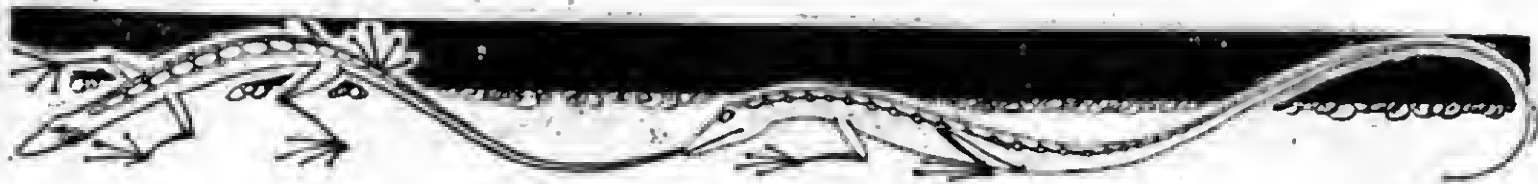
昔支那の後宮の美姫達を取締る役人は、皆男性としての資格を失つた男が宦官と称して勤めて居ましたが、彼等は男性の象徴を持つて居なくとも、舌と言う武器で結構姫達の御機嫌を秘密に取結ぶ事が出来たと言う事です。彼等は子供の時からその武器の特長を活かすために舌を長くする習練を怠らなかつたと言われますが、その事を思い合わせれば、私の事を「宦官亭主」とはよくも諷

したものだと思いました。

私はたとえ、人並みの亭主の役目は果して居なくとも、春美を満足させて居るものだとばかり信じて居ました。然し今にして思えばそれは私の独善的な考えだつたのです。私は失望と落胆と不安に襲われて、眼の先が暗くなるように感じました。

（あゝ！所詮は春美も平凡な女だつたのか）

私には妻の不貞を詰るとか



相手の男を憎むとか言う気にはなりませんでした。

(総べては自分が悪いのだ。妻の現在の行為を咎める資格は私にはない)

(ノーマルな夫の勤めを果せぬ男。妻子を捨て去った男——それが又妻に捨てられたとて、誰を怨むところがあるのだ皆身から出た錆だ!)

然し私は春美を諦める事はどうしても出来ませんでした。私はこれからの妻に対する私の態度について、深く考えて見ました。

もしも事を明らさずにすれば、春美は平然として家を出て行くだろう。

知らないふりをして居れば、益々不愉快な、不安な毎日を送らねばならない。

男に話をつけて手を切らしたら——

そうすれば又直ぐ春美は第二の「真実の夫」を作るだろう私は悩み、苦しみ、悶えて、善処する方策に迷って居るうちに、はやあたりは夕暮が迫り、私の帰宅時間がやって来ました。

四

妻はいつもと少しも変りなく、無邪気な笑顔で私を迎え、睦まじく二人で食卓に差し向いになりました。私はつとめて何の蟠りもなく、極めて朗らかに妻に對しました。

暫らくの間妻の行動を秘かに監視するより他に道はないと思つたからです。

私は自分の理想を実現するために、無駄だと思ふような眼

立たぬ所にまで気を配つて建てた私達の寝室、二人キリの秘密の楽苑に、昨夜と同じように春美と二人で入りました。

然し今見るこの室は、調度や寝具に一切変りはなくとも、もはや「秘密の花園」ではなくなつて居るのです。

春美も昨夜とは別人のような気がします。不潔な女!

自分専用の食器を、自分の知らない間に他人に使用されたような、それも食器としてでなく別の用途に使われたような感じを春美から受けました。

然しどんなに汚された食器でも一度拭われれば、見た所は綺麗な色艶に光り輝やく食器です。

私はあまりにしら／＼しい、あどけない春美の表情や態度に始めて怒りを覚えました。

そうです、今始めて春美に怒りを感じたのです、ベッドの下へ潜り込んで居る時も、コーヒー店で、いろ／＼考えた時も、春美に対する瞋恚の心は起らなかつたのが今始めてムラ／＼と沸き上つて来たのです。

私はベッドに仰向けになつて、瞑目したまま考え込んで居ました。

春美は鏡台に向つて、寝化粧に余念ありません。

(それにしても今日の男は一体誰だつたのかしら。大概か、或は私の全然見も知らぬ男だろうか?——)

「チョコレート食べない?」

春美は自分で先に一つ頑張しながらロレーアチョコレートの銀紙を剥つて私の所へ来て口の中へ投りこもうとしました



「要らない！」

「フン、ひとが折角持つて来てやつたのに、いゝわ、じゃアもつとおいしくして食べさせてあげるわ起きてらっしゃい」

「今日は気分が悪い、疲れてるんだ、寝よう」

その晩一晩中、あれやこれやと考えて、まんじりともせず夜を明かしてしまいました。

翌朝はシト／＼と雨が降つて居ました。

「ねえ、今日は会社お休みなんですよ」

今迄仕事に忙しかつたので日曜日でも出かけて行く事はザラにありました。

「いや、行かなくちやならないんだ。もつともお屋からでもいいんだけど、晩は一寸おそくなるかも知れないよ」

何となしに私は嘘を吐いてしまいました。

屋近く迄眠つて、朝風兼帯の食事を済ませると、私は鞆を下げて出かけました。

門を出て十間ばかり行つた曲り角で、それとなく家の様子を見て居ると、期待した如く春美が出て来ました。そして思つて居た通り、公衆電話へ入つて行きました。

ふだん着のブラウスとスカートにサンダルをつゝかけた恰好は、電話をかけて直ぐ家に戻るのだなと思ひましたから、私はその隙に家へ逆戻りし、鞆と靴を持つて又ベッドの下へ這い込みました。

間もなく春美は帰つて来て、寝室に入つて来ると、ベッドの上に脱ぎ捨てゝあつたバジャマに着替え、ブラウスやスカートを乱暴にクル／＼丸めたのを洋服ダンスの中へ投げ込む

後姿が見えました。

春美はベッドの上に上つて、雑誌を読んで居る様子です。(バジャマで迎える訪問客！)

今日こそその秘密の訪客の正体をつきとめてやろうと思ひました。ベッドの上と下で訪問客を待つ夫婦！

妻は柔かい羽根蒲団にくるまつて、仄かな香水の漂う中に秘密の快楽の期待に、肉体のざわめきをおしころして居るところでしよう。

夫は堅い床の上に枕もなしで犬のように這いつくばり、湿つぱい藁の匂いを嗅ぎながら、夫として見るに堪えない場面の数々が、頭の上で繰りひろげられるであろう事を、じつと忍んで窺つて居るのです。

この苦しみ、この屈辱は、いつしか私に不思議な陶醉を感じさせました。そして私の肉体にも、私の意志を無視して、異常な昂奮が起つて来たのです。何と言う哀れな夫でしょう情ない私の姿でしょう。

春美は突然はね起きて、ベッドからおり立ちました。

私はドキツとして息をとめました。

彼女はテーブルの上に昨夜から出しつ放しにしてあるチョコレートの箱をとり立つたのでした。

春美は床の中でそれを食べながら又雑誌を読んで居るようです。

あたりはシーンとして、どこかのラジオが軽音楽をやつて居るのが、かすかに聞こえます。

重苦しく、長い／＼時間がのろのろと過ぎて行きます。



時々寝返りを打つ妻の肉体が、私にはよく分りました。

あの丸い肩からこの腕にかけて、ムツチリと盛り上った肉
ずき、美事に発達した腰のまわり、疲れを知らぬ精力！

総べてが情慾的に爛熟した、健康な肉体を持つ春美が、私
の「愛の奉仕」が一夜たりとも怠れば、不満を訴えるのに相
違ない筈です、それを平気で居られたのは、こうした「抜け
道」があつたからなのです。

今にして思えば、春美が私に就職をすすめたのも、経済的
な面を心配しての事ではなく、自分の秘密な時間を得るため
に、私を遠ざけようとした策だったのかも知れません。

春美は私の「愛の奉仕」だけでは最初から不満だったので
しょうか。

私は決して肉体的に不具者ではありません。

(今からでもおそくない、私がノーマルな気持ちに立帰つて、
妻に接すれば、妻の素行も治るだろうか)

とも考えて見ましたが、それは私にとつては味気ない夫婦
生活なのです。

(私は精神的に不具者なのだ！)

今更ながら、自分の女性に対するインフリライコンプレッ
クスに、愛想をつかし、自己嫌悪に心秘かに溜息をつきまし
た。

家の外に自動車の音が聞こえ、サーツとブレーキをかける
車のスリップする音が響きました。

バツトの上で春美の動く気配がしました。

半身を起した様子です。

玄関の格子が開く音がしたと思うと、

「おい！」

とどなる声がありました。春美の白い足が、桃色のパジャマ
の裾を捲つて床におり立ち、急いで玄関へ出て行きました。

男はまるでこの家のあるじの如く堂々と入つて来ました。

それを迎え入れる春美は、彼の愛妻の如く、誰憚かる所なく
私の潜んで居る部屋へ招き入れるのでした。

「おそいのねえ、何してたのさア」

私は入つて来た男の下半身、そのズボンを見て、バツと息
を飲みました。

昨日の男と違うのです。イヤ、この男こそ顔を見なくても
ズボンに見覚えがあつて一目で分りました。

この白屋正面玄関から堂々と訪れた姦夫は池崎だったのだ
す。

(続く)

(読者通信)

本年高校を出たばかりの者
です。先月浅草に行き貴誌四
月号を見つけないで読んだだけ
で身がよじる様な気持ちになつ
てしまいました。そしてすつ
かり好きになつて私のマスコ
ットにしてしまいました。

是非KK通信を拝見したいと
思いますのでどうかお送り下
さいませ、同封の写真は昨年
江の島で三泊した時のもので
す。(独りで行つたのです)
なんだかオバアちゃんの様に
写つていますが撮つた人(ど
こかの大学生でした)が下手
なので実物は遙かに良いので
す。どなたか高校卒の女の方
(男性の方はもう嫌です)お
友達になつて頂けませんか、
私今同性のお友達がほしくつ
てたまりませんの、お便りを
お待ちいたします。

(東京、藤田艶子)

「女王様ごっこ」それは一人の美しい早熟す。

な十六才の少女と、その召使いである十四才の気弱な一人の男の子との一年間にわたる長い二人だけの「秘密の遊び」の名称です。

そしてその女王様だつたお嬢さんは、(名は「さとえ」と云います。)今は亡くなり、「ドレイ」だつた一人の男の子は、かく申します私であります。

私も今は若い妻もある

り、年老いた母もある

一人前のつもり青年

であります。ですから

決して本名や今の住所

は発表しないで頂きた

いのです。私のこの願

いを聞き入れて頂ける

事と存じ、そのドレイ

だつた私の小さい頃の体験を語らして頂く事

に致します。

私は父を知りません。早くから母一人に東京の世田谷で育てられました。母は一人子の

私一人の生長を愉しみに、或る宏壮な伯爵邸

に女中奉公に出て居り、従つて、私達親子は

その大きな家の一隅に住んで、私はそこから

近くの小学校へ通ふわしてもらつていたので

此の伯爵邸は高台になつた住宅地に位置し

非常に大きな古い建物は、一層広々とした庭

園に囲まれて居り、伯爵夫妻とその一人娘

(女王様だつた「さとえ」の事です)に、あ

とは多勢の召使い達が住んで居ました。

伯爵夫妻は、ほとんど云つてよい程、大

切なはずの一人娘もはうり出した様に家を開

も美しい容姿でしたが、誰も直接その日常に

干渉するものもないまゝに広いやしきで数多

い召使い達に君臨して居りました。

学校は私と異つて、確か学習院とかに「バ

ス」で通つていた様ですが学校の方も、ずい

分であつた様な様で、又、学友が遊びに来ると

いう事もなく、何時もその大部分の時間を二

階の自分の部屋に過ごして時折召使いに高声

で云いつけたりしてい

ました。一方、その頃

の私は至つて弱虫の内

気着で学校もあまり好

きでありませんでした

何時も級友達の悪大将

共にいじめられるばか

りでしたので 仲良し

が一人あるでなし、毎

日、真すぐに帰つて来ては一人で、狭い女中

部屋の隅で小さな古机に向つて絵を書いて過

ごしていました。私は絵は好きでした。絵ば

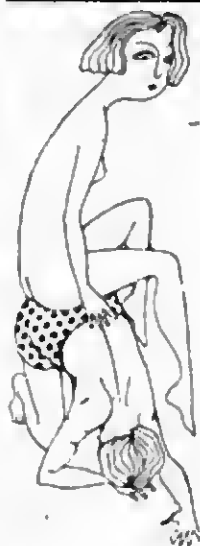
かりは学校でも、何時も大きな丸をたくさん

もらつたもので、内心得々となる程でした。

ですから、毎日あかずにそれこそいろんなも

のを絵にして一人で愉んで居りました。景色

や、花や動物、人間など、女の人や、女の心



飛田良二

女王様ごっこ

男性MASO

特集

の絵もだん／＼書き、しまいには何時の間にか、お嬢さんの顔や姿も想像しては一心に書いたものでした。しかしたゞ絵を書くことが好きで次々に書いたものです。ところが或る日、何時もの様に一心にお嬢さんの絵を書いている処を、ちようど通り掛つたお嬢さんに見付けられてしまつたのです。

始めにも書きました様に内気な私は、日頃同じ屋根の下に住いながら、しかも同じ位の年頃でありながら、遠慮する心もあつたのですが、友達になるところか、向い合うという事も、ついぞなく、その様な事は、努めて、私の方からさけていた様です。そんな弱虫の私に、ずか／＼と近ずいて来たお嬢さんは、それが自分の顔である事からちよつとびつくりした様でした。

「それ！見せて／＼」

命令する様に取り上げてしまふとお嬢さんは、私と私の絵をかわるがわる見て居りました。その白いお嬢さんの口もとには、不思議な笑いがたゞよい、そのさぐる様な大きな目は長いまつげの奥にキラ／＼と光つていました。私はたゞ真赤になつて固くなるばかりでした。お嬢さんは、横に並べて

ある私の書いた絵を拡げて見て、自分の顔や姿がたくさんあるのには一層驚いた様子でしかたか……

「へーエ、良ちゃん（私の名です）たら私の絵ばかり……」

あとは何時もの高笑いになり、私は、はすかしさで顔も上げられません。

「フーン、そうか／＼良ちゃんは私が好きなんじゃない？ね、きつとそうよ。私と遊んで欲しいんでしよう？ね、そうでしよう」

もちろん私は今まで一ぺんもそんな事思つたこともありませんでした。しかしお嬢さんはかまわず忽ち私の手を取ると立ち上りました。

「わかつた、遊んであげるからいらつじやい！」

こうして二階のお嬢さんの部屋に連れて行かれたのです。それまで、時には誰も居ないとき、そつとのぞいた事はありましたが、お嬢さんの部屋に入つたのはその時が初めてでした。そして、その時がきっかけでした。急速に二人で遊ぶ様になつたのは、いや遊びと云つても、完全に主人とその召使いとの関係が始つた日でした。

部屋には黒くて大きなピアノがありました

歩くと沈む様な敷物、大きな窓には重いカーテンが、風間から閉つていて、ソファ、勉強机そして色々なものがありました。ピアノの上に大きな人形もありました。

カタ／＼なる心臓で息をつめている私を面白そうに眺めていたお嬢さんは急にビヨンと飛んで、側のソファの中に沈むと、さぐる様なその大きな目で、「おいで／＼」をしました。私は思わず引きつけられる様にその前に進みますと、お嬢さんは、低い声で「遊んであげるから、私の云う事は何でも守る？」

と云いました。私はお嬢さんが恐かつたのです。そのくせ、何だか、急に夢の国にさまよう様な気になり、だまつてコックリをしました。

その時からまる一年程の間、空襲で此の大きな家が焼けて、私と母は今の土地に移り住むまで、「女王様とそのあわれなドレイ」の遊びが続き、一層青白く、半病人の様になつた私は、一人の母を心配させながら、その目を忍んではこつそりと毎日の如く風過ぎの三時の鐘が鳴ると、引きつけられる様に、女王様の待つてゐる二階に音をひそめて昇つて行つたものです。

そして五時が鳴り、六時近く、お嬢さんの食事の時刻までの間、無言に近い、絶対秘密の二人の遊びは続けられたのです。時々聞こえる高笑い、もちろんお嬢さんのです。その外は、低くするどい命令的なやはり女王の声とムチの音、そしてあわれなドレイのみだれた呼吸音、それは広い部屋にカギをかけたドアに閉ざれてついに最後まで他の大勢の誰にも知られずに終った事は、せめてもの幸だったと思つて居ります。……

日を重ね、月を重ねる度に、お嬢さんは、様々な遊びを考え出し、色々な道具を引っぱり出しては新しい刺戟を求めて行きました。お嬢さんも、いよ／＼病的な美しさを増して行きました。

最初は「馬におなり」と云われ、四つ這いになつて、広い部屋をお嬢さんに乗せて這い廻わされました。体の小さい私には、すぐこたえる程、お嬢さんは重く、白い手足は、すく／＼とのびて居ました。

次の日は、クラの様にフトンが背中にくりつけられ、次には「たずな」を口にくわえさせられ、用意した、ムチでしりをたゝかれて這い続けたものです。

それに此の馬遊びの事は部屋中が外になぞ

らえられ、お嬢さんは一切敷物の上を踏みません椅子へ私の馬で渡り歩き、休息の時は、「タヅナ」を机の足に結びつけるのです。その恰好で私は主の乗るのを待つわけです。そしてちよつともお嬢さんの足が敷物にふれた時は、罰として、たゞちにその部分を、「よし」と云われるまで、私は舌でべろ／＼と清めさせられました。こんなひどい目に合うのに、なぜか、私は、この二人だけの遊びの時間を毎日待ちどろしく思う様になつて行きました。

又、この様な馬乗りや犬ごっこの際は、「ごほうび」に時折お嬢さんの食べ残した、「お八つ」の残りを下に置かれ、おあずけをさせられ、三べん廻つたり、足ゆびをなめたりしてから、やつと手をつかわせずに食べさせては、面白そうに眺めるのでした。

そのうちに次々と「泥棒ごっこ」「ドレイごっこ」「あんまごっこ」そして「おまるごっこ」まで考え出され実行されました。

「どろぼうごっこ」は何時も私がつかまつて、めちや／＼に細ひもで、く／＼り上げられては、ムチでぶたれる役です。そして苦しい恰好のまゝ小一時間もころがして置いて、ピアノを鳴らしてみたり、居眠りをしたりし

ては、思い出した様に縄をほどいてくれるのです。そしてすぐに次の遊びに移るのです。又、「どれいごっこ」も大変、しんぼうのいる遊びで、昼寝している女王様をうちわであおぎ続けたり、又は読んでいる本を差し上げてひざまずいていたりするので、すこしでも休みそうなら忽ちムチが飛んで来るのでした。

次に「アンマごっこ」は私はなんだか好きな遊びでした。ソファに長々と寝られた女王様のわきに、ひざまずきその美しい肢態をのみ続けるのです。そんな時、如何にも楽しそうに奉仕を続ける私を女王様は細目で眺めながら気持良さそうです。従つて、此の遊びは色々の遊びで、女王様がつかれて来た時に行なわれる様になつて行きました。

次に「おまるごっこ」ですが、これは最初はいやでしたが、しまいには、私のそうして欲しい身振りで、目かくしだけは取られましたが、両手足は自由にならぬ様にく／＼られて上を向いて口を開けてひざまずくのです。そして私はだん／＼その一瞬を待つ様になつてしましました。女王様はソファか机のはしに腰をかける様にして、……。

この外、様々な遊びを繰返して、春も夏も

過ぎました。私はそれ迄もそうでしたが一層病的な体つきになり、一方女王様のお嬢さんの方はだん／＼異常な美しさを増してきて、

遊びの時は何時もシユミーズ一枚の上に本物の女王の様な白い大きなスカートのドレスを着るだけで、その美しさに、そしてその美しい女王様から、毎日々々かわいがつてもらえる私は、どんな苦しみも、又みじめな思いもすべてすばらしい喜びでありました。

戦争中でしたのに、びつくりする程食物は色々なものがたくさんありました。さすがに石炭は時々切れて、ほとんど薪はだかにされて、もてあそばれる私は、寒さと、そのやせた体を見られるのがはしくてふる／＼ふるふる日もありました。

もちろん召使いも大勢なので、遊びの最中に扉を「ノック」されキモをひやして、さもしい姿のまゝ、物入れの中に押込まれた事も何度かあったのです。

こんな毎日が、ついに最後の一月、そうです。焼け出される焼夷弾の雨が降つたのが夜でしたから、とう／＼その夜、私の十四才の思い出に君臨した女王が焼け死ぬ、一ヶ月前からです。次の様な特別の「遊び」が、毎日最後に行われるようになりました。

この遊びは今迄のいろ／＼な遊びの中で、一番興味深いものでしたが詳しく書けないのが残念です。

女王様は目をみはり、息をのんでいる私を前に引きすえて置いて、私など初めて見た、しほり出しのチョコレートを取り出すのです。そして声のない笑を見せると、例のソファに沈むのでした。とそれが合図でもある様に後手にく／＼られた不自由な体をころ／＼様にして私はいざりより、そのチョコレートに吸いつくのでした。それは云うに云えぬ頭の芯までしびれる様な一刻でした。チョコレートは、女王様の体温で一種独特の芳香と味わいを、私の口、そして鼻の、のどの奥の奥まで、呼吸も止めんばかりにあふれるのです。

私の顔はチョコレートで彩られ、ついにチョコレートがすっかりなくなる迄なおも私になめ続けるうちに、疲れ果て、息もたえ／＼の私の顔を押えつける様な恰好に女王様の指長な両足が置かれ、みだれた二人、いや一人の女王と、そのドレイの呼吸が静ずまる頃、おとずれる夕暮と共にその日の「女王様ごっこ」は終るのでした。

焼け出された夜、母の必死になつた手にひかれて逃げのびた私は今では健康になり、二

人だけの秘密を知る只の一人の男としてペンを取つた次第です。

くれ／＼も私の本名や住所は内緒にして下さい。お願い致します。そして貴誌の愛読者の皆様に広く読んでいたゞけるなら、心から感謝する次第であります。(終)

(読者通信)

(投稿歓迎)

私は昨年六月号からの貴誌の愛読者ですがその時は殆んど驚異に似た感を抱きました。然しその時は或は一時的な企画であつて世上に氾濫する煽情雑誌の群と違ふ所がなくなるのではないかと危惧を抱いていましたが、号を重ねる毎に益々深く追求し研究され、その異常心理の解剖に於て唯一無二の独特の内容は恐らく戦前戦後を通じて御誌あるのみでないかと思ひます。又世上斯くも多くの同一傾向の人達がいる事を知らされ、或る人は外国の文献や古今の書画等により専門的知識其の資料等を集められてゐる事を知つたのは全く大きな喜びでありました。又近來め／＼魅力を増された口絵アート頁の川端嬢はいつも絶大な期待をもつて拝見してゐます。特に四月号のそれは最近の秀作だつたと思ひます。この様な高手小手による種々の繩の掛け方や道具をあしらつたもの等解説を加えた系統的なものを今迄望んでゐました(大阪、芝礼)

心理サジスト派の凱歌について

偽^いわ^るる^る殉^{じゆん}教^{きやう}者^{しや}



成^{なる}
瀬^せ
亮^{りやう}

切支丹（基督教）の伴天連宣教師いるまん（副宣教師）同宿（信徒）等に対する迫害が絶頂に達したのは徳川三代將軍家光の時代であつた。惨虐な処刑と拷問に斃れた切支丹は凡そ全国で何万に達したか知れない。まるで通り魔のように日本を過ぎ去つて行つたこの「鮮血の洗礼」は、言葉を変えれば、血腥さいサジストとマゾヒストの織りなした中世紀の妖しい悪夢でもあつた。その一部は本誌（二七・十、二七・十一、二八・一二）「切支丹迫害史」（漆島迫平氏）によつて、生々しい実況を詳細に紹介され、亦、五井野弘画伯の麗筆によつて画集となつているが、どんな宗教にせよ、その布教の始めには必らず為政者に弾圧せられ、凶暴なテロが加えられるのが常であるにしても、なぜ、どんな宗教よりも強く「博愛」と「平和」を叫ぶ切支丹のみが皮肉にも並外れて冷酷無惨な迫害を受けねばならなかつたのか。私の好奇心と研究はこゝから始まつた。

とにかく切支丹に対する異常な嫌悪と恐怖と疑惑は、昭和の今日でも特に（文化程度の低い頑迷な地方では）脈々と三百年以前のま

生きていた様だ。現に、たつた十年前の大東亜戦争の最中に、特高警察や憲兵隊が米国スパイの疑いで、多数の基督教牧師、信者を捕縛し投獄、拷問に処した白色テロ事件は我々の耳に新しい事である。私は西宮市夙川教会のS牧師に篤く私淑している一人だが、人格高潔、資性温厚なS先生も、その迫害者の代表である。大阪憲兵隊に検挙されて、終戦直前迄丸三年、方々の拘置所や警察を盟まわしにされたS先生の右手の指は三本とも曲つたまゝ永久に伸びないし、僧衣の下の肌には胸にも腹にも背中にも、往年の拷問の鞭の痕が醜いアザとなつて歴然と残っている。先生は決してそれをお見せにならないが、私はそれが、映画「無防備都市」のあの凄惨な拷問の場面にも劣らない惨忍な拷問の記録であることを知っているのだ。私が最も尊敬している元神戸女学院々長H牧師先生も、S先生同様戦時中つねに迫害、弾圧されていた。

S先生やH先生は御存命だからまだしも、老令や病弱な牧師、信徒で、獄死したり釈放後間もなく病死したり、生れもつかぬ不具廢人となつて、今だに呻吟している氣の毒な人が、私の知っているだけでも随分ある、私はいずれ「昭和基督教迫害史」として、この血

塗れの陰惨な実録を発表するつもりである。なお、最近向米一辺倒の傾向を辿り、復古調が顕著になるに従つて、進歩的社會主義者に対する弾圧が、狂氣染みる程強烈になつてきたが、かつての満洲事変―支那事変―大東亜戦争に至る間、あの陰惨な憲兵政治、特高警察が、自由主義や社會主義を奉ずる人々にどんな暴逆を加えたか、それも亦基督教徒の受難の激しさに優るとも劣るまい。

特高刑事や憲兵下士官が切り捨て御免の職権を笠に被て、これらの犠牲者をいかに玩弄したか。特に基督教の婦人信者や、社會主義共産主義の女性闘士を拷問するにどんな方法や器具機械を用いたか、血の逆流するようなサジズムの正体を、私はやがて完膚なき迄に曝露せずにはおかぬつもりである。

二

日本には肇国以来「神ながらの道」即ち八百万の神を祭祀する神道諸派と、二千年の伝統を誇る仏教諸派が厳然として君臨している我々の家庭には必らず神棚があり仏壇がある冠婚葬祭の行事の何一つにしても、必らず神仏と関係が深く、全く生まれてから死ぬまでそれに奉仕せざるを得ないほど、生活に滲透

しているわけである。

切支丹はこの神仏二道に比較すると日本へ入つて来た歴史が浅く、亦、その布教の方法や行事もバタ―臭く、現代でもまだまだ我々の生活の中へびつたりと溶けこまないものが多分に感じられる。況んや、將軍の幕府が天下を握り、大名小名が藩を司どり、両刀を手挟んだ武士が睥睨し、百姓や町人を虫けら同様に扱つていた三百年以前に、「人間は凡て平等である」「尊敬すべきは天に在します万能の神のみである」と説く切支丹の教義が、いかに危険な異端邪説として排斥されたかは想像に困難ではない。現に、戦時中に「神だけが最上最善である」と説いたため「日本では天皇が最上最高の存在だ、天皇以上の神が存在するなどとは不敬極まる思想だ」として検挙投獄された牧師がずいぶんあるのだ。

結局、あの惨烈苛酷な切支丹迫害の根本も国民にそうした人間平等の宗教を認められると、独裁者である幕府の存在が批判され、社會不安の禍根となることを警戒したためなのである。いつの時代にも独裁者は自分の権力を脅やかすものの出現に対しては、どんな残忍苛酷な手段を弄しても弾圧するものである。当時の切支丹迫害の真相も結局はそこに在つ

たことは間違ひなからう。

しかし、直接に切支丹取締りに当つた中堅あるいは下級の役人には、そんな複雑な政治の在り方は判らないし、仮りに判つたとしても、封祿を受けている役人である以上、上司の命令に背くことは出来なかつた。昔も今もそうだが、教養の低い下級役人が、宗教や思想の取締りを、訳も判らず、上司の命令や、法律や規則の杓子定規でやろうとするぐらい滑稽で危険なものはない。殺人、強盗、放火など常識で考えて犯罪だとわかるものなら、そんな役人が大いに活躍してもまず間違ひはないが、宗教や思想の問題の是非善悪を決定することは、どんなにすぐれた大学者にだつてなかなか出来ない至難なことだ。それを、きわめて頭の程度の低い役人が与えられた権力をふりまわして断行するのだから、いかに危険が生じるか、火を見るより明らかである。また、少し教養があり、学問に志していた役人ならば、切支丹の教義がいかに正しい真理であるかは理解できたはずであるが、うつかり切支丹に同情したり共鳴したりすれば、忽ち自分のクビが危くなる心配があつた。点取り競争、縄張り争い、出世主義、杓子定規、事なかれ主義などは、古今東西、かりにも役

人と名のつく奴輩には必らず共通する卑劣な根性である。同僚を押しつけて一日でも早く一步でも高く出世したい、上司に自分の腕前を認識させたいという、その哀れな役人根性が、切支丹迫害に、世界稀れな残虐さを発揮させて了つたのである。

切支丹迫害を、サジズムとマゾヒズムの対照として興味深く観察することを、私は決して無意味とは思わない。それは確かに一面の真理があり、新しい発見には相違ないのだが

読者通信 (投稿歓迎)

「狂い咲くカンナ其の後の告白」及び「悪女」をむさぼる様に読み終り異常な感銘を受けました。でも羽村さんという女の方はマゾヒストであると同時に幾分加虐的な嗜好もお持ちになつていらっしゃるのね、あの方の告白記や創作を読んでいると一種の戦慄を覚えますわ、四月号に載せて頂いた私の告白など遠く及ばないという事は承知しておりますが書かないでねない衝動があるなことはなつてしまいましたが、御本を手にして自分の書いたものが活字になつているのを見たとき、もう胸がドキ／＼して恐くて読むことが出来ませんでした。でも沢山の読者の方に読んで頂けるのだと思うと嬉しくて嬉しくつて、この私の気持、ど

求め得べくば迫害者の心理の根本を完膚なき迄に追及して行けば、彼等が殉教者を処刑したり拷問したりすることによつて、耽美的サジズムを満喫するような夢想的ロマンスだつたのではなく、むしろ、最も醜態にして陋劣極まる現実的「役人根性」の持主だつたことが必らず暴露するはずであらう。

彼等は切支丹の男女をローマの大闘技場でライオンに食わしめ、その叫喚と鮮血に、サジスト本来の官能の昂奮と、陶酔と、愉悦を表現したらいゝかしら？ 歯がゆい位ですの、今後共どうぞ御発展のほど御祈り申し上げます。(信太蓉子)

毎月、月末近くなるとそわ／＼と落着がなくなり、今日は来ているだろうか、という期待の楽しみで胸、一杯に膨らむのです。僅か百円位で私の生活にこれだけの潤いと励みをつけて下さる奇巧に感謝したいと思ひます。この月は二十八日だったので少しは遅れるだろうと思つていたところ昨日会社から帰ると机の上にちゃんと届いているではありませんか、思わずあつと声を出しました。バラ／＼と頁をめくつて口絵写真の素晴らしさ、川端多奈子さんの高小手に縛られた姿は本当に美しく写っていました。この写真だけでも大した値うちで

味わつて狂喜した皇帝ネロのように卓抜した奔放不軌の大ロマンチストの面影など、爪の垢ほども持ち合せなかつた。彼等の持つた小人の精神は、あくまで凡俗にして低劣きわまるリアリストの打算と怯懦に過ぎなかつたのである。

三

私は、折角読者諸君の抱かれている「切支丹迫害」の美しいロマンの夢を傷つけるに忍びない。だが、真実はつねに冷徹な実証の場において確立されるのだ。私のベンの峻烈さをどうか許していただきたい。一方の迫害者達が真のサジストでなかつたように、光輝ある殉教の聖座に列せられた人人も、その多くは、真のマゾヒストのみではなかつた。悲しいことだがこれは真実だ。

我々は報知を唯一の真理として信奉する現代人である。かつての切支丹迫害の歴史を、美しい一巻の絵巻物として讚美するだけではすまされないし、また殉教者達の凄惨な最期を美化したり、うやうやしく胸に十字を切つて礼讃するだけでは納得が行かない。その底に盡めくまされない「人間」を突き止め、批判し、解剖せねばどうしても安心できないの

す。玲子さんの絵も益々円熟してうま味が加つてきました。内容についてはゆつくり拝見の上又感想を述べさせて貰うことにします。ではお元気で (都 築生)

滋賀県の大川由紀子さま、貴女が編集部へ送られたという写真、是非拝見したいものです。若し差支えないものでしたら編集部の方で本誌がKK通信に発表して頂くなり、或は複写して希望者に分けて頂くりしてほしいものです。読者通信だけで写

真が発表されていないのは蛇の生殺しみたいで殺生ですよ、私の願いは必ず達して下さい、頼みます。 (宮城森生)

(編集部より)

大川さんのお送り下さった写真数葉は出して早速御許しを願うため御手紙を差し上げたのですが、封筒の差出人の住所では返送されて参りました。御返事差し上げたく思いますので再度御連絡賜るよう編集部より大川様に御願ひ致します。

だ。

我々は切支丹迫害の真相を理解するためにはりつけ、斬首、火焙りというような残忍な極刑が、いかに独裁幕府時代でも、そうやらに軽々しく使えた刑罰でないことをまず承知しておきたい。そうした嚴刑を執行する場合、当時の掟、法令によつて間違いない裁判が行われ、奉行から幾人もの上司の手を経て、最高行政長官である大老(現代の総理大臣)の裁決を仰がねばならなかつたのである。また、各種の拷問を用いる場合にも、死罪以上の極悪犯人が、あらゆる物的証拠、証人が揃つているにも拘らず、なお頑迷に自由を拒んだ場合にのみ許された方法だつたことである。しかるに切支丹宗徒を取調べる際には、

そうした法や掟は一切無視され、執行する理由も権限も持たぬ下級官吏が、ほしいまゝに天下の御法度を左右し得たということは、実に奇怪きわまることである。幕府の要人達がそれを暗黙のうちに許可していたとしか考えられないし、また、大老や老中をして、仕方なしに看過せざるを得なかつたのは、全く徳川家光將軍の性格異常、倒錯症による、切支丹への理由なき恐怖が背後に存在していたからなのである。

三代將軍家光という男は、講談でお馴染の寛永御前試合を催すほどの尚武の精神に富み豪快で男性的な武將肌のように誤解されているが、事実は全く逆であつた。聰明ではあつたが極めて神経質な内攻性性格であり、しか

も少年時代から男色に溺れて常に美童を寵愛し、長じても女色に興味を持たぬ倒錯者であった。徳川家の血統断絶を憂慮する父秀忠や周囲の重臣が、家光の乳人春日局に嘆願してようやく適当な令室を迎えさせたのはいゝが、かんじんの御本人は、型式だけの結婚はしても大奥へ足を運ぶことは滅多になく、終生寵愛の的としたのは、同性の美童であつた。

こうした先天性変質者の家光に、サジズム傾向が濃厚だつたことは容易に首肯できるであらう。切支丹への惨忍な迫害は、全く家光の倒錯症に発現し、狂気沙汰としか考えられないようなサジズムと

マゾヒズムの地獄を繰りひろげて了つたのである。記録によると、家光自身が出馬して、直接に切支丹の取調を行い、その苛酷さを、師僧沢庵や剣道の師柳生但馬守にきびしく諫止されたことすら度々あつたと云われている。これは非常に重要なポイントである。幕府



の要人のすべてが凡庸であつたため、迫害の生地獄を招来して了つたのではないという証拠をあげておいて、この論を進めねばならぬ理由が後で判つていただけなくてはならない。と、こういつても私は家光將軍の倒錯趣味を決して嫌悪したり輕蔑したりしているのではない。幸か不幸か、

私自身にそういう変質傾向が絶無だし、またそれ故に、そういう傾向を持つ同性愛氣質の男性に興味を覚え、従つて接近する機会に恵まれていないだけのことであるから。

本論に戻そう。

そもそも、切支丹禁制の掟は、前述のように最高政治の立場から

独裁者の権力否定の機運を作ることと怖れた対抗策であつて、当時の為政者の考え方は一殺多戒のつもりだつたのである。決して惨忍な処刑や拷問によつて血腥いサジズム風潮を作り出したのでなく、そうした酷刑を試みることによつて、出来るだけ多くの切支丹

の伴天連や信徒をころばせ（転宗、棄教）、ひいては国民に切支丹の伝播を終止せしめれば足りたのであつた。ところが、そういう最高為政者の狙いは、出世主義に血眼のコツバ役人には徹底しなかつた。ころばせるために許した一つの手段であつた拷問や、一殺多戒のつもりでの処刑がいつの間にか、濫用される結果となり、それが嵩じると、役人の残酷なサジズム傾向に答えるように、狂信的な切支丹の人人は逆に殉教という美名に蕩酔して、自ら切支丹と名乗り出て、拷問や処刑を受けることを喜ぶというマゾヒズム傾向をますます強めて行つたのである。内地で各地から続々と切支丹を名乗り出るものが激増するとともに、日本における切支丹弾圧の噂が、海外にまで聞こえると、今度は「拷問」され「処刑」されるのが目的で、日本へ密行してくる外国の切支丹がどんどん増えて来た。

殉教、法難ということは、切支丹にとつては一躍聖人に祭り上げられる絶好の機会であつた。彼等は「殺される」ために、すぐ逮捕されやすいよう、人眼に立つような「堂々たる」大量密航を敢行したのである。これは決して、キリストが十字架にかゝつたような尊い殉教でも何でもなかつたし、むしろ、彼等

は「聖人」という名前を獲得するための、唾棄すべき狡猾な打算と売名のためにこそやつて来たのである。ここには、宗教者にありがちな最も嫌悪すべき「執着の鬼」の臭気ぶんとしたる俗臭が感じられる。

もちろん、こうした傾向にノドを鳴らして喜んだのは、例によつて例の通り、点取り亡者、出世主義のコツバ役人達である。先方からわざわざ網にかゝりに来た魚を捕獲するにとぐらい手軽な功名はあるまい。型式通りの取調べと、棄教の強制、そして亦型式通りの告白と殉教の固守、そして、そのあとは、お定り通りのはりつけ、火焙り、斬首、吊し斬りであつた。

こゝになんの崇高で神聖なロマンの展開があり得ようか。乱舞するのは、滑稽さわまる茶番劇だけではないか。コツバ役人の俗臭と切支丹の売名とが織りなした最も醜悪な「聖人製造劇」の八百長芝居に、現代人の我々は欺されるほど甘くあつてはならないのだ。ここに見る人間の精神の汚なさや墮落は徹底的に批判されていゝのだ。

四

こうした卑劣な流血の切支丹迫害が、結局

何の役にも立たず、惨忍な処刑や拷問が、却つて切支丹の激増を促すに過ぎぬことを、幕府の当路者も漸く悟つたのであろう。切支丹弾圧の方法は、単に処刑や拷問など、肉体的苦痛を与えるだけでは大失敗であると知つてからは、もつと合理的に、精神面からその信仰を徐々に崩潰させ、弱らせてゆくとする巧妙な（それだけにいつそう陰險な）方法を執り始めたのである。歴史的に見てゆくと、

本当の「切支丹迫害」は、ここからがようやく本筋に入つてくるのである。肉体に苦痛を与えて昂奮するサジスト、与えられて歓喜するマゾヒストの一卷の終りはここにある。そんな程度では早晩必らず飽和状態が訪れるにきまつている。どんな方法を考案してみた所で、人間の生身には必らず「死」の限度がある。サジズムにせよ、マゾヒズムにせよ、「死」の壁に打ち当たるまでの技巧だ。この犯し難い鉄壁にハネ返されるようなものならいかに智能をふりしぼつて考案してみたところで、千変万化をくり返してみたって、要するに間口だけ広がつて底知れぬ奥行は持てないのである。所が心と心の闘争、精神のサジズムと精神のマゾヒズムとなれば、これは無限に底知れぬ深淵である。肉体面のサジズム、

マゾヒズムを新制中学生の遊戯とすれば、精神面のサジズム、マゾヒズムは大学院学生の専攻程度の高さ、とでもいえようし、有形から無形へ、刹那から無限へ、コドモから大人への深まりといつていゝだろう。

幕府の切支丹迫害の方針がそういうふうになるに百八十度の転回をしてくると、いまで取締の第一線に活躍した、暴力本位の奉行、同心目明しの類ではもうデクノボウ同然、手も足も出せなくなつたのは当然である。

では、その卓抜な精神的サジストの代表は誰であつたか？。その男こそ、彼一流のやり方で、最も大量の切支丹棄教者を出して拔群の成績を挙げ、大老酒井讃岐守の信任が最も篤かつた初代宗門改役奉行井上筑後守であつた。

筑後守の本名は井上清兵衛政重。戦国時代の切支丹大名として有名な蒲生氏郷の家臣であり、父と共に熱心な切支丹だつたのである。清重は洗礼も受け、切支丹仲間でも尊敬される篤信者であつた。それが蒲生家滅亡と共に浪人として諸国を放浪したのである。眉目秀麗にして頭腦明晰、加えて弁舌爽やかな彼がいつの間に棄教したのか判らないが、後年縁故を求めて江戸へ出て、時の大老酒井讃岐に

着目された頃は、打つて変つて、切支丹弾圧の急先鋒に転身していたのである。何しろ二介の浪人からのし上つて、筑後守に任官、大目付役を拜して封祿四万石を領した人物である。ふつうの万年役人とは全く別の優秀な男であつたことは確かである。

彼は、元々切支丹であつただけに、宗徒の心理は手にとるように判つていた。切支丹に入信する男女には必らず何かの苦惱があつたにちがいないし、その秘密を探り出し、相手の心理を十分に察知した上で、肉体的拷問によらぬ心理的拷問を行なうことが、棄教せしめる最上の手段であるというのが、彼の確信する持論であつた。彼は、やがて酒井大老の推挽によつて將軍家光に接近し、堂々とその所信を説明しているが、従来の残忍な極刑や肉体的拷問の強行は予期せざる逆効果を生むにちがいないことを、おめずおくせず家光に警告している。やがて、みごとにこの予言は的中したのだ。

惨殺すればするほど激増する切支丹宗徒の群集、それは氾濫する人海戦術にも似ていた。測らざる大失敗に困惑し焦燥する幕府が、筑後守を抜擢して、初代宗門改役に任じ、その所説に屈伏し、その才腕に委ざるを得なくな

つたとき、彼の端麗な唇の端にはあるかなきかの冷やかな会心の微笑が浮んでいた。肉体的拷問に対する心理的拷問の勝利を確信する彼こそ、私は最も聰明な稀代のサジストであつたと考えている。

彼は切支丹が神の栄光を慕う崇高な使徒でもなんでもなく、性慾と食慾と名譽慾に餓えた主身の人間であることを曝露させることに異常な興味を持つていた。肉体的には斬らず焼かず、傷つけず、吊らず、縛らず、しかもそれ以上に確実に自ら進んで棄教せざるを得ない心理的拷問を、彼はかねての持論通り着々と実行に移して行つたのである。

彼は切支丹に死を与えることが、切支丹の憧憬するパライソ（天国）へ昇天させる道であることを知悉していた。ころび（棄教）が目的であるのに、その功をあせるあまり、多くの役人は、切支丹を責め殺し、かえつて切支丹の本望をやすやすと成就させている。その愚劣で低俗な手段は、自分の頭脳と弁舌を確信する彼の眼にとつては、幼稚な蠻行としか写らなかつた。彼は、切支丹をいかにして生かすかに苦心したのだ。切支丹はその戒律に従つて、絶対に自殺出来ないものだ。これが彼の着眼点だつた。寿命が燃えつきるまで

何年でも何十年でも生かしておく。十分に食をあたえ、美酒を味わせ、美女を娶らしめ、名譽慾を満足せしめ、しかも、死ぬるまで、神に背いた棄教の罪に悶えぬき、自らインヘルノ（地獄）に落ちる苦悩を骨の髄まで味わせるのだ。これが、切支丹弾圧にどんなすばらしい効果を奏するか、彼は人間をモルモット代りに、自説の実験を試みたのである。これは、戦慄すべき心理的拷問の勝利であつた。切支丹の流血にノドを鳴らした一般の役人が切支丹は勿論世人にも残酷な餓狼のように忌み嫌われ、恐怖されたのに反して、彼の名はその表面的温情のゆえに好感と賞讃を以て迎えられる、上司の人々にも必らず認められる賢明な道であることを彼は緻密な水も洩らさぬソロバンをはじいて知つていたのである。彼ぐらい伶俐で冷酷な怖るべきサタン（悪魔）が、あの封建時代に出現したことに、私は舌を巻かざるを得ない。

五

井上筑後守が肉体的拷問を一回も行わなかつたとはいわない。が、しかし、その拷問は答でも鞭でも杖でもなく、まして灼き鉄、鉛湯等は決して用いなかつた。彼の好んだ拷問

は木馬であつた。丸太を切つて四本足で支えた木馬に切支丹を跨がらせる。たゞこれだけである。はじめは痛くも痒くもなく、傷つける心配もないが、一―二時間以上も据えられていると疲労と筋肉の痛みを感じてくる。ましてそれ以上の苦痛は大小便の垂れ流しによつて、衣服を汚すことだつた。それも若い女性切支丹の場合、衆人環視の中でそうされた恥しさはたまらなかつたであらう。他人が加える残酷な笞や杖や鞭には、マゾヒズムの喜悅があつても、自分の肉体が生理的に分泌するそうしたもので、自らを汚すことには何らのマゾヒズムの歡喜は伴わない。しかも、彼は、木馬拷問を行う前日には入浴させ、衣服を改めさせ、心身ともに爽快な氣持を満喫させておくのだつた。こうした心理的な拷問は、肉体よりも精神に深い傷を負わされるのである。それに耐えきれぬ常人ならば舌を噛み切り、頭を打ち碎いて死ぬであらう。だが切支丹には戒律によつてその方法をとることが出来ないのである。

こうして精神的に打ちひしげられたのを見すましてから、彼は悠々と切支丹と教理問答を始めるのだつた。汚辱と絶望に混乱した切支丹の人々の頭腦が、かつて優秀な篤信者だつ

た彼の研ぎすました論理の鋭鋒に立ち向えるはずがない。切支丹の教理の弱点や欠陥の急所をぐいぐいと突く彼の雄弁には、さすがの伴天連でさえしどろもどろになる。況んや、いるまん副宣教師、同宿信徒など教養の浅いものは揚足をとられ、ぐつとも返答できぬまでに押しつめられる。

が、彼は決して徹底的に説伏し、棄教を強要したりはしない。切支丹としての高い自尊心を一挙に粉碎することは、かえつて窮鼠猫を噛む例のように、彼等に決死の反抗心をたかぶらせてしまう。彼は切支丹自らが棄教を申出るまで、悠々と持久戦を布いたのである。

彼は魚を獲るのに、遠大な地曳網を用意したのだ。広くゆつたりと張りまわされたこの網は、相手に氣付かせずに徐々に引きしぼられてゆくのだ。投網やモリ打ちは彼の性格や趣味でなかつた。他の奉行や役人が点取り競争に血眼になり、雑魚の一匹二匹釣れてもすぐ

上司に報告するのを冷笑しながら、彼はその数十百倍の獲物を追ひこんだ地曳網を悠然と手繰りよせているのだつた。彼の自信満々たる水も洩らさぬ智謀の網を免がれ得る切支丹はなかつた。

この心憎いまでの落ちつき、自己の頭腦と

敏腕の醸し出す効果に陶酔している彼の心情は、冷酷無惨な非人格的サジズムの典型であると同時に、ナルシズムの傾向を濃厚に示しているのではないか。

彼が最も狡猾に活用したのは人間の持つ最大弱点である性慾の虚を突くことだつた。たとえば、氣高い童貞を守りつゞける伴天連を



唯一人狭い独居牢に幽閉しておき、ここへ、妖艶な女囚一人を同居させて、あらゆる媚態を示して誘惑させ、いつしか伴天連がその女囚を抱擁して、きびしい切支丹の戒律を破り、いやでも棄教しなければならぬようにしむけたのも彼の戦術であつたし、逮捕されてき

た大勢の切支丹教徒を、それぞれ似合の男女一組づつにして、暗闇に放置し、処刑の恐怖を暗示して、男女双方が生命の終る間際の激しい情炎に絡みあうのを、まるで動物の交尾をみるように冷笑したりしたのである。とにかく、彼は、切支丹が自ら戒律を破り神に背かざるを得ないような巧妙な心理的サジズムを縦横無尽に発揮したのであった。

また、彼はころび（棄教）せしめた切支丹達を、もっぱら他の切支丹の棄教のために活躍させた。これは実に苛酷にして陰險な戦術であつた。（現代でも共産党の転向者や脱落者がかつての不倶戴天の敵である資本家陣営に雇われ、尖鋭的労働組合の切り崩しなどに懸命であるのと全く軌を一にした卑劣な生き方である。）

そのいづれにしても、かつての同信同志からは裏切者としてきびしく非難され、雇用する側も要注意人物として警戒を怠らず、世人からは侮蔑と嘲笑を浴びせられ、かつ亦、自己の良心には責め悩まされ、結局根のない浮草のように限りなく孤独で漂泊するより仕方がないのである。

棄教者の中にはその苦痛に堪えかねて、再び切支丹の自覚を蘇らせ、殉教しようと企て

た者も少くはなかつた。これを「立ち上り」と呼ぶのであるが、この人々にははや、切支丹としては扱われず、殺人、強盗、放火などの罪人同様の扱いの下に、情容赦もなく首をはねられたのであつた。それが裏切者に対して与えられる当然の報酬であつた。

六

多くの切支丹の中には信仰の際立つてすぐれた者がなかりはなかつた。井上筑後守の頭脳、雄弁、計略を以てしても、頑として棄教を肯んじない手硬い相手を発見したときの彼の顔には、みるみる好餌を前に舌なめずりする猛獣のような喜色が現われるのであつた。

天成的サジストの彼にとつて、その倒錯心理をあくなきまで満喫できる機会だからであるよし、どうしても棄教しないのならそれでもよいが、お前達の希望する殉教の名誉は断じて与えぬ。かりに断食死しても、世間へは、棄教した後に病死したとふれ知らそう。お前達を秘かに葬ることは私の胸三寸にあるのだぞ。と冷笑する彼の前には、いかに信仰心の篤い切支丹でも他愛なく崩折れてしまうのであつた。

さらにまた彼は切支丹仲間の堅固な結束を

破り、一人一人を孤立させて、お互の間に不信と疑惑と猜疑を植えつける策動にも長じていた。これは棄教せしめるのに成功した後でさえも、旧同信者を相反目させるために、彼が細心の注意を払ったことでも証明できるようである。たとえば、その報酬にしても、伴天連には十人扶持、いるまんには七人扶持というふうに区別して、「人間は神の御前には平等である」と信じている切支丹を譏弄し嘲笑しているのである。

また、棄教したものには、それぞれ強制的に妻をあたえたが、その女達は、いずれも、切支丹として処刑された夫や親をもつ哀れな女達であつた。「汝姦淫すべからず」「汝二夫に見ゆるべからず」とする切支丹の戒律をいやおうなしに破らせ、女体に、耽溺させることによつて、「立ち上り」の意思と勇氣と自信を根こそぎ奪い去つてしまうようにしむけたことも、彼の底知れぬサジストぶりを物語っている。

とにかく、あの血腥さい切支丹迫害時代にあつて、彼のような高踏的心理サジスト派が出現したことをくれぐれも忘れてはならないそしてまた、殉教者の美名を謳われている切支丹の中にも、「聖人」の名欲しさに、自ら

刑死を希望したものが少くなかったことや、さらに、始めて知った女体の魅力に酔い痴れ他愛なく棄教した切支丹崩れもずいぶんあつたことは、深く記憶にとめておくべきであらう。

さしも暴逆を極めた切支丹迫害史も、家光時代を頂点として、四代將軍家綱、五代將軍綱吉の時代になると、急激に衰退の兆を示し始めている。布教に勞して功少き日本の国情を海外の宣教師が漸く身に泌みて悟つたことも大きな原因であるが、井上筑後守の心理サジストの成功によつて、みごとに切支丹弾圧の方法が急転換したこと、さらに、それによつて、切支丹に対する国民の失望と輕侮ははつきり植えつけられたことが、さらに大きな効果を奏していることはまちがひなかるう。

もちろん、日本における切支丹の運動は決して根絶したわけではなく、主として九州に長くその余勢を保つて明治に及んだのであるが家光時代のような大騒動は再び起きることがなかった。

これに反して、典型的肉体サジストとして一世を畏怖せしめた長崎の鬼奉行長谷川権六などは、その度外れた残忍な処刑拷問の間ために、最後には自ら発狂してしまつたのであ

る。我々はここに 大きな示唆を受けずにはおられない。肉体サジストに対しては必らずそれに答える狂熱的肉体マゾヒストを生み出すのに反して、心理サジストの場合は心理マゾヒストを伴わないという冷徹な歴史の事実である。甘美な感情による肉体サジズムと冷静な知性による心理サジズムとの優劣、一方

は昂揚せしめ、一方は鎮靜せしめる。換言すればロマン派サジズムとリアル派サジズムとの対比である。そのいずれがわれわれ現代人のもつ鋭い嗜好にかなうのか、私はこゝに井上筑後守の姿を借りて、読者諸君のきびしい自己批判を俟ちたいと祈つてゐる。

好淫動物の挿話 蛇の巻

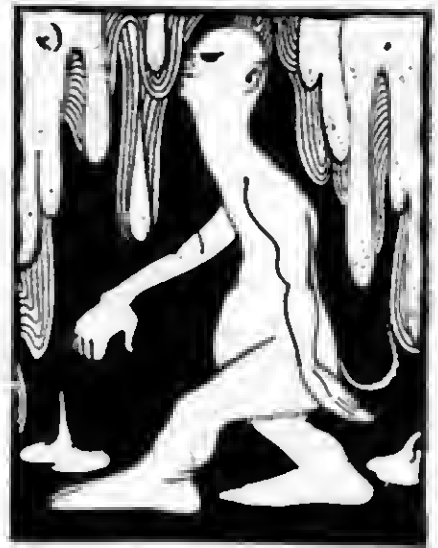
谷 純 一

世俗間に蛇を以て好淫の動物のように看做しているのは、蛇が人間の陰門、肛門に這入ることのあるのが、其の原因の一かも知れない。この事は夙に古書に見ゆる処で「谷關集」に「四分律」を引証して「有比丘尼、跌枷而坐、有蛇、入瘡門、白仏、仏宣、勿殺、与藥」とあることや、「本草綱目」に「蛇入人竅、灸以艾桂或竦以椒末則蛇自出」とあるが如き記事を見ても、蛇の女陰に入つたことは古來その例多かつたことと思われる。

「幸庵対話」にも「女の陰門に蛇の入りたるを一代に三度見たり」と記した「女節用大全」の中にも、蛇の陰門に入つた時の処置を記して、「蛇まゑに入りたるには蛇の尾の外に出でたる処を繩にてゆわい、

尾に灸をするに忽ち出ずるとなり。また蛇の尾をゆわい、小刀にて尾の尖を少し破り胡椒七粒入るれば忽ち出ず。出でたる後、雄黄朱砂を粉にし、人參を煎じ、その湯煎にて飲ましむべし」とある。

「松屋筆記」に依れば、肛門、陰門に好んで入る蛇は鳥蛇で、「小さくて黒色なり好んで人の尻穴に入るに、その人更に覚えず、この蛇、穴に少し許り首をさし入れたらんには、如何に引き出さんとすれども出ずることなし。寸々に引き切れても首はなお残りて腹に入り遂に人を殺す。之を引き出すには、「サルシのカケ」という木の葉にて巻き、引き出せば僅かに尾ばかり少しく出だしたるにも容易く引き出でぬといえり」とある。



続・硝子便所

芳野眉美

その絵日記には美しい女主人の尿を綿にしみこませてのむ召使のことが書いてありました。

私はおもわず深い歎息をつきました。私の心はなにかあわただしくみだれさわぐのです。その雑誌を伏せると、私はぼんやり外に出て行きました。

夜の帳をさげた街に忘れられたようにもれるひとつのあかり、いずことなくさまよい歩いた私の足は若い花のお師匠さんの家の前でたたずんでしまったのです。垣根からこぼれた白い便器が私の心を自茶目茶にかき乱してしまふのです。心のよりどころを失った私は放心したようにつゝたつていました。そして、玄關から出て来た一人の少女を見るとむらむらと激しい憎悪がわきあがつたのです。私の頭の中を左右にとびちがうのはあの爛熟しきつた肉体にもだえる未亡人―夜の師匠―の姿ではありませんか。私は少女をおそろしい目で見らんでいました。

なにがなんだかわからなくなりました。そして、私はたえず口の中でこうつぶやいていたのです。

やつてみようか。やつてみようか。

私はいつしか薬局の前に脱脂綿の袋を眺めていました。また新しいむなさわぎにこらえきれなくなつた私はふるえる声で店員に声をかけたのです。

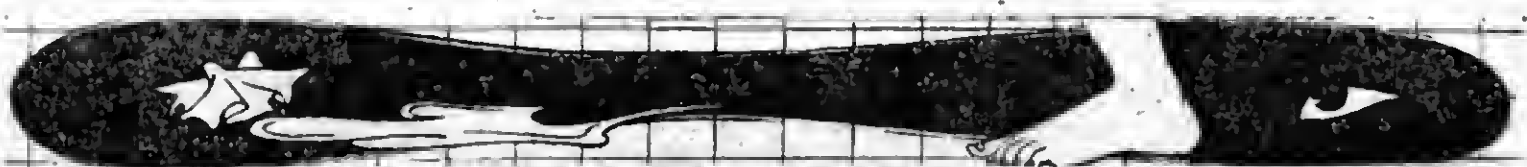
脱脂綿を下さい。

私はかつてなっていました。血が逆流してあらゆる他の感覚が喪失したように思いました。無造作に手渡す店員の顔がどんなにおそろしかつたことか。私はその袋をしつかり胸にだきしめるとあとも見ずに家にとんで帰りました。

私は脱脂綿を小さくちぎりました。しばらくの間ただ綿の感触に酔っていました。

やつてみようか。

私の顔はこわばっていました。目は異常な迄にひかつていました。空想によいしれる自分となんとちがつている今の私なのでしようか。求めても求めても得られない「女」に対し



男性MASO特集

ての憧憬が私を異常な方向にぐんぐんひっぱっていくのです。ただわずかにでも「女」に接したい。女の今したばかりの尿をのむことによつて少しでも自分のこのあわれないじけた心をなくさめたい。

私はふと立ち上りました。なんの意識もありません。まるで夢遊病者のように、夜の誘惑が私をさそいだしているのでしょうか。

わずか十五分ばかりの省線の中で私はたえずそわそわしていました。電車にゆられて私の今しようとするものがはつきりわかつたのです。私を見つめる人の目がすべて私の秘密を知っているかのようにせせら笑っているのです。そう見えたのです。私はぎゅつとポケットの脱脂綿をにぎりしめました。落したら大変だ、それこそ大変な目に会うぞ。私はぶるぶるふるえていました。

目的の駅に下りた私は駅員の目をかすめてあたりまえのように便所の中に入りました。その駅は男女共同の便所だったので。外の男がたえず出入りしている。その中に交つていれば私の仕事はたやすく完成するわけです。誰もあやしむ人はいりません。

女便所の戸をあけて比較的よごれの少ないところを選んで入りました。無作法な人が多いので中で私がどんなことをやっているのか見られるおそれは多分にありました。そして便所の戸はどれも鍵がこわれていたのです。左手で戸をおさえて右手でポケットから脱脂綿をとりだしました。家を出る時すでに

ちぎつてあるのです。この水洗便所はうしろに穴がありましたから、私の目的は十分に達せられるはずです。前の方に脱脂綿のかたまりを置くとあわてて便所をでました。そして何食わぬ顔で手を洗うと便所の戸口で中をうかがつたのです。他の人達にはさも電車の時間表を見ているふりをしながら。時刻は九時をまわっていました。電車がうくと大勢の人が階段を下りて来ます。そして便所に消える人も多いのです。だが、なんということでしょう。よつぱらつた男が三列にも四列にも男便所に並ぶと、まちきれない男は女便所の戸をあけつばなしに堂々とやつているのです。そして、私が苦心してつくつたあの秘密の部屋にも。

私の夢は無慙にもふみにじられてしまつたのです。私はがっかりしました。

私は幾度も女便所の戸をあけました。駅員が私の顔を不思議そうに見ていくのも気がつかないで。私はただやりとげなければ気がすまなかつたのです。なんという気持だつたのでしょうか。まったく無我夢中でした。

あまりにらんでいたのでいつしか目にいたみをおぼえて、しばらくぼんやりしてしまいました。ふと気がついた時に私の秘密の部屋の戸のガラスに一人の女の影がうつゝたのです。私ははつとしました。その影をじつと見つめました。そしてそつとその左に近寄つたのです。その人の出るのを待ったのです。

その女は見るからに肉感的な、蓮つ葉な女でした。軽くちびた下駄をひっかけたところは、近所の飲屋の女かと思われ



ました。年の頃二十五、六ぐらいだつたでしょうか。女は私を見ると戸をあけたままそそくさと出て行きました。

私はとびこみました。そして、激しい水勢に押されて半分穴に落ちかかったびちよびちよにぬれた綿を見た私は夢中で手につかんだのです、あんな軽い綿がどつしりと重い。指の間からなまあたかい尿がこぼれ落ちました。白い綿が真黄色にそまつている。つんと鼻を打つ尿のにおい。私はそのとたん………だしました。

なんてしよつばいんだらう。

2

美しい婦人が着物の裾をきしながら便所の戸をあけたときの姿は、なんとなく私をなやましい幻想にしばらくつけてしまいました。しまつた戸をぼんやり見ていることがしばしばあるようになったのです。

あのなかでなにをしているのかしら。

家に帰つてもその奇妙な錯覚にとらわれてどうにも自分をしまつしきれないこともありました。そしてベルナールのミニアチュール「トイレットにて」や、レンブラントの「立小便をする女」などの絵にひそかに見入るのでした。ルイ王朝ロココ時代。貴婦人が愛用の便器で用を足そうとしている。そのお尻がなんとなくかわいい。路ばたにかがんだ女。ほとばしりである一条の白い線がなんとなく気になる。私は想像します。そうしていろいろが一番楽しいのです。

一度味つた女の尿の魅力は私を捉えて離してくれません。精神病者になつたのかしら、とも思いました。でも精神攪乱などの発作は一度も見られませんでした。ただ、あたたかい女の尿が私の舌であばれているのです。

正常な精神病者なのでしょう。

でも、あの駅の便器におく白い綿は、二、三人の女が入つたにかかわらず少しもぬれていないことがありました。それを見る私は、不思議な美しさに魅せられて、たびたびそのままつたつて見ていることがありました。便器に咲き乱れる白い花。

なんて美しいんだらう。

それは美しい秘密をひめたひとひらの花びらでもあつたのでしょうか。黄色にもそまらず。私はいとおしいものでもさわるようにそつと手にとると、そのまま持ち帰つたこともありました。

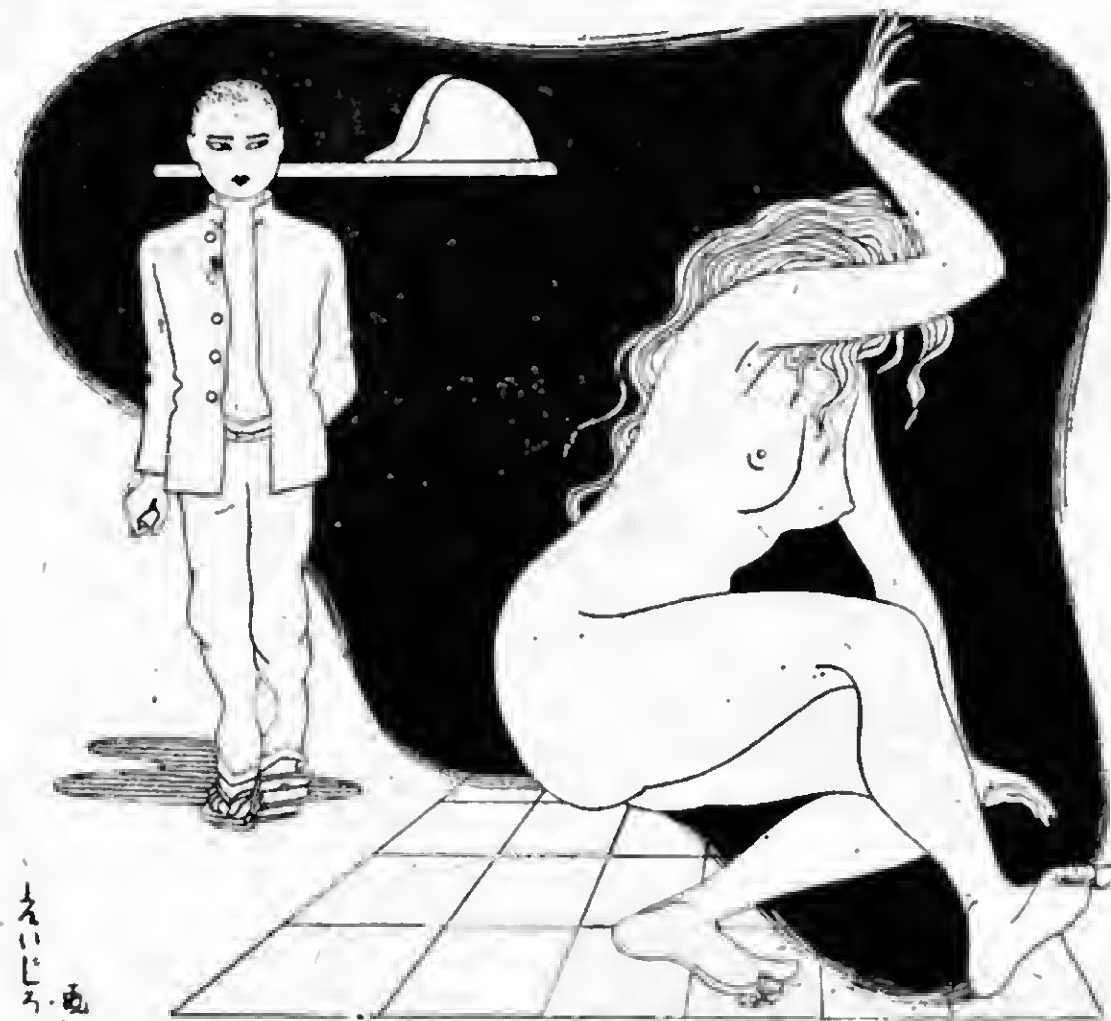
そんな日が続いたとき、洋装の一人の女を追つて、その女がはいつたばかりの便所の戸の前にたつたのでした。それこそずかずかと近寄りました。外の人達が自分をどう見ようとそんなこと、ひとつ気にしてはおりませんでした。第一頭にもなかつたのです。

ガラスの影が消えてしばらくたつた頃、私は無造作にドアをあけたのです。

アッ、

という悲鳴、その女はあわててズロースをあげました。私は無言で戸をしめました。そして、すぐ隣りの便所に入つた





大いじろ

のです。
ズロースをおろして、白いかわいいお尻を見せながらだまつて便器にまたがつている女の姿は、どんな名画より私のまなこにぎりぎりときつつけられました。ほんの一瞬間のことではありましたが、激しい胸の鼓動をおさえながら、それでも私はじつと耳をすましていたのです。やがて、乱暴にドア

をたたきつけて出ていくけいを感じました。無作法にのぞいた男がどんなにくらしかつただろうと、ひそかに微笑がこみあげてきました。それとも、のぞかれてかえつてうれしかったかしら？

しかし、どうしてわざわざ中腰になつてズロースをあげたのだろう。私は不思議でなりません。秘密の場所は見ようと思つたつておいそれと見られるものではありません。かえつて少しでも動くことによつてよけいに自分の肌を裸にする結果になるではありませんか。反射的な処女の羞恥心だといつてしまえばそれまでですが。

その時から女のズロースが私の頭からはなれないのです。ほんの一瞬ですからその女がズロースをあげなければいくら膝のところにあつたからといつてそれがズロースだとは思わなかつたでしょう。見る方じやただ排泄行為全体の観念しかないのですから、いくら大胆でもそんな細部まで見ている勇氣はありません。そんなこととしていたらそれこそ軽犯罪法のまさしく現行犯でひつばられます。ほんの一瞬なら、あ、まちがいだ、ですみますけれど。

ほんのわずかでも中腰になつた腰に白ズロースがうごいた強烈な印象となつて私の頭にこびりついた白いズロース。

私は苦しみました。たえられなくなつてさまよい歩きました。そして、ふと夜空に置き忘れられたようにひらめく白いズロースを見ると、いつまでもそこにたたずんでしまうのでした。

風でおちてこないかな。



そうつぶやくのです。

3

あれにあられた私の生活も、東京のある大学に入学を許されてからは、新しい希望にすべてを忘れました。あのようなみにくい行為も、五月のさわやかな風と共に、いつしか私の心から去っていったのです。

私は幸福でした。

が、私にとりついた悪魔は私をどこにつれていこうというのでしようか。六月に入ると、私は急に大学の講義を欠席し始めました。高校から浪人、あれほど憧れた大学が、私の目の前にもろくもくずれさつてしまったのです。

何故でしょう。どういうわけなのでしょう。

駅からの二十分。大学に通う私の足は乱れていました。じりじり焼きつくような太陽はようしやなくこのあわれなみじめな心に照りつけます。

なんといういらだたしさ。

小さな台の上の交通巡査がまるでサーカスのピエロのように見える。

家にとじこもつた私は、孤独のおそろしさにおののくのでした。

どうすればいいのだ。

その頃だと思えます。ふと書店で奇譚クラブを見つけたのは、読んでいくうちに、不思議に私の心はなくさめられてゆ

くのです。私はむしろうれしくなりました。そして、この奇妙な雑誌をあきたすように見つめました。ほんのわずかな間でも私は楽しくすごすことができるようになったのです。七月、八月、そして九月。書店で奇譚クラブを見た時のみ、私はなにかほつとしたのでした。

いつしか秋になりました。

ある夜、私は急に家をとびだしたのです。

つと立つた女は風呂敷で電燈を軽く覆いました。部屋が一瞬暗くなりました。そして、次第にあわいくれないの色に変っていました。まるで桃花鳥がはばたきをしているかのよう。田々太鼓が私の心をやわらげました。

女は私に笑いかけると、そのまま坐ることなく部屋の片隅に立ちました。女は静かに帯をとき始めました。黒縹子の帯はするするみだれ箱に落ちていきました。

私はぼんやり女のうしろ姿を見ていました。が、またおずおずと目を伏せてしまうのでした。真赤な夜具に、錦絵の女の顔が大きくうつしだされていました。放心したように、目はうつろに火鉢の灰をまさくつていました。そして、着物のずれる音が、やわらかく私をつつむのでした。

まだ着かえないの。

ふりむいた女はやさしい微笑を私になげかけながら云いました。

女は丹前を持って私の前に坐りました。仕方なしに、私は服を脱ぎ始めました。しかし、肌着を見せるのがいやにはず

男性MASO特集

かしく、むしろ女が私の前にいるのをにくらしくさえ思いました。脱いだ下着に女の手がふれたとき、私は反射的に手元にひっこめました。女はおかしそうに笑いました。

女は洗面用具を手につくと、私をお風呂にさそいました。私は静かに廊下にでました。窓から、吉原の夜の街をいろどるネオンのまたたきが目にふれました。それは、なんと美しい星空だったでしょう。

だが、このあわい幸福なひとときもむざんに破られてしまったのです。

あなたためなのね。

女はあわれむような口調で私に云いました。その時の私の気持。うすく涙がにじみでて来しました。これ程の羞恥を受けたことはありませんでした。

電気が消されて女はどこかへ出て行きました。くやし泣きのなかに、いつしか私はねむってしまったのです。

そして朝、私は女の軽い息を身近かに感じました。ふりむいた私は、女の唇にそつと接吻しました。私の手が、ふくよかなお尻にちよつとふれたとき、いままでにない激しい……

をおぼえたのです。私は女の……

興味を感じたのです。

女は身をよじらせましたが、別に目をあけようともしませんでした。

私はとつさに起きあがると、……

みました。

なにをするの。

女は不思議そうな顔付きで私を見ていました。そしてくすぐったそうに笑いました。

秋の枯葉。

さびしさにたえかねてさまよう森の小道。そこには、灰色の枯葉がただあるばかり。

女を知ったのに……

あの朝、……リビドは優に前の夜の失敗を克復してくれました。私はやっぱり一人前の男だった。

だが、何故こうもさびしいのだろう。

女の排泄物にとびついていつて始めて異常な程の満足を感じた私は、怖るべき固定された宿命的な排泄物^{スカトロ}狂^{ロジイ}症の潜在意識に慄然としました。そのもたえのなかに、私をスカトロジイにまで追いやつたあくことのない激しい「女」への憧憬が、女を知つてもひとつも解決されていないことを知らされました。

まだ、私は「女」を知っていないのか……

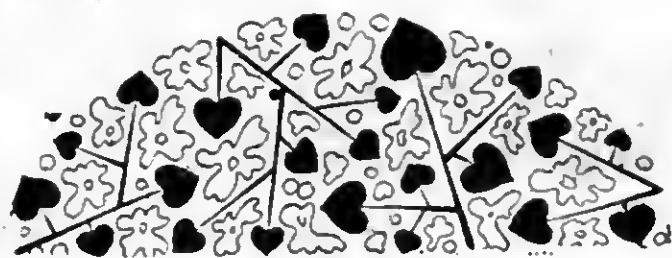
不安と孤独と絶望と自嘲と。あらゆる「生」に対する怒りのなかに、「女」を求めてさまよい続けた私の、女を知った結果がこれだったのだろうか。

それはあまりにも残酷だ。残酷すぎる。

しかし、これも自嘲でしょうか。私は「女」を求めていずことなくさまよい続けるでしょう。宿命的な憧憬の「女」を求めて。

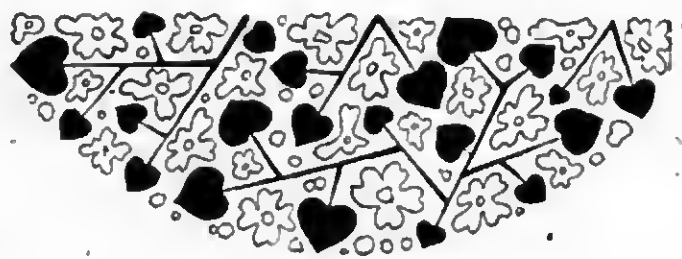
(おわり)





道 徳 的 な 物 語

笹 田 豊



「——処で、今日は友人としてじやなく、雑誌の編集者として君に頼みがある」

「と云うと？」

「つまり小説を書いて貰いたいんだ。熱情的で道徳的で女性の紅涙をしぼる様なやつを」

「難かしい注文だな」

「特に道徳的なと云う処にアクセントを置いて貰いたい。何しろ世は滔々たるアプレ時代だからね。人妻に恋をしたり妻子ある男と若い女が駆け落ちしたりする事件は日常茶飯事になっている。これじゃ将来の日本はどうなる。こゝに於て僕は——」

「悲憤慷慨はもう結構。君の愛国心は全く素晴らしい！要するに君は、現在の乱れた世の中を救う様な道徳的大小説を書けつて云うのだろう？」

「まあ——そうだ。時に性道徳のたいはいを攻撃したやつをね。一口に云えば——美談だ。世人は今や余りにも美談に餓えている。一人の行い正しい人間の話は世人を譟然大悟さすに違いないのだ。そう。美談だ美談を書いてくれ給え」

「そうだね、余り好い材料は無さそうだが——こんなのはどうだろう。一寸思いついた話だが」

或る読者の通信より

私 の 歡 び

瓜 生 珠子

曙書房の皆様益々御健斗の由御喜び申し上げます。私共はかねてから貴社発行の奇譚クラブの愛読者にて最初は市販のものを購入して居りましたが確実に毎月入手するため先月KK通信を半年分お願いして連絡を密にすると共に今迄入手漏れになつていました旧号及び玲子画帖も送つて頂くことが出来ました。厚く御礼申し上げます。

一寸余談になりますが、私共「女体の責」に特別の興味を持ち貴社と別に○書房の雑誌を購入して参りましたが正直の処貴社のものとは比較にならず、尙最近「○○の会」へ入会しました処、只平凡な写真一枚送つて来ただけで貴社の誠意と熱心さには到底比較にならないことを痛感致しました。今後共貴社一本を愛読して行きたいと思ひますので愛読者の

「ふん、筋を云つてくれたまえ」

「まあ仮にそのヒロインの名を須美子として置こう。彼女は未亡人だ。未亡人と云つても未だ三十を越すか越さぬかだ。子供を生んだ事のない肌は絹のように艶やかで柔かい。しかしこんもり盛り上つた二つの乳房の中には成熟し切つた三十女の情熱と、二年間守り通してきた孤獨のやるせなさがかくされている」

「ふんふん、一寸いけるじゃないか」

「そして夜ともなれば、彼女はその柔かい乳房を両手で我と我が身に固く握りしめて充たされない欲望に独り激しく喘ぐのだ……」

「ふんふん」

「彼女の唇は何時も、接吻を待つように真紅だ。そして抜けるような首筋の白さと美しくコントラストをなしていた——処で君幾ら支払ってくれる積りだね？」

「ちえっ！折角いゝ気持で聞いていたのに君つて男は全く以て散文的な奴だ」

「しかしこれが一番重要な問題だぜ。いくら俺だつて霞を食つては生きて行けない。さあ幾ら出す？」

「一枚五十円」

「けち／＼するな、一枚百円にしる。汽車賃だつてガス代だつて公務員給与ベースだつて何でも上る世の中だぜ」

「えゝい仕方がない、百円出す！」

「じゃ話をつゞけよう——彼女の顔はもつと素晴しかつた。ハリウッドで最も典型的な美女と評判の高いエリザベス・テイラーに一寸日本的な要素を加えれば——それがつまり須美子の顔だつた。しかし、これほどの美しさを持ち、これほどの肉体を持ちしかも夜ともなれば肉のうずきに軋々反側する彼女は決して淫蕩な女ではない。夫の死以来現在に至る迄浮いた噂一つ立つ事がない。身を持つ事尼の如しだ」

「ふんふん。一寸惜しいようだね」

「つまり、この所が君の要求する道徳的と云う形容詞にびつたり合う所だ」

「成る程。それから？」

「そこへ一人の青年が現われる」

「いよ／＼おいでなすつたね！」

「彼は文学青年だ。ヴァレリーを読みコクトーに感嘆しサルトルを語りラディゲに共鳴する。しかし須美子は彼の文学論より、彼の容姿に惹かれる。二十二才の彼はまだ完全に少年臭を脱し切っていない。つづら

リストに確実に御記入の上各種御連絡を是非お忘れなく御願ひ致します。

扱て今回御送り預きました「縛られた女の写真」をお願いしてから丁度五日目、予定して居りました日だけにこんな嬉しいことはありません。主人にも会社へ電話で知らせて早引きして帰つて貰ひまして其の晩は二人で楽しみながら晩くまでかゝつて新しく買つてきたアルバムへ整理致しました。何にしる貧しい給料の中から主人と相談して漸く苦面した尊いお金で申込みましたものですから、最初の中はどんなものを送ってくるかと内心不安で堪らなかつたのでございますが、封を開けてみて余りの素晴らしさにあッと声を上げた程でした。特に「ハシゴ」「芋虫」等は美事だと思ひました。

伊藤晴雨先生と黒井珍平氏との論争を私共は大変興味を持つて拝見いたしました。勿論私共には批判の沙汰ではあませんが、私共の傾向から申しまして、どちらかと云えば黒井珍平氏に親しみを感ずる様な気が致します。

これも主観の問題でしよか、私共は、「女の責め」を「女性に限られた性的な責め」と解釈したいと思ひます。従つて残酷な苦痛を主体としたい、「責め」よりも「女性に対す

な瞳、ばら色の頬紅い唇が印象的だ。須美子はだん／＼彼が好きになる。彼が彼女に好意を寄せているのは勿論だ。二人はお互いの何気ない会話に恋の囁きを感じ取るようになる。こうした或る夜、二人の間で小さな宴がはられる。須美子の誕生日だ。喜びの余り二人はついグラスを重ねすぎる。抑えていた感情が爆発した……」

「ふんふん。それから？」

「突然青年は未亡人をソファの上に押倒した。激情に慄える手が本能的に未亡人の上衣の胸にかゝる。ボタンが邪魔だ。スリッブが邪魔だ。ブラジャーが邪魔だ」

「ふんふんふんふん」

「彼は未亡人を抱きしめた。火のような息……」

「ふんふん、良いとこだ、ふんふん」

「青年はもう堪らなかつた。そして、遂に……」

「やつたか？」

「そう昂奮するな。やろうとした時、突然力一杯つきとばされた」

「畜生！無念だな、もう少し何とかならんかい？」

「こゝが此の小説の道徳的な処だ。三十才

の未亡人と二十二才の青年との結び付きは余り道徳的じゃない」

「やれ／＼、とんだ注文をつけてしまったもんだ」

「道徳的なシーンと情熱的なシーンとはこれで一応終つた訳だ。——それから一週間後失意の文学青年の処へ一通の手紙が舞込む。未亡人からのものだ。私はあなたを愛している。しかし結婚は出来ない。これは宿命的なものだ——そんな事が美しい文字で書かれている」

「成程。愛しているが結婚は出来ない——つまり亡き夫に対する須美子未亡人の美しくも悲しい貞操だね、うん、実に奥床しいものだ。現代日本婦人の鑑とするに足るねそれからどうした？」



る凌辱の前程”としての“責め”の方により興味が持てます。『縛られた女の写真集』にしても緊縛による苦痛に対してでなく、性的な責めに対する準備姿勢として、其の自由の奪い方法に興味を持てるのです。従つて伊藤晴雨先生の真に迫つた残酷な責めより、一月号や三月号で拝見した喜多玲子さんの「習作各態」画帖の中の“かゝみ”等には自分の真に氷めていたものを得た様な親しさを感じました。その意味で今度御送り下さいました写真集はすべて私共の気持にびつたりしたものばかりでこれからも此の私共二人だけのアルバムを充実してゆきたいと思つて今から楽しみにしておりますので何卒よろしくお願い致します。

私共の夫婦生活の事を詳しく書いて投稿したいと主人も申しておりますが、何にしろ会社の勤めが忙しくてまだ果しておりません。そのうち主人が書けなければ私が拙いながら告白めいたものでも書いてみたいと思つております。羽村京子さん御夫婦には遠く及ばないかも知れませんが、でも御誌には今迄川端多奈子さん、古川裕子さん以外に余り縛られる女の歎びといったものを女性の側から書いたものが見受けられませんので私の告白も

「此の間のような事件が起つた以上、もうあなたと平静にはおつき合い出来ない。あなたを私の物にしてしまいか別れるか、二つの中一つだ。しかし私があなたと結婚することは不可能だ。だから、死ぬ程悲しい事ではあるが、お別れする事に決心した——こんな事も書いてあるんだ。そしてその手紙の中に音楽会の招待券が一枚封入されている。永久に別れてしまいう前に最後にもう一度二人一緒に話して見たいと云う訳だ」「分るよ、その気持は」

「別れのシーンを豪華にするために、まあその音楽会を、コルトーのリサイタルとでもして置こうじゃないか。しかし今の二人にはピアノなぞ耳に入る筈はない。悲しい別離の情がある許りだ。二人は音楽の途中で堪えられなくなつて脱け出す。もう夕暮れに近い。会場の外には人影もない。黄色くなつて風に散るいてふの並木がある許りだ。二人は物も言わず歩き出す。と、その二人の耳に会場の中からコルトーのひくシヨパンの曲がかすかに聞えてくるんだ。無論その曲の名は「別れの曲」だ……」

「いゝね、実にいゝ。傑作だ。此の最後の場面じや婦人読者の紅涙をしぼる事うけ合

いだ。素敵だ。実に素敵だ。これなら一枚二百円でも惜しくない、じや宜しく頼むよ今日はこれで」

「一寸待つた。これには未だ後日譚があるんだ」

「ほう、未だつゞきがあつたのか？」

「それから一年たつた或る日、青年は再び路上で未亡人に出合ふんだ……」

「ふんふん、劇的な場面だね。未亡人は涙ぐんで青年に許しを乞うのかね？」

「処が一向に劇的でないんだ。その一年間に青年は全く落ぶれてしまつて寄せ屋の手先をやつてゐるんだ。だから未亡人は、一向に気がつかない。だが、そう云う未亡人自身ひどい変化をしてゐるんだ。あのチャームングな胸も顔も昔日の俤は殆んどない。それ処か腹は無様に突き出ている。顔は青白くむくんでゐる。良く見ると妊娠してゐるんだ……」

「へえ？」

「だから青年も未亡人には気が付かないんだ」

「しかし、未亡人は何故——」

「何故妊娠したと云うのかい？ 無論結婚したからだ」

又何らかの御参考になるだろうと思ひます。

弓削友子さんを縛つて

沖 芳 郎より

僕の手紙を早速転送下さいまして本当に有難うございました。厚く御礼申し上げます。お蔭で僕の念願していた思いを果すことが出来て何んと御礼申し上げていいか御礼の言葉もございませんが、取敢えず御報告をかねて厚く御礼申し述べさせて頂きます。実は彼女は僕が編集部へ手紙を出すのを大変嫌がつてやめて呉れと申しましたが、無理に納得させて書いた次第です。

僕の手紙を転送して頂いてから御返事を貰いまして小説もどきにお互いに目印をつけあつて初めて逢いました。ああいつた事は小説で読んだり映画で見たりしたら大変ロマンチックですが、現実にはきざで面映ゆいものですね、その為最初は大変きこちなくてお互いに固くなり過ぎていたせいもあつて、ちよつと失望に似たような気持になりました。然し話し合つている中に次第に打ち解けてきて、奇譚クラブの事や縛られた女優の出る映



「しかし、未亡人は亡き夫にみさを立て、一生独身を通す積りじやなかつたのかい？」

「そりや、君が勝手に感心して勝手にそう決めている丈の話だ。俺はみさを立てたとも立てぬとも云わなかつた筈だが」

「するとつまりどう云う事になるんだ」

「未亡人が青年と結婚しなかつたのは、青年に金がなかつたからだ。二年間空闊を守つていたのは金持の男が見つからぬと云う単純な理由からだ。無論彼女は青年を愛してはいた。しかし金の方はもつと愛していた。青年に係り合う事は自分の商品価値を下げるものである事を彼女はよく知つていたのだ。二年間つましく暮していたのも青年と別れたのも決して事主の思い出に生

きていた為じやない。その証拠に青年と別れて四月目にもう結婚しているんだ。無学だが生活力のある新興成金とね」

「やれ、話は最後迄聞いてから感心するものだね……馬鹿見たよ」

「しかし此の小説には熱情的な処もあるし紅涙をしぼらせる処もある。それに第一道徳的には——特に性道徳的には頗る健全だヒロインは性衝動に対しては完全な抑制力を持つてゐる。たとえその根底に経済的な原因はあるとしても……。エロ小説の横行する今日、これほど常識的で健全なやつは一寸見当たらないぜ。して見ると君の要求と完全に一致していると云う訳だ。二百円は安い……」

「何とでもほざくがいゝや……処で其の後日譚は切捨てる訳には行かないかね？」

「馬鹿云うな。全篇の骨子は此処にあるんだ。金は凡てに優先すると云う思想は最も重要だからな」

「やれ、折角ロマンチックになつたと思つたら、すっかり又散文的な気分に戻つてしまつた」

「二百円は頼むぜ」

「勝手にしやがれ！」

画の事などを話題として楽しく一日を過しました。

それからの手紙のやりとりは何れも速達で多い時は日に二回も出したりして、一度逢つてしまえば十年の知己のようで彼女の性格も十分掴かむ事が出来、又彼女も僕の全貌を知つてくれたようでした。そして約束の日曜日彼女はとうとう僕の申出を受け入れて縛られる事を快諾してくれたのです。僕は女を縛ることに興味を持つていましたが、相手に無理を強いたり又欺いたりして縛るといふことは空想の中でも嫌でしたから、彼女から承諾の返事を貰つた時は實際天にも登る心地でした。そして僕はその日、今迄夢に描いていた理想の女性と対面することが出来たのです。これから後二人の間がどのように進展しますか何れ改めて御報告したいと思つておりますしそれが僕の義務でもあると考えております。あの日以来、僕は家業にも人一倍精出し見違えるような張りきりようです。彼女に出した最近の僕の手紙は是非お見せしたいものの一つです。別便にて編集部の方々へ御礼のしるしばかりに粗品を御送りしておきました。二人の微衷として御受取り下さい。では厚く御礼申し上げて筆をおきます。

僕は奇々誌上で貴女の文と写真を見て、
るフアンの一人です。僕は今迄貴女のように
美しい縛られた姿を見たことがありません
近代的な嗜虐悦虐の姿は実に美しいもので
す。次々に貴女に色々の事柄を質問いたし
ますから是非お答え下さい。御返事は直接
でもKK誌上でも結構ですがなるべく詳しく
書いて頂ければ幸いです。

いましてが他人にそんな事をさせて貞操の
事なんか考えないので、⑩最後に一番
長く責められていた時、一番辛い責められ
方は、――

こんなに沢山の質問を出して申し訳ありま
せんがどうかお返事願います。

【お答え】

至らないわたくしにいろいろと有難うご

川端多奈子さんへ

問

質

矢作 生より

①縛つたりするのと縛られるのと
どちらにどの程度の興味を持ちま
すか、②いつ頃から興味を持ち初
めたのですか、③初めて縛られた
のは何時ですか、その時の簡単な
思い出を、男の方にですか、女の
方にですか、場所はどんな所でし
たか、④大体何時までの位縛ら
れましたか、⑤大番楽しかった時
と苦しかった時の思い出、⑥どの様な経過
を経てKK社へ出るようになったのです
か、⑦写真は主にどなたがとられますか、
⑧あなた自身で他の雑誌の責絵なんかごら
んになりますか、そういつた絵をお持ちで
すか、⑨他の人(男でも女でも)が責めら
れる所を見たことがありますか、⑩貴女は
縛りたければ縛らせてやると雑誌に書いて

ざいます。簡単ではございますが左記へお
答えをいたします故それでお許し願います
①縛られる方に強い興味を持ちます。縛つ
てはしくてたまりません。②今から十カ月
程前からです。③昨年の五月です。勿論男
の方にです。場所は日本間です。新年号に
その時の気持一寸書きました。④さあどの
位でしょうか、回数にしたら二十回位かし

ら、でもはつきり覚えてませんわ ⑤破つ
た日記帳でその事はだんだん書いて行こう
と思つてますの。今即答しかねますわ、乙
女の心の中つて複雑ですもの ⑥わたくし
にそういった気持があつたから自分で希望
しました ⑦写真はすべて塚本鉄三さんが
おとりになります。他の方のカメラの前に
立つた事はありません⑧時々ポーズの参考
に見る事もあります、度々見る
という程でもありません。絵は一
枚も持つておりません⑨一回も見
たことがございません。編集部の
方が一度他の女の方を縛っている
所を見せてあげようかと云われて
見せて下さいと返事しましたが、
まだ見せて貰つておりません⑩雑
誌社の方々はみんな紳士的な方で
安心出来るあまり世間の方々もそうだと信
じきつてしまつてあいつた通信を出して
しまつたのですが、今迄二三の方に逢つて
みた結果大変失望してしまいました。今後
はもう絶対にお逢いしないとおこうと思ひ
ます⑩案外見えていて楽なようでも辛いポ
ーズもあります。例えばお腹に縄をかけて吊
られた時等です。



マゾヒズムの極致

少年及び女性の切腹

中 康 弘 道

筆者が前稿に於て説述する如く、切腹は世界自殺史上に比類を見ない、凄惨且つ苦痛多い自殺方法である。従つて文献にも残るように後代に於ては介錯が主体となり、苦痛の軽減法が講じられている位で、極めて非力な少年や女性の、容易に遂行出来るものではない。

従つて是等の少年や女性の切腹は一言にして言えば、マゾヒズムの極致と言えよう。視覚的刺戟を好んだ江戸泰平期の演劇に於て、和田舞鶴女合戦の市若や、近江源氏先陣館の小四郎の、可憐且つ悲愴な切腹の

決意と断行が、人々のサドマゾヒスティックな好奇心に合致したのは、当然の事象である。

便宜先例に従い、十九才以下を少年として、その切腹例を集録してみよう。

差当りまず考えられるのは、承久の乱に於ける伊賀判官光季の一子、光綱十四才である。光季は官軍に攻められ防戦甲斐なく時至ると知つて、光綱に「腹を切れ」と命ずる。

光綱は直ちに腹巻の紐を切つて退け、直垂の紐を解き寛げて双を逆手に腹に押し当てたが、流石に掻切る事が出来なかつた。光季は「火に跳び入れ」と命じたが、是も

火焰に吹き戻されて果さなかつた。止むなく光季は光綱の首を打ち、自分も腹十文字に掻切り、火に跳入つて死んだ。光綱は戦に先立ち、逃げ延びよという父の命に背いた程だから、必ずしも勇気を欠いたのでは無かつたが、腹を如何にして切るかの教養が、武士の家訓に無かつたものと解したい。元弘の乱で北条勢が鎌倉東勝寺に滅びた時、長崎所右衛門十五才の最後は見事であつた。身体髪膚を破るは不孝に似るが、祖先の名を辱すかしめぬ為なれば、と老年の祖父を刺殺し、返す刀で我と我腹掻切り、祖父の死骸に重つて果てた。一門の主な人々の切腹にも随つていた高時も、此の少年

の健気な最期に励まされて切腹した。

此の頃から戦乱は全国に及び、切腹の事も史書に頻繁に見えるが、少年の切腹で哀れ深いのは、何と云つても男色に絡まるものである。西方備中守の子胤彌次郎は、備中守が自刃の決意を明らかにし、行々家名を傷ける事無けれ、と伝来の剣を手渡すや否や、「覚悟致して居ります」と言いざま九寸五分の守り刀を抜き、「死出の山路にてお待ち申す」と云い残し腹十文字に掻破つた。時に十九才。

然るに彌次郎と割無い仲の少年があり、数日後摂津に在つて是を聞き、心中を書置いて祕かに腹を切つて果てた。時に十四才

此の類で今一つ紹介したいのは、三村実親のことである。天正三年毛利勢と戦い力つきた実親は、身を棄て城内の人々を救う為、潔よく切腹を申出た。やがて正月二十九日検使を迎え、「父の為に切る腹なれば如来も済度し給うべし」と云いおいて、中巻した大脇差を左の脇に撞立て右脇に引廻し、柄も拳も砕けよと真中に押込み十文字に切つた、というから鳩尾の辺りへ力一杯突込んで切下げたのであろう。時に実親二

十才。人生の花開き切らぬ哀れさであつたが、まして哀れは小者の藤吉である。此の十四才の少年は涙と共に見守つていたが、矢庭に飛出し攻囲の敵兵を斬り倒し、馳せ戻るなり実親の死骸に寄り懸つて腹掻切つた。是は単に主の死を悼むのみではなく、念者に殉ずる稚児の切腹と見てよい。

実親の一族に源五郎高透という少年があつた。是も居城陥る六月四日、自刃の支度をする父母に向い、「逆さまには候えどもお先に腹仕る」と、涙ながら雪の肌を押寬げ、見事腹十文字に掻切つた。時に十五才。戦国の少年城主の最後を拾うと限り無いが。以下に数例を挙げよう。

箕輪の城主箕輪左京亮業正は落城近しと知るや、十九才で家名を恥ずかしめまいと腹掻切つた。

多胡の城主千葉之介胤宣は足利成氏に攻められ、終に二十騎となるや、京徳四年、自ら申出て城を開き、仏前にて切腹した。十五才。

是より先永享十一年には、足利時代滅亡に際し其の子義久は、鎌倉報復寺にて焼香称名の後、刀を抜き左脇に突立て静かに切

腹した。時に僅かに十才であつた。

十文字切腹の範として文献に名を止めた細川九郎澄元は十九才であつた。

龍崎宮千代という少年は、年少にして出陣叶わぬのを憤り、辞世を認めるなり腹掻切つて果てた。

秀次自刃の際、腹十文字に掻切つて供した不破万作、山本主殿、山田三十郎は、何れ劣らぬ十七、八の寵童であつた。中にも万作は顔容花の如く肌理玉の如く傾国の美女にも優る、と伝えられる。絵双紙の太閤記では等の美少年達が切腹しているさまは凄愴な中にも美感の漲っているのは否み難い。

寵童の追腹は此の頃から盛だつたようで慶長十四年には中村一学の死に際し二人の美少年が追腹を切つた。即ち感応寺という寺で畳に蒲団を敷き三方に紙巻の脇差を載せて待つ所へ、服部若狭十八才、垂井勘解由十九才が着座する。勘解由の発意で声を合せて腹へ突き刺し、若狭はそのまま引廻す所を介錯された。勘解由は「腹を十文字に切り申す」と介錯人に断つて、まず横に切り次いで鳩尾から臍の横へ切り下げた。

深く突立てすぎて下り兼ねるのを、かけ声して両手で押下げた後、首を受けて死んだ

寛永年間、堀田正盛の寵童伊丹左京は、舟川妾女と愛恋の末、横恋慕の森主膳を切つて切腹仰付けられた。妾女は右京切腹の場に駈せ来り共に押並んで腹一文字に掻切り、後は刺違えて死んだ。時に夫々十六、十八の美少年であつた。是などは男色愛恋の極致であり、美貌の少年が纖手自刃を操り、自ら雪白の腹皮を苦痛に耐えて切り裂くさまは凄惨悲愴、さながら一幅の錦絵の如き情景である。

然し此の趣は後に説く女性の切腹に於て更に極点に達し、更に意義深い。

尙西鶴は、男色大鑑に此の情死を扱い、まず右京が切腹して介錯を受ける所へ、見物人の中から妾女が飛び出し、いきなり腹掻き破つた、としている。挿絵でも右京一人が双肌脱いで刃を腹に突き刺し、妾女は駈け寄ろうとしている。然し此の二少年の自刃心理からしても、共に諒解の上で、夫々心ゆくまで腹を掻切り、然る後差違えた

と解する方が、正しい。

小姓達は、殆ど寵童と見てよいであろう。

細川忠利の死に際しては内藤長十郎元統十七才、大田小十郎正信十八才が切腹した。家光薨去に殉じた阿部重次の小姓に、彌右衛門という者があつた。重次の介錯を努めた荒井頼母を、此の少年が介錯し、自分も切腹した。時に十六才。清水宗治の小姓市之丞十五才と齊しく、他の人々の介錯を終えての切腹であるから、自ら屠腹の後、致命傷を与えて絶命したに違いない。

重次と同じ時追腹した内田正直にも、萩原主悦が追腹を切つてゐる。

さて、男色に絡わるものを是で止めて、年少の例を紹介する。先に足利義久は十才でよく切腹し、その勇気を謳われたが、ここに八才(九才とも云う)で切腹した少年がある。

豊臣秀頼に殉じた氏家内膳正の子八丸である。彼は兄の左近二十四才、内記十七才とも二十才とも云う、の二人と共に京都妙光寺で切腹を命ぜられた。何れも極めて美貌の青少年だつたから、見物も多かつた。

八丸の幼少を危ぶんだ左近は「八丸から先立つべし」と云つたが、八丸は「腹切

る者を見た事無し、兄上の切腹を見習います」と云う。少しも恐れる様子がない。そこで左近は内記との間に八丸を坐らせ、よく見よ、余り深く掻くな、俯伏すのだぞと教えながら双肌脱いで、左から右へ一文字に切り廻し介錯を受けた。内記も「目を刮と開け、切先を勇気を揮つて引廻せ」と教え是も一文字に腹を切る。その間八丸は兄の絶命を見届けてから、やをら肌を脱いだ。流石好奇の観衆も泣き出し逃げ出した。然し八丸は静かに脇差を抜き左の脇に突立てた時、情の介錯を受けたと云う。

大野修理亮の子彌十郎も同じ理由で、浅草海禅寺に於て、十七才で切腹した。

因みに秀頼と同時に切腹した真田大助は十六才であつた。

有名な赤穂浪士が殆ど打首に近い最期を遂げたのは、時代の風潮故致し方無いが、大石主税に就て或る書物は切腹の情景を記している。或いは一種倒錯的な哀惜の情から、彼の最期を華々しく伝えたのかも知れない。

即ち「当方より声を懸ける迄お待ちを」と介錯人に頼み、左から右へ臍の下を一文字に切つた。そこで介錯人が刀を振り上

けると「お待ち給われと申したに」と睨み次の刃で肋の骨際を左から右へ引き、然る後介錯を受けた。二文字で切目も大きく立派だった、と云うのである。時に十六才であつた。

真実腹を切つた例では、松平信綱の小姓高島左近がある。家臣同士の喧嘩が元で赤井彌兵衛という武士を突殺した。切腹を命ぜられるや、「兼ての覚悟、有難し」と、行水落ませ、伊豆守邸の小書院前の庭に席を設け、所謂碁盤の目なり、腹十文字の見事な最期を遂げた。時に十九才。見事さを謳われている。

延宝五年には大阪で永来彦兵衛の小者勘太郎と云うのが、三才の幼主房太郎の死に供腹を切つた。即ち、病死の翌々日、藏の二階で双肌脱いで、左の脇に脇差を突立て右の脇に引廻し鳩尾より臍の下迄十文字に



掻切り、喉を突いた刃を枕に、壁に倚つて死んだ。時に十一才とも十六才とも云う。集団的な少年の切腹は白虎隊であろう。然し此の十九名の少年達も、中には刺違え或いは咽喉を突いた者も有る。

一同城を拝み、交天祥の正氣の歌を吟誦し終えるや、まず石田利助十七才は、「手傷重ければ御先に御免」と、両肌を脱ぎ刃を腹に突立て美事に引廻して前に伏した。野村駒四郎十七才も、永瀬雄次と偶刺して、死に切れなかつた林八十治を介錯した後、

暫し刀身を眺めて感激に打たれていたが、やがて両肌押拵げ作法通り割腹して俯伏した。唯一の生存者飯沼貞雄の談では、切腹の状況明かな者は此の二名である。

会津藩の抗勅の責を負つて切腹したのは家老菅野権兵衛であつたが、その次男乙彦後に改めて郡二郎長正も、会津魂を貫いた彼は選ばれて九州小笠原藩の藩校に遊学中、母に宛てた手紙に食事の点に触れたことから、常々対立的だつた小笠原藩の生徒に罵られた。長正は武士道の一分立たずと見事に腹一文字に掻切つて果てた。

長崎中学の前身時代にも、職員の時計を盗んだ少年が、後に自首したが、校長に切腹を命ぜられ、覚悟の自刃を遂げた話柄が残っている。

その他、明治大正期の文獻に残る少年の切腹例十一の内から、注意すべきものを挙げると、東京で木棉問屋店員十七才が番頭を刺殺の上、短刀で腹を中央から左へ五寸切り、内臓露出し死亡したのは明治四十四年である。

大正元年十一月三日には山口県下で、中学生十六才が、乃木將軍を慕い短刀で割腹

危篤を伝えられている。

三年八月には長崎県で十九才の少年が持病を苦に日本刀で割腹自決を遂げた。十年一月には東京駅改札係十九才が失恋の爲、列車内で切腹未遂。一種の悲喜劇ながら切腹のマゾヒズム性を現している。

十五年三月には大阪で仲居の子九才が、活動写真を真似て小刀で臍上に、腹膜腔に達する傷を与えている。此の例などは誰しも少年時代身近に見聞した事があるのではないか。

一種の英雄憧憬を悲劇的に表現しようとする慾望が昂じた結果であらう。

太平洋戦争後、皇室の彌栄を祈つて自刃した大東塾生の内にも、十八才の少年が参加、割腹している事実を附記して、一応少年切腹史の筆を擱こう。

筆者が嘗て婦女の切腹図絵を渉猟した折ある錦絵店で、「女で腹切つた者がおますか」と番頭が驚いていた。然し文献によれば明治大正期に於て女性の切腹例は六十余に達し、中には臨月近い妊婦もあり創口も男子も及ばぬ大きい切り方を示したものも少なく、と云う。

大体古文書に記録されている切腹の元祖は、神話時代の説話に信倚するならば、女性であることは特筆せねばなるまい。即ち播磨風土記に、淡海神という女神は、夫花浪神が他の女性の許に走つたのを憤り、跡を追つて沼に行詰つた。遂に憤怒の極、刀で腹を掻き沼に没して果てた。故に此の沼を腹掻沼と云う、とある、蒼黒く澱んだ沼の重い水面に鮮血が滴り、時ならぬ波紋と共に憤怒の血汐が赤黒く拡がつて行くさまは、想像するだに凄愴である。

武士の切腹が藤原保輔或いは源為朝の如く、逃れる能わず而も自ら名譽を保つべき最良の方法として擧げられたに對し、女性の場合は、屢々やり場の無い愛執が貞烈の形式を執つて自己破壊に向けられているのもここに端を発しているよう。

戦国時代に入つて上杉禅秀の妻左衛門は夫の敗死を聞くや藤渡の川辺にて腹を十文字に切り、水没して果てている。女の十文字腹は珍らしい。此の二例の如く切腹後水没しているのは、単に死に切れないという許りではなく、女は慎み深くあるべきもの無暗に肌を他人に示すべきでないもの、従

つて死骸を水中に隠す意図が察せられる。勇武にして戦乱に参加する程の女性でも概ねは咽喉や胸を突いて死んでいるのは、切腹が絶大な体力氣力を要するからではなく、少くとも上腹部を露出すべき自殺方法なるが故に敬遠されたものと解される。

然しその露出性にも拘らず、敢然と切腹を選んだ女性も在る事は、女性の特質とすべきマゾヒズム性を最高度に發揮するものとして、注目に値する。殊に尖鋭なるものが男根の象徴であることを知るならば、最も女性的な器官を内包する腹部に、女性自身の手によつて刃物が突込まれる事象の意義は、最早や説述を要しないであらう。そしてその故にこそ、女性の切腹が多くは愛執に絡まるところのものであるのも、当然の現象と首肯されるのである。

以下戦国以後の女性の切腹例を略述する。武田勝頼の妻は、敗勢明かとなるや脇差で腹を突いた。かくと聞いて勝頼は妻の腹に突立つた刀を抜き取り、自分も腹十文字に掻破つて果てた。

是より先、永祿十二年、足利義昭を本国寺に襲つた三好の党に、奈良左近義成が加

つていた。養成は敗走の途、嘗ての笛の師匠貞光久左衛門に討たれた。久左衛門は養成の妹の美貌に恋着、妻を去つてもと懇望したが養成に断られ、遺恨に思つていた。

彼女は野村高勝に嫁していたが、高勝も此の乱で討死、久左衛門に城に迫られた、決心した彼女は久左衛門の不意にその刀を奪つて刺殺し、返す力で我と我が腹を切つた。

江戸時代に入つては、上杉景勝の寵妾が正妻お菊の方の嫉妬に耐え兼ね、自分の生んだ定勝とお家の安泰とを祈念する余り腹一文字に掻切つて果てたのは、本誌十二月号「男装寵姫伝」の紹介するところである。

その定勝の妻で鍋島勝茂の娘於市が寛永十二年、二十九才で病没するや、梯尾安女藤井左エ門胤重の夫妻二組と、江里口九郎右エ門信貞、於己久の兄妹が追腹を切つた即ち男三人女三人の切腹である。

是は主君への殉死であるが愛慕する男性の死に殉じた例は、西鶴の作品に現れる。

まず武道伝来記から一つ。

京は六条の遊女花のえんは、初会惚れした十太郎が、やがて郷里で切腹せねばならぬ身と聞くや、情死を迫る。然し男は名譽

を重んじ翌日帰郷の途に就き、間もなく菩提寺で切腹する。女は、志は万里に通え、男のするような女の追腹と、腹掻切つて果てる。

武家義理物語にも一つ。

讃岐藩中に隠れない美男梅丸と、美女小吟あり。互に見も知らず恋い焦れていたが殿のお声が、りで夫婦になつた。年を経ず殿は危篤、梅丸は追腹と決る。別れの刻限になつて小吟は、何れ後夫を求める志と、愛想尽かしを云う。梅丸は顔色を変える所へ殿臨終の知らせ。そのまゝ梅丸は登城して腹を切つた。

武家には珍しい愛慾の末の夫婦なので、あの恋妻残して腹切るは誠に心残りであるう、と人の噂だつた。然しそれを察して夫に未練無きよう愛想尽かしを言つた小吟である。即ち梅丸の最期を聞くや否や彼女も腹掻切り、跡を追つたのである。

近松の長町女腹切も二つの原話がある。

大阪長町の老女が切腹した事件、も一つは京の私娼お花が刀屋半七と心中した事件此のお花は元禄十二年、男の半七が咽喉を突いたのに対して、見事に腹を切り咽喉を

絶つて死んだ。

女腹切の代表的なものに溝口与えがある養子娘の彼女は、夫が主君の奥方と通じたのに悩み、遂に夫を刺殺、土分の切腹を願ひ立てた。許された当日は、自若として身を清め、介錯を断り、検使の面前で見事に腹を割いて果てた。是も介錯無しという万事からすれば稀な十文字切腹であつたか



も知れない。

今一つ「加賀騒動」(村上元三氏)で紹介された浅野吉長夫人節子の切腹がある。

節子は十九才で前田家から迎えられ、文武に秀で女丈夫の風があつた。吉長が中年より遊蕩止まず、夫人の諫止にも拘らず芝神明の蔭間や吉原の大夫を国入りに供させた。本邸の窓からは是を見た夫人は、我が一分も早是迄と、その深更を待つて見事に腹一文字に掻切つた。村上氏によれば白綾の下着の上からとある。事実とすれば着衣の上からの切腹は、肌を露わすよりも更に難しいことを附記しておく。さて気配で知つた女中たちの驚き一と方ならず、お局の外山沢井、中老の豊田は夫人の体を抱いて、お医師をと立騒ぐ。夫人は「覚悟の切腹、手当して届くような切り方はせぬ、早う介錯を」と言付けた。

三人は、「此上は追腹仕ります」と願う。「追腹は天下の法度」と夫人は叱り付けたが、三人が強つてと言ひ張るので、苦しい息の下から「外山沢井は供せ、豊田は介錯して三十五日過ぎれば勝手」と遺言である。忽ち外山、沢井の両名は肌押広げ懐剣で

切腹、豊田は夫人と朋輩の介錯をする。介錯と云つても首を打つのではない、咽喉を貫くのに手を副えたものと思う。夫人時に五十一才、女中の年齢は判らない。豊田も三十五日過ぎて墓前で自害した。切腹か自刎かは不明。

江戸時代切腹の故実作法を書いた本の中に扇腹ということが出て来る。切腹の座で扇を三方に載せて出す。それを押載く時に首を打つのである、斬首に異ならないのだがさる大名で婦人が扇腹仰付かつたとある之は婦人だけに寧ろ名譽な扱いであつたらう。女性で切腹仰付けられた例は寡聞にして吉村れつの他に聞かない。れつの父嘉之は殿のお側用人に志を屈せられ、無念腹を切つた。

一人娘のれつは側用人の奸曲を知り、斬奸状を懷中に彼の邸を訪れ、玄関先で斬り棄てた。もと／＼奥に仕えて忠実だつたので、特に切腹を仰付けられた。れつは喜んで切腹の座に付き、存分に腹を切る迄介錯を待つように依頼した上で、九寸五分を手にした。そこへ殿からの急使が、れつの思誠により赦免の使命で駈せ来つた。彼女は

恩命を感謝した上で法は守るべきもの、と猶も切腹を願つた。

再び切腹と決り、肌押ぬいで乳房から豊かな臍の下辺り迄露すと、左脇に刃を突立て、流れ出た血汐を盃に満たし、主命で嘉六の跡を継ぐ少年勝之助と呑み分け、薨爾として腹一文字に引廻して果てた。時に二十一才。

助かるべき命を振り切つて、檢使始め数多男性を前に肌を露わし、心ゆくまで腹掻切つて果てた彼女の最期は、陶酔的な悲愴美に輝くばかりの満足であつたらう。此の話は前田曙山、納言恭平、邦枝完二の諸氏が小説化している。

哀れを止めたのは横浜の遊女喜遊で、米人に身を任すのを悲しみ、苦慮の末、一夜自室で腹一文字に掻切つて果てた。二十一才。

明治大正期の文獻によれば次のような女腹切の例が見られる。

明治三十六年東京本所の駄屋の娘十九才は家庭不和から、口中に紙を含み手拭で縛り膝を細帯で結えて一尺九寸の刀で左右の咽喉を突き、更に腹を背へ貫くまで刺して

死んだ。

四十四年には赤坂の古物商の娘十八才が
気鬱症から腹を長さ一寸深さ三寸切つた後
咽喉を突いて死んだ。

大正三年には水戸の
下宿屋の養女十九才が
家庭の不和から実弟を
刺殺、自ら下腹部を三
寸余り切り咽喉を突い
て死んだ。

以上何れも年少の女
性が、覚悟の上と見え
見事に切腹を遂げてい
るのは傷ましい。

明治四十一年七月に
は神戸と大阪二件。

神戸の方は鉄工所の
職工長二十七才の朝帰
りを憤り、二十二才の
妻が出刃で切り付けた

夫の前頭から流れる血汐に驚き生きては
居れぬとそのまゝ腹に出刃を突えて気絶し
た。一方夫も女房ばかりに腹は切らせぬと
自分も其の出刃を腹に突立てようとし近隣

の人々に止められた。二人共軽傷で済んで
いるが、是などは、一時的昂奮によるもの
である。

一方大阪のは覚悟の上の切腹未遂である



即ち三十七才蒲鉾
商の元の夫と復縁出
来ぬのを悲しんだ二
十三才の娼妓、夫の
咽喉を匕首で刺し殺
し、返す力で腹一文
字に掻切つたが生命
は取止めた。

その他、原因は詳
らかではないが、明
治四十二年五月には
群馬県下で農家の妻
三十七才が鎌で切腹
八月にも同じ県下で
二十四才の娘が菜切
鎌で切腹している。

芝居で云う鎌腹である。腹を切るのに刃の
薄い鎌なら、出刃で切るよりは楽に切れる
し、同じ刃が薄くても菜切庖丁と違つて
刃先が鋭く、掻切るのに適している。農家

では一番手近でもある。日露役当時、農村
の青年が召集解除を恥じて、その夜半鎌で
腹一文字に切り、未明に絶命した事件もあ
つた。

四十四年には東京本郷で女中二十才が、
右腹部から左乳下へ切つたが、浅かつたの
で助かつている。左利かも知れない。

大正四年には千葉県で三十才の尼僧が剃
刃で切腹している。

五年には京都で三十九才には京都で三十
九才の人妻が庖丁で腹を数ヶ所切つて死ん
だ。

然し烈女中の烈女は畠山勇子であろう。
大津事件の経緯を憂える余り、万一の場
合は自刃と覚悟して入浴した勇子は、明治
二十四年五月二十日夕刻を待つて、京都府
庁西側門前に白布を敷いて端座した。遺書
を前に細紐で膝を縛り、暫し黙禱を捧げた
持参の剃刃で腹を切り、次いで咽喉を切つ
た。馳せ付けた警官に「発狂か」と聞かれ
首を振つた後間もなく絶命した。時に二十
八才。

心臓の下、胃の下部腹皮を横に約六厘の
咽喉部に径八厘深さ気管に達する切創があ

つたと云う。

畠山勇子に劣らぬ女性は、当時の婦人雜誌でも伝えられ、知る人も多いと思うが、鷹林花代夫人である。夫君宇一陸軍中佐（後に大平洋戦で戦死）が在満時、官舎焼失の事件があつたのに痛心、その罪過を償い併せて夫に後顧の憂い無からしめようと、自刃を決意した。割腹時内臓より汚物の流れるのを恐れ、一週間に亘り絶食、昭和十四年一月十九日午前三時、林檎を摂つた後血止めのガーゼ脱脂綿を敷き詰めた上に端座、短刀で腹真一文字に掻切り咽喉を断つて果てた。時に四十八才。

今一人は最近陶山密氏が公けにされた摺建静子夫人の最期である。終戦時木戸内府襲撃に失敗した夫君が、遂に愛宕山で同志と共に自決するや、夫人も他の同志の二夫人と自決を約した。八月二十七日早晩、薄化粧の夫人は思出の愛宕山で他の夫人と会つた。中央に端座した夫人は左右の二人が夫々ピストルを心臓部に当てる間に、モンベの紐をゆるめ、懐剣で直接腹部を一文字に切つた後、既に絶命した左側の夫人のピストルで心臓を射ち貫いた。割腹と同時に

水を打つような音を立てて、血が夏草を染めたと云う。

その他戦前の例は資料を焼失したので戦後の二、三を挙げておこう。

満州の曠野を敗走する開拓移民の一婦人はソ連軍の追撃を受けるや日本刀で割腹自決を遂げた、という。戦時の此の種の例は精査すれば一再に止まらないであろう。

二十六年には東京で三十四才の人妻がヒステリーから出刃で二児の首を打落した上腹を切り咽喉を突いて死んだ。

二十七年には京都で二十四才の人妻が神経衰弱から短刀で乳呑子を刺殺自ら胸腹等十七ヶ所に深さ三寸の刺傷を与えたが未遂。遡つて二十四年には、税を苦にして少女ハラを切る。という断片も新聞に見えてゐる。

最後に一言したいのは、女腹切と演劇との関係に就てである。歌舞伎に於ても女の腹切を扱うものは無しとしないが、乳房を持たぬ女形を使用する以上、上半身を露出して切腹の擬態を演出することは不可能に近い。長町女腹切にしても、切腹する女が若くない、という弱点も含めて、桜丸や久

我之助、或いは判官、勘平の切腹程の、視覚に訴える何ものかを持つてはいなかつたでは近年女優の出現によつて、どれ程の事が出来たか。然し是も上半身露出などということはタブーであつたから、戦前の二三の例も着衣のまゝで行われたにすぎない。大正十五年マキノ映画作品に真葛ヶ原女腹切と云うのがある。泉春子が主役菊野に扮し、刀詮議に終つて邪恋の男に訴人され真葛ヶ原で捕方に囲まれる。彼女は覚悟を決めて男を殺し、包囲の中で見事に立腹を切る。

長町女腹切の譚案らしいが、勿論着衣の上からの切腹である。

昭和四年七月には帝劇で森律子が、前述の西鶴武道伝来記を松居松葉が脚色した、「討てば討たる」に於て、遊女花のえんに扮し十太郎切腹の幻影を見るなり、端座して、着衣の上から短刀を腹に突き立てゝいる。

十四年夏浅草万成座では筑波澄子が「明月女造酒」を演じている。即ち天保水滸伝で有名な平手造酒が斬死後、妹浪路が江戸から来て復讐を誓う。翌年旅から戻つた繁

藏は、造酒の墓前で助五郎の身内に討たれる。その寺で病を養つていた浪路は、繁藏の子分達と共に助五郎を討つて復讐を遂げる。然し乱闘の内に血を啗いた浪路は、病篤いを知り今は是迄と、刀を逆手に取直し左の下腹に突込み苦しみつづり、と引廻し、見事な立腹を切る。同時に幕となるのだが、此の澄子も着衣のまゝである。女体がタブーから解放された戦後も余り此の種の芝居は無い。

二十五年浅草座で「ストリップ忠臣蔵」が上演されている。此の時は判官切腹の場に於て男装のストリップが、スパンコールこそ付けているが臍の下迄袴をぬぎ下げ膝を突いた姿勢で左下腹に矢刀を突立て、右脇迄充分に引廻して前に俯伏している齒を固く結んで苦痛を堪えるさまはなか／＼の出来で、男髪が変態的煽情性を示し、スパンコールさえ無くばと思わせる。

二十六年には池袋アバンギャルド劇場で「エロ手本忠臣蔵」が上演され、同じく判官切腹の場で判官に扮した女優が白装束の双肌る臍の下迄脱ぎ棄て、三方の刀を執り左の掌で下腹を押撫で、力彌と問答の末切

先を腹に突立てている。そこで由良之助の出となり題名通りの艶芸劇となる。

此の芝居は二十七年にも女優によつて上演されたが、今度は袴の下に桃色の下着を着け、乳房をも露出して女らしさを匂わせた代り、切腹の場面が簡略になつていた。

是らストリップ的切腹場は、男装の女体という変態的要素によつて成功したと言える。然し先にも触れた現実の女腹切のマゾヒズム性を言うならば、隠すべき玉の肌を敢えて露わし、脂肪厚く豊満な腹部こそは最も女性的な器官を含む、非力な女性自身の手で切り裂く事によつて、マゾヒズムの極限を遂行したものと見られる。女性の腹部の神秘性が暴かれ、更には緻密な滑らかなで白い皮膚が傷つけられ、鮮血に染まつて行く時女性のマゾヒズムは最大の苦痛と同時に最大の効果を感じ得るはずである。それは同時に裏返してみれば、見聞する側の特に男性の最大のサディズムを満たすものである。

従つて演劇に於ても責め場や殺し場以上に、女の腹切場が求められて然るべきであらう。前者と後者とは根本的に違ふので

ある。女性の苦痛が女性自身の手によつて加えられることこそ、マゾヒズムの極致に違いないからである。従つて女形ではなく女体そのもの、男装ではなく女性自身を主題とする演劇に於て、血綿その他の助けにより写実的に行われるならば、その刺戟の強い陶酔的な演出は、他に比類を見ないであらう。

それは歌舞伎や新派では求め得ない。大衆的軽演劇、所謂女剣戟に期待する所大なる所以である。

(附記) 資料に就き援助を惜しまれなかつた黒部龍二氏に深く感謝すると共に、更に大成を期する為、資料蒐集に努力する事を念願としている。

~~~~~ (編集部より)

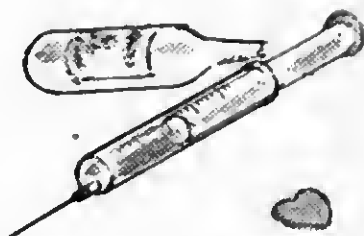
女性の切腹についての種々の文献、御意見等を多数頂いておりますので、引續いて誌上に発表いたします。尚、中康弘道氏の切腹の記事に就いての御意見や御批評等がありましたら何卒、編集部氣付にて御通信下さいますようお願い致します。

特集 男性MASO

ある女のドレイとなつた男の手記

実 験 室 に て

角 田 平 八



私の妻は、と書き出すと私の場合何となく
ぴんと来ませんので、いつも呼びなれている
私の御主人様はで始めたいと思います。

私の御主人様は今年数え年三十六才の、大柄な肉附のよいそれはく美しい御方です。商売はお医者さんです。小児科が専門ですが、内科全般に近辺では可成り名の売れた仲々の名先生です。私が始めて御主人様にお目にかゝつたのは三年前の今頃でした。私はその頃、しつこい風邪にとりつかれ、肺でも冒されたのではないかと心配になり、御主人様の診療室の扉を叩いたわけなのです。実のことを申しますと、私は生れつき気が弱く神経質で、学校は関西の或る官立の大学を他人よりは二年遅れましたが一応卒業しているのですけれど、どの会社に移めてもすぐに上役の人達とけんかをし永く続きませんでした。気の弱さと神経質とからくる意志薄弱のためであらうと思つています。その頃故郷の両親は既に他界しており、従つて兄妹のない私は、まあ、言わば天涯の孤児であつたのです。そして、その二、三カ月程前から、御主人様の医院の近所のある二階の一室に下宿していたのです。私は例によつて失業中で殆んど一文の金もなかつたので、医者に支払う金がなく

学校時代の友人の一人から初診料の四拾円と健康保険証を借りて、詐欺罪になることを知りつゝ、金はなし、医者にはかゝらねばならないという切羽つまつた気持で、びく／＼しながらも、女の医者なら例え見つかつても何とかゴマカシがきくだらうという気もあつてこの御主人様の医院を訪れたのです。

その夜はもう可成り寒く感じられる夜で、十時を少し過ぎた、待合室には電燈が一つともつていただけで、だれも合客はいませんでした。私はそつと胸をなでおろしました。もし顔の知つた合客が居れば、私が偽の健康保険証を使つてゐることがばれる心配が多いからです。私は

「夜分遅く伺いまして申訳ありませんが、先生いらつしやいますか？」

と出来るだけ気をおちつけながら云いました。すると

「はい」

と、豊かな声がして、マスクをかけた女の人が出て来ました。この女が御主人様だつたのです。大きな眼の、知的な、そしてどこことなく鋭さのこもつた、美しい顔でした。私は忽ち圧倒されてしまいました。罪を冒すのだという気遅れが手伝つて、私はまご／＼しま

した。そのまゝ、帰えりたくなりましたが、勇を鼓して来意をつけました。私より少し背の低い御主人様は、にこりともせず黙つてうなずき、診察室へ私をいざないました。診察室にはガスストーブが燃えており、むうつとする程暖かでした。私がくどくどと申し立てる自覚症状を黙つてきながら、御主人様は私の脈をとり、体温を計り、上半身を裸にさせて、胸をコツ／＼叩き、聴診器をあてました。そして最後に静かな声で

「御心配は要りません。注射をして置きましょう」

と言いました。そして注射器を消毒し始めました。私は腕を出して待つて居ました。御主人様は、アンプルから薬液を注射器にふくませると、

「その寝台にねて下さい。お尻にしましよろ。」

と、否応言わせない、やさしい静かな声だが命令的な語調をひびかせて言いました。私は一瞬ためらいましたが、医者が尻に注射するのは何も不思議なことではないと考え直して寝台にのり尻を出しました。御主人様は始めあちこち私の尻を押えていましたが、やがてブスリと針をたてました。御主人様は私にの

りかゝる様にして薬液を私の尻に差入れて行きました。

その夜私は寝床の中で、御主人様の美しい顔と、あの静かな二人きりの診察室での光景を思い浮べ、眠ることが出来ませんでした。それは清い、淡い情慾でした。次の日は土曜日で、前夜と全く同じ動作が診察室で繰り返された後、御主人様は

「明日は日曜日で休診ですが、私は二時なら都合がいゝから、まだ具合が悪い様でしたら注射にいらして下さい。」

と、注射器の後始末をしながら抑揚のない声で事務的に言いました。

私はこの二夜の何の変哲もない様な、接触で完全に御主人様のとりことなつてしまつたのです。美しさ、知性、そして私の趣向にピッタリと来る、得も言えない冷たさと取りつくしまのないもどかしさ。その上、その豊麗な真白い外衣につままれた肉体からあふれる様に発散してくる女、女の雰囲気。その時迄全く女を知らない純情な私が理想に描きつづけた女。よく映画のセリフに出てくる

「私は貴女のドレイです」

という言葉の実感が私の若々しい体内をかめぐりました。

一睡も出来なかつた夜を明した私は二時かつきりに待合室に入りました。私が訪いをつけると、診察室の方から御主人様の声がして「どうぞ」

と誘いました。私はいそ／＼と診察室へ通りましたが、そこはひやりとして誰もいません。すると、も一つ奥の部屋から「その隅のドアから、こちらへ来て下さい」

御主人様の声です。私はいわれるまゝに、そつとドアを開けました。そこは研究室だつたのです。随分大きい部屋で、一番奥には厚いビロードの様な生地のカートンが床まで下つて、更に奥行のあるらしいこの部屋を仕切つています。カーテンのこちら側には、大きな細長い試験台が置かれてあつて、その上には戸棚があつて、各棚に無数の薬瓶が横文字のレッテルをはつて並べてあります。戸棚の前の台の上には、ガスバーナー、フラスコ、ビーカー、試験管、小さな冷却機、その他雑多な試験用の小道具が雑然と置いてありました。台の向う側の端には、水道の口が出ており、流しの様になつていました。大学の理学科薬学の研究室に入つた様な感じです。御主人様は相変らず白い上衣をつけて、じつとバ

「ナール」の上のフラスコの中で沸騰する液体を見つめながら

「その椅子に腰かけて下さい」

と言いました。私は御主人様のすぐ側に一つしかない丸い台の様な椅子を少しこちらへ引っぱつて、ちよこんと腰をのせ

「何をなさっているのですか？」

と問いかけました。御主人様はそれには答えず

「あなたは、他人の保険証を使っていますね詐欺罪になりますよ。私を馬鹿にしているのね。許せませんわ」

くるとこちらをふりむくと、語尾に「ね」を重ねて大きな声で、その大きな眼で私をとり押えるようににらみつけながら決めつけて来たのです。私は、心臓がどきりと鳴り、氣力が抜けてへな／＼となつてしまいました御主人様はいきなり立ち上り、台の上の金属製の輪の様なものを握ると、つと私に近寄りその輪を私の首にガチャリとはめたのです。

私はまだ呆然としていました。御主人様はその椅子を私の方へよせ私の真前に坐ると、冷たい強い声で

「上衣をとりなさい。………シャツもぬぎなさい」

と言つたのです。私は保険証のことはもう責めないで、診察をしてくれるのかと思つたのです。全くおろかなことでした。御主人様は更に

「ズボンとパンツをおとりなさい」

とけわしい顔で言うのです。全くみだらな私にむさぼりつく様な氣配が感じられたのです。私はかつて、フアーブル昆虫記でサソリの雌が雄を交尾の後食い殺す話を讀んだ様に思います。その殺氣が私の潜在意識につたわつたのです。私は今ぬいだ、上衣とシャツをこわきにかゝえこむと、扉の方へかけよろうとしました。しかし私はザラツという音がしたかと思ふと床にひきたおされてしまいました。私の首にはめられた輪は鎖で、台の足にくくりつけてあつたのです。御主人様は私にかけより、私の髪の毛をむごく掴み、私を引きすえ、床の上に正座させました。私は夢中で、前から用意していた、保険証に関する言訳を申し述べました。しかし御主人様は私が言い終らぬ内に顔をしやくつて

「早く、ズボンとパンツをぬいでおしまい」

と命じたのです。如何な私でも普通の状態なら、この命令には従わなかつたでしょうけれど、さつきからのいきさつに度肝をぬかれ

ているでの従順にズボンとパンツをとつてまゐる裸になりました。御主人様は

「四つ這いになつて私の足の間にお入り」

といふました。笑わないで下さい。私はとたんに恐怖感が薄れて、快感が湧き上つて来たことを告白せねばなりません。ドレイ。

夢に画いたドレイです。御主人様は、その股の間にぐりこんだ私の背の上にどかりと腰をおとしました。私の背には、御主人様のお尻が直接触れています。私はこのまゝ死んで行つてもよいと思ひました。私の全身は御主人様のスカートと白い上衣にすっぽりと包まれていました。私の背をまたいでいる二つの太もゝがじわりと私の両横腹を締めつけて来ます。

「ワンとお言い」

私は、この言葉からくる屈辱感が快感となつて頭がじい／＼として来ました。私は思はず、

「ワン」

と言いました。御主人様は私の横腹を足先でちよつと蹴つて、

「這いなさい」

と命じました。私は嬉しくてたまりません這いました。

男性MASO

「ストップ！」

と云うと、御主人様はそのまゝ、私にまたがつて一時間程実験を続けていました。御主人様の足は時々いたずらつぽく私の横腹へ刺戟を与えるのです。

始めの内こそ、私は無上の快感のみを味わいましたが、終りには手と足がだるくなり、膝頭が硬い床の上に堪えられなくなり、亦背骨が御主人様の重みに折れ曲つてしまうのではないかと思うばかりに痛み出しました。けれどこの苦痛は私の性情に共鳴して、深い快感に昇華してゆくのでした。私は御主人様の大きなお尻の下から甘え声で、

「苦しいようー、もうお許しになつて下さい」

と何度か言いました。しかし、全然とり合つて呉れません。それでも、やつと実験がすむと、

「何よ！我慢のない！、まだく訓練しなきゃだめね」

と、低い鋭い声で言つて私から離れたましたが、その白い上衣の裾が私の膝に敷かれて汚れているのを知ると、

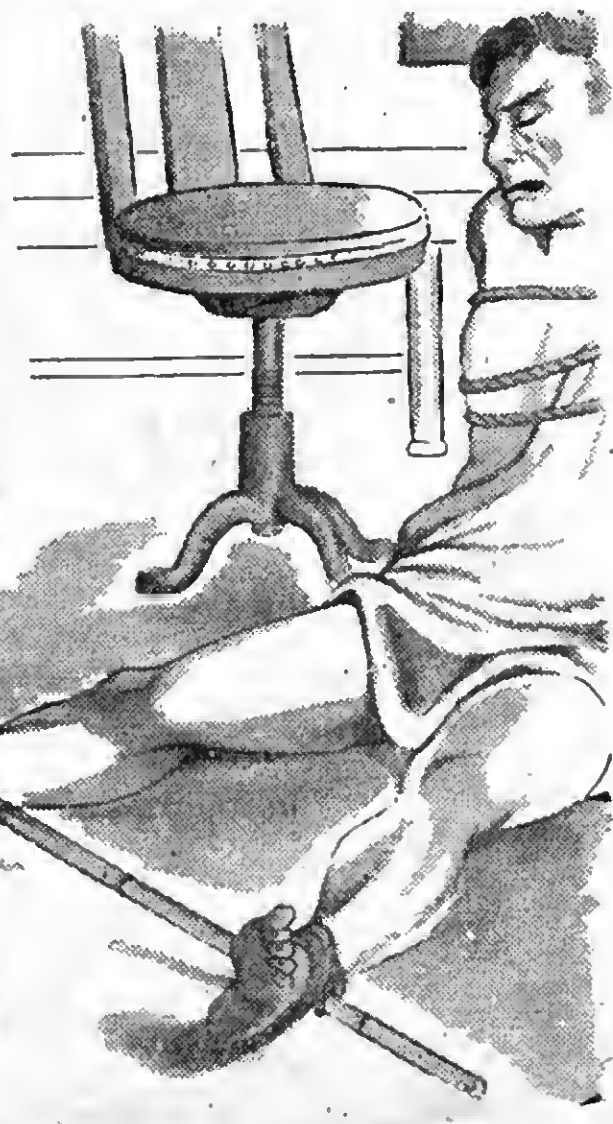
「まあ、けがらわしい。こうしてあ

げる」

と言うなり、私を後手にしぼり上げ台の足の角を私の背に当たつて、がんじがらめに私の上半身を台の足にしぼりつけました。私は少し抵抗しましたが、御主人様のプチ／＼とした手と足が私を荒つぽく扱つて行くのが、耐えられない喜びなのです。私は結局、御主人様の為すがまゝになつたのでした。御主人様は更に、細い鎖で私を一層強く台の足に巻きつけました。台の足の角が私の背に喰い込みます。そして、私の床へ投げ出された両足のつけ根の所へ、リンゲルの注射の装置を持つて来て、痛がる私をしり目に太い針を一本ずつつゝ立てました。吊り下げられた瓶から注射液が重力でじり／＼と私のもゝの肉に流れ入んで行きます。私は始めてこゝで、

「御主人様！」

と呼び、泣き声で、この注射だけは許して下さいと哀願しました。私は体中に針を立てられた様な、そして、肉の中から起つて



来る鈍重な痛みにくうー、うーと唸りながら許

しを乞い続けました。体を動かすと針が筋肉の中で折れるかも知れないし、亦余計に深くさゝつて行くので、体をじつとさせたまゝ

「かんにんして！、かんにんして！、これだけは許して！、痛い！、痛い！」

と泣き／＼叫びました。しかし御主人様は冷たいが、ちよつと上気した顔で私を平然と見おろしておいて、ガスバーナーでコーヒを湧しました。甘い香りが部屋中にたゞよいます。ほこ／＼と湯気の出るカップをそのやゝ

大きい口唇に近付け、うまそうにすゝりながら椅子に腰かけ、足を大胆に組み、上側の足をびよこ／＼と振つて、私の顎を爪先で軽く蹴りながら、

「こんな事で悲鳴をあげてどうするの。ブドー糖とビタミンの注射よ。栄養になるのよ。病人なら黙つて我慢しているわ！、お前さん本当は嬉しいんだろ？嬉しい泣きなね。今に本当に泣かして上げるよ。お前はこれから、こうして私のなくさみものになるのよ」

御主人様はコーヒを飲み終ると、

「さあ、もう少し苦しんで貰いましょう」と言つて、

「ちーちゃん！」

と大きい声でよびました。ちーちゃんと呼ばれた、十七、八の、余り美しい顔ではないがいたずらしい眼をした、女の子が、私が入つて来たと同じ戸を開いて、大またに私達の側へやつて来ました。この光景に別段驚いた風もない様でした。ちらりと横目で私を蔑すむ様に見ておいて、

「先生、何の御用ですか？」

と、分つていますが念の爲にと云つた調子できゝました。私は何が始まるのかと怖れと不安にとらわれました。

「まあ、コーヒでもお飲み」

御主人様と御嬢様——ちーちゃんは、看護婦の見習いで、私に御嬢様と呼ばせます——とは椅子に腰かけて、コーヒをすゝりながら楽しそうに私を眺めました。私は苦痛と恥しさに身をもだえました。しかし同時に世間で一般にマゾと呼ばれている感覚が私の別の神経をいらだたしく、くすぐるのでした。私はこの交錯した氣持を、

「余りじろ／＼と見ないで下さい。この注射だけは許して下さい。外のことなら、どんなことでも、あなたのなされる通りになりますから。」

という言葉に表わして、輪をはめられた。

首を拝む様に垂れ乍ら、頼みました。と、御主人様は顔を峻しくして、

「うるさいわ、黙つておいで！もう一本針をたてゝ欲しいの？、お前は焼いて喰おうが煮て喰おうが私の勝手よ！」

と言います。私は恐しくなつて黙つて苦しさ、恥しさに耐えました。やがて、注射液がなくなつてしまふと、

「じゃあ許して下さい。そのかわり、他のことは私の言う通り、する通りになるのね？」

「はい御主人様！」

「お前は、余程の助平ね。もつとも大抵の男なら、私の様な女にくらゝもて遊ばれ、苦しめられてもいゝでしようけれど。ほゝゝゝ。お望み通り、もつと／＼苦しめてやるよ。私は亦それが唯一の楽しみだもの。昔から、高貴な、人生の最高の悦びを求めた婦人達が、到達した遊びは、結局、これなのよ、私の桃源境で私の伽をするお前も果報者の一人よ」

と、御主人様は云つて、御嬢様に命じ、私を台の足から放し、今度は、私の手と、足とを後へまわして背の上で可成り太い紐でくゝりあげ、その結び目を天井の滑車から下つているロープにとりつけ、滑車を廻わして、台上一尺位の処へ私をぶらさげたのでした。腕と腰の関節がはずれて、筋肉にめり込む様な痛さです。私は、

「ひー、ひー、」

と、もがきました。しかし私は唯振子の様にゆれ、苦痛がいや増すだけで、御主人様と御嬢様を嬉しがらすに過ぎませんでした。御二人は、私の台の上にぶら／＼している顔の下に大きな洗面器を置き、水を一杯にはりました。私は輪がなおもはめられた儘の首を力一杯上げて辛じてその水を避けました。それ

でも顎の先が少し水に浸つています。だからもし少しでも首の力をゆるめると、私の顔は全くその水の中に沈んでしまうのです。始め

の十分程の間は、首に全身の力を集中して顔を上げていましたが、——勿論、御二人は何もせずに見ている訳でなく、いやという程ムチで体をしばいたり、面日半分に、私の頭を抑えて、顔を水へ浸したりしました。——やがて、私は力儘き、間断なく顔を水の中に沈め、呼吸が苦しくなると、亦顔を上げて、息をするといった具合に、張子の虎の頭のような運動を続けました。御二人は私のこの必死に生存のための努力をつづける見苦しい様に笑

【読者通信】（投稿歓迎）

貴誌昨年九月号より本年四月号迄拝見し大層興味深く今迄長年教職にたずさわつていた者として大なるリクリエイション的価値を見出しました。折柄微恙なるまゝ病床にて具さに拝読、個々の作品について改めて申し上げるとして編集全般に亘つて愚見を述べさせて頂きたいと思ひます。

先ず貴誌の内容については大胆にして率直なる表現には感伏させ

いこけていました。私の、「死んでしまふ！、死んでしまふ！、許してえ！」

という訴えは、すぐに水の中に、ぶく／＼と消えて行くのです。私はこの僅か洗面器に一杯の水に溺死しそうになり、もう、何もかも忘れてひたすらに救いを求めました。私が飲んだり、はね飛ばしたりして水が少しでも減ると、直ぐに補給するのです。

やがてマツチを擦る音がして、ガスバーナが点火され、熱さが私の肉体の一部に伝つて来ます。

「見て御覧！、いゝ恰好よ。ちよつと一服し

ましようよ。ちーちゃん、そのウイスキーをとつて」

御二人は、私の全身汗みどろの、この世のものとは思われない苦しみとかがきをよそにウイスキーの杯を合わし始めたのです。

こうして、この私の人生の転機となつた、一日が突然、思いもかけない経験と共に私を訪れたのでした。一応私は御主人様と結婚したことになるつており届けは役場に出ている筈です。そして私達の結婚生活が、想像を絶する愉快と苦痛、歓喜と屈辱の中に続けられているのです。その生活の一端の紹介は次の機会にゆづらせて置くことにします。

られました。特に此の種雑誌にあり勝ちの軽薄さの見受けられないのは好感が持てました。然し貴誌の主体とすべきは矢張り、女体を縛る、という線であつて、この程度であればアブノーマルという程ではなく殆んどすべての人間には存在するものであつて極めて愉快に拝見出来るのですが、男子同性愛とかフェチズムの糞尿に関するものは等そつた趣向の人は余り多くないにも拘らず敢て貴誌に掲載していられるのは納得しか

ねる所で男M女Sのものも共に敬遠して頂きたいものです。これは貴誌の品位から云つても当然そうあるべきで男色の記事なんかは問題外ではないでしょうか、大衆の支持を離れては雑誌の存在価値が失われるのですから、男性が女体を縛る、といった貴誌の持味を活かして絶対的に多い読者層の吸収に務むべきでしょう。或は私の独り相撲の意見であるかも知れませんが日本唯一の貴重なる雑誌が末長く存続することを願した余

り失礼をも願ひみず申し上げました（静岡 磐田生）

いろいろと御意見有難うございました。従来も読者諸氏の御意向は十分尊重して参りましたが、特別会員申込書によつても多数の方々の御希望がよく判りましたのでその実現に努力致します。但し一つのものに固定してしまふという事は如何かと思ひますので出来るだけ広範囲の方に満足して頂く為或る程度の御辛抱を願ひます。

（M 生）

雌獣の手記



(一) 別れの曲

あと何分したら豹兵は帰つて来るでしょう。その時私の手に持っているコルトが火を吐きます。そして私も死ぬつもりです。それ迄の間に啓様に最後のお便りを書こうと思います。先程啓様にお逢いしてから、狂気のように帰ると、すぐ、シヨパンの「別れの曲」を聴いて居ります。今はピアノも無く、レコードですけれど、この曲は身に染みます。昨年お別れしてから、幾度とかこの曲を聴き乍ら死を想いました。けれ共その機会と勇氣が無かつたのです。けれど今は違います。神様の様な啓様と獣の様な豹兵が今日程分離して見えな日は無かつたのです。今程豹兵が憎い時は有りませんでした。今

啓 見 近

私はM市の土木課に勤務する者である。曾て愛しあつていた某令嬢が何故か私を嫌つて富豪で二十才も年長の某氏と結婚したロマンスは地方紙を飾り、私に深い憤りを与えた事だつたが、一年後、某所でその令嬢と再会し私が過を犯そうとした時、彼女は自ら生命を断つた。それは富豪との心中の形式であつた故事業不振の結果と見られたが、遂に真相は分らずに終つた。私はその後、私宛の遺書を受取り、久しく篋底に秘めてあつたのだが、本誌を読むに至つて、思い切つて公表することにした。関係人の中には生存の者もあり、今更それを追訴するのも本人の意に反すると思ひ、総て仮名を用いた。尚、原文は死の直前に書いたもので、誤字脱字文章の重複も多かつたので、真意を曲げぬ程度に整理し標題を附して、読者の便を図つた点は諒承して載きたい。

ならキツト死ねます。

丁度一年前私は最初の死を求めて居ました。その日雨上りの夕焼が美しく、木犀の花の香が強く漂つて居たと思ひます。啓様は私の結婚を申出られました、併し私は強くお断りしました。啓様は何か結婚出来ない理由でもあるなら聴かせて欲しい、とも申されしました。だが私は啓様の悪口ばかり言つて、その為にとりとうお帰りになつて了つたのです私は天にも昇る氣持でお受けするのが当然だつたのです。少く共父の死迄は啓様の奥様に成り幸福な生活に入れる日を夢見ていました。所がその一月前父の死の後、私は莫大な負債の中に生活してゐた事を知つたのです。もし啓様が私と結婚すれば私と共に一生掛つても払えない借金を背負わなければならなかつた

のです。大学を卒えて、土木課の少壮幹部として芽の出かかつていた啓様を大変な苦しみで落してしまふのです。私はその時程父を恨んだ事はありません。もしそれをお話すれば啓様は進んで結婚して下さるに違いありません。それが恐ろしかったので、わざと邪険にお断りしたのです。

美しい夕焼が私の幸福の最後の光の様に消え、秋の冷気が静かに襲つて参ります。私は指は自然に「別れの曲」を弾いていました。私の意の赴く儘に、強く、弱く、指が押えます。涙がキーに丸く落ち、透徹つた白魚の様と、啓様に愛くしまれた指が、その水玉を弾いて踊ります。

ピアノの上に立てた手鏡にうしろの柱の花瓶の真赤なダリヤが映っています。啓様が—この花と対象させた時貴方の美が競う様に映える—とおつしやつた花。壁に掛つた深い額に入つた私のバレエ姿それを啓様に見られた時の恥かしい、何だか私の総てを知られたという幸福感も忘れません。そして私の乳房が初めて啓様の広いお胸に抱かれた皮張りのソファ—、皆鏡に映っています。

それを見乍ら、私は「別れの曲」を弾きました。明日私の境遇は変わる。ピアノは競売、花は枯れ、絵は焼かれ、鏡の映像は消え、家は債鬼に、そして私はその債鬼の妻になるのです。彼は田島豹兵。父が可愛がつた書生上りの番頭だつた奴、父は大事に育てた白蟻に倒されたのです。

—そう、身売りするの、私は—

鏡の中の私が苦笑します。花が一ひら散り、曲は終わります。そして眼を閉じました。最後の私を取巻く光景、永久に忘れぬ様、閉じた儘部屋を出ます。今夜死のうと屋間から用意して置いたスローツゲ

—スを持ち、廊下に出ます。長い、磨かれた廊下に継母の部屋から光線が漏れ反射しています。かすれた強いて作つた笑声が継母と話しています。

「勿論あんたには一生決して不自由はかけん。万事この豹兵を信用して下さらんか。あんたには亡き山中龍介氏同様、恩義ちゆうもんがありますよつて。そのかわり笹子を頼みまつせ。」

すると継母の若作つた声が響きます。

「あんたもよう考えとんなさるわ、このお婆ちゃんに飽いたよつて二十になつたばかりの笹子をとお望みなさる。よろしま笹子の方は引受けます。その代り、私の方忘れん様に氣を付けて下され、ほゝゝ。」

不潔！

十年前私の母が亡くなると父は妾だつた女を入れて後妻にしました。それがこの継母です。父が病氣中、もう豹兵は番頭を止め、独立して居ましたが、継母と力を合せて財産と事業を次々に奪い、今の田島建設を創立すると共に逆に父に借金をさせたのです。その上父の病中を幸いこの二人は醜い関係を続け、最後に父を狂死させたのです。そして今度は借金を枷に私迄奪おうというのです。まるで獣です。

—一刻だつて我慢できないわ—

私は玄關の扉を軋ませぬ様静かに閉めて外へ出ました。光が継母の部屋の緑のカーテンを通して木立に消えています。これが最後の夜、美しかつた生活は光と共に消えるのです。

足早やに、然し要心して足音のする砂利を避けて木の根伝いに進みます。もし見付かつたら引戻され、昨日の様に、男の前で恨しい

責めを継母から受けるのです。

昨日どうしても結婚を承知しなかった私を継母は縄で括り、寝台の上におお向けて縛り私の顔を見乍ら言うのです。

「お前、親孝行で知らないか、この私を捨て、自分一人で生きたいのか。お前を今迄育て、来たのは私やぜ、又お前にこんな楽な生活させて呉れたのは誰や、豹兵さんやないか。それを振つてしもうてどうする気や、」

びしり、頬を打ちます、そして私のブラウスは胸から破れたのです、恨しい責、私は死を求めます。私の背丈程もないくせに人並外れて大きい艶のある赤ら顔の豹兵はその小粒の眼を輝かせて見入るのです。

「まゝ、もう分つてるのや、そないしたら言えんがな、な、笙子、何も俺、今迄の生活の事、恩がましく言つてるやないぜ、本当に俺笙子ちゃんが好きなんや、笙子が子供の頃から、今に金儲けて、笙子をお嫁に貰うて、仕合わせに暮したい、とそればかりが希望で働いて来たのやぜ、それ分つて呉れへんやろか。」

豹兵の太鼓腹のチョツキのポケットから金時計がだらしなく下りブラ／＼揺れています。彼はお金で言うこと聞かない者は無いと思つて居るのです。上向いた低い鼻の下からチョビ髭が漢汁の様に伸び、ぶ厚い唇から涎さえ垂れているのです。嫌な四十男、私はぞつと悪寒が走りました。こんなに嫌がつている私を継母は生活のため、豹兵は妻に欲しいと言つて二人で責めるのです。啓様にさえ拒んだ肌を開け、見詰めるのです。私は一時逃れにうんと頷くより他仕方無かつたのです。すると豹兵は掌を返した様に相好を崩して、

「そうか、笙子分つて呉れたか。恨しかつたやろ、痛かつたやろ、母さんも酷い事するなあ、見よ、こんなに肌が赤うなつて。」

そして男のくせに、ぶよ／＼太つた薙みみたいな指で、縄の跡を撫で、唇を付けて吸うのです。

私はこの男と結婚させられるのです。今日昼間、何度啓様に打明け様と思つたか知れませんが、けれども話ししたら、啓様は私と結婚すると言われるに違いありません。そうなつたら前途のある啓様は借金と、豹兵の執拗な攻撃からすぐ不幸になつて了います。私は打明けずに、嬉しい涙を隠して殊更意地悪く啓様との結婚をお断りしたのです。そのかわり、豹兵とも結婚しません。その前に自殺する覚悟を決めていたのです。自殺する場所も啓様に御迷惑の掛らぬ様又醜い死体を啓様に見られぬ様、M海岸と決めています。あそこは海流の関係で入水した者の死体は決して上がらぬと聞いていました。門燈の死角に隠れてそつと外を伺うと、小型自動車が一台中止つて居ます。豹兵が乗つて来た車です。自分が運転するので、運転手は居ません。私は安心して小走りに自動車の横を過ぎ、街の方へ向きました。

その時自動車の中から突然けた／＼ましく犬が吠えました、豹兵は大きな土佐犬を飼つて居り、盗難予防に、自動車に残して置く事を私は忘れて居たのです。犬の声は豹兵に聞えたに相違ありません。私は重大な失敗をしました。が、こうなつては逃げるより他に方法がないのです。街へ一軒程の街道を一目散に走り続けました。父が街中の混雑を嫌つて山裾の閑静な土地に家を建てたのが、今の私には不運となつて返つて来たのです。街へ入りさえすれば海岸行の電車もすぐですし、身を隠す場所も多いのです。私や家の恥を晒す気

なら警察にだつて保護を求められます。要は街へ出る事なのです。

後で自動車の爆音が響きます。ライトが二つ輝きました。街道は一本道なのです。この儘進めばすぐ追い着かれます。私は立木の間から横道へそれ山の方へ逃げました。だが月夜の田圃道でした。稲が茂り下半身は見えないにしろ、上半身は街道から見通しです。山裾の木立がすぐ眼の前に青黒く光つています。その中へ入ればまず安心なのです。けれど私の喉は渇き、息が苦しく胸が痛くなりました。スリッケースも何処かへ落とし、靴もありません。そんな事に関わる暇もなく私は走り続けます。が、駄目、豹兵の荒々しい息が私を押し伏せる様に追い縋つて来ました。

私は山裾の手前で豹兵に捉まつたのです。二度彼の両頬を打つたのですが、怯む様な男ではないのです。私はあつと言う間に、ハンケチで猿轡を嵌められ、後ろ手に振上げられ、細引で縛られました。毛糸のセーターの上からでしたが、手首に深く喰い込んで思わず息を詰めました。

「笹子、何故逃げるんや。そんなに嫌やつたら、こうしてやるぜ」

豹兵は私の胸を片手で抱き上げると、強い力で締めるのです。胸が折れそうで、乳房がひどく痛みました。

——痛いわ、放して——

と言おうとするのですが、猿轡がありますので、

「う、う」

と呻くだけなのです。豹兵は、

「俺、笹子が可愛いくて、ならんのじゃよ」

そう言う私の額、頬に唇を押し付け、ザラ／＼痛い聲を擦り附

けるのです。その上、猿轡を外して、私の唇に接吻さえし様とするのです。ふんとヤニの様な臭いがします。私は思い切りそのブヨ／＼した不潔な唇を噛んでやつたのです。

「わ、痛ッ、何するのや、よし抵抗するのやな」

怒った豹兵は私を草の上に投げつけて押し伏せました。私は本能的に非常な危機にあるのを直感しました。けれ共、後手に縛られているので、足をばた／＼するより外仕方がないのです。

——啓様許して——

私は恐怖におの／＼きながらと心の中で叫びました。

然し幸に豹兵は諦めた様子です。

「よし、そんなに抵抗するのやつたら、俺は無理にとは言やせんぞそのかわりきつと、笹子にうんと言わしてやるさかい」

そう言うのと、私の足も、ぐる／＼縛つて丸太の様にしてから、横抱きに片手で靴やスリッケースを拾い乍ら、自動車へと帰って行きました。小柄のくせに強い力なのです。

自動車は座席に私を転がした儘、海岸通りを東へ走ります。何処へ連れて行かれるのか分りません。今の内に死に度いのです。が猿轡は口に喰い込んでいます。舌を噛み切る事も出来ません。私は死ねないのです。

(二) 地 獄 図

私が豹兵に誘拐されて来てから幾日かの後、四隅に柱のある柔かいベットの上で眼を覚めました。牀は綿の様に疲れ切つて居りました。毛布の中で裸なのです。豹兵の臭いが牀の隅々迄流れて居ります。もう啓様にお逢い出来ない牀になつてしまったのです。ベッ

トの横には、燃えさしの蠟燭、点々と落ちた蠟、鳥の羽根、蜂蜜の瓶、鞭、その上切れた細引迄散乱しています。私は駄目でした。とう／＼豹兵の自由になつてしまつたのです。そして死なずに生きて居ます。私の気持、虚無と言うのでしうか。何も考え度くないのです。心も身も何か大きな変化を続けている様です。

戸外では多分朝日が輝き初めたのでしう。この地下の密室にも何処からか淡い光が、四囲の壁画を夢の絵の様に浮び上らせています。十帖程の洋室です。この壁一面に、女が縛られ、折檻を受けている図が細かく画かれてあります。それは浮世総風の纖細な女が肌も露わに樹に吊られ、立木に縛られ、或は雪の中に座らされて、雲助や獄卒達から、鞭打たれ、炎に炙られている画なのです。天井には一面に十字軍遠征時代の絵が描かれてあります。兵士達は沙漠の行進の後、異国の街を落して、鎧の儘、武器なき乙女達を蹂躪しています。然し不思議なことに乙女達の顔は恐怖の中に或期待の色が現われているのです。十字の旗は彼等の一刻の褥となつて居ます。まるで地獄図です。その他この部屋のベット、戸棚、絨毯等は中世風の豪華なものです。その何処にも、椅子の背迄、春宮図が細かく彫刻されてあります。

でも私には恐怖でした。誘拐された夜、私は自動車から下されると海岸の別荘風の門と入り明るい洋室を過ぎて、この密室に連込まれました。そして椅子に手足を縛り附けると、この絵を見せられたのです。私は最初ぞつとしました。

「いや！」

私は首を振つて、眼を閉じます。

「そうか、じゃ、見える様にしてやるがな」

豹兵は棚の上の小瓶を取ると、その一滴を私の眼にたらすのです。何という薬なのでしう。眼に入ると涙が流れ、閉じると痛く、何時も開いて居なければたまらないのです。私の眼に嫌でも四囲の地獄図が焼き付けられるのです。その上、抽出から極彩色の密画を出して、一枚一枚私の顔色を読み乍らゆつくり見せるのです。私の神経は次第に麻痺して参ります。初めの恐怖と不潔感が柔らいで来るのです。

「な、こんなのは、当り前の事やぜ、此処には笹子と俺との他誰も居やせん、何んな事しても良いのや、声出しても外へ聞えんのやぜ」

恐ろしい言葉、豹兵は何を仕様と言うのでしう。

——止めて、止めて——

私は声の出ない口を動かしました。

「笹子、どうや、結婚承知せんかい、一生大事にするぜ、な、母さんに孝行やないか。今時若い娘が一人家出したつて乞食になるのが落ちや、笹子が此処でうんと領きさいすりや万事うまく行くやないか……」

——嫌、嫌です——

私は皆迄言わせず、首を左右に激しく振りました。それが一層豹兵の気持を掻立てた様です。彼は立上ると、卓上の酒をじかに瓶飲みにして、酒臭い息を吹き乍ら

「笹子！我儘も良い加減にせんと、お前の綺麗な顔も身も疵物になるぜ、此方を見よ、これはな、お前の様な強情な娘をうんと言わしているのや」

私の顔は脂切つた豹兵の手で無理に振廻され壁の折檻図に向けさ

せられるのです。

「道具もあるのやぜ」

豹兵は戸棚から鞭、蠟燭等を一つづつ私の眼に醫しては投出し
ます。

私は生き乍ら絵の娘達の様な地獄の責苦を受けるでしょう。良い
わ、私は啓様を思っています。啓様は神様です。きつとその苦しみ
に勝たせて呉れます。私はそう決心したのです。心さえ強く持てば
肉体の苦痛位何でしょう。

「ふん、覚悟したか、何処迄、お前の躰が持つか競争やぜ、俺は天
井の絵の様に無理強いはいしないぜ、きつと笹子にうんと領かせてや
のや」

豹兵はそう言うをやつと手を放し、部屋の隅の大きな姿見の方へ
私を椅子ごと運ぶのです。

「な、良く見よ、絵と同じになつてゐるやないか」

本当にそうなのです。私の姿、ぐる／＼椅子に縛られ、髪は乱れ
て頬に流れ、眼は血走つて居ます。上半身は裸同様です。スカート
は身を纏う用をなして居ません。一人の哀れな女が無抵抗の儘、完
全に自由を奪われているのです。

「もつと酷くしてやるかな」

豹兵はそう言いつゝ私のセータを安全剃刀の刃で破つて行くので
す。桃色のシミーズに隠された乳房がこぼれる様に現われます。ス
カートは横のスモックからビリ／＼引破かれ、靴下は外されました
まるで絵の中の女が動いている様に鏡に映ります。

シユツ、シユツ、

絹の破れる音が、聞えます。もう駄目！、そう思うと急に力が抜

け、眼の前が真暗になつて了つたのです。

気が付くと同じ部屋のベットのの上に寝かされて居ました。眼の前
に酒を飲んで真赤な豹兵が居ます。驚いて逃げ様としました。駄目
です。手足はベットの四隅の柱に縛られています。丁度礫にあつた
様、寝返りも出来ません。毛布が一枚掛けてありますが、全裸にさ
れて居ました。

「ふふ、未だや、俺は無理強いはせんと言つたやないか、笹子がう
んと言うまで待つさかい、ふふ……」

見透かす様に豹兵は言います。悪魔！私が堪えられなくなる迄責
める心算なのです。

天井の逃げ狂つてゐる乙女達の絵が見えます。彼女達は飢えた兵
士達に無慙にも衣服を剥ぎ取られ、その場で犯されているのです。
昔戦争に敗けると、乙女達はあゝいう風に男の餌食になつたのでし
ようか。私もその中の乙女の一人であるかの様な錯覚さえ起し初め
ました。豹兵は兵士なのです。

彼は身動きの出来ぬ私の躰に何か塗り初めます。ねつとりした液
体を瓶から手に移して全身に塗るのです。ぶんと甘い香がします。
蜂蜜でもあるのでしょうか。塗り終ると、全身を磨擦します。擦
ばい感じが次第に耐えられなくなつて、沸き上ります。私は齒を喰
い縛つて呻きます。

「う、う、よして、よして」

彼は大きな鳥の羽を出してきました。それで私を擦ぐろうといふ
のです。

私が身を振じる度にベットの柱が細引に引かれて軌みます。

——未だ何かあるわ——

私はそう思います。肉体は何かもつと最後のものを待っているのでしょうか。恐ろしい事!

豹兵はキツトそれを知つて居ます。彼は電燈を消すと、蠟燭に火を点けました。ポトリと肌の上に一滴蠟を垂らします。一瞬身震いする疼痛!それが全身に伝わり、又その部分に返るのです。ポトリポトリ、蠟は腹、太股、足裏、そして又乳房へ落ちます。

「むッ、むッ」

ビシリッ巾の広い皮鞭が胸に、腹に当たります。蜜を塗つてあるので打たれた瞬間僅かに滑り、肌に傷が附かないのです。焼く様な苦痛が伝わるだけです。それが蠟の何倍かの疼痛となつて逆に襲つて来るのです。

ビシリッ、ビシリッ。

「いゝか、頷くのやぞ、未だか」

嗚呼、私は雌の動物です、もうこれ以上の責めには気が狂いそうとうく

「うん」

と頷いて了つたのです。

「笹子、よく承知した。可愛い、可愛い」

と歎び乍ら猿轡を外し、手足の細引を解き、跡を撫で擦るのです。それから幾日経つたか分りません。この密室には風も夜もないのです。自分の体が自分の物でない程疲れています。唯はつきり判る事は、もう永久に啓様にお逢い出来ぬ体になつてしまつたという事です。でも味は豹兵の物となつても、私の心は啓様のもの、何時も啓様の事ばかり考えて行く積りです。

(三) 獣 の 宿

密室で私が屈伏してから一月間は其処で暮しました。その間に諦め切つた私を豹兵は意の儘に仕込んだのです。風も陽の目を見ない地下室で、蠟燭の光を頼りに豹兵は私を裸にし、柱に縛り蜂蜜を付けては私を責め苛むのです。天井に滑車を取付け、私の両手を一束を縛り釣上げておいて鞭で打つのも屢々です。初めの間はその様にされる、自分が浅ましく、死んだ方が良いと何度思つたか知れません。けれど、来る日もく壁一面に画かれた絵に囲まれ豹兵と二人だけの生活をしている内に、私はとうとう豹兵の行為を待つ程の変化をしたのです。

此の間も豹兵は夜一睡もしないで風間は仕事に行くのです。私は風間精魂尽きて寝るのですけれど豹兵は何うするのでしょうか。自動車の中でも寝るのでしょうか。私はこうした彼の精力の強さに畏伏し、彼に関心を持つたのかも知れません。夜になると豹兵が持つて帰る精のつく油っこい食物を待つ一方、彼の姿を今か今かと待つのです。私は所詮弱い女でした。

私はこうして豹兵が望む「檻に飼われた獣」になつて行つたのです。ですが啓様の事も一日も忘れた日は有りません。私は肉体は豹兵を待ち、心は啓様を想う、分離した恐ろしい女に成つたのです。

一月の後、豹兵は思い通りの女に仕上げたと思つたのでしよう。私を密室からやつと連出しました。この建物は元は某財閥の追放者の物であつたのを貸金の担保に取上げたそうで、広くはないのですが、しつかりした蕭酒な別荘で、裏庭は海岸になつて居ます。久し振りに見る太陽!、潮の香、私は生きている喜びを皮肉にもそ

の時程深く味つた時は有りません。

私は生き度いと思ひました。それは肉体の欲望と精神の欲望とを分離出来た時初めて知るのではないのでしょうか。私には豹兵と啓様が一緒に居ます。一方は悪魔で一方は神様です。人間それ自身の中に二つが棲むのです。それを認めれば生きられます。私は爽快でした。海岸の砂も太陽も波も、皆私を受け入れて呉れる様に思ひました。一見不思議な調和がその時は確かに成立して居たのです。

私の身に纏う物は襦袢の下着とビロードの襟の線の露わな夜会服と部屋靴とだけです。ズロースも、パンティも靴下も与えられないのです。私は朝豹兵を送ると風呂し、日光浴をし、風呂に入り、化粧しては豹兵を待つのです。一步外へ出ればベスという何時か自動車の中に居た土佐犬が飛び掛つて来ます。外出しない様に番をして、いるのです。料理は殆ど継母が仕度します。

総べて豹兵の意志通りの生活ですが唯一つ頑張つて通した事があります。それは電蓄でした。番頭上りの彼に音楽の趣味等無いのを知つていながら要求したのです。私の要求が激しかったので、遂に買つて呉れました。それは海岸向きの明るい部屋に置かれ、名曲を掛けるのです。その部屋は啓様との部屋です。私が弾き、啓様が聞いて下さつた曲の数々は揃つて居ます。私はピアノは欲しくないのです。もし弾いたとて誰が聞いて呉れるでしょう。唯曾つての私と啓様との光景を曲と共に回想出来れば良いのです。そして最後に必ず「別れの曲」を掛けます。

私は風呂間啓様と共に過し、夜は豹兵と悲鳴を上げる程歡喜します私は幸福でした。

心に調和を保つていましたので、躰迄も健全でした。午後の太陽

が窓から入る湯殿で、私は自分の躰にうつとりする事があります。乳房は大きく張り、腰は丸く、胴は細く、筋肉を残して贅肉は落ちました。娘時代の青白さは消えて、情欲を掻立てられるとバラ色に染り汗が薄つすら浮ぶ肌に成つたのです。

そして結婚しました。盛大な式でした。十日間を事業関係の団体から招待され続けたのです。もし天地がこの瞬間に固定するのでしたら、私はどんなにか嬉しかったでしょう。

豹兵は惨酷でしたが、一度被虐の味を知つた私は不幸にももう忘れられないのです。これは人間の最も不幸な事です。私は仕方なくこの方法を許さなくては堪えられないのです。

此処迄来ると完全にエキセントリックな生活でした。もう人間ではありません。欲情だけの獣です。私はそうなれば成程、音楽を聴き度くなります。聴いている間だけでも、私はこの欲望を忘れた清純な乙女に返れるのです。啓様の神の様な御姿もその中で浮べる事が出来ます。風呂間の一刻がせめて私の天国でした。

その頃から豹兵の事業の方も思ひにくくなつた様です。私に迄愚痴を零します。併し豹兵の財力は私の父の財産を奪つたものです。又私を妻にする前に豹兵は、私と結婚する為めに懸命に働いたと言いました。私を得て了つた今では目標を失つたのでしょうか、そのために事業不振だつたら良い気味です。彼に同情し、彼を励ましてやる必要がどこにありました。むしろ復讐し度い程です。私と豹兵には精神的な結び付きは無いのです。

「あゝそうなの」

一度私は答えるだけです。そんな私の態度を見ると豹兵は怒つて酷い責めを加えます。だが、今ではそれさえ、私の満足に協力する

だけのものです。豹兵は明らかに苛立つて来ました。

この家へ来てから十ヶ月後、私は初めて外出用の着物を与えられ自動車で運ばれて、或る待合の門を潜りました。表座敷では酒宴の最中でした。豹兵が招待した客です。中央や地方の役人達、業者仲間です。私は奥の離れに案内されると、豹兵が主客を導いて来るのです。専門の接客婦が居るでしように、事業不振で雇えないとか、私が美貌だから客が歓ぶとか豹兵は言いますが、それとは別な豹兵の思惑なのです。

豹兵は隣の部屋で見ているのです。

事業は益々不振でもう破産一步手前迄来ています。彼は溺れる者が藁を掴む様に、誰彼の区別なく買収します。時々啓様の事も豹兵の口から訊きます。今は土木課でも重要な地位に就いて居られるとか。私は啓様が招待されて、一刻でも啓様の手で慰んで戴けたらと思いました。でも啓様が豹兵如き者の買収を受ける筈はないとも考えました。私は其の日が来るのが恐ろしかったのです。

が、とうとう来ました。今朝啓様を招待する話を豹兵から聞きました。

待合の絹の夜具の中で私は涙を流しました。このような事になるのだつたら、何故、結婚できなくても清純の躰を啓様に捧げなかつたのかと思うと後悔が寄せます。でもそんな事をしたらキツト結婚すると言われるに違いありません。借財の為にそれが言えませんでした。今は心では啓様の事のみ想っているにしろ、躰は豹兵に穢され果てゝ居るのです。こんな躰でとても啓様に逢えそうにありません。でも一生に一度でも良いから、啓様と一緒に居り度かつたのです。私は横を向いて、自由にして戴けたら、私と知らずに逢えたら

どんなに嬉しかつたでしょう。私は馬鹿だつたのです軽蔑されても良いからお逢いしたかつたのです。

襖が開きます。私の顔を見た啓様は、あつと叫ばれました。

「君、笹子さんだね？」

啓様の驚ろきの表情が見る見る歓びに輝きます。

「どうして、こんな？」

と言われました。私は両手で耳を覆いました。もうおつしやらないで、啓様の清純な眼の輝き、神様の様、

「許して、私のせいじゃないわ」

私は叫びました。涙がボロボロ零れます。この一年間泣いた時はないのです。矢張り駄目でした。私の穢れた躰を啓様にお見せできません。もう遅いのです。総ては一年前の別れの日に終つて居たのです。私はあの時死ねばもつと美しく死ねた筈です。私は豹兵が憎くてなりません。

私は夢中で部屋を飛び出し、長襦袢の儘自動車で帰つて来ました。今でも――

――笹子さん、笹子さん――

というお声が聞えます。総べて許し切つたお顔の色、それも忘れません。帰つて良かつたと思います。もし長く逢つていたら、私は啓様に引かれます。以前とは違つた意味で啓様は不幸になります。「別れの曲」何度も掛け直し乍ら書いて居ます。もう豹兵が帰つて来る頃です皆隣の部屋で見えていましたもの、私から訳を訊き、縛つて責める積りで帰つて来るでしように。扉を開けたら、コルトがあります。私も死にます。啓様の事最後迄言わぬ積りです。

馬鹿な女、私は、でも最後に神様に触れました。その肌を再び強

隣に穢されない間に死にます。

最後のお願ひ、啓様は立派な人、決して買収されちゃいけないわ
そして立派な奥様お貰いになつて下さい。お祈りしています。

自動車は止りました。

あと数分で此処に来ます。

もう書く事無いかしら、

継母と話しています。

扉の前、

撃ちました。豹兵の大きい胸へ血が沸きます。醜い事、苦しみ乍

◎ 次号予告 ◎

松井籟子女史を囲む

第二回読者座談会

去る三月十五日、箕田京二氏主催の下に松井籟子女史を囲んで特
に川端多余子嬢も出席五人の読者代表によつて活発な意見の交換が
行われました。席上松井籟子女史が川端嬢を縛るといふ一幕もあつ
てその速記録は必ずや皆様の御期待にびつたりする事と思います。
尙本誌では引續いて「女体の緊縛美に関する討論会」を左記要項に
従つて実施したいと思ひますので奮て御応募下さい。

女体の緊縛美に関する読者討論会

- 一、出席予定の人 喜多鈴子女史、川端多余子嬢
- 一、開催予定地 京都市
- 一、予定日 四月下旬か五月上旬
- 一、司会者 松井籟子女史か辻村隆氏
- 一、会費 一切不要

ら這つて来ます。

「しようこ、おれのめがみ」

笙子、俺の女神、と言つています。そうかしら、私をあれ程苦し
めて神かしら、そんな神も在るのかしら、

豹兵は私を神、そして私の神は啓様よ、一致しなかつたのです。

私達は。

不幸な夫婦でした。

とても綺麗、海がキラ／＼光つて、真赤な夕日、潮の香に木犀の
強い甘さが混つています。さようなら、私の神様 (終)

◎ 緊縛美の寫眞集 ◎ 分譲

- 一、出席資格者 本誌特別会員中より選定
- 一、出席希望の方は、女体の緊縛美に対する御意見を原稿用紙五
枚程度に御記入の上編集部、高月大三宛御送付下さい。詳細
決定次第御連絡致します。返信料は不要。

光沢面 焼付 五枚一組 (一集分) 二百円 (送共)

第六篇 (五十一集より六十集) 十集分
第七篇 (六十一集より七十集) 十集分
第八篇 (七十一集より八十集) 十集分

◎各組とも一集分は五枚一組です。第八篇の各組の姿態はKK通信
第八号に発表してあります

吊り三態特選集

キャビネ版

三枚一組 五百円

第一組、第二組、第三組 完成

十二枚組シリーズ

襲われる女

五百円 (送共)

吊
ら
れ
た
白
鳥

(破った日記帳より)

川 端 多 奈 子

陽が杉の梢に近く迄登つて、じり／＼と暑さが身体の中から燃え

上つてくるようです。私は彼の言葉に対して只黙つて考えている風をしました。承諾しようかしまいかというためらいの為ではありません。彼の問いに対して鸚鵡がえしにすぐ返事するのが面はゆかつたからなのです。相手の意図が十二分にわかつていながら私は如何にも汲々といった態度で、しかも言葉もさもとげ／＼しく

「変つたつて、どんなのですの？」と尋ねました。カメラを逆さにして三脚の中程を握つてぶら下げた

まゝ一步近ずいた彼は

「吊られた白鳥つていう題なんです。ねえ、痛かつたら合図して貰えばすぐ下しますよ、ちよつと吊り下げる真似をするだけですから心配いりません」

そう言つて私の肩にやさしく手をやる彼に私は尙もかたくなに黙つていました。心の中ではそんな真似だけじゃなしに、裸の身体をぎり／＼と縛つて逆さに吊り下げられてみたいと思ひながら、
「やはり駄目かなア、貴女だつたら承知してくれると思つて特に助手の方も二人頼んだんだけど……」

残念そうにあきらめ口調でそう言つた時、私は思わず

「私、やりますわ」

と答えていたのです。そして知らず知らずほんのり赤く頬を染めながら、それでいて何かほつとした氣持だつたのです。

部屋の中は板敷の仕事場のような処です。南側は崖でもあるらしく谷川の音がざあ／＼聞えています。大分長い間使わずにいて急に掃除したのか隅に積み重ねた脱穀機や綴摺機が埃にまみれています。

梯子、天秤棒等が持ち出されて

きました。私は隣の部屋へかくれて太股に喰い込んだゴム紐をゆるめました。梁の上に縄をかけるために梯子をかけているのか天井の近くでかたん／＼という音と縄のすれる音がしています。私は南側の窓から遙か下の木立に眼をやつてぼんやりと無想のひとときを過していました。そしてまた一度も呼んだ事のない彼の名前をそつとくちずさんでいました。

「さア、多奈子さん、来て下さいよ」彼の声です。私は慌てゝそのまゝ飛び出しました。

「なんだ、まだ用意してなかつたのか、仕方のないお嬢さんだ」
「でも、あたし、……」

こゝで一寸すねてみたくなつたのです。三人もの男の方が揃つていて余りにもおとなしいのでからかつてみたくなつたのか、或は怒らして酷い仕打ちをしてほしかったのか、甘えてみたかつたのか、その点は自分でもよくわかりませ

んでした。

「さあ、隣で準備をして此れを纏つてきて下さい」

私の手に大きなバスタオルが一枚渡されました。梁からはもう何本もの縄が長短さまざま垂れ下がっています。私は胸から膝迄バスタオルを巻いて縄の下に立ちました

「吊られた白鳥」という題で、貴女はその白鳥になるんですよ、それで最初に試験してみますから、若し耐えられないようだったら合図して下さい。フラッシュで撮りますから二三秒でいいのです」

私の足首は痛くないように先ず日本手拭を縦にさいたもので縛られました。そうしてその間へ麻のロープが通されて、二人の男の人に抱き上げられたのです。

「いけない、足の裏が汚れてる」
ノンストッキングでサンダルのまま田舎道を歩いてきたのですから仕方ありません。私の台の上へ腰かけさせると助手の一人の方が

バケツを持つて井戸へ走つてゆきました。私は足首を縛られたまま足の指から足の裏へかけて拭つて貰いました。おろしたてのタオルが忽ち真黒になつてゆきます。井戸水の冷たい感触！それにも増して足の裏のこそばい感触！早く終つてくれ、と願つて奥歯をかみしめて、うううとこらえる。

滑車がぎり／＼と鳴つて愈々逆さ吊りになる。両手を離されて宙に浮いた時、右足の踵に掛つた縄が痛くて合図して直して貰う。この程度だつたら何んともない、でも眼を開けて外を見る勇氣がなかつたのですと眼はつぶつていました。

この試験が終つて手は後手に胸から廻した縄で固く縛り上げられ口には猿轡をかまされた。今迄と違つて一本の棒のようにしやちこばつてしまつたので、抱え上げられる時に二の腕に廻つた縄がぎゅつと肌に喰い込んで手がじいーん

と痺れるような感じがする、縄が引かれて足先は天井の方へと次第に上つてゆく、二人の手が離されると完全に逆さ吊りになつてしまいました。かすかながら縄のねじれに沿つて廻るのがわかる。足首から脛、膝にかけて締めつけられるような感じ、二の腕や後手の手首にもぐつと締まる感じ、でも不思議に足首には何の感じもない、そして頭の中には何の考えることもないので。只逆さに吊られているという現実があるだけ。

ピカッと一閃、フラッシュの閃光が臉の奥にしたかと思うと、私の身体はふわツと持ち上げられて台の上に横たえられていました。この時になつて初めて足首に鈍い痛みがしました。そして、なんだ物足りない、もつと辛抱出来なくなる迄吊つておいてくれたらいい、のという気持ちが湧いてきました「どうだ、辛かつただろう。痛くないかい、少し休もう」

私の気持を知らない男の人達はやれ／＼といった風で盛んに煙草の煙を出し初めました。私はなんだつまらない、と思ひながらむつとり返事もせず、両足をぶらりぶらり交互に揺つていました。カメラの整備を終えた彼は井戸で冷したのだといつてサーダーを携帯用のプラスチックのコップに注いでくれました。泡がバスタオルの上に落ちて私の肌を伝つて板の間へ黒いシミをつけました。

うつむいた私の眼に縄目の喰いこんだ跡のはつきり見える足首が映りました。すぐ直るかしら、私は一寸不安になりました。右足の拇指で左足首の踝の上をこすつてみました。

「さあ、今度は足の外に手も縛つて吊ろう」

手首にも手拭が巻かれました。丁度ハンモックを張つたように私の両手と両足とは別々に吊り上げられてゆくのでした。(未完)

奇譚クラブ最近号 主要目次

○八月号責めと男色特大号○

○九月号特集錯倒の告白○

- 口絵 倒錯の告白圖集……………竹中英一朗
- 玲子習作二十題……………喜多 玲子
- 縛られた女の写真集……………美の 緊縛
- 狂い咲くカンナ……………羽村 京子
- 白い腋窩の幻想……………三富 浩生
- 僕という男……………中野安太郎
- 妖しい花びら……………寺尾 修治
- 弱者の醍醐味……………村井 健司
- 憂鬱症の転機……………園 守
- サディストの悲哀……………天野 一郎
- 足償いの悲願……………山本 貞輔
- 鎖夏怪漫語……………嵯峨あきら
- 変態心理を衝く……………波多野 新
- 記録係……………岡田 咲子
- 中国艶話 夜譚隨錄……………皆田 仁
- 邪恋の焰……………松井 籟子
- サト侯爵と殺生関白秀次……………高取 辰治
- 処女性神秘……………的場 通
- 洋パンを圍む座談会……………辻村 隆
- 加虐症の種々相……………仁比山 等
- 吉原の淫虐魔……………緑 猛比古
- 桜姫全伝 曙草紙……………山東 京伝

○十月号特集切支丹迫害史○

口絵 責め場面描繪集……………喜多玲子・構成

- 切支丹迫害史圖集……………五井野弘・構成
- 縛られた女写真集……………辻村隆・構成
- 切支丹迫害史……………漆島 迫平
- 氷賣めの断罪……………赤城 芳年
- 遊女花菱の受難……………花山 剣作
- 江戸の刺青模様……………潮 マリ
- マリヤ・マグダレナ……………桂 牧次郎
- 性慾の昇華……………赤坂 剛
- 或る医師の告白……………亀岡 恭二
- 大衆文学に現れた「女の賣場」……………高月 大三
- 愛と苦痛の交錯……………鳥上 源一
- 恋の烙印……………松井 籟子
- 少女の像……………栗村 田美
- 呻される夢……………波多野 新
- 男色の海……………井口 正憲
- あらたま村の奥にて……………二俣志津子
- アブニストの記へばきうり……………鬼山 絢策
- 夫婦愛と緊縛の考察……………辻村 隆
- サーニン……………戸森 暁
- 宿命に哭く……………浅田 正人
- 悪 女……………岡田 咲子
- 江戸時代の墮胎医……………福森 耕司
- 縛られた妻……………早川新一郎
- 遺 書……………小峰登美子
- 猿轡五題……………喜多 玲子

○十一月号宗教刑罰戦慄画譜

口絵 宗教刑罰戦慄圖集

- 風俗便所考 淫書開好記
- 緊縛の受難(縛られた女の写真)
- 悲恋の管刑……………松井 籟子
- 局部装飾としての文身……………高野 雅和
- 統・へばきうり……………鬼山 絢策
- 羞恥と潮紅……………波多野 新
- ストリップ変態記……………朝見 速夫
- 現代陰間茶屋談義……………染田 玄
- 好き者放談……………鷺見 東一
- 統・変態艶書……………岡田 咲子
- 誌上雜感……………小田 利美
- 少年矯正院体験記……………獄 牧一
- 桃色の地獄……………藤安 節子
- 反戦論者の弁……………三富 浩生
- 夢性の美少年……………三村 幾夫
- 墮胎と出産風俗……………阿久津 猛
- 珍版・南国隨筆……………井村 幸男
- 聲恥心の発達……………赤坂 剛
- 都会の異態交響楽……………中河津規男
- 江戸寄習 縁切寺……………畑村 連治
- 悪魔と口紅……………桂 牧次郎
- 発狂文学者の研究……………杉山 清詩
- ジャンベルネル夫人の狂楽シャルロット
- 男色魔の萌……………井口 正憲
- 性愛描写の文学……………紀市 郁栄
- 切支丹迫害史……………漆島 迫平

○十二月号惑溺の愉悅特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活

- 罪 甘き飲茶の後
- 耽美派小説名場面集 潤一郎の巻
- 折込口繪写真 縛つた女を写す辻村 隆
- 濁れる愛慕……………松井 籟子
- 切 夜……………笹田 豊
- 奴隷妻……………片矢 薫
- 指の秘密……………武山 武彦
- 男夢麗姫伝……………亀岡絳七郎
- 孤獨なファンタジー……………芳野 眉美
- モンテカルロの拘 僂男……………モオリス・ブルウシエ
- 中国艶話毛のない女の物語……………赤塚与志夫
- 女性器崇拜……………雨森 順一
- 糊と泥と砂……………長岡愛一郎
- 4Sクラブ探訪記……………二俣志津子
- 非公開放画世界の隣房……………藤安 節子
- 囚衣或る人妻の生活記録……………古川 裕子
- 鹽に関する怪奇な報告……………村田 生
- SODMIEの珍裁判……………鳴尾 善治
- ロマンチックなサディズム……………森山 美歌
- 香具師放談……………浮家 鷹三
- 女囚私刑体験記……………小坂多美枝
- セックスの記憶……………綾 久江
- 錯乱の倫理……………近東規矩也
- 夕映え燕の教訓……………丘 正雪
- 狂い咲くカンナ其の後の告白……………羽村京子

荒縄による緊縛感のスポット

辻村 隆 構成 (塚本鉄三撮映)



純白の柔肌に対する荒縄のトゲトゲしさの持つコントラスト、緊縛感を誇張するために縛られる人には気の毒であつたが特に薬の荒縄を用いてみた。柔かい綿ロープとか腰紐とかであれば如何に強く緊縛しても中々感じが出にくいものであるがその点荒縄は実際に使つてみると、縄を解いた後でも肌にブツ／＼と赤い発疹様のカブレが出来て極めて痛そうである。現に縄をしごいて締めつけるとトゲが皮膚の表面に突き刺つて困つた。



さて、それでは女体に対する緊縛感の醸し出す雰囲気とは何んであらう。被縛者からすれば身動きも出来ない程ひし／＼と身にいましめられた自由束縛の感であり、縛者からすれば完全に相手の自由を奪い自分に屈従せしめたという満足感であらう。以下各種の角度から部分的な接写によつて個々の場合を見てゆくことにしよう。上の図は後手に縛つた縄を三巻き、胸へ巻き猿轡をかました所で二の腕から胸に喰い入る縄目を狙つた右の図は手は自然のまゝ後で括り両足を合せて二箇所を縛つたもので別に取り立てゝ意図のあるものではないが、両足を揃えて縛つた所に批評があると思う。



「両手は勿論後手、乳房の上下と尾の三個所へ廻した繩は胸部の膨らみによつて強く肌に喰い込んでいる。上の図は真横より、下の図は斜め前より狙つた。荒繩と柔肌はこゝに至つて最大の効果を發揮している。



A black and white photograph showing a close-up of a person's hand holding a bundle of dried, fibrous plant material, likely a root or stem, against a light background. The hand is visible on the left side, with fingers gripping the bundle. The plant material consists of several thick, parallel, light-colored strands that appear fibrous and somewhat brittle. The background is a plain, light-colored surface. The overall image has a grainy, high-contrast quality typical of older black and white photography.





こゝでは後手と脚部の接写を試みた。今迄脚に対して緊縛したものを余り取扱わな
いという読者の要望により一枚加えた次第
である。中の図はその時のポーズを側面よ
りキャッチしたものである。この外多くの
クローズアップを試みたが誌面がないので
残念ながら割愛したが別の機会に発表した
い。



○新年号 縛った女を描く○

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集

罪 愛の使徒 色刷口繪 椋鳥

口繪写真 縛った女を描く

アフリカの記・らぶすれいぶ鬼山綱策

脱落者……………小森 原平

徳川開門痴情録……………的場 通

淫火(みだらび)……………松井 簞子

戦争処女の手記……………藤安 節子

長崎らしやめん考……………花山 剣作

お国自慢・好色民謡……………七条美樹子

人妻告白記・妻の復讐……………辻 佳月子

桃色のベールに包まれて……………川端多奈子

読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理

マゾヒストの果て……………福田 英一

糊の執著……………長岡愛一郎

鼻彫礼讃……………升岡 金吉

変の字問答……………浮家 鷹三

告白記 僕の記録……………黒井 珍平

女の責場を描く時の心境……………伊藤 晴雨

少年の恋……………守田 雄二

貞操帯奇譚……………シヨルジュエフカトル

あなたのムチの下に……………角田 平八

赤につかれた男……………上村秀久雄

男色の花道……………堤 行房

風変わりな作戦……………笹田 豊

○二月号責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口繪写真 恋に狂ったワン・カット

スペインの宗教裁判

妖 花(心の悪魔)……………羽村 京子

夜開く孤島……………岡 真史郎

淫 火(第二回)……………松井 簞子

若衆散華(同性愛欲史譚)……………戸崎 平馬

変の字問答(第二話)……………浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回)……………鬼山 綱策

燐 光……………久留木 栄

女嫌いの種々相……………仁比山 等

アレキシナの日記……………鳥上 源一

女囚獄中記花井お梅さんげ談……………小町右近

露尿崇拜とトーマ思想……………三瀬 淑朗

処女崇拜と宗教売淫……………島影 映

比丘尼開眼……………久松 俊介

琉球の女達……………木之下白蘭

悩ましのサディズム……………森山 美歌

切支丹迫害史……………漆島 迫平

死刑執行奇談……………茂木 芳久

黒井珍平氏に答う……………伊藤 晴雨

しいたげられるよろこび……………林田 澄子

破つた日記帳……………川端多奈子

硝子便所……………芳野 眉美

つわもの哀史……………吉井 川洋

映画とサディズム……………雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ○

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口繪写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髄……………吾妻 新

切腹史談……………中康 弘道

同性的男性愛の謎……………染田 玄

受難記(ある女の告白)……………岡田 咲子

妖異聚楽第……………戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第三回)……………鬼山 綱策

女囚私刑体験記(其の二)……………小坂多美枝

黒井珍平さんへ……………羽村 京子

艶書通信(喜多淫子さまへ)……………高野すみ子

文学歴史に現われたるサディズム……………仁比山 等

悲痛と快楽……………波多野 新

第七天国の夢想……………梅井 清

伊藤晴雨先生へ答えて……………黒井 珍平

屍 臭……………丹波 太郎

色情の価値……………角田 平八

猿 轡 雑 考……………千葉 三郎

白い便器の幻想……………芳野 眉美

伊藤晴雨氏の解答を読んで……………和泉としを

破つた日記帳……………川端多奈子

緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉

アドニス灯……………鷗巣 千芳

シブシイの性的生活……………有馬 正秋

淫 火(第三回)……………松井 簞子

○四月号 錯倒の告白特集○

口絵 くすぐられる女 喜多 玲子

口繪写真 緊縛美の考察

後手と高手小手について

探衣(続少年矯正院体験記)……………獄 取一

神の酒を手に入れる方法……………沼 正三

肥満体への郷愁……………麻生津和夫

乗馬服と長靴と鞭……………森本 愛造

不思議な拷問……………有馬 稻高

私の新婚生活……………島村 康雄

開花の契機……………信太 薔子

キヤメラ愛好会……………岡田 咲子

妓 の 影……………泉 辰之助

交 感……………藤安 節子

支配者と被支配者……………波多野 新

責めの美的表現……………小此木蘭一

らぶ・すれいぶ(第四回)……………鬼山 綱策

春婦哀歌(飛田の娼婦たち)……………花村 鶴二

新裸体狂楽論……………七条美樹子

続・囚 衣……………古川 裕子

地獄繪行脚……………長岡愛一郎

美少年の死……………岡 真史郎

恍惚境と法悦境……………高取 辰治

切腹史談(二)……………中康 弘道

縛られた女優たち(二)……………升岡 金吉

風流猿轡……………吾妻 新

人獣交婚談異婚抄……………山崎 浩平

或る家庭教師の告白……………角田 平八

淫 火(第四回)……………松井 簞子

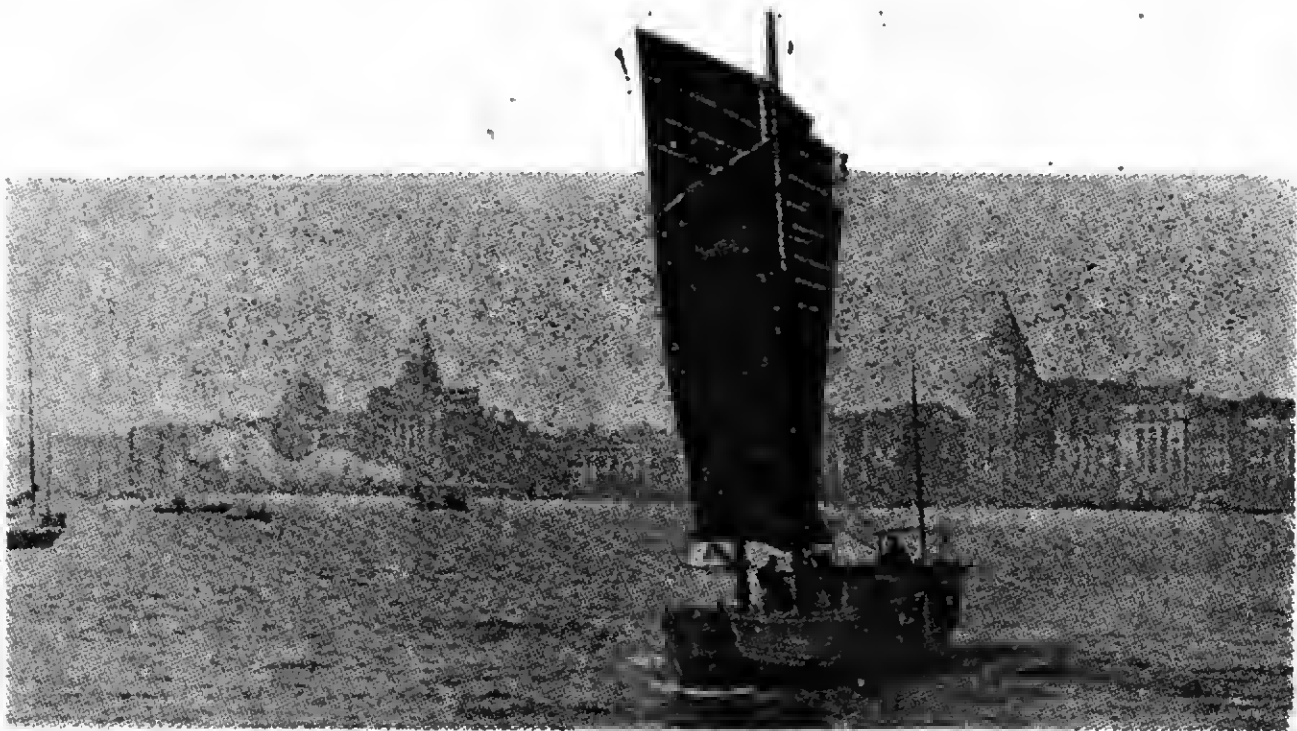
魔都上海の思い出から

姫宮四郎

まえがき

先日、某新聞紙上に連載された、赤い中国に於ける主要都市の現況は、曾て大陸生活を経験したことのある人々に、様々の思い出を呼び起さしめたことでありましよう。私自身も、そのシリーズの最後に上海の現状が掲載せられた時には、誠に今更の如く感慨深いものを覚えました。何故なれば、それは昔の上海を知る者にとつて余りにも大きな変貌ぶりであるからです。東洋一の規模を誇る、春秋二回全上海人の血を湧かせた名物競馬は廢止せられて、広大な競馬場は人民広場と化し、ユニオンジャックや星条旗の中に、日章旗も交つて飄えつていたバンドに立ち並ぶ高層建築の屋上には、今やすべて中共の五星紅旗がへんぽんと黄浦江上を渡る風を孕んでいるの

です。ブロードウェイ・マンションは人民政府交際処に、また上海陸戦隊本部は中国海軍の本拠となつて私等の知る上海は完全に面目を一変して居ります。私は政治に興味を持たず、共產主義についての知識も殆んどありませんので、中国の共產化が中国自体にとり、更には世界にとつて果して幸福な出来事であるか否かは、全くよくわかりません。唯、報道によりますと、あれ程有名であつた蠅や乞食も少くなつて、街路も清潔になつたそうです。し「暗黒の都市」と言われた上海が、今や明るい産業都市として更生せんとしていることは、その限りに於ては何としても喜ばしいことと考えます。然しながらその反面、長い間コスモポリタンとして育まれた上海人の間には、これらの変りゆく街の姿を死の上海と呼んで、去りし日を懐しんでいる人々の



多いことを聞くにつけても、私自身限りなく愛惜した在りし昔の上海の姿を、改めて思い起さずには居られません。此の機会に私は自分で体験した赤裸々な上海生活の断片を述べて見たいと思ひ立ち、敢えてここに拙い筆をとることにした次第であります。

私が上海に居りましたのは昭和十四年の春から十七年の夏に至る三年と少しの短い期間ですが、その間に私はすべての余暇を挙げて上海の街々の探訪に費したものです。私は某専門学校を出るとすぐに入営して、内地に一年、満洲で二年の軍隊生活を送った後、上海楊樹浦の××綿花へ就職することに決定したのですが、その時には、かねて憧れていた国際都市上海に対して、まるで恋人にでも対面するような胸の高鳴りを覚えました。そして到着後一通り会社の様子がわかりかける頃になると、私はまず第一に上海語の勉強を始めることにしたのです。御承知の如く中国では、各地方によつて全く言語が違つて居りますので、或る地方の人が他の地方へ行くと、まるきり言葉が通じません。もつとも標準語としては北京官話が指定されていて、学校や官庁などではすべて之を採用して国語の統一に努力してはいますが、何しろ広大な国土の

ことですから、未だ十分に徹底してはいたのです。私も満洲に居たので、北京官話なら相当に話せるのですが（いわゆる満語は北京官話と同一のものです）勿論、これだけでは十分に意を通じることが不可能だからであります。かくして上海語の勉強をする一方、私はまた永く上海に居住して裏面の事情に詳しい人を物色しました。そして、或る機会に工部局（これは後に説明します）で相当長く勤務しているK氏を知り、更に同氏によつて、南京路で雜貨商を営んでいる中国人のM氏に紹介して貰うことができました。言わば此の二人は、私が今や探險を開始せんとする魔都上海の道先案内であつた訳なのです。

お断りしておきますが、私がこのように相対計画的に準備を整えたのは、矢張りそれだけの理由があるからであります。上海の地図を一見せられるとおわりの通り、揚子江の支流である黄浦江の西岸に沿うて発達した此の都市は、更にその黄浦江に流れ入る蘇州河によつて南北に二分されています。此の蘇州河より北は虹口地区と言つて、此所には当時十萬近くといわれた日本人の殆んど全部が居住しており、これらの邦人は、蘇州河以南の英米租界と仏租界を擁して全市の大半を占

める地区を、「河向う」と呼んでいました。そして、昭和十六年末に太平洋戦争が勃発して、日本軍が歴史的な租界進駐を行うまでは此の地区に特別の用がある者を除いて、一般にはなるべく立ち入らないようにしていたのです。それと言うのは、当時日本軍当局が正式には一步も入ることのできない此の地区を根拠にして、抗日派のテロ団が盛んに暗躍していたからなのです。特に夜間「河向う」へ行くことは、領事館方面からも禁止されている形になつており、事実それは相当の危険を伴うものでありました。ところが、このような南部の地域こそいわゆる上海の心臓部であり、「魔の都」「悦楽の市」と称せられるのも、すべて此の地区に外ならないのですから私は他の一般在住邦人のように虹口の料理屋で酒を飲んだり、キャバレーの日本人女給と踊つたりすることには一切興味を持たず、たとえいかなる危険が伴つても、否、危険があればなおのこと、年来の宿願である此の禁區探訪に奮い立つた訳なのであります。

その後、私は毎週一回以上は必ず前記の二氏のどちらかにお伴をして、上海の街の隅々に至るまで殆んど余す所なく訪ねました。屋間はさ程でもありませんが、夜になると、私

以外には周囲に誰一人として知つた者も無くそれに興味を惹かれるような場所は、大抵の場合大通りから入りこんだような所が多いのですから、そのような区域では、たとえどんな事が起きても絶対わかりつこありません。従つて、風間ごく普通の場所へ行く時以外には、私等は必ず中国服を着たものです。こうして、私がどうやら一人歩きできるようになつたのは、およそ一年近くも経つた頃からでしょう。それ以後、はようやく二氏を煩わすことも稀れとなり、私は、一人で自由に行動することができました。以下私は、このようにして自分で実際に見聞した異色ある上海の街の生態を、順に追つて御紹介して見ましよう。

公園・映画

当初、まだ上海の特殊地帯にも殆んどなじみのなかつた頃、私がまず驚かされたものに公園と映画があります。はじめに公園の方からお話ししますと、上海の主な公園としては仏租界のいわゆるフランス公園、英米租界にあるジェスフィールド公園とそれに黄浦江岸のパブリックガーデンくらいのものでしよう。これらの公園へ入るにはいずれも入場料

が要るのですが、思うにこれは、街に氾濫している乞食や浮浪者の侵入を防ぐ意味もあつたものと見られます。その為もあるのか、内部の芝生や花壇などは実によく整備されていて、最も代表的なジェスフィールド公園には、その一隅に純日本式の庭園も設けられていました。然しながら、私がこゝで言わんとするのは、そのような設備についてではなくて、これらの公園の果していた特殊な役割なのであります。と申しますのは、風間は別にどこの国の公園とも変らない風景が、夕方以後になるとその模様が一变してしまします。言うまでもなく、それはアベック族の集団によつて占領されることを意味するのであります。戦後は日本でも宮城前広場等の光景で容易に御想像のつくこと、と思ひますが、上海の公園はいささかそれが徹底していました。何故ならば、夜間わざわざ入場料を払つて公園へ入るのには、特に何等かの意図がなければならぬからです。美しい花や樹木も夜にはそれも賞味するすべがありません。照明設備といへばホンの申し訳程度のものに過ぎませんし、上ほど月のよい晩なればまた違つた趣きもありましようが、とも角も嚴冬の頃を除いてこれらの公園はいつも夜間若い男女

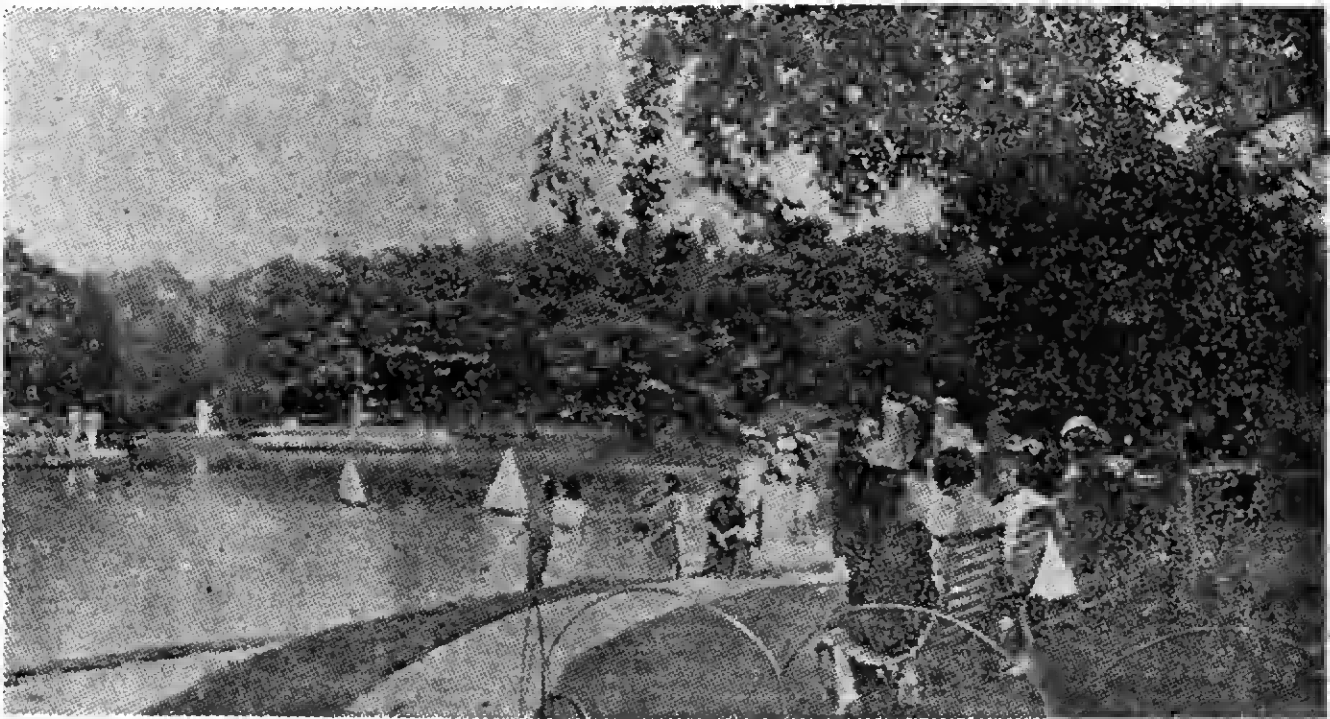
で大そう繁昌して居りました。

そう言えば風間公園内を歩いた時に、中央部の花壇や芝生のある所よりも、周辺の樹木の多い地帯のあちこちの木蔭に、沢山のベンチが備えてあるのを少し奇異に感じたものでしたが、このような疑問は一度び夜間にそこを訪れることによつて、直ちに氷解し去つた訳であります。至る所のベンチは殆んど残らず若い二人組で占領されて居ります。大部分は中国人同士ですが、中には西洋人の姿を見かけることもありました。けだし、六百万の大人を有する都市として、上海の市街区域は余りにも狭小の感があります。従つて、住宅不足も相当以前からの宿命であり、簡単にホテルを利用することもできかねる中流階級の男女にとつては、必然的にこれらの公園が絶好のあひびきの場所となつたものでありましよう。而も都合のよいことに、こうした必要が夜の公園の一部を特殊地帯とする不文律の如きものを形作り、其所へ訪れるのはすべて同じ目的を持つ者ばかりでありますから、相互不可侵的に誰からも邪魔される心配は無い訳なのです。このようなドアーもカーテンも存在しない密室の集合ともいふべきこれらの区域における光景はまず一つの偉観と申し

てもよろしいでしょう。彼等のいずれもがその行動に於て、当然の権利の如く実に大胆にふるまっているのは、初めてそうした地帯へ足を踏み入れた私を驚かせるに十分のものがありません。どのアベックを見ても、皆固く相擁した状態で、小声で何か語り合っているもの、接吻したまま長い間動かないもの等様々ですが、中には通路である小径のすぐそばのベンチで、こちら側に背を向けたまま、男は女の………おり、女は相手の男の………いるような光景もザラに見られます。また少し入り込んだ樹間のベンチでは、………でいる女さえあります。聞く所によりますと、こうした場所へ来るに当つては、あらかじめズロースもパンツも省略している者もあるそうで、その為お互いの………とより、本格的な………、容易に且つ何等はばかる所なく行われるのでありますから、正に同伴者を持たないヤボな人間には、オフ・リミットの場所であると言ふべきでしょう。

次に映画について申しますと、こゝに述べるのは例の秘密映画ではなくて（これらにも後に各所で見物しましたが）、堂々と街で公開

ジェスフィールド公園



上映されているものごとでありますが、事のついでに上海の映画館について一言御説明

しましょう。上海で一流の映画劇場としては競馬場のすぐ傍らに在るグラランド（GRAND）、アベニュー・ジョッフルに在るキャセイ（CATHAY）、それにこれは路の名を忘れましたがロクシイ（ROXY）、此の三つが代表的なものです。後にマジエステイツク（MAJESTIC）と称するものも新しく出来ましたが、これらの劇場はいずれも英米系資本の経営によるもので、その豪華な設備は日本のいかなる大都市に於ても見ることはできません。館の大きさや収容人員については東京等にもこれらに匹敵するものはありますが、隅々まで分厚い絨氈を敷きつめて、完全な間接照明を施した内部の廊下や客席の豪華なことは、到底内地の劇場の比ではないのです。このような劇場で上映されているものは、例外なくアメリカ映画ばかりでした。尤も、後になつて太平洋戦争開戦後はアメリカ映画が入らない為に、ドイツ映画や中国映画、それに日本映画も租界に進出して、三三四郎がROXYで上映されるという、今から考えればこれまた歴史的とも言ふべき出来事もありましたが、当時はすべてアメリカ映画一色で、英仏等の歐洲映画も、まずこうした一流劇場に現れることはありませんでした。

そして、これは要するに上海人がアメリカ映画を最も愛好したという、簡単な理由によるものと思われまゝ。

それらの映画は殆んどが日本へ輸入されたことの無いものでしたが、私が見て少からず驚いたというのは、日本で見たアメリカ映画とは全く別の感じを受けたからであります。どこが違うかを一言で申しますと、はるかに刺戟の強いものが多いということなのです。もとより日本語のタイトルが入っている訳ではなく、すべて原語のまゝなので、私は自分の見た多くの映画の題名や細部の内容を殆んど忘れましたが、一例として、後日私が内地で同じものを見た「スエズ」「ハリケーン」について言いますと、「スエズ」ではアナベラの扮する土人の娘が水浴中にタイロン・パワーと出会うシーンがありますが、その際全裸であるアナベラの姿体が、胸、太股から下半身の後姿等、部分的に大きくクローズアップされ、最も強く印象に残る場面が、内地で見た時にはすっかり削除されてしまっているのです。「ハリケーン」でも、映画の最初の部分に、ドロシー・ラムーアが愛人の男と共に椰子の木蔭で寝る場面があります。背景に見える星空には中天に細い月が懸つて、

夜も大ぶ更けたことを示しています。やがてラムーアの足が何かを合図するように……

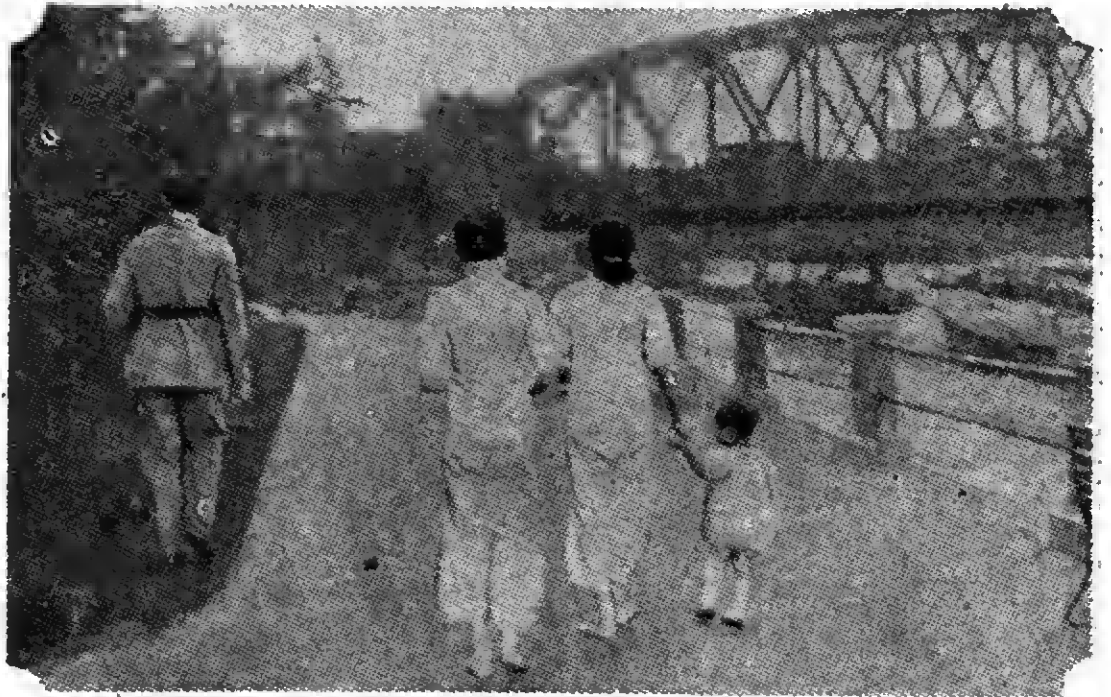
……、横たわつたまゝで男が……
……に彼女に接吻します。そして、次の画面には二人の膝から下の部分だけが写されて、……が激情を物語るように……み合つていゝのです。——このようなシーンは、あつさり検閲で切り取られて見ることはできません。これらによつても推察せられる如く、他の初めから内地へ輸入されないものに至つては、その多くが熱烈なエロチズムを主題としたものでありますから、私が少々圧倒されたのも無理はなかつたのです。

中国映画の方はどうかと申しますと、これには技術的にも幼稚で内容も貧弱なものが多く、中国人間でもインテリは余り顧みないようでしたが、私は語学の勉強の為に機会あるごとに見るようになっていました。その頃中国の映画スターと言えば、陳雲裳、李麗華、袁美雲などが主なところで、日本人向きの美人としては、袁美雲や李紅などが思い出されます。これらの中でもナンバーワンとされているのは、矢張り何といつても陳雲裳でしょう。彼女は日本の新聞雑誌にも紹介されたことがあり、中国のインテリにも人気のある近代的

な女優ですが、此の陳雲裳が南京路の某所に於けるプール開きの際に、とんでもない災難を蒙つたことがあります。彼女はその式典の女王として招かれて、最新型の水着姿で観衆のギッシリつめかけた会場に現われたのですが、その瞬間に熱狂したファンは一時に彼女を目がけて殺到し、警備員の制止も聞かばこそ、彼女は約十分間余り完全に観衆のとりことなつてしまいました。その間に、彼女の髪飾りや耳輪は奪われ、水着は引き裂かれ、殆んど全裸体とされた彼女の顔と言わず背と言わず、胸から腰、脚、それに秘密の箇所に至るまで、余す所無く観衆の手によつて凌辱せられてやつと救い出された時には半死半生に近い状態であつたのです。

話を中国映画の内容に戻しますと、それらの多くはお涙頂戴母もの中国版といったところですが、一部にはアメリカ映画の影響を受けて、相当に露骨な性愛描写のものも見受けられました。此の方面の第一人者であり、さしずめ日本の京マチ子を今少しエゲツなくしたような肉體女優として、私は顧蘭君の名を思い起します。彼女も後にはその筋の圧迫から殊勝な役を演ずるようになりましたが、治外法権のその頃に彼女の主演した映画の中で

印象に残っているものの一つに「蕩婦」という作品があります。これも内容の細目までは覚えて居りませんが、要するに多くの財産を豊麗なる肉体を持つ女が痴態の限りを尽して最後は下幸な結果に終るといった筋のものでした。その女は大きな西洋風の住宅に住み、贅沢三昧の生活を送っているのですが、あきれたことに、その邸宅内の一部に六人の若い男妾を蓄え、それぞれに一個の部屋を与えて住まわせているのです。彼女の寝室にはベッドの枕許に、六箇のボタンがあつて、彼女は自分の欲する時に応じて自分の好きな番号のボタンを押します。すると、押したボタンと同じ番号の部屋に在る電気スタンドが点滅する仕掛けになつて居るのです。その部屋に居る若い男は、それを見てベッドから起き上り、



彼女の誘惑に応じないのです。最後に彼は帰ろうとしてドアの方へ歩み寄りますとそれを見て彼女は突差に鍵をかけてしまいます。青年は彼女の手にある鍵を奪わんとして、そこで暫らく彼女と揉み合うような形となり、そのはずみに彼女の着ていた夜会服の肩の部分が破れて、豊満な乳房の一つがむき出しに

ひそかにパジャマのまゝで彼女の寝室に忍び込む場面になります。彼女の寝室へ入つて来た男は、枕許に近づいて………中略………

その様子をそのまゝベッドの上方からカメラがじつくりと撮影しているのは、いささか恐れ入らざるを得ません。更に同じ映画の他の部分では、或るホテルの一室で彼女が美貌の青年を誘惑するシーンがありました。その道心堅固な青年は容易に彼女の誘惑に応じないのです。最後に彼は帰ろうとしてドアの方へ歩み寄りますとそれを見て彼女は突差に鍵をかけてしまいます。青年は彼女の手にある鍵を奪わんとして、そこで暫らく彼女と揉み合うような形となり、そのはずみに彼女の着ていた夜会服の肩の部分が破れて、豊満な乳房の一つがむき出しに

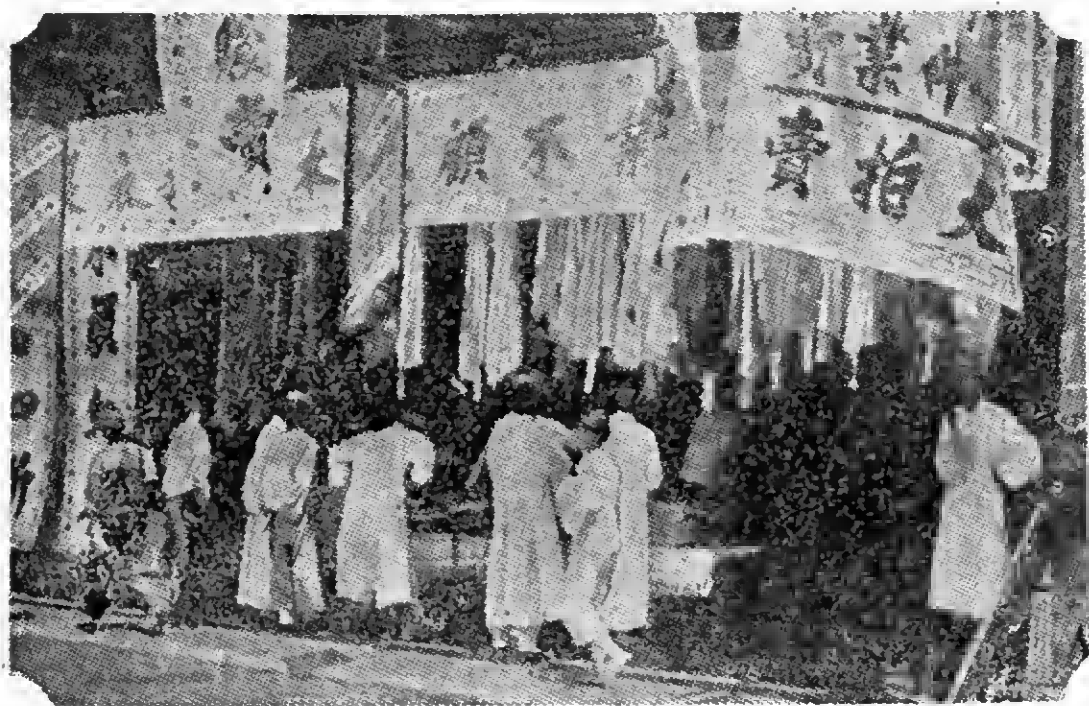
街 娼

上海へ来る以前に、私は必ずしも岡晴夫歌

うところの「上海の花売り娘」のような風情を想像していた訳ではなかつたのですが、場所によつて或いはそうした風景も、一部に見られるかも知れないとは思っていました。ところが実際の上海の街頭では、およそ「花売り娘」というようなロマンチックなものは、一人として見出すことはできません。その代りに至る所の街角で私の目についたものは、誠にリアリステイックな「アナ売り娘」の群像であつたのです。表現が少々落し噺めいたことは恐縮ですが、実際、上海の「河向う」を訪れた日本人は誰しも、彼女等が大挙して十字街頭に進出してゐる壯觀に屢々接したことでありましょう。今や内地に於てもパンパンの大量出現によつて、街娼を見かけることは日常茶飯事になつて居りますが、俗に「野鷄」と呼ばれるこれら上海の街娼は、日本のパンパンとは大ぶその趣きを異にしていたのです。我国では昔から公娼制度というものがあつて、代表的なヨシワラをはじめ各地の特定の場所に、こうした常設の肉体市場がありました。現在では表向き公娼制度が廢止せられたことになつてはいるものの、従来からの特殊地帯は依然として旧の如く存在して居ります。このような「集娼」に対して戦後新し

く登場したものが、「散娼」形態の街の女なのであります。彼女等は特定の地域に密集した営業所を持つてゐる訳ではありません。そして、「集娼」がその住居であり職場である場所の提供者に対して、結局何等かの形で従属する立場に置かれるのと異り、「散娼」の場合には、原則として何者にも束縛されない自主独立の形態をとつてゐます。

ところが上海の街娼は、右に述べたような言わば近代的な意味における「散娼」ではなかつたのです。彼女等は街頭に進出してゐるにも拘らず、その本質は大部分が封建的形態の「集娼」に属するものであります。彼女等は決して自主独立の立場で営業してゐるのではなく、勿論、上海には此の外に純粹に自分だけの責任に於て肉体取引をしてゐる女



も沢山ありますが、私が今こゝで問題にしてゐるのは、最も多く街頭で見受けられ、目でそれとわかる中国人街娼のグループ即ち、(前に申しました「野鷄」)についてであります。これ以外の私娼に関しては、また後に言及することもあると思ひます。さて、これらの女はどのような場所に多く現われるかと

言いますと、日本人が一番よくお目にかゝつた所は、矢張り上海第一の繁華街である南京路でありましょう。女等は濃い化粧をして、服装はいずれも中国服を着てゐます。服の色はピンクのような明るいものが多く見られましたが、中国服伝来の藍色系統のものもあつて、もとより一定はしてゐません。元来、中国の女性はごく一部の例外を除いて、すべて洋装をしないものです。それは彼女等が、既

に国際的衣裳となつてゐる中国服を持つてゐるからでありましょうが、例えば裾の長さをちようどスカートと同じくらいに短くするなど、時に応じていろいろと改良を加へることはしても、決して全面的に洋服に変更してしまふことはないのです。ところで、これらの街娼は概して一人だけで立つてゐることは珍しく、大抵二、三人で一組となつて居りますそしてそれらの一組ごとに、日本で言えば「やり手婆」に當る年輩の女が必ず一人付添つてゐるのです。彼女の任務とするところは、値段の決定等について客と交渉することが主なものです。おそらくその外にも、街娼が勝手に規定以外の場所や価格で取引したり、若しくは逃亡したりすることに対する監視もあつたことと思われれます。

南京路では殆んど夕方以後になつて、こうした街娼が多く見られますが、大世界に近いエドワート七世路に於ては、正午頃から早くも多数の女等が出張開店してゐました。此所で私が目撃した客引戦術の二、三を次に御紹介してみましよう。彼女等が通行人に話しかけたり、腕につかまつて誘つたりしてゐるのは、どこでもよく見る光景ですが、一風変わったもので少しエロチックな方法もあります。

これは、顔の方はどうも余り戴けないが、肉体は堂々としてゐる女がよく用ゐるもので、前記のやり手婆と何か二言三言話してゐるかと思ふと、途端にワーツと大声をあげて泣き出します。これで通行人が当然彼女の方に注意を惹かれた次の瞬間に、女は泣きじやくりながら両手で自分の服をつかみ、まるで子供がするように身体を揺すぶつて、服をどんどん上の方へたくし上げるのです。そしてこの動作は、はち切れそうなくましい太股があらわれ、短いズロースに包んだ腰の部分が全部見えるようになつても、まだ当分続けられているのです。これは確かに或る程度効果的な方法であらうと思われれます。次に、サディズムに訴へる方法もありました。これは、やり手婆が何事か言つて女を叱りつけます。そして女がかぶりを振つてわめき立てますと、別のやり手婆か或は力の強そうな他の街娼も加わつて、二、三人でその女にお仕置きをするのです。勿論、白昼の街路上で行うのですからごく簡単なものですが、女の手を左右両方へ引張つておいて、むつちりと露出してゐる二の腕あたりを赤くなる程つねるとか、または手をうしろへねじ上げて女がうずくまつた所を押えつけ、そのお尻を叩いたりつねつ

たりします。こうして女は盛んに苦痛の悲鳴を上げますが、これまた相当の効果を發揮するに至るまでお仕置きは続行せられるのです。このような街娼に属する者にも、その中には矢張りピンからキリまでありまして、キリの方は、碼頭の苦力専門で一回の料金は電車賃くらい、路傍にころがつたまゝで行うというようなすさまじいものですが、ピンの部類としては、さしずめ新々公司や永安公司の如き有名百貨店でお目にかゝるのがそれと言へましよう。これらのデパートでは、屋上に近い何階かの部分が娯楽場になつて居りまして其所へ入るには勿論入場料を必要とするのですが、その中では中国の芝居や映画が開演されたり、或はいろんな遊戯の設備が整へてあります。元來、こうした上海のデパートは庶民の為のものではなくて、そこへ来る者は殆んどが中流以上の階級なのです。従つてこれらの場所へ現れる夜の天使も、一般の街路上で見かけるものとは大いに様子が違つていて身なりや持物も立派でなし、態度もしとやかでありますから、初めての者にとつては素人との見分けが困難なくらいです。彼女等は適当な客を見つけますと、さりげなく傍らへ寄つて来て、ほゝ笑みながら二言三言話しかけ

ます。それでもまだ言葉のわからない日本人であれば、相手が何者であるか恐らく一寸見当がつきますまい。若しその場合に事情を知る客であれば、その女が気に入ったとしますと、一緒に近くの茶房へ入って暫らくお茶でも飲むことでしよう。そして話しながら何気ない風で女の腰を抱いたり、胸のふくらみに触れたりしても、彼女は敢えて拒絶することには致しません。やがて、何処からか前に申したような年輩の女がこつそり現れて、改めてそこで本格的な交渉を進めることになります。商談がまとまれば、こんどはボン引きのような男が出て来て、客を附近のホテルの一室か若しくは専用のアパートのような所へ案内してくれるのです。

裸踊り

敗戦後の日本社会では、至る所解放されたエロやグロが氾濫し、果てはスパイ事件、麻薬の密輸など植民地的様相も多くあらわれて特にそれらの中心である東京は曾ての上海同様とさえ言われて居ります。然しながら、密輸やスパイに関しては私は殆んど知らないのと言及致しませんが、エロの解放の点に於ては、どうやら戦後の東京も私の知る上海には

遠く及ばないように思います。だからと言って、これは決して上海の状態を望ましいものと申しているわけではありません。こうした方面の取締りの行き過ぎは、もとより百害あつて一利無きものですが、さればとて全然無制限に放任して置くことは、少くとも普通の文明社会では考えられないことだからであります。戦後の東京風俗を描いた例の「自由学校」にも紹介されるエロの生熊、例えば下半身裸体の女が固定した競輪用の自転車にまたがつて、お尻を持ち上げながら客の前でペダルを踏んで見せるものとか、或は、パンパンとお客の性的交渉を隣室からこつそりのぞかせるといったようなものは、何も戦後初めて現れたものではなくて、同様の事は戦前にも盛んに行われていました。そして、これらは如何なる国の大都市に於てもその裏面には必ず存在するもので、唯それが堂々と公開を許されるということはあり得ないだけなのであります。ところが上海に於ては、こうした一般文明国の常識が必ずしも当てはまらない場合があつたのです。それと言うのも、此の都市が持つ国陸社会の私生児的性格に由るものでありまして上海はいずれこの特定国家にも属しない主権の盲点のような地帯であります。従

つて、同市の警視庁に当る工部局でも犯罪の捜査や治安の確保には相当力を尽していましたが、風俗関係の取締り等には極めて消極的で、むしろ原則として放任主義を採っているように見受けられました。そうした一例として、次に上海の裸踊りについて述べてみましょう。

それは日本のストリップ・ショウと異つておよそ身に着けるものは一糸も纏わない赤裸々な姿で舞台に現れるのです。而も、近頃一部で行われているといういわゆる「お座敷スト」の如く、秘密の場所でこつそり見せるものではなくて、白昼堂々と公開されているのですから、実に爽快極まりないものであります。中国人であるM氏の言によりますと、そのような場所が上海市内に少くとも三箇所はあるということでしたが、私が実際に訪れたのはその中の二箇所に過ぎません。こゝでは一部の邦人間にも割合知られていたと思われる（何故ならば私は一度確かに日本人と見られる三人連れの男を観客の中に発見したからであります）静安劇場について、まず御紹介しましょう。此の劇場の名は、所在地である静安寺路から取つたものでありまして、前に申しました南京路というのがバンドから競馬



ストリップ劇場の踊り子

場へ東西に通つていて、その延長である競馬場から更にジェスフィールド公園に至る間が静安寺路と呼ばれているのであります。この通りを競馬場から約三分の一ばかり行つた所で、交叉点になつてゐる静安寺という電車の停留場がありますが、そこから西へ約四五分歩きますと、北の方へ入る路次の入口に静安劇場という看板が出て居ります。路次の道巾は一間ぐらゐでしょうか。小さな物売店が雑

然と立ち並んでいる中を、入つて五十メートルも行つた左側にその劇場があるのです。それは劇場と言つても名ばかりの小さいもので椅子席の収容人員はまず百名余りといったところ、勿論設備も何もお粗末なものであります。入場するのには入口で切符を買いますが料金は確か一流映画劇場の最下等席と同じくらいであつたと思います。中へ入るとすぐに映画館と同じようなプログラムを渡してくれ

て、それは全裸の美人の写真と共に、次週上演の番組予告まで載せてありました。此の劇場は裸踊りの常設館には違ひないのですが、単に踊りだけではどうしても時間が短いので間を持たせる為に中国の芝居もやつて居りました、それが終ると裸踊りを始めるのです私は数回そこへ出かけましたが、その中で矢張り最も印象に残っている最初の時の模様を

以下まず申し上げてみましょう。

上演回数は一日四五回で一回が約一時間半くらい、一回が終るとお客は全部入れ替えられます。そして最初の回の始まるのが大体正午頃のようにした。私が行つた時は、ちょうど第一回が終つたところと見えて内部の客席には殆んどまだ誰も居なかつたものですから私は最前列の中央部でいわゆるかぶりつきの所へ坐を占めることにしました。舞台との間は一メートル程の距離が有るだけでありますところがこれは後になつてわかつたのですが、此の一メートルの空間地帯も唯無意味に存在しているのではなかつたのです。客席が半分ばかり埋まつた頃になると、ボーイが木製の簡単な腰掛けを運んで来てそこに並べ始めました。私が呆氣にとられて見ていると、後から来た客の一群がそれに悠々と腰を下すのです。この野郎と思つてその時はさすがに少し腹が立ちましたが、それが此所の習慣であり、そし特権を得るためにはボーイに幾らかのチップをやればよいのであるということがわかつてからは、私も専らこの方法を利用したものです。愈々幕が開きますと初めは前に申しました通り中国の芝居が行われます。これが一時間近くも続くのですが、およそ中

国の芝居ほど他国人が見てつまらないものも少いことでしよう。私の場合は、多少とも語学の勉強と思つて聞いて居りますが、それでも相当退屈しました。左様、中国の芝居では「見る」と言うよりもむしろ「聞く」と言う方が、より適切な表現なのでありまして（事実、中国語では芝居を見ることを「聴戲」と申します）、その理由はと言いますと、舞台に於ける俳優の動作が極めて少いからであります。特に旧劇の場合には、ドラや胡弓の伴奏によつて、俳優の歌が科白の代りをするのです。そして動作は殆んど無いと言つてもよい程で、例えば、鞭を手に持てば馬に乗つてゐることを示し、鞭を捨てれば馬から降りたことを意味するといふように、全く限られた所作によつてあらゆる行動が象徵されるのですから、こうしたルールに通じない者には何のことやらさつぱり見当が付きません。現代劇ではそれ程極端なこともなく、科白も普通の会話で行われますが、それでも動作は矢張り至つて少く、唯一の舞台装置であるテーブルと椅子の周囲で、立つたり坐つたりして話しているのが俳優等の主な仕事なのです。従つて言葉のわからない者には全く無意味なものです。言葉の多少わかる私にとつても、

その内容と来たら、要するに中国の家族制度に由来する家庭内若しくは親戚間のごたごたなのですから、全く以て閉口するより外はない代物なのであります。

場内の観衆は殆んどが中国人ばかりでしたから、このような芝居も結構楽しんで居ります。見渡したところさすがに女性を見かけることはまずありません。愉快なことには、工部局の中国人巡査が制服制帽のまゝ横の方に立つて見物していることもありました。彼の役目は決して臨検などというものではなくて退屈しのぎにやつて来て、他の一般観衆と一緒に見物しているに過ぎないのです。やがて芝居も終つて幕が引かれました。そして暫くすると、場内の電燈が半分以上消されてやゝ薄暗くなります。勿論これによつて舞台が見えにくくなるというようなことはなく、むしろこうして雰囲気を一層効果的にする為のものとされます。観衆のざわめきが一段と大きくなつて、中には口笛を吹いて催促する者もあります。間もなくスルスルと幕が左右に分れました。同時にレコードが何となく煽情的な音楽を鳴らし始めます。舞台の向つて左から中国人の女が一人、続いて一人また一人現れます。都合三人、いずれも皆文字通り全

裸体で乳房はもとよりその腰部に至るまで余す所無く露出して居ります。即ち此所ではいわゆるストリップ・ショウとは異つて、最初からストリップすべき何物をも身に着けてはいないのです。彼女等は音楽に合せて、ゆるやかに舞台の上を輪を画くようにして廻ります。それは踊りと言うよりも、唯何なく手足を動かしているといつた感じで、動作そのものからは余り淫猥な印象を受けることは少ないのですが、何としても一番接近した時にはすぐ目の前にまで彼女等の裸体があらわれるのですから、嫌でもその肉体の隅々にまで、じかにお目にかゝることになります。三人の女が舞台へ出て来た途端に、私はそのいずれもが身体の………ことを発見したのですが、一体、中国の女は肌の美しいことに定評が有りますが、それは同時に、頭髮を除く身体の部分に極めて毛の少いことを意味するものなのです。売笑婦その他私の接した中国女性の中では、その六七割までが無毛若しくはそれに近いものでありました。夏など電車に乗つて掛けて居りますと、その前へよく若い女が来て吊り革につかまることがあります。御承知の如く、中国服には袖が無くて肩の部分から腕が露出していますから、坐つ

ているちようど目の前に女の腋の下が現れることゝなつて、まことにどうも少々エロチックなのですが、こうした際にもその部分に毛らしい毛を見かけることは殆んど稀れなものでした。

レコードが一曲終ると彼女等は出て来た所へ姿を消しましたが、続いてまた反対の側から別の女が三人現れます。そして前と同じように身体を動かして舞台を廻るのですが、この女等もすべて全裸体であることは申すまでもありません。彼女等の肉体はいずれも中国人としては立派な方で、肉付きもよく胸や腰も相当よく発育していました。

一方、観客の様子はどうかと言いますと、日本のストリップ劇場に於けるそれとは違つて、実ににぎやかなものです。盛んに彼女等に向つて声を掛けたり、口笛を吹いたり、中には思わず吹き出すような奇声を発する者さえあります。女等はそれに対しては、笑んでゐる者もあれば、まだ新米らしく表情も身体つきも共に固くなつてゐる者もいます。これもレコードが一曲すむと引き上げますが、次には先刻の三人と共に、舞台の左右から合同して現れました。そして、此の最後の場面では腰も一段と大きく振り、随所で脚を十分開

いたりして、先程よりもはるかに大胆な踊りを行います。或は二人づゝ組になつて、全裸の女同士が共に触れ合い抱擁するかと思えば、全員が横に一列となり、手を組んで最前部まで出て来ると、客席の方を向いたまゝ大きく左右に腰を振つたりします。もうこうなると観衆の熱狂ぶりは大変なもので、終つて彼女等が引込んでしまつた後でも容易には納まりません。プログラムは全部終了した筈ですが誰一人席を立とうとはせずに、更に女等の出場を要求して止まないのです。すると間もなく此の熱烈なる要望に應えて、一旦退場した女等が全裸体のまゝで再び登場し、全員で微笑しながら盛んに観衆に向つて愛嬌をふり

まきます。こうしたアンコールが二三度続けで行われると、ようやく観衆は満足したかの如くに客席を立ち上るのであります(未完)

お願い

本誌執筆者並に投稿者の住所氏名に關しての御照会が未だにあとを断ちませんが、右は従来度々申し上げ居り、ます通り一切御返事出来かねます故左様御承知願います。尚執筆者並に投稿者に対する私信の転送はその旨明記してあるもの以外は御取計らいかねます。直接発行所御訪問の件も毎号固くお断りしてゐるにも拘らず面会の強要をされる方がありますので困つて居ります。何卒御訪問下さらないようお願い致します。

集眞女の縛られた

大好評！ 全部未発表の素晴らしい特寫成る

只今分譲の第七篇(六十一集—七十集)第八篇(七十一集—八十集)は多数読者の要望を取り入れて特別に會員分譲用として最近撮映したもので、すべて未発表の粒選りでありますから、どうぞ御安心の上御申込下さい。

海老責、柱しぼり、猿ぐつわ、ローソク、高手小手、ストッキング、長襦袢、十字竿、棒責め、拷問台、ハシゴ、吊り上げ、逆高手、アグラ、芋虫、ムシロ、折檻、腰巻、逆立、荒縄等、豊満な裸女の肌に固く喰い込んだ縄の緊迫感はずつと皆様のお氣にいらる事と存じます。多少に拘らずお申込みをお待ちします。

第五篇、第六篇も併せて分譲中です。一集分五枚一組200円(送共)

大阪府堺区内

曙書房 代理部
振替大阪第34956番

「奴隷の安」の記 中野安太郎



長い間、お便りもせず申し訳ありません。
「奇ク」益々御発展、お喜び申し上げます。

昨年は私の下手な文章を発表して下さいまして、本当に有りがとう御座居ました。今頃御礼なんか申し上げて変ですけど、私事の取込事があった為、今迄お手紙差し上げられなかった失礼を何卒お許し下さい。

昨年私が体験致しました事を書いて見ましたから御笑覧下さい。原稿用紙が無いので便箋なんか書いて済みません。発表されるのでしたら、適当に直して題名をつけて下さい。手紙の人、登代子様には一応お断り致しました。最近良く「奇ク」に出している森山美歌さんです。今でも時々お逢い致しますが私が文章がもつと上手なら一篇のロマンにするのですが、住所移転致しました。お便り下さるのでしたら、封筒に書いてある所にお願

い致します

箕田先生御机下

中野安太郎

初夏のすがすがしい或る日、一日の勤めを終えた私が、家に帰ると、一通の手紙が届いて居た。差出人に心当たりが無いので不思議に思つて、封を切つて読みだした。私は思わず顔が赤くなり、胸がドキ／＼してしまつた。一説は上の空、もう一度ゆっくり読み返す。

「安太郎、御飯だよ、何をしているの、さつきから呼んでいるのに」

母が夕飯の支度をして、何度も声をかけたらしいが、私は夢中で手紙を読んで居たので聞こえなかつたらしい。夕飯は、何を食べて居るのか判らない位味が無い。私は一杯でやめて自室に入り、又手紙を読み返す。

中野太郎様貴方の「奇ク」に出ていた読者通信を読みましたので、早速お便り致します。此の様に、貴方にお手紙を差し上げる事は、取りも直さず私が、貴方のお望みのサジズムの女だからなの。私は貴方が女に虐げられて喜ぶマゾヒズムの男性だと思いますので、初めてお便りするのですけど、もう私と関係のある仲の気持で書きたい。私は、たとえ手紙でも、男をもて遊び、虐げたい凄女なのよ。

私は二十六才で、今一人の彼氏が居ます。彼氏の事をかりにAと呼ぶわ。Aは私の奴隷です。二人きりの時は、私はAをけたものとして扱います。Aを高手小手にロープで縛り上げる。肉に喰込むロープ。苦しがるA、男が苦しみ悶える姿つて、とても素晴らしいわ、こんなAを私は鞭でビシ／＼打ち、蹴り飛ば

男性MASO

特集

し踏みつけるのよ。こんなのは序の口よ。或るホテルの一室が、私達の秘密の部屋なの。私は、ソファアーに糸まとわぬ裸で寝そべつて、Aの苦しむのを見るの。又Aを後手にして赤い紐で縛り、その紐をお尻の方から出しつて一端を私が持つて彼を歩かせるの、お尻を蹴り飛ばし、ビシ／＼鞭打つの。Aの恰好たらないわ、そして、堪えなくなるとAに組み付いてひっくり返し、ぐた／＼に踏みつかみ付き、つねり上げ、ヒイ／＼悲鳴を上げると、所構わずビシ／＼打ちのめすの。そしてAの顔の上に足を乗せ、足をなめさすのよ。どう素敵でしょう。貴方興奮して？勿論もつと／＼いろんな事するわ。男を責め、苦しめ、残虐の限りを尽くして拷問するのつて、私堪らないわ。

此の頃、A一人では物足りなくなつたの、沢山のきれいな裸の男と一緒に苦しめたいの。Aも他に男か女が居たらいいのにつて云うの。若し貴方が私の奴隷になったら面白いわ、替り番に責めたり、二人一緒に縛つて責めたり、貴方は………のよ。………なければうんと打つてやる。貴方は、身体はお丈夫かしら、私の拷問は凄

いから丈夫でなければ資格無しよ。でも私達是不潔な事や傷つけたり、明日の仕事に差支える様な事はしません。あくまでも、なやましく、ロマンチックな変態遊戯にふけるのです。私がうんとお金持だつたら、素晴らしい拷問部屋を作るわ、そして貴方を飼つてやる。犬小屋の様なのを作つて、貴方は首に輪をはめられて入れられる。蒲団なんか無いわよ。私や、女中の汚れた下着の中で寝るのよ。女の奴隷が三人居て、貴方の係りなの。此の三人はみんな素敵な肉体美で、豊富な脂ぎつた年増の女、此の三人が貴女の拷問係り時々引きずり出しては拷問部屋で色々拷問するの。三人の女が私の命令で貴方を鞭打つのよ。

私がお便所へ行きたくなると三人の女がお前を引きづつて、便器の所へ連れて行き、顔を押しつけて動かない様にし、………をするのよ。全部貴方は飲むのよ。終つたらきれいに………の。………が下手だと蹴とばして「………が下手だつたからお仕置きし」と女達に命ずるの、貴方が苦しめられ、責められてヒイ／＼泣き叫ぶ苦しみのうめき声、私堪らないわ、貴方は人間で無いから、人の言葉や動作をしてはいけないの、少しでも破

つたら、それこそ一番ひどい拷問よ。食事は皆の残飯、勿論手なんか使つては駄目、犬の様に食べるのよ。どうこんなのは、もし私の奴隷になりたければ誓約書を書いて送りなさい。今度の土曜日K駅で待つています。手にハンカチを持つて居る事。もし来なければ切れ切りよ。

登代子より

安太郎様

手紙には以上の事が書いてあつた。奇譚クラブに出した通信にこんな手紙が来るなんて、嬉しくなつてしまつた。とう／＼奇々／＼のおかげで理想の女性にめぐり逢えた。勿論僕はマゾセストさ。だけど、今迄本当に、女性に虐められた事は無い。皆、空想の産物。本当に虐められたらどんなかしら、良い気持ちかしら、痛くて堪らないかしら、絶好のチャンス、土曜日には出掛けて見よう。でも不安だ。もし傷でも付けられたら、風呂へも行けない。しかし此の機会を逃したら、もう私の希望は達せられないかも知れない、どうなつても構わないから行つて見よう、それから土曜日迄の待遠しかつた事、仕事をして居ても手につかない。其の日は、朝からワク／＼して時間の来るのを待ち、K駅へ六時に行く。

まだそれらしい人は来ていない様だ。

あんな手紙を呉れる女性は、一体どんな人かしら、肥つていて、みにくい女だつたらどうしよう。僕の理想は飽く迄、近代的な素晴らしい人だ。もし変な人だつたら逃げてしまおうか、逃げられなければどうしよう。逢わずに帰つた方が良いかしら、中々現われないのでイテ／＼してしまふ。

「待つた？」

その時、後から声を掛けられる。振り向くと、小柄で上品な人が

立つて居る。この人か
思いがけず奇麗な人なので嬉しくなる。だ
けど少し羞ずかしくて、顔も良く見られない。

一人の男の人が一緒に居る。此の人がAさんだ。立派な体格の人である。

「とにかく、そのホテルへ行きましょう」

K 駅のすぐ前のホテルへ三人で入る。こ
うは云う所大抵二人で来る所なのに三人で変に思
われないかしらなどと思ひ乍ら一室へ、洋間かと思つたら日本間、後で判つたのだが日



本間の方が床柱が有つたり何かと便利な様だ
「私が登代子よ。こちらは彼氏の啓太。これ
から私の事は名前では駄目よ。必ず女
神様つて云うのよ。私はお前の事、安つて云
うわよ。お前は私の奴隷だから何んでも云う
事きくのよ。」

と云つて二人は風呂へ出て行つてしまふ。

一人残された私は色々な責写真置いて行つたので見ている。今迄見た事も無い凄いのばかりだ、裸の女を机に縛りつけ、ローソクに

火を付けたのを……何人も女が縛られ、責められている写真、もう私はすっかり圧倒されてしまふ。間もなく二人は帰つて来て「安

も風呂へ行きなさい。よく洗つて奇麗にしなければ駄目よ」

私は別に風呂へ入りたい

くもなかつたが仕方なく行く。あつさり洗つて帰ると、アツとびつくりしてしまふ。啓太

氏は、裸にされ縛られころがされている。女

神様も一糸まとわぬ姿「安も裸になるのよ」

私は羞ずかしくて、もじ／＼していると「何

をして居るのよ」と云つて、彼女に着物を脱がされ、裸にされてしまふ。「縛るから手を後にしなさい」

手を後にすると、実に上手に縛り上げてしまふ。身動きしてもかえつて縄は体に喰込むばかり。足も縛られ、転がされると、いきなり鞭が所きらわらず飛んで来る。私は思わずうなづいてしまふ。私は長い間空想して居た事が実現した。一体こんな事が良いのか、痛いけれどそれ程苦しくもない。別に良い気持でもない。女神様の鞭は音を立て、私の体を打つ次第に強さが増してくる。

「今度は安は見ているのよ」と云つて彼女は私を引づつて、柱に立たせて、柱に縛りつけられてしまふ。

「啓太の苦しむのを見るの、見ていないと承知しないよ。」と云つて、私の目の前で彼を打つ、蹴る、つねる、彼が悲鳴を上げようが構わず虐める。「もつと打つて呉れ、女神様もつと強く」驚いた事には彼はこんな事を云う。私はもう見て居られないので、思わず下を向いてしまふ。

「安、どうして見ないの」

と云つて又一鞭、痛さに体をよじると体が凸凹の柱にこすられて余けい痛い。一時間位

男性MASO特集

彼氏が責められて居たのだろうか「今度は安の番よ」と云つて私を転がし、啓太氏が柱に縛りつけられる。ところがされた私の顔の上へ彼女は足を乗せ、「足をなめるのよ」私はベロ／＼彼女の足をなめる。何という浅間しい事だろう。「もつと上手になめるんだよ」と云つてぎゅう／＼踏みつける。鼻が痛くてひん曲りそうだ。それが終わると顔の上にべつたり坐る。私はこんな事をした事が無いから下手なのか「下手だよ」と云つては、鞭で打つ

つた恋人同志だろう。結局今迄のは前戯だったのか、私の事など忘れたかの様な二人。間もなく私も縄をほどかれる。何んだもうおしまいか、私は責められていた時は早く終わってくれと願っていたのに、終りかと思うと何だか物足りない気持ちがある。三人で寝そべつて雑談、今迄の事なんかケロリと忘れて話合う。

「どうだった、安？」

私はきかれる。「もつと凄いい事されると思つて、恐かつたけど、何だか物足りない気がします」

「だって、今日が始めてだもの、初めからひどい事したら、安はびつくりすると思つて、今日は加減したのよ。今度はうんと虐めてやるわ」

ホテルを出てから別れて一人家路につく。

今迄空想していた事は、こんな事だったのか空想していた程の事は無いじゃないか、自由な空想の方が楽しいではないか、自分を虐めた方が良いではないか。私は何だかさびしくなつて一人で酒場へ行き酒を飲み出した。もうこんな事は止そう。つまらない事だ。ノーマルな自分に返えろ。私はこう自分に云いきかせて家に帰り床に就く。今日の出来事が

何だか甘く思い出されて眠れない。二、三日ぼんやりしてしまつて、仕事に付かない。だん／＼日がたつと先日一夜が何んとなくなやましく、思い出され、もう一度打たれたいなどと考える。女神様のあの眼、それ程美人とは思われないけれど、あの男を魅力のとりこにする様な眼だけは忘れられない。もう一度縛られ、打たれたい。其の日は家に帰ると、彼女から手紙が来ている。

奴隷の安、此の間はどうだった、始めてから加減したけどもつと虐められたいかい。今度は、彼氏は呼ばずにお前と二人で、お前を虐めてやるよ。来週土曜にY駅で待つて居る事。お前をどんなにして虐めようかと毎日考えているよ。海老責めでも何んでもやつてやるよ。楽しみにして居るんだよ、

女神より

奴隷の安へ

私は、行くまいと思つて居たのに約束の土曜日が来ると、又出掛けてしまつた其の日の事は又次の機会に書くことにするが、とにかく私はこの身をとるかすような女神様の魅力にすっかり捉らわれてしまつた。



縛られた妻“以前”

早川 新一郎

【前書】

私は昨年十月号に「縛られた妻」と題して自分の妻幸子の告白を聞いたまゝ、あからさまに載せました。その時お約束したように私は更に幸子の前身を根堀葉堀聞き出して、こゝに書いてみました。普通の夫であつたら自分の妻の前身、しかも娼妓に売られたり、二十も年上の前夫にさんく弄ばれたりした事を他人から聞くのさへ嫌で嫌で仕方がないでしょうに、私はそれを細々と自分の妻の口から直接聞き出すのが何んとも云えない強い魅力なのです。何んと云いますか、胸や腸がにくりかえるような快感なのです。私は妻が少しでも言い洩つたりしたら、後手に雁字がらめに縛り上げて更に真実を白状するように強要します、そして他の男に縛られたり弄ばれたりした事を告白した時は、殴つたり蹴つたりしていじめるのです。それが又堪らない程私にとつては嬉しいのです。だからこの文章もそんなことをして私が妻の幸子から聞き出した告白文なのですから、そのおつもりでお読み下さい。

(一)

幸子の父が、僅か三日の患いで、ボツクリ死んだのは大東亜戦争も末期の昭和二十年、幸子の二十一の春だつた。幸子の連命はこの日を境にして全く一変してしまつた。

父が長年苦勞して残していった貯えも、戦後のあの混乱した社会では、何の役にも立たなかつた。頼みにする親類とても無く、荒れ狂う世の荒波は、忽ち幸子一家をおびやかした始めた。

「せめて弟が成人するまでは……」と幸子は悲壮な決意を固めると、青春の夢も捨て、病身の母を助けて、必死になつて働き始めた。重いリュックを背負つて買い出しにもいった。指も凍るような冬の夜も、遅くまでミシンを踏み続けていた。

配給の米代にも事欠く窮乏の裡に、何時しか二十年も暮れて、二十二年の春、思いがけない縁談が幸子の一家



に持ち込まれてきた。

相手は戸田という今年四十才になるブローカーで、五年前に妻を亡くし、子供も無く、以後はずっと独り暮らしを続けていたが、年も四十を越せば矢張り安定した家庭の温かさが恋しくなり、その白羽の矢が幸子に立てられた、という訳である。しかも、結婚すれば、幸子の一家の面倒は、十二分にみる、という口上がわざわざつけ加えられてあつた。

「いくら面倒を見てもらつても、四十じゃ……」幸子の母は最初から反対してとりあわなかつた。然し、幸子にしてみれば、今の一家の窮状や、弟妹の将来を考えると、この条件をそう単に見逃すことも出来なかつた。このままゆけばどうなることやら、せめて弟には教育もつけてやり度いし、……幸子とはつおいつ思案にくれていた。

勿論幸子とて、青春の夢はあつた。しかし命をかけて想う人は、遠い太平洋の彼方に消えさつて、未だに何の消息もなかつた。

「そうだ、私さえ辛抱すれば……」

幸子はそう決心すると、さすがにおさえ難い一抹の哀愁を胸に秘して、進んでこの縁談にのりかかつていったやがて内輪だけの、簡単な式を挙げると、二人は鴨川べりの一隅に、ささやかな家をもつた。

ブローカーというだけで、戸田が何をしているのか、幸子は、くわしい事はわからなかつたが、月々の収入は

当時としては相当な額にのぼつていた。何年ぶりかで化粧をした幸子は、僅かの間に、見違える程美しくなっている。幸子にとつても、又幸子の一家にとつても、久しぶりに明るい日々が続いた。

しかし、世の中が安定してくるにつれて、ブローカーの暗躍する余地は段々せばめられていった。戸田のあせりが幸子の目にもはつきり見え出した頃、戸田は、何か法の下をくぐるような荒仕事に手を出し始めたらしく、そう思えば、出入りする男達の入相も、何だか一くせありそうな連中ばかりになつていた。

重苦しい不安が、幸子の胸に立ち始めた時、さらに悪い報せが幸子の耳に入つてきた。それは、死んだと聞かされていた戸田の妻が、戸籍もそのまま、今も立派に岡山に住んでいる、ということである。しかも戸田には、その他、少く共三名以上の女が各地にいるということであつた。

怒りと悲しみ、不安と失望、しかしこれをどう処理すべきか、世間知らずの純真な幸子には、とても考えつけるものではなかつた。くどくど言い訳をする戸田の言葉を信じて、ただじつと辛抱するより他に、幸子はどうするすることも出来なかつた。

(二)

戸田が顔中血だらけになつて、家の中に転げ込んできたのは二十四年正月七日のことであつた。驚いた幸子は



あわてて戸田を介抱しながら、虫の知らせか、何か不吉な予感に襲われた。

「黒部の子分共にやられたんだ。畜生、どうするか覚えいやがれ」

戸田はしきりに口では強がっていたが、恐怖と不安におののいているさまは、幸子にもよくわかった。

次の日になって、事の真相が幸子にも漸くわかり出した。

黒部という男が、戸田とどのような関係にあるのかはよくわからなかったが、戸田等が常に親方と呼んでいるところをみても、普通の人間でないことは、幸子にもよくわかつていた。家にも二、三度来たことがあり、幸子も知っていた、三十五、六のデブプリ肥えた立派な様子はしているが何か薄気味の悪い、三国人タイプの男であった。その黒部の持つていた、何とかいう、アチラ製の品物を、戸田がこの暮に、自分の商売の穴うめのため、無断で流用したところ、運悪くそれが手違いとなり、戻すに戻せず、あせつているうち、遂に発見されてしまった。そしてともかく金に換算して十万近くを、今日中にも黒部に渡さねば大変なことになるというのである。

戸田は必死になって金策に走り廻った。しかしすでに落目になつてゐる戸田に、当時十万もの大金は、容易に集まる筈もなかった。黒部の子分達の脅迫は、其後一層露骨になつてきた。或る時は土足のまゝ奥座敷まで踏み込み

「おい、十万にも二十万にもなろうという、大したお宝がほら、お前のすぐ横に坐つてゐるじゃねえか」とジロリと幸子の方をにらみつけたり、又或る時には

「おい、仲間が裏切つても、その女にや随分入れ上げてゐるつていうじゃねえか」と嫌味たつぷりに凄味をきかせたりした。

今から思えばタイアイもないおどし文句であるが、当時の幸子にとつては唯恐ろしさで一杯、どうする術もなく身の不運を嘆いては薄氷を踏むような思いで毎日を送っていた。

忘れもしない二月の初め、ここ二、三日家を空けていた戸田が、青い顔をして帰つてきた。

「明日中にはつきりせにや、何をするか、わからねえつていつてやがる」

冷えた番茶をゴクゴク飲みながら、戸田はそんなことを独り言のように言い出した。

「来るものがとうとう来た」幸子は心も凍るおもいで戸田の次の言葉を待つていた。

「ところがよ、金の方は、もう十日もすりや確実に入るという見通しがついてるんだ」

「それ本当？」

「うん、そりや今度こそは大丈夫だ。問題は、黒部の方を、どうたらかして十日待たすかだ。それに、金の方も、確実とはいえ、このまゝ目を離していたんじやどうなるか、わかつたもんでもねえし」



それから戸田は、商売の内容をながながとつともらしく説明した。そして

「そんな訳だから、俺あ、今からでも一寸東京へ行つて来ようと思うんだ。だからお前、御苦労だが明日、黒部の家にいつて、何とか頼んでくれねえかなあ」

戸田は幸子の心の動きを、じつと観察するように、彼女の顔を見つめていた。純真な幸子は、これでやつと何か明るい見通しが出来たように思えて、ともかくホツとした。そして、お金は今度こそ大丈夫らしいし、私もこゝで一役頑張つて、何とか十日待つてもらわねば、と思ひ、黒部と会う決心をした。

戸田は複雑な表情で、しきりに

「すまん、すまん」と繰り返していたが、突然

「しばらくのお別れだ」というと、氣違ひのようになつて、幸子を抱きすくめた。

「いやあ、それどこじやないじやないの」

「黒部にこんなことされたら、どうする、なあ、こんなこと……」

しかし、幸子はもう戸田のそんなつぶやきは少しも耳には入らなかつた。

(三)

翌日、やつと決心して、おずおず訪ねていつた幸子に対し、黒部の歓待ぶりは驚くばかりであつた。一度は土足で踏み込んできた子分達が、前とはうつつて變つて、お

世辞笑いさえ浮べながら幸子を奥の一間に招じ入れた。

お茶が出、お菓子が出て、待つ間もなく黒部が入つてきた。幸子は咽喉がかすれて、声も出なかつたが、家を出る時、さんざ練習しておいた詫び口上を、ともかくのべ終ると、何遍も頭を下げた。

「いやあ、いいんだよ、いいんだよ」

黒部は、わざと鷹揚に大きく笑つた。

幸子は、それを見て、やつと我にかえり、ホツと胸をなでおろした。ところが、黒部は、しばらくすると、今度は、全く思ひもよらぬことをいい出した。

「特別に良い部屋を準備しておいたから、まあ遠慮せずに、旅館にでもいつて保養しているつもりでな、なに十日位、あつという間だよ」

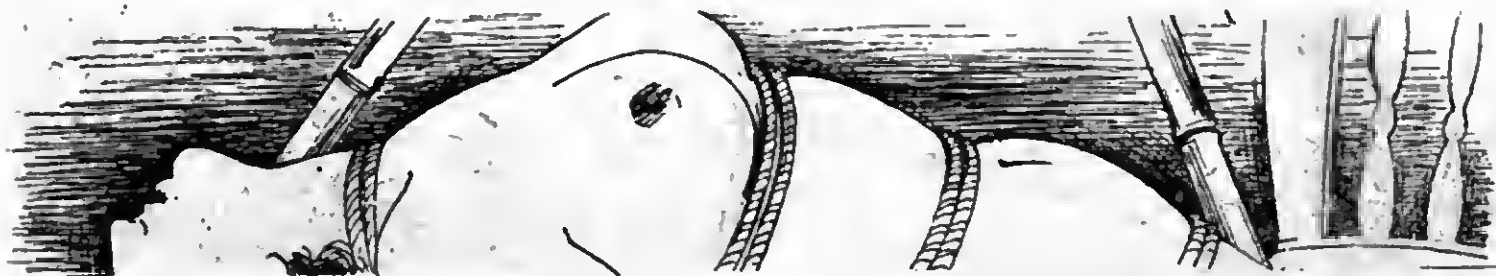
一瞬、幸子は、頭の血が一時に凍つたように感じ、クラクラ目まいがした。それでも、もしや聞き違ひではないかと

「えつ……」と聞き返した。

その様子を、じつと楽しむように眺めていた黒部は、またしても

「ハッハッハッハッ」とひとしきり大きく笑うと

「何だ、戸田の奴、何もいわずに寄こしたのか、仕様のねえ野郎だ、しかしまあ、これも約束事仲間の仁義だ」といいながら、一枚の紙を取り出して幸子の前に掲げた。——妻、幸子の身柄、お預け致すべく……なおこの誓約に違背したる節は、妻幸子の身柄、どのように御処



置下さるうと……

他の文句は何も見えなかった。ただこの部分だけが、焼けつくように、幸子の眼を突きさした。そして、まわりの物が、ぐるぐる廻り出すのを、頭の何処かで、ぼんやり感じると、幸子は、畳の上にうつ伏してしまった。

(四)

二、三日は夢中のうちに過ぎていった。幸子の扱いは依然として鄭重で、かえって何だか薄気味悪い位であった。

興奮と恐怖から、漸く抜け出した幸子はやつと今自分の置かれている立場を考え出した。

「もしや、お金が出来なかったら」疑うことを知らぬ幸子は、今になつても、まだ戸田が、自分のために、十万円作ろうと、東京で、苦勞して走り廻っているものと思ひ込んでいた。それにしても、もしや今度も、お金が出来ねば……この仲間制裁が、どんなものであるかは、幸子も、戸田との生活の間に、身にしてみる程見聞していた。どうなるのかしら、と思えば、幸子は恐ろしい予感に、全く生きた心持もなかった。

十日の夜になつても、戸田からは何の便りもなかった。十二時過ぎ、がっかり床の中に横たわつた幸子は容易に寝つかれなかった。

「いや予定が一寸延びただけだ。明日にでも、きつと迎えに来てくれる」何とか、自分でそう思ひ込もうと努力

してみたが、次から次へと湧きおこる不安は消すすべもなかった。そして身も心も狂いそうになつた幸子は、思はず夜着に顔を埋め、両手で耳をおおつてしつかり目を閉じた。

「幸子……幸子……」

確かに戸田の声だ。幸子は夢の中でそう感じると、ハッとして床の上に起き上つた。

「矢つ張り来てくれたのね。……でもどうしてこんな真夜中に、そう、今帰つたのね、いいわ、今すぐ行くから」幸子はそれが夢か真か、確しかめる暇もなく、フラフラと、そのまま庭下駄をつつかけて、庭に走り出た。

「この野郎」

突然黒い影が横から飛び出したと思う途端幸子は足をすくわれて地面に倒れていた。

「大方こんなことだろうと思つたが……やい、歩かねえか」

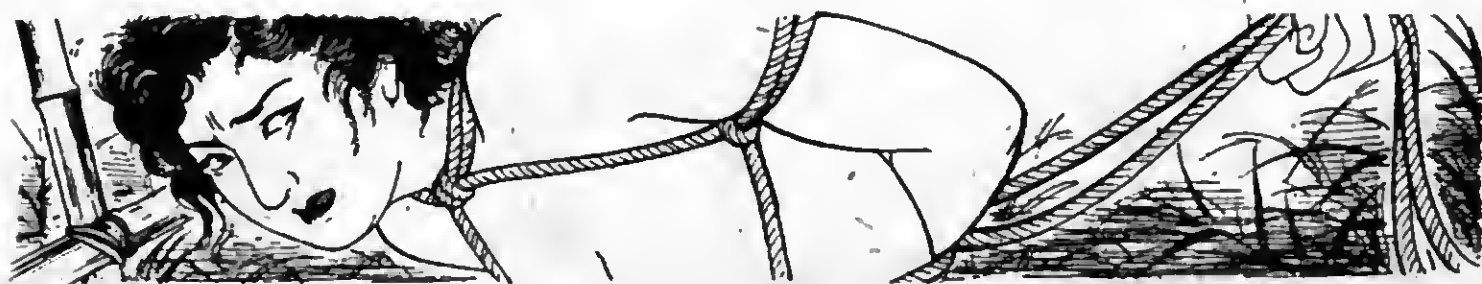
忽ち二、三人の男に腕をねじ上げられた幸子は、腰の辺りを、こつき廻されながら、もとの座敷に、引きずり込まれた。

座敷には、黒部が坐つていた。

「決して逃げるなんて……そんな……どんなことをしてもお詫びしますから、今日は、どうかゆるして……」

幸子の必死の弁解を聞いているのか、聞かないのか、黒部は黙つて煙草をふかし続けていた。そして

「おい、今度は逃げねえように、ふん縛つて、あとで俺



の部屋にほり込んだ。余りいじめるんじやねえぞ」
 そういうと、黒部はさつさと外に出ていった。

幸子は忽ちよつてたかつて手荒く、二重三重に縄をかけた。

「甘くしてりや、つけあがつて、何時までもお客さんじやねえんだぞ」

誰かが頬をはり飛ばしてつき転がした。

「待つてました、とくらあ。どうでい、こゝろ女の縛られたつてえのは、こたえられねえや。」

「よだれをたらすんじやあねえよ、……だらしのねえ野郎だ」

「この首すじ、おつぱい、畜生、食いちぎつてやろうか」

子分達は、好き放題に幸子の身体を廻りまわした挙句かつぎ上げて二階の黒部の部屋にほり込んだ。ここでも、夜どうし黒部から、いじめ抜かれた幸子は明方近く目隠しをされ、猿轡をかまされると、そのまゝ箱におしこまれて、この家を運び出された

(五)

ガタリ、と箱を下ろすと、男達はドカドカと外に出ていった。

この先、どうされるのか、幸子は、余りのことに、考える力も失せて、ぐつたりと目を閉じていた。

やがて、男と女の話し声が近ずいてきた。男の声は黒

部に違いなかった。

「今度のはちと上玉だからな、……しつかり教育してやんな」

「フフフ、相変らず腕がいいのね、でもあんた、助平心出してんじやない」

「ハハハハッ、よせやい、俺にやあお前という……」

後が言葉にならずやがて、男が出てゆくと、ガタリとふたがはずされて、幸子は外に引き出された。

「さあ窮屈だつたでしより、もういいのよ、ここが貴女のお部屋、どう、一寸見て御覧」

そう言われて、幸子はこわごわ周囲を見廻わした。部屋は普通の六畳の座敷だつた。

「何もそんなに心配することないわよ、住めば都、今に

いいこと教えてあげるわよ、……あら、貴女、お腹減つて

るでしより、今お食事持つてくるわ、それから、お掃除

除道具に、便器もね、フフフ、いい忘れたけど、私、

慶子つていうの、じや一寸待つててね」

その女は、意味ありげな笑いを残して部屋を出ていった、部屋の外からカチリと錠をかける音が、無気味に聞えるのを幸子は、放心したように、ぼんやりと聞いていた。

こうして、奇怪な、この屋敷に於ける幸子の生活が始められた。

翌朝、明け方近くなつて、やつとウトウトしたと思ふと、もう慶子に引きずり起された。



「さあ朝の散歩よ」

そう言つて慶子を取り出したのは、革で作つた手錠であつた。

「手を後ろに廻わして、何をぐずぐずしてんのさ、ここじやお部屋を出る時は、何時もこれをはめるのよ」

慶子は幸子の両手を後に廻わすと、馴れた手つきで手錠をかけ、さらに縄を取り出してお乳の上からぐるぐる巻きつけた。そして、今度は前に廻つて、腰に手を入れ、無雑作に幸子の腰巻を抜き取つてしまつた。

「ここじや長襦袢一枚だけよ、さあ、外に出て」幸子は縄尻をとられて外に出ると、そのまま庭の中をぐるぐる引き廻された。

「もつと早く歩きなさいよ、さあ、この柵をまたぐんだよ、何してんのよ、あそう、裾が邪魔になるのね、じやまたぎ易いように、こうしたげるわ」

慶子は、矢庭に裾に手をかけると、くるくると、腰の上までまくり上げてしまつた。「何が恥しいのよ、子供じやあるまいし、さあ立つて御覧」

ぐいと縄尻を引かれると、幸子は、しびれるような腕の痛さに、よろよろと立ち上つた。

「貴女、こうしてみると、随分いい身体ね」

慶子は、そんなことをいいながら、幸子のお尻をビシヤビシヤ叩き、尙も引き廻わし、一時間近くもたつてから、やつと部屋に連れ戻つた。

幸子に課された日課は、この朝夕恥しい散歩だけでは

なかつた、黒部が来る日は幸子は必ず二人の前に引き出された。そして二人の前であらゆる方法で責められ、なぐさまれた。二人は次々と、新しい手段や、色々な器材を考案しては、幸子をもてあそんだ。そして幸子が苦痛に身体をよじり思はず洩らす悲鳴を聞くと、二人は、それを肴に楽しむのであつた。

しかし、これは、幸子に課された試練の、まだほんの序幕に過ぎなかつた。まだまだ恐ろしい地獄の責苦が、幸子の白い肉体を待ち受けていた。幸子がこの家へ連れて来られてからもあれ以来、夫の戸田は一度も顔を見せなかつた。もうすっかり諦めきつた彼女は自分のこの不幸な運命を少しでも楽しく考えたいと思うようになってた。恥しめも痛めつけもさして恐ろしくなくなつていた。そして一度は戸田に買われた自分の身体がこの黒部という男に売られてしまつただけなのだと思つた。

(六)

廿四年も春になつた。幸子の身体から十萬円の金を産み出すため黒部は先ず銀閣寺裏の別荘地域で秘かに催すエロショーに出演さすことにした。観客層は密輸とかドル買い進駐軍物資の闇取引、麻薬の密売買に狂奔している第三国人が殆んどであつた。そのショーは幸子をヒロインとして全裸のまゝ後手に縛つて落葉の中に埋めそして一匹の大きな犬がその落葉をかき分けて逃げ廻る彼女を追ひ廻すといつたものであつた。それに引続いて毛皮を



まとつた男の出場、そして人間の考え得る限りを尽した淫靡な仕草……。

「家の事は心配するな、月々二万円は送っているから」

この黒部の言葉が幸子の唯一つの慰めであつた。――

母や弟の為に私さえ死んだつもりになればいいんだ。あんな戸田に欺された自分が悪かつた、今更どうもがいて見ても仕様がな。それより少しでもお母さんらを楽に出来れば――運命に逆うことを知らぬ純真な彼女はたゞこの氣持一つで毎日に耐え続けていた。

「さあ支度するのよ」

今日も入ってくるなり慶子はそう言つて幸子の二の腕をつかんだ。いつもの事ながら幸子はビクツとして身をすくめた。

「まあ、この人、いつまで経つてもいじらいわねえ」

幸子のそんな様子を楽しんでいた慶子は、やがて、たつた一枚しか許されない幸子の長襦袢を、アツという間にはぎ取つてしまつた。そんな時、慶子は、まるで幸子を虐げることが勸めであるかのように、ことさらに荒々しく取扱つた。

「今日は何をされるのだろう」

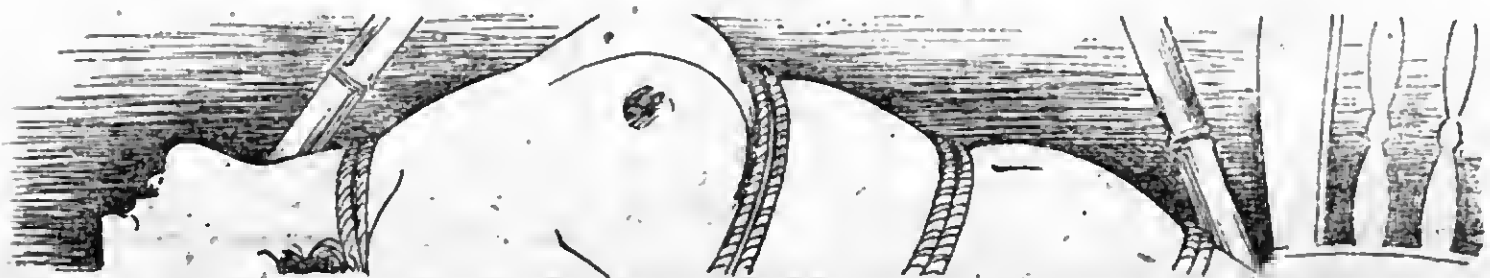
不安におびえながら、幸子が連れ込まれたのは二階の間だつた。

外は何時のまにか、全く夏景色になつていた。遠く比叡、比良の山々が、美しくかすみ、遙か彼方を走つていく道路には、行き交う人達の、白い夏姿が、美しく反射

していた。ムーンとする夏の大氣が、素膚の全身に直接ふれると、幸子は、こんな恰好で縛られて隠すすべもない素裸のまま、あの白日の戸外に、つき出されて、立たされている自分自身を感じて恥かしいような、晴れがましいような感情が、ジーンと全身に伝わるのを感じて、胸は、妖しく、ときめき始めた。

夏が過ぎるとシヨもすつかり飽きられてしまつて、幸子は再び慶子の家へ閉じ込められてしまつて、外へも出して貰えなかつた。そして九月も或る夕方、今迄ついぞ姿を見せなかつた黒部が突然珍しく背広姿で現れて、慶子の酌で酒を飲んでその晩は泊つてその翌朝、幸子には特に念入りに化粧させて三人で市内へ連れ立つて出た何にも知らない幸子は久方ぶりの外出に心もときめくように嬉しかつた。

宮川町の遊廓の××樓の裏口から応接間へ通されて幸子は屋過ぎるまでそのまま放つて置かれた。黒部も慶子ももう二度と幸子の前に姿を現わさなかつた。それから一週間目、彼女は黒部に欺かれてこゝへ売られた事を知らされた。そして家へ月々に送つてくれるという二万円の嘘も、然し所詮前夫の戸田から黒部へ売られた身体であつてみれば今又身売りされるのも仕方のないことであつた。こゝで彼女は言うに言われない種々な惨虐なめにあつたのだが、それは「縛られた妻」に書いた通りなので割愛しておく。





盲めしいたる手て

藤 安 節 子

が、小野田とわたしは写真結婚をしたのである。

何故、写真結婚なぞという愚劣な結婚をしたかと云えば、戦前の日本は、多くの殖民地を持つており、又、南米ブラジルをはじめ、移民もなかなかさかんであつた。いわゆる「大陸の花嫁」となる場合、この地理的な距離の関係で、見合いも思うように出来ず、写真結婚はざらであつた。

小野田は当時、新京に居住して、軍の要職に就いていた関係上、職務多忙で、結婚するにも帰国が困難だつたのである。わたしも又、知人ひとりいない満洲くんだりまで、独身見合いに出かけることも出来ず、仲人格の叔母の言葉のみを信じて、たいてい身元調査もせず、旬日のうちに結婚の決意をしてしまつたのである。

小野田は叔母の知り合い先の男であるが、叔母はこれまで、京城に住んでいたのので、わたしは小野田の噂をすら、耳にしたことはなく、ぜんぜん未知の男であつた。

わたしがほとんど十余年ぶりで小野田孝と突然邂逅したのは去年の春のことで、十余年にわたる才月と、戦後のめまぐるしい世相変転は、ふたりをまつたく異つたすがたに変えていた。わたしは、流行のウーステッドのオーバーを着て、ベージュ色の靴下に包まれた脚をコッコッ舗道に音たてながらタキシードも拾おうとしている通行人であつた、が小野田はこの寒空に、両腕のない白衣の袖をカガシのようにヒラヒラさせながら、道行く人に憐みを乞う、変り果てた姿となつていたのである。

小野田はわたしが十余年前に別れた良人である。それも合意による離婚ではなく、わたしは甘言をもつて捨てられたのだつた。

こゝで、小野田とわたしとのちよつと変つた結婚について語らねばならない。この頃の若い人には滅多に見られないことだ



小野田は要職に就くとともに、住宅難の満洲に、官舎が与えられたので、大変結婚を急いでいたのであった。彼はもう三十を三つ四つ越していたし、周囲の者もはやく身を固めさせようとしていた。

戦争がはじまつて、しだいに結婚難の高まつている時期だったので、わたしの両親は乗気になつていたのである。わたし自身も適齢期を過ぎようとしているし、又、わたしには三人の適齢期の妹があつて、その上、わたしの家は、破産しかけていたのであった。

柳行李一つでよい「大陸の花嫁」を両親は希望したのである。どうせ、言葉巧みな叔母の話だし、結婚というものに大して期待も抱かず、わたしは小野田と結婚するために渡満したのであるが、こういう結婚がうまくいかないのは当然で、あれもこれも、結局は写真結婚という愚劣な結婚に起因しているように思われる。

まず、わたしを驚かしたのは、初夜からはじまる彼との異様な閨房であつた。わたしは少し年齢をとつていたが、無論、純然たる処女で、小野田はわたしが最初の男であつた。

どんなひどい無智な男でも、初夜の花嫁に対して、彼のような事をする者はいないであらう。

然るに小野田は、かたちばかりの結婚式がまさに初対面という間柄にもかゝらず、その初夜に於いて、それでなくとも、怖れと恥らいにからだのふるえてならぬわたしを、素つ裸にし日本手拭で猿轡を囓ませ、胴体を赤いしごきで、ぐるぐる巻きつけたのである。

さすがに鞭打ったり、吊し上げたり、拷問や折檻は加えなかつたけれど、そのような行為が、処女のわたしに、どのような大きいショックを与えたかは云うまでもない。初夜に於ける神聖な夫婦の契が、私の心の奥底に消し難い婚姻の汚れとなつたのである。

一一

わたしと小野田との結婚生活は、半年ほどで終つている。あの魂もちじみあがるような思い出わたしは屈辱と恐怖に、苛なまれつゞけて来たのだつた。

小野田は普通の男の人に見られぬような、やさしいところもあつたが、反面、短気で怒りつぽく、軍の要職に就いていた関係もあつて、その残忍性は、精神的にも肉体的にもわたしを苦しめ通したのである。

小野田がわたしの肉体に加えた折檻と拷問の跡はわたしの真白いからだに、いまでも何らかの痕跡を残しているし、更に、わたしが精神的に受けた打撃は、もつと大きかつた。

わたしはまだ籍にこそ入つていなかったが、正式に結婚しているのにも拘らず、小野田は離婚に際して、わたしに一言の同意も求めず、奸計とも云うべき、卑怯な方法をとつて、わたしを離婚したのである。

更にわたしを震駭させたのは、わたし達が結婚したときには彼はすでに猛烈なスピロヘーダー、バリダの保菌者であつたという事実である。その病菌は、彼が青島の司令部にいた頃、クニヤンから染されたものだと言ふ彼の口から聞いた。

だが、何よりもわたしをいちばん悲しませたのは後になつて



聞いたことだが、そういう病氣を持つておればこそ、純潔無垢の処女と結婚したのだという彼の言葉なのである。

主要な軍務に就いていた小野田は拷問が彼の職務で、人間性を無視していたのであつた。

彼の甘言に乗ぜられて、わたしが單身帰国したのは、太平洋戦争がはじまり、小野田は南方方面に転勤になつたからだだが、実家に販つたわたしが受け取つたものは、氣に入らぬから返すという一通の離婚状であつた。そして、そのまゝ、彼は私の前から、永久に姿をくらましてしまつたのである。

小野田との離婚後、かつて豊満純白を誇つたわたしの肉体には、おそろしいスピロヘーダ・ペリダの徴候があらわれはじめたのである。この病氣の恐しさは、黴んだ沼地のように、魂までが腐つていくということである。それは何か得体の知れぬ怨恨であり、斗争であり、苦悩であつた。

わたしの半年ほどの結婚生活は、このように惨めなもので、わたしが小野田から与えられたものと云えば、悪徳と不信の非人間性であり、悲しみと苦しみの「不幸」そのものなのであつた。「苦しめ！」それがわたしに与えられた彼の唯一の言葉なのだ。

結婚して幸福だつた日は、一日もない毎日の生活が、悲しみと苦しみの連続であり、わたしはそれを運命として堪えたのである。小野田がわたしに残していたものに、美しいもの、はるかに高いもの、強烈なもの、わたしがみれんをおぼえるようなものなぞ、何一つなかつたのである。

それにもかゝらず、女の生理のかなしさと云おうか、小野

田はわたしの年令から云えば少しおくられて知つた最初の男であるためか、わたしはそんな小野田に異常なほど執着したのである。それは愛情とも、憎悪とも区別のつかぬ執着であつた。

どんな女でも、最初の刻印を受けた男の記憶は、一生忘れ得まい。自己を一人の女の生涯のなかに、生きながら埋めておくこと、それは一人の男の持つ当然の権利ではなからうか。

最初の刻印以後、わたしの記憶のなかには「以前」が出来上り、残りの生涯は、もはや「以後」でしかないのだ。

小野田と別れてからの、この十年間というものの、わたしはいろんな職業に就いて、随分苦勞して来たのであるが、わたしの心を横切る、遠い良人の追想を少しでも乱すまいとしながら、むなしくさまたまな手仕事に従事して来たのである。

ひとは信じ難いことだと思ふかも知れぬが、わたしはその後再婚もせず、たゞいちどのあやまちもなく、ずっと操正しい生活をつづけているのだつた。わたしはまだ若く、すらりとしたスタイルで、潜在的色氣も磨き出している。その上、わたしは男とあいびきしようと思えば出来る部屋まで持つ自由なアパート住いの身の上なのである。

わたしにも勤め先にいろんな誘惑があつたり、又、誘惑してみたい欲望が、むらむらと湧き起つてくることもある。それは全身に溢れ、わたしの抑制はもろくもくずれ落ちそうになるしまた、この夜をはねのけてしまふには、頑強な力のいることもある。

混雑した電車や、映画館の中では、わたしの膝を抑じつけてくる膝を感じとつた。



結婚生活を経験して来たわたしには、眠られぬ夜は、しばしばあり、それは月に一度か二度、必ず周期的に溷濁したはげしい欲情が、身内から起ってくるのだった。どうすることも出来ぬからだを、むなしく悶えさせながら、このおのれの強い情念に、どれほど苦しみ悩んだことか。

だが、結婚に失敗して以来というものの、それが性病と関連して、わたしは異性に対してへんに警戒深くなっているのだった。わたしの異性に対する、異常な警戒、恐怖心は、アバンという年令以上にこの体験なくしては考えられぬのである。

それに、いちど血管にまで喰い込んだ、あの恐ろしいスピロヘーダー・パリダは、感染以来、十年を数えても、いまもなおあたしの内部に巣喰い、燃え上り、燻り、わたしの血液反応はいつでもプラスなのであった。

男のために血を流すことを欲しながらも、たえず女として、おおきくゆらめきつゝ、わたしは冷ややかに男を拒否しつづけて来たのであった。そのたびに、いつさいの快楽が、わたしの肉体から逃げ去っていくのを感じながら。

三

小野田が行方をくらましてからというものの、戦争中はもとより、終戦後はあらゆる手段をつくして、わたしは小野田の行方を探し求めて来たのだった。まだ太平洋戦争が上昇的だった頃、フィリッピン方面へ転勤を命ぜられたということだけで、司令部も部隊名も何もわからず、その後の消息は杳としてしれないのだった。

小野田は東京都の出身者ではなかつたし、両親はすでになく身寄りの到つて少い、肉身に縁のない男なのであった。身寄りが少いということも、旺盛な生活力とともに、わたしの結婚条件だったのである。

彼は将校だし、戦争に捲き込まれていることだけはたしかでもし死んでいるとしたらフィリッピンで戦死したか。それともビルマあたりで戦病死したか。どうせ彼のことだから、原住民や、俘虜の虐待、拷問の廉で戦犯者として外地でむなしく絞首刑となつたか。或いはまだ南方方面に戦犯者として、収容されているか。それともシベリヤに抑留されたか。

新聞やラヂオを通して、また、あらゆる卑近な方法では、調べた。わたしはこのために、上野の図書館へ出掛けて、全国の新聞に眼をとおしたこともあるし、帰還者のあいだを尋ねまわつたこともあった。

もし、彼が生きているとしたら若し、幸いに無事販還したとしたら、彼はこの東京にいたことだけは、ほぼ確実だった。彼は陸軍士官学校を出てからも、長く東京にいたし、また彼のような男が、田舎や地方に行くことは、ちよつと考えられぬことだった。

しかし、もし彼が無事販還しているとしても、四十代の彼が今頃独身でいよう筈はないのである。彼に妻子のあることは必然であつた。

わたしは小野田に何を求めようとしているのか。この世で、もう二度と逢つてはならぬ男に、たゞいちど逢つて、自分の受けた傷の生々しさ、深刻さ、惨めさを、そのまゝそつくり、何



らかの方法で、復讐を企てようというのか。
わたしは幾年も、欺むかれ、踏みにじられ、泣かされて来た自分を、いまでも生々しく原型のまゝ残し、たえずその眼で、皮膚ではかつて来たのである。わたしの長い禁欲生活の支えとなつてゐるものは、小野田であり、精神や肉体や性や、あらゆるものをふるいたてて、他の男ではない、もういちど小野田のなかへはいつていきたいのだつた。

四

その日、わたしは日比谷の劇場で、アメリカ映画のロードショウを観ての帰りであつた。わたしはその映画を、勤め先の上役の一人と一緒に観た。

映画館を出たときは夕方、課長である白石は、しきりに夕飯を誘つたが、わたしはことわつて、ひとりで省線の駅の方へ歩いていつた。男と一緒に食事をするのが、どういうことであるか、わたしはよく知つてゐる。彼はたぶん、数寄屋橋あたりの料亭か、銀座裏の関西料理に、わたしを連れ込んだらう。彼は何本かのお銚子を取つて、わたしにも酒を飲ませるだらう。そのあとはタキシードで待合かホテルへの、課長さまのおきまりのコースである。酒を飲めば、わたしだつてどんな男とでも一緒に寝るし、やぶれかぶれになる。

「薄情ですねえ、貴女は。」

白石は諦め兼ねるように、空車を物色してゐた。ちやうど其処へ車が来て停車した。

「でも、ほんとうに今日は急ぐんですからまたこの次にでも」と言い捨てるとわたしは素速く、折からの群集の渦の中へ身を投じたのである。白石は止むを得ずひとりでその車に乗つたのか、それでも、群集の渦中に、わたしの姿を見失つたのか、追つては来なかつた。

男と別れると、急に力が脱けたように。わたしは雑踏のなかをさびしく脚を引摺るのだつた。わたしはこうして、ひとりで歩いてゐると、いつも孤独なる中年の精神と肉体をかんじるのである。この冬を越せば、わたしは三十五才になるのだつた。むなしく過ぎるにまかせた、多くの年月を思うとともに、わた



しはそれを、今更どうすることも出来ないのだった。

ふと気付くと、着飾った群集のほとんどはアベックで男に腕を組んだ女は、あやしげな媚を浮べて、笑ったりしている。若い女は、腰をふりふり通り過ぎるのだった。少し横町では、若い男女や、進駐軍とバンバンが、いちやつきあっている。

わたしは省線で、まっすぐアバートの自分の部屋へ帰るつもりでいたが、その部屋が寒々として空っぽであることを思うと急に味気なくなり、車で銀座へでも出ようかと迷っていたのだった。それは一日中働きとおして、夕方ひとりで自分の部屋へ帰ってくるときおなじきもちだった。何かしら、身体のうちにせつないものがあつて、わたしはそれを晴らす方法を求めていたのだった。

ちようどそのときガード下の近くに人だかりがしてその輪のなかから、

「ああ、彼はひとりで小便も出来ません。大便も——」

というしわがれた異様な言葉が、市中の雑音を破つて悲痛なひびきで、わたしの耳に入つたのである。わたしは思わず立ちどまると、ふりかえり群集の肩越しにその輪のなかをうかがつた。

そこには、二人の白衣の男がいて、一人の男の袖には、附け根からすつぽりと二本の腕がなかつた。腕のないうつろな袖は夕方の冷たい風のなかに、シヨンボリと垂れさがつていた。

「ああ、彼はひとりで小便も出来ません。大便も、他人の手を借りなくては——」

と、もう一人の男は叫びながら、件の男の着物の裾をまくり

はじめののだった。わたしと群集の視線はそこへ吸い寄せられていった。

わたしはこれまでも、随分ひどい傷痍軍人を見て来ている。両手両脚を失い、俗にダルマサンと呼称される、樽の中に入れた男や、両手両脚を半分だけ切断して、四つん這いとなつた男や盲人や、性的不能者や、松葉杖や、慈善鍋を前にして立つているこれらの白衣の男にも、もしや小野田ではと、わたしはその面影を探し求めてきたのだった。

わたしはぶざまにも前をまくられているその男を正面にむきあつたのだった。

十年という年月は、まるきり人を変えてしまふ。順調な環境にあつても——

それにそのあいだに、戦争があつて、空疎な十年間をへだて、とつぜん邂逅しても、かれの十年前の青春をしか知らないわたしは、容易にむかしの面影を認められないのがあたりまえであつた。

これが若し小野田だとすれば、何というはげしい変りようであらう。わたしは十年という才月を計算して、幻想のなかの小野田にたえず修正を加えているし、また、凄惨な戦争や、戦後の社会的転換も充分考慮してさまざまな人物を描いて来たのだが、そのわたしの冷酷な計算もつてしてもなお割りきれぬのであつた。

だが、その男はまさしく小野田であつた。わたしが彼を認めたのは、連れの白衣の男がきものの前をめくつたその刹那からだつた。チラツとではあつたが、わたしは彼の真正面にいたの



で、忘れ難い特長まで判別出来たのである。

二人は真正面にむきあっているの、彼とは何度も視線があつた。わたしがわたしであることを認めてもらいたいために彼の注意をひくためにも千円札を慈善鍋のなかへ入れたとしても、彼はまったく別な意味にとるだろう。

アルミの鍋の底には、十円札が二三枚入っているきりで相変らず金詰りの世相を反映していた。ひとりで用も足せぬ不自由な彼をお助け下さいと、連れの白衣の男は一生懸命叫びつづけているのだつた。

わたくしはいつまでも其処に立ちつくしていた。ふと、われにかえつたときはいつの間にか、群集は潮のように引いてあたりは暗く二人の白衣の男と、三人きりになつていたのである。

このときになつて、彼はようやく、かつての妻であつたわたしを思い出したようだつた。彼はわたしを認めた瞬間、ハッと途惑いしてあわててその眼をそらした。

「あたし——」

と、わたしは自分を名のると、後は言葉がつかなくなり人前も何もはばからず彼の両腕のない白衣の袖に抱きつき、彼の胸に顔を埋めて、はげしく鳴咽したのである。

五

それから、わたしと小野田との同棲生活はわたしのアパートではじまつた。

孤独で、癪癪持ちで、部下を叱りとばし、恐れられていた、かつての傲岸不遜の陸軍大尉のおもかげはもはや何処にもなく

傷病兵として帰還した彼は、住む家も、妻も子も、職もない世の中の中絶者なのであつた。彼が兵卒や、原住民や、俘虜に、みずから拷問を加えた両腕すら、沖縄の激戦で失っているのだつた。

腕をうしなつた彼は、井のなかに顔をうつこんで、ひとりで食事だけは出来るが、口で字を書く芸当なぞ及びもつかず、あの連れの男が叫んでいたように、大小便も何もかも、人手を借りなくては、足せないのだつた。そうした身のまわり一切の世話はずべて、かつての戦友であつたあの連れの男がやつてくれた。

小野田とわたしが同棲することに、その男をなかにはさんで一悶着起きたことは云うまでもない。その男は、両腕のない彼を見世物にすることによつて、その日の糧に、辛じてありついていたのだつたから。

しかし、わたしが小野田をアパートに連れて来て、小野田に長い間、欺むかれ、ふみにじられ、泣かされて来たにもかゝわらず、なおも小野田に愛着し、生死不明の小野田のみを支えとして、生きて来たという、このかなしい女の心が僅かに残っている彼の人間の心と呼びました事は確かであつた。

わたしは小野田が、井のなかに顔をうつこんで、飯粒や汁をいっぱい顔にくつつけて、犬のように食事をすることを好まず、いちいち自分の手で喰べさせてやつたし、用を足すのは勿論のこと、いままで彼が自分自身でやつて来たような些細なことまでも、わたしは彼の両腕となつたのである。

わたしは長い間、世の荒波にもまれて、苦勞をして来たが、



いまは秘書兼英文タイピストとして、丸ビルにある貿易商事会社に勤め、安サラリーマンをはるかに上廻る収入を得ているのだった。

外人客が多い関係上、服装をととのえねばならず、また、わたし自身も非常なお洒落なので、銀座を歩いている女達のなかでも、一流の服装をしているじ、かなり高価な持ち物も持っているが、イヤリングにしろ、ネックレスにしろ、アクセサリーにしろ、わたしが男に買ってもらったものや、プレゼントされたものは一つもないのだ。

わたしは朝出かけて、夕方帰ってくる勤め人であり、一日の大半を外で過さなければならず、そのあいだの小野田の不自由さを見ると、わたしは勤め先も辞め、一台のタイプライターを購入したのである。わたしは東京でも有数の熟練者であり、これまで騰写版屋や、取り引き先の外人客から、仕事を依頼されることはいつさいでなくわたしは会社の者の隙を見ては、ひそかにアルバイトも兼ねて来たのである。

また両腕のない小野田を養うためには、生活費がかさむのでわたしは独立する必要があつた。わたしが男を養うに足るだけの、旺盛な生活力を持つていくところが、実のところ、小野田をすつかり捕えて離さないものである。彼は上野の地下道を根城にして、残飯を喰つていたこともあるし、傷痍軍人としての収入はタカのしれたもので、わたしが毎日食べているようなものぞ、彼はもう長いあいだ、口にしたことすらないのである。

彼はわたしの手料理の、洋食や支那料理の皿に、顔をぐつゝ

け、犬のように長い舌で、舐めまわし、顔じゆうを油で汚しながらガツガツ咽喉を鳴らすこともあつた。小野田が用を足すときは、アパートの便所へ連れてゆき、わたしの手で用を足してやるのだが、アパートの洗面所は、無論共同便所で、そのあいだに人の出入りがあり、わたし達のことは忽ち、口さがない、連中の評判になつてしまつた。

わたしは小野田に、シンビンと便器を買いととのえて部屋の中で用を足させることにしたのだつた。

六

わたしの部屋は、この汚いアパートでは、いちばん上等の部屋で、見晴しのよい二階の端にあつた。この部屋だけが、白いペンキのはげた、かたちばかりのテラスを持ち、別個に屋根の上に突き出した一棟となつていて、煩しい隣室はないのだつた。奇蹟的に焼けなかつた古い館で安手のアパートと異り、頑丈な壁であつた。わたしと小野田との、およそエキセントリックな焼けたられるような妖しい生活は、この孤立した部屋のなかで行われたのである。

両腕のない彼のために、わたしの爛熟した三十女の手は、飼犬に物を与えるような愛撫や、また、わたしの盲いたる手がかつて彼から受けたように、その両腕のない胴体を、麻縄や、ロープで縛り上げ、彼の瘦せた肉体に鞭を鳴らした。

いまや、わたし達の立場はガラリと変りわたしが彼を養つていたのであつた。それがどういふことであるかは、言うまでもない。彼は完全にわたしの玩弄物になり下つていた。生きた無



抵抗の玩具であつた。宿望を交換するにも、わたしは対等、若しくは上位の立場にあり、且つ、絶対なのである。敗戦という事実によ來して、その上、両腕を失つた小野田は、不具者で、生活無能力者なのであつた。彼がパンを得るためには、傷病兵を看板にして、道に佇むよりほかないのである。しかし、反戦思想が風靡するこの時代にあつては、金詰りの世の中とともに施しはいたつて少くその日の糊口にも事欠くのが、彼の現状なのであつた。

いまやわたしは、彼に性的不満を与えた二十代の頃のおとなしい女ではなく、円熟しきつた三十女なのである。彼には何よりも大切な両腕がないため、わたしのコルセットや、ブロースを脱がすことさえ出來ず、男性の役割を演じることが何一つ出來ないのだつた。

両腕のない彼のために、わたしの手は、男性と女性の役割を同時に演じねばならないのである。わたしの片方の手は、小野田の手であり、それは實在でない、イメージとしての小野田の手であつたが――。そしてもう片方の手はわたし自らの妻としての手であつた。わたしの盲いたる肉体は、かつて孤独な寝床のなかで夜ごと夢見た奔放なあやしい幻想の世界を現実に行動に移すのであつた。わたしの脂ぎつた白い両脚は、腕のない彼の肩に、くちなわのように巻きつき、彼の頸を素足の裏で蹴り倒し、ころ／＼と転る彼の口の中へ足の拇指を突込んで舐めさせるのであつた。わたしはそれを「ダイヤモンドゲーム」と呼んだ。

両腕のない彼の唯一のわたしに対する奉仕は、すべて舌であ

り、舌が彼の唯一の感覚でもあつた。

厩間わたしがタイプを打つているときも、彼は、なすこともないまゝ腰かけたわたしの脚のあいだに、そつと這い寄つてくることがあつた。「あら駄目よ。お仕事じゆうはいけないつてあれほど云つているじやありませんか」

だが、彼は犬のように、わたしの脚にまつわりついて離れない。そこでわたしは、じつとりと汗ばんでうす汚れた足先を与えて彼にゆつくりと舐めさせながら自分の仕事にかゝるのであつた。わたしの盲いたる手は、彼に飼ひ犬にするような愛撫を与えたり、その両腕のない胴体を麻縄でガングラメに縛りあげ、丸太のようにころばせて、革の鞭を鳴らしたりするのであつた。わたしはすでに、そのような年令のはげしさに達しており、彼の肉体を責めることによつて、復讐的な愉悅をおぼえるのである。わたしは一匹の人間の言葉を喋べる犬を飼つてゐると同じであつた。

縛られた彼は、わたしの脚下に跪坐し、横たわり、まったくの受身の無力で、肉体的に疲れを知らぬわたしの手の下で、意のままになつてゐるのであつた。

いまや、両腕のない生活無能力者の彼はかつての横暴不遜を極めた陰萎のいくじなしに転落してゐるのだつた。わたしの勝ち誇つた肉体は腕のない彼の胴体に馬乗りとなつて苛め通したわたしはこのようなきを、何ヶ月も、何年も前から待ち受けていたのである。長い間、杭につながれ、飢えきつてゐるけものが、ついに絆を解かれて、食にありついたように、わたしが抑えつゝけて來た欲望は、もはや堰を切つたのである。(了)



真空地帯の一挿話

簞

六

平

さて、人間と云うものは全く何時何処でどんな事をしでかすハメに陥るかわかつたものではない。この私が、(と云つても貴方は私を御存知ない。マ、何の取り柄もないごく平凡なおとなしい男と思つて下さればよろしい)その私が、柄にもないこの枕草紙を五、六部ばかり創作した経験があるのである。創作した……いや実は、書く事を強制されたのである。尊厳なる上官の命に依り……ナニ古い兵隊共が私に書くことを命じたのである。軍隊時代の話である。種本が一部あつた。それに何とか色をつけ、趣向を変えて、五、六部程書いたと云う訳である。別府航路、熱海の一夜、エトセトラ。それを又ひそかに事務室でガリ版に刷り、古い兵隊共が廻して続んだ。

こんな事がひと頃、何処からともなく、誰

からともなく流行りだした。敗戦前夜のわが日本軍隊、真空地帯、どうにもならぬ若い性慾のはけ口を、こんな事にでもゴマ化して、かなしい憂さをはらしていたと云う訳である。

さてこの古い兵隊の中に、通称オジヤンオジヤンとよばれていた応召の兵長がいた。当時三十五、六だつたかと思う。なかなか若い兵隊に負けてはいなかつた。たとえば、今の角力の老雄名寄岩みたいな人氣が我々の間にあつた。

又このオジヤンの猥談がケツ作。名物であつた。ともすれば荒み勝ちな若い兵隊の鬱屈した血を吹き飛ばす清涼剤の役目を果たした経験は数段我々にまさり、所謂微に入り、細に穿ち、メンメン尽くる事を知らず、その話術の妙味は、今も忘れる事が出来ない。当時

純情可憐、実は何にも知らなかつた私如き、この時の耳学問が後日どれ程役立つたか、その恩は測りしれないものがあつたのである。いや、このオジヤン兵長の様な人氣者は、日本軍隊何処の部隊にでも必ず一人や二人はいたであらう。

貴方もきつと誰かの顔を思い浮べられるに違いない。私は、何も軍隊恋しと回顧趣味に浸っている訳ではない。モウ戦争はマツピラ御免である。唯あの頃、オジヤン兵長の様な人物がいたお蔭で、どれ程我々の殺伐な生活にうるおいを興えられた事か、それを思うのである。……ところでオジヤン兵長の猥談であるが、それが何時も自分達夫婦の閨房秘話であつたから恐れ入る、

いわゆるアソビ女の手練手管の秘話は、あながち経験がなかつた訳でもなからうが、あ

まり好んで話さなかつた。要するにオジヤン兵長、なかなかの愛妻家であり、妻恋し、云わば我々はお惚氣を丹念に聞かされたと言う訳である。

それが又余計実感があり、面白かつたのかも知れない。

子供が三人、一番上の男の子はもうその頃中学に通っていた。写真も幾度となく見せてくれていた奥さんは、流石自慢するだけあつて、どうしてなかなかの美人であつた。

「ふうん成る程、あんな顔しとるのがええねんな。よし、僕もかえつて嫁はん貰う時はそんな奴探さんならん、どうでつしやろ、兵長殿。その写真参考にいただくわけにはいきまへんやろか……」

若い兵隊が冷やかすと

「馬鹿コケ！」

オジヤン兵長上機嫌、嬉しそうに笑うのである。然しそんな話を聞いて、その写真を見ても、少しもみだらな連想を浮べる事もなかつた。立派な奥さんだつたのである。

私の筆記した枕草紙の如きはこのオジヤン兵長の猥談とくらべては物の数ではなかつた。色も、香も、味も、コクも数段劣つたのである。實際古い兵隊はどこが面白くてあれを

ムサボリ続んだのであろう？ いや、此の秘本も又オジヤン兵長に教えを乞う事再三に及んだ。最後は結局、合作みた様なかたちになつたのであるが……

ところがオジヤン兵長、どんなイタヅラ心を起したのか、又どうして送つたものか、留守を護る奥さんにこの冊子を送つたと云うのである。そしてそれは無事奥さんの手許に届いた。返事が来たのである。

「オウイ、母ちゃんから返事が来たぞオ」

興奮したオジヤン兵長のその時の嬉しそうな顔……奥さんはどんな顔をして、あれを開いたと云うのだろうか？

聞いた途端に、オジヤン何んて云う事をしてくれたのかと、此方の顔が真赤になつた。

まるで奥さんと不義はたらいた処見つかつたかの様な、何とも言葉にならぬ間の悪さを私は覚えたのである。それ程私はウブであつた。流石はオジヤン兵長の細君、老練。下手に取り乱したさまもないのである。

「……御本たのしく拝見致しました。激しい軍のお務めの疲れの中とは言いながら、また貴方様方にはその様なおたのしみもございましょうが……」

逆に叱られているのやら、からかわれてい

るのやら……、日ましに熾烈の度を加える空襲、食糧の窮乏、老人と三児を拘えた奥さんには、実はそれ処でなかつたのであろうが、左様な御自身の苦衷は唯ざらりと書き流し、亭主の変らぬ健在を喜んでいたのである。子供たちの元氣な消息を伝えた後、

「……ほんとうに、こんなに若やいだ気分になりましたのは、貴方が征らしてから幾年振りの事でしよう。もう永い間忘れていた、そんな生活……。実は、あの御手紙を戴いて以来、私は貴方のお側に、貴方の御胸にしつかりと取りすがる気持で、毎夜いただいたあの御本枕に敷いてやすんでおります。今は私の大事なお守りとして……」

「母ちゃんが枕に敷いて寝たとよオ。ええ、可愛いやないか」

上づゝたオジヤン兵長の嬉しそうな顔。夫婦とは、あんな手紙を交すものだろうか？ 検閲をはばからぬ、奥さんの非常識を嗤うべきだろうか？……

その時、オジヤン兵長の両眼にキラリと光つた涙、私はその涙を忘れることが出来ない。臆面もなく書き綴つたあのバカらしい枕草紙が……、最早わらい事ではなかつたのである。夫婦の美しさ……我々若い兵隊は、とつさに

オジャン兵長をからかう事も忘れ、唯言葉のない深い感動に打たれたのである。

その時程胸の底から「生きたい!」としみじみ思つた事はなかつたのである。

あれから……最早十年。あわただしい歳月が流れた。

実は昨日何と云う奇遇だろう。九州にいとばかり思つていたオジャン兵長に、梅田でバツタリ出くわしたのである。然も、向うは

奥さん同伴である。無論初対面。「御噂は、かねて承つていました」

可笑しな挨拶である。私は、ふと永い間忘れていたあの話を思い出し、のど元迄出掛つた言葉は、然し淡い口辺の微笑に消した。此

の幸福そうな夫婦を見て、今更何を云う必要があつたであらう。……

実はオジャンもう三年も前から大阪に出て商売をしているそつだ。

なつかしそくに肩叩いての話振りは昔に交らぬオジャン兵長だつたが、今はどうして大した中年の紳士である息子さんも早や大学に進んでいるとの事、何もかも、幸福そうであつた。……

私は生憎急ぎの手離せぬ用事も持つていたので、一寸お茶を飲んだだけでかたく再会を約してオジャン兵長と別れたのだつた。

【読者通信】

(投稿歓迎)

私は少年時代より同性愛的傾向がありましてので同性愛の物語、記事はいつも嬉しく拝見しています。今迄同性愛に関する書籍は、い分集めました。が貴誌の内容こそ非常に価値のある最もよくその心理を捉え三文小説的でない事が私の心を深く貴誌に結びつけた次第です。私は現在純喫茶のボーイをしていて店の仲間へいずれも十三才から十七才迄の美少年は皆貴誌の熱烈な愛読者です。私の氣持としては御誌によつてどの位此の世の多くの同愛性に苦しみ悩む人達が希望と勇氣を与えられてい

る事だろうかと思ひます。朋輩は殆んど客と秘密を持つて居ります。私は愛される立場より愛する幸福を求めて居ります。でもお店では青年中年の客ばかりでどうしても高校生や中学生等の少年の客の無いのが残念です。大変勝手な希望ですが私が今は非求めたいのは十三、四より十八、九才位までの美少年のヌード写真なのです。それから昔の蔭間茶屋の詳細或はお小姓達の性愛生活、そういったものを編集の中へつけ加えて頂けたら私のみならずの同好者の方々の喜びこれに過ぐるものはないと思ひます。長々と勝手なことを書き述べましたが御編集に当り考慮して頂ければ幸いです。

(十七才 信行)

○御希望の企画を樹て、おりますから追つて誌上に発表します。

(染田 玄)

○四月号並にK通七号拝受、早速特別会員の申込を致しますからよろしく、会費は別にとられないとの事です。が通信費として他社でも相当とつてゐるのですから毎月百円でも二百円でも徴収した方がよいと思ひます。そしてK通をもつと充実して下さい。四月号は相変らず素晴しく立派でした。他の雑誌がすべて骨抜きになつてゐるのに奇クだけが頑張つてくれているのは実に嬉しい。巻頭の口絵、是非これからもこういうたものを続けてほしい、錯倒の告白集、昨年

九月号とは違つた味が横溢、妓の影はよかつた。喜美子のような妓がいたらぼくは全財産を投げうつても手に入れた。淫火、益々好調小説の中で最も歯ごたえのある本格的なもの、続・囚衣、期待に背かぬ書きぶりは僕の心の奥底をかき立てた。ゆうべ見た夢、川端さんがこの日記を書いてくれるので僕は断然写真にも興味を持つて初めた。喜多さんの挿絵については感嘆の余り言葉もない。次号に大きな期待をかけてお喋りをやめる

(徳島 井本杉男)

☆

☆

☆

☆



家の味の牧さち子

一

朝早くから電話のベルがけたましく鳴つた。日曜日なのでまだみんな寝ていたが、その音のはげしさに眼を覚ましてしまった程だった。

志津は台所から手をふきく／＼あわてゝ電話にかゝつた。

「もし、もし……あゝ由起さん。いやに早いやない？何ですつて、三紀ちゃんか？」
電話は志津の妹の由起からで、始めは不興げに電話にかゝつていた志津が、急に緊張しだしたのは、電話の内容が容易ならぬものだったからだ。

既に目をさまして床の上で、刻み煙草をくゆらしていた夫の嘉吉の傍にぼんやりと座つた志津の顔にはやり切れないという様な表情が浮いていた。

「いやになつちまいますねえ、三紀子が家出をしたんですつて……」

「三紀子が？……」

「由紀はのんき者だから、いまゝで気がつかなくつたんですつてよ。あの子、男があつたんだそうよ、それも女房子のある……」

「へえ、そいつは驚ろいたね、じやあつまりその男と駈落つてわけか、ウーム」

嘉吉は、虫も殺さぬ様な顔をした三紀子を出し、之もうんざりした気持になつた。

「一昨日だつたかな、三紀ちゃんが店に来たのは、ちつとも様子変つてなかつたぜ……」

「あなたに無心でもする氣じやあなかつたのかしら、ともかく私、ちよつと由紀の所まで顔を出してみましよう、きつと一人でおろく／＼してるでしようから……」

「それがいい、何だつたら次郎も一しよに連れてつたらどうだ……」

その次郎も、両親の話しでいつしか目を覚まし、床の中で目ばかりぱち／＼していた。

三紀子とはいゝけんか相手である。

去年大学を出て、父の会社で仕事をしているのだが、一人つ子の三紀子の養子に三紀子の母の由紀から望まれていることは、うすう

す本人も承知している。

勿論三紀子に対して何一つ悪感情を持つて
いるわけではないし、自然に放つて置いても
ふたりは将来むすばれそうな環境にあると自
負していただけに、もう一人の男の介在には
ちよつと度きもを抜かれた形である。

取るものも取りあえずという恰好で、二人
が由紀の家にかけてみると、由紀は五つ
位の男の手と赤ん坊をつれた三十前後の女と
対座して、目を泣き腫らしていた。

志津の顔をみると歪んだ表情になつて、
「姉さん、とんだことになりました。三紀子
も無謀な……この奥さんの御主人と一しよに
どうも大阪方面に行つたらしいんですよ」
女は顔をあげずに、僅かに頭を下げた。

「困つたことをしてくれたわねえ、何もそん
なに切つ迫つまつた氣持にならなくつたつ
て……」

「いゝえ、お嬢さんは何も御存知ないんです
わ、うちの人、勝手にそゝのかしたに違い
ありません、うちの人そんな人間なんで
す」

女は膝の上に、涙をぼた／＼こぼし乍ら、
声をふるわせた。

女の主人の柏木と三紀子の間に關係が生じ

たのは三月程前からで、それまで円満だつた
家庭もその為面白くなく最近夫婦の間に別
れ話も出ているということだつた。

柏木は大阪に従兄がいるということで、之
という親戚もなく、何かという大阪の従兄
を心だよりにしていたので、三紀子をそゝの
かして家出した先はそこに違いないと、細君
は確信ありげにいう。

それにしても何という暗い恋愛であろう。
二人は将来に何をかけて恋愛したというの
だろう。志津はまだ何も知らない三紀子が初
めて身を委した男にとことんまで従つてゆく
氣持を哀れに思わずにはいられたかつた。

時代は變つても彼女の恋愛は明治のものと
變りはないではないか。

あゝすればよかつた、こうすればよかつた
出来てしまつたことを悔み乍ら、涙をこぼし
ている細君の姿にも大時代めいた古さがある
ばかりで、よく新聞紙上をにぎわす刃傷沙汰
や、そしよ沙汰の激しさは全くこの人達に
は縁がないものと思われる。

二人の家出は状況から押して汽車に乗つた
にしてもまだ大阪についている筈はない。
まず第一に大阪へ発つたかどうかを、たしか
める必要がある。

駅に行つて二人の家出時間の二十時以後に
切符を買つた人をたしかめれば大てい見当が
つく筈だ。

普通南の果のこの町から京阪、東京行には
朝十時半の特急霧島が常識だから他の時間に
その方面の切符を求める人間の数は、ほんの
僅かに違いない。

そこは次郎の活躍範圍で、彼はすぐ家を飛
び出して行つたが半時間もたゝないうちに調
べあげてきた。

九時何分かの門司港ゆきの列車改札で大阪
までの切符をもつた人間が三人、そのうちの
二人はアベックで三十四五の脊のあまり高く
ない男と連れの二十前後の女、丸顔で脊が高
く、白いハンドバッグを抱えていた。

それだけ充で分であつた。

半真半疑のものがそゝと確定されると事件
の直接の關係者である細君と由紀は改めてお
ろ／＼し初めた。

この場合、志津が何もかも采配をふるわな
ければならなかつた。

大阪の従兄の所へ電報を打つたり、万一の
場合を考えて警察に保護願を出したり、走り
使いは次郎であつたが、志津も芯が疲れた。

ひる頃、嘉吉が店の自動車に乗つて様子を

みにきた。

「誰か応援によそうか」

「いえ、もう大てい済みましたわ、大阪の従兄という人から知らせを待つばかり……」

「なか／＼うまく手配がすんだね」

嘉吉は急に、にや／＼つとして妻にだけわかる隠語をつかった。

「前科二犯も、為になることだつてあるからね」

「いやあよ——」

志津は若々しい声をあげて、夫をにらんだ。夫はそのまゝ自動車を走らせて店へ帰つて行つた。

二

志津は四十三の今日まで、嘉吉のいういわゆる前科二犯の家出をしている。

早生れで田舎の四年制の女学校を卒業したのが数え年で十七の年。その頃津々浦々にまで熱病の様な勢で蔓延していた宝塚熱に御多分にもれず浮かされて、やれ春日花子の、天津乙女のと、学業はそつちのけで、随分熱をあげた。

学校を卒業してしまふと、宝塚熱はいつしかひいたが、何かの写真でみた、その頃浅草

で名をうつていた田谷力三熱に変わり、寝てもさめても田谷、田谷と思いつめた。

幾度か出した手紙に返事がきて、志津の熱病は最高頂に達し、会いたい見たいの思いに堪えかねて、無謀にも、バスケット一つさげて家出したのだ。

何も自分が俳優になりたいわけではなかつた。田谷に会いさえすれば気が済みそうだった。

その頃はまだ、東海道線は、御殿場廻りで富士とか山北とかいう地名があり、巨大な富士山の姿が、汽車の窓から肩にせまつてきたときの只ならぬ恐怖心を、志津は、今でも思ひ出す。

バスケット一つ持った家出娘は、ともかく事無に浅草にたどりつき、憧れの田谷力三が出演している芝居小屋の前に立つ事が出来た胸がどぎ／＼する。夢にまでみた田谷に会えるのだと思うと、身内中が何だかむずむずする様だつた。

恐る／＼楽屋口から顔を出し、

「田谷さんいらつしやいますか」

と、声をかけると、オーツという掛声の様な声を出して、二匹の化け物がニューツと顔を出した。

志津はキヤツと悲鳴あげた。が、お化けと思つたのは、顔を真つ白にぬり、両方の頬つべたに、目の丸の様な赤い紅をぬりつけた道化役者だつた。

「田谷さんは、今居らんね」

とその道化役者は、にべもなく言い、じろ／＼と、志津の恰好を頭の上から下まで見廻して、

「あんた、どこからきなさつたのかい」という。

志津はもう泣き出さんばかりになつて、

「静岡の田舎から出てきたんですけど」

やつとそれだけいうと、身をひるがえす様にして戸外へ飛び出していった。

あの恐ろしいというか、みにくいというか滑けいというか、二匹の化物じみた道化役者がまさか田谷の身边にしようなどは、考えてもみない志津だつた。

あゝ怖ろしい、あんな恐ろしい化物のいる所なんか、いくら田谷さんが綺麗でも、まっ平だわ、と思う。

所へ出てからも、あの恐ろしい化物が後から鈴首をつかまえそうな気がして、何とあつたをふりむいたか知れなかつた。

浅草の盛り場をうろ／＼しているうちに、

街には、早くも灯が入った。

家出娘は次第に心細くなってくる。

田谷一人だけをあてにしてきただけに、この広い大都会の海の真只中に一人、おつぽり出されているのだと思うと、もうどうしようもない心細さに泣き出さんばかりの気持だった。

とにかく今夜の宿をどうにかしなければならぬ。汽車の疲れも出て、ひどく志津は参ってしまった。

暗くなり初めた池の端を歩いていると、ひた／＼と後から追いついてきた二人連の男が声をかけた。

「姐ちゃん、何処まで行くの？」

いくら田舎出の十七娘でも、浅草辺で知らない男に声をかけられたら、用心しなければいけないという位の予備知識はあつたので返事もせず足を速めて、人通りの多い方へ出ようとする、いつのまにか、右と左に、その男が竝んでしまった。

「姐ちゃん、今夜泊る所あるの？」

おいでなすつた、と思い乍ら、志津は尙強情にだまつて、歩いていた。

こうなれば、逃げ出すより他に仕方がない。こんな所で、うろろろしていたら、それこ

そ、映画や小説でみた様な、ひどい目に合わされるのが落ちた。

不意に故郷の家の平和な夜の団欒が目の前に浮んできた。

今頃は父もたんぼの仕事を終えて、囲ろりの傍で、母を相手に、一合の晩酌を傾けている頃だ。弟や妹も、そのそばで読本や算術の本を開けていることだろう。

臉の奥がじんわりと熱くなつてくると、志津はもう無性に、父母の膝元が恋しくなってきた。

隙をみて、志津はバツと駆けた。

何とかいう声を後にきいた様だったが、ふり返りもしなかった。

通る人がみんなふり返つてみたが恥しいとも思わなかった。

「交番は？」とき／＼乍ら走つた。

不思議そうな顔をしながらも、きかれた人は交番のありかを教えてくれた。

交番の赤い軒燈をみたとき、志津は、漸く虎口を逃れた気がした。

ひげをはやした中年の人のよさそうな巡査だつた。

志津が事情を話すのをきいて自分のことの様子にホツとしてくれた。

「東京ちう所は誘惑が多いから気をつけにやあいかん、家へ帰りたくなつたのは何よりじや、汽車賃は持つているか、これからはもう東京へ出て来たいなどという気持は起さず両親のいうことをきいて、よか嫁女になる様修養するんだね」

親切な巡査で、近くの店屋から天どんを取つてきて食べさせてくれた。

その夜の汽車で、志津はその親切な巡査に見送られて、又東海道線を西へ、わが家に帰つてきた。

考えてみると、東京に出て、浅草公園の池を一周してきたに過ぎなかった。

しかし田谷にあげていた熱は、それでおこりが落ちた様にすっかり冷めてしまった。

三

夫の嘉吉に女が出来たらしいことは、うすうす志津も気づいていた。

血氣盛んな年齢ではあつたし事業も好調な時代だつたから、志津もそれを大目に見てやるだけの度量はあつたのだが、それにしても嘉吉ののぼせ様がひどく、家に帰ってくるのも週に数えるほどになると、志津もついヒステリックはならずにはいられた。

或日、嘉吉は機嫌のいい調子で、

「お前にも随分心配をかけるが、どうだね一度一しよに伊豆の温泉へでも行つてみないか少しは気分もはつきりするかも知れないよ」

夫がいつになく優しいので、志津はうれしかった。二つ返事で、その伊豆の温泉ゆきが実現され、折角の遊山なのだから、子供達は女中に委せて、夫とふたり、新婚時代に立ち直つたように楽しい気分、伊豆のその目的の温泉宿に着いた。

所が宿の女中が、

「もう、先程からお待ち兼ねでいらつしやいます」

というので、志津は、他にも誰か伴れがあつたのかとびつくりしたが、嘉吉はにや／＼として、

「あゝあとでゆくから」という返事。

「誰方ですか、他にも御一しよにお約した方があつたんですの？」

「いや、別に約束したわけじゃないがね、僕が女房を進れて温泉へゆくといつたら、ひどく羨しがつて、じゃあ私も行つて二人の楽しみを思う存分拝見させて貰うつていうんだ」

「泉町の女なんですね……」

口惜しさに声がふるえる。

「いゝやあないか、お前にいつも淋しい思ひばかりさせているから、この機会に一つうんと仲の好い所を奴に見せてやろうと思つてね……」

「まあ、あなたつて方は……」

だまされてくやしいが、そうと夫から打ち明けられてみると満更悪い気持もしない、では嘉吉は、まだ自分をも愛してくれるのかとつい甘い考えになつてしまふ。

志津にとつて、その夜の夫は、初めて見る夫だつた。

嵐の中の花のように、……にあつた。

らも、志津の心は……にあつた。

結婚してから十年近く……初めて志津はよろこびを、……

夫によつて知らされたのだ。

翌朝、新婚の朝の様に、はにかんだ気持で朝の食膳に向つたとき嘉吉はにやつとした顔で、

「ゆうべ、女が隣りの室から覗いたの、知つてるか」

といつて、志津を驚ろかした。

「いや、そんな悪趣味……」

志津は思わず顔を染めた、

山に囲まれ、清流の岸に沿うたいでゆの眺

めはすばらしい。

志津はいそ／＼と、若妻の様にはずんだ心で嘉吉と一しよに、附近の名勝地を探訪した折角女が来ているというのに、まるで素知らぬ顔で、妻の傍にばかりくつついている夫をこんなにししく思つたこともなかつた。

宿に帰ると、嘉吉は、手拭をぶらさげて

「一風呂浴びてくるからね……」といつて、

階下の浴槽の方に降りて行つた。

志津はしばらく一人で雑誌などを読んでいたが、なか／＼嘉吉が帰つてこないの、自分も一風呂浴びて来ようと考え、借切りになつて家族風呂に降りて行つた。

何気なく、がらつと戸を開けて、志津は思わず棒立ちになつてしまつた。嘉吉一人とばかり思つていたのに、誰か他にも人がいるのだ。

志津はか／＼と頭に血がのぼつてくるのを感じた。

「おい／＼……と」嘉吉が呼び止める声をあとに、志津は階段をかけ上つた。

「ばか、ばか、……自分だけが可愛がられているといゝ気持になつて、夫のおとしあなにうま／＼とはまりこんでしまふなんて……」

嘉吉は、夫婦の合歡を女にみせて、女の情

痴をかきたてゝいたのだ、

二人はきつと、この自分のお人よしを笑っているだろう、

と考えると、もう志津は居ても立つてもいられない。

女中をせきたてゝ、自動車を呼ばせ、嘉吉が部屋に帰ってくるまえに、志津は、宿を飛び出してしまった。

子供のいるわが家へ……とてもそんな気になれない。

志津はそのまゝ、東京ゆきの切符を買い、女学校時代の友人をたよつて家出してしまったのだ、

だがしかしもとゝ夫が嫌で家出したわけではない、蒼くなつた嘉吉が、漸く、志津の居所をさがしあてゝ迎えに来るまで、志津はその友達の所にいた。

この家出さわざで、夫婦の仲は緊密の度を加えた。

女はまもなく他に男を作り、その男と墮落してしまつた。

四

この前科二犯の家出常習者が、姪の家出に何かと采配をふるつたのだから、嘉吉から冷かされるのも無理はない。

しかし結果は、上々で、大阪の、男の従兄だという人間から電報で、

××日七時×分ニテカエス
いうしらせがあつた。

「ばかねえ、どうせ帰らなけや、すまないのに……出迎えは誰をやつたらいいかしら、由紀さん、三紀ちゃんか帰つてきてもあんまりやかましくいつたら駄目よ、もう自分じや充分考へてるんだから……」

志津が云うと、妹の由紀は早くも涙ぐみ乍ら、

「えゝもう帰つてさえくれたら……」
で次郎がちよつと考える様な目付をしていたが、

「僕が迎えに行つてやろう……」

「まあ、あんたが……三紀子が面目ながるわ」

由紀は申しわけなさそうな顔をした。

「それがいいよ、次郎なら、三紀ちゃんも気が置けないだろうし……笑い話にして連れて

くれば何でもないわ」

「うん……そうするから……」

次郎はその出迎えに、いそぐと出て行つた、

「よかつたね、之で三紀ちゃんも一人前になつた。若い時は、おこりみたいなのに、のぼせ上るものだわ……ホラ私が若い頃、東京へ飛び出したでしょう、田谷力三に熱をあげて……あんなものだわ、若いうちしくじつておくと却つていいものよ……三紀ちゃん、きつとけろつとして帰つてくるわ……」

「そんな三紀子でも、次郎さんは許してくれるかしら」

「許してるしよこよ。迎えに行く所を見れば……今の若い人達に私達の時代みたいな貞操観はもうあてはまらないのね昔は女ばかり犠牲を強いられたけど、今は男女同権……」

「まあ、ホッホッ……」

三紀子が家出以来、始めての由紀の笑いだった。(おわり)



一清教徒の日記

栗 島 洋

○月○日

会社の仕事が終わると、僕の足はいつかまたH公園の方に向つていた。風はなく美しく晴れた星空があゝの小道を囲む木立の間から眺められる。自動車走り過ぎ、木立の間に寄りそつてゐる若い男女の姿を照し出した。しかし僕の心はそんなものには動かされない。

幾度かこの公園に足を運んで、僕の求めの男性にめぐり会う機会を待つてゐる。が僕のようにならぬ待つてゐるのでは何時のことやら分らないかも知れない。今日こそ勇気を出して積極的に行動して見よう。木立の奥から足音が聞えた。僕は電氣に打たれたように立上る。そしてポケットから煙草を取出して火をつける。しかし僕の全神経は近づく足音に

向けられていた。果して期待してゐた通り若い男である。僕に近づくふと立止つた。僕の全身には不安と期待に熱いものが一瞬かけ廻つたが、次の瞬間「火をかって下さいませんか」という男の声に「どうぞ」という声にならないまゝ煙草をさし出してゐた。

火をつけようとうつ向いた若い男のマフラーの間から、はち切れそうな若々しいえり首が見えて僕の様子に不思議なものを感じたのか、青年の目が一瞬またゝいたのを知ると、僕は何も言えずに逃げるようにその男の傍を離れて行く。心とは反対に行動するじれつたさ、今日もまた空しく家路につかなければならない。また明日も同じことを繰り返すばかりだろう。

○月○日

今日もまた空しい一日が過ぎようとしてゐる。落ちつかない夕食を済ますと風呂屋に出かける。僕の満たされない心を幾分でも和げてくれるのはそこには何のさまたげるものをも身につけない男の肉体を眺めることが出来るからである。何時ものように湯舟につかりながら、理想の男を求めて僕の視線が移動する。そして目標をとらえるとそのまゝじつと動かない。筋肉の発達した手足、美しい曲線を画く臀部、そして最後には最も男らしい部分、ギリシャ彫刻が生き返つたかと思われるその美しさ。あゝのたくましい腕で抱きしめられたら……

僕は体を洗うのをそこそこに風呂屋を出る。僕の横にはさつきの青年が美しい肉体を惜し気もなく見せて横たわつてゐる。そしていつしか空想の世界に入つて行くのだつた。ふと気がついて空想の世界から呼び戻されて見れば、青年の姿は無く独りさびしく横たわる僕の姿だけである。

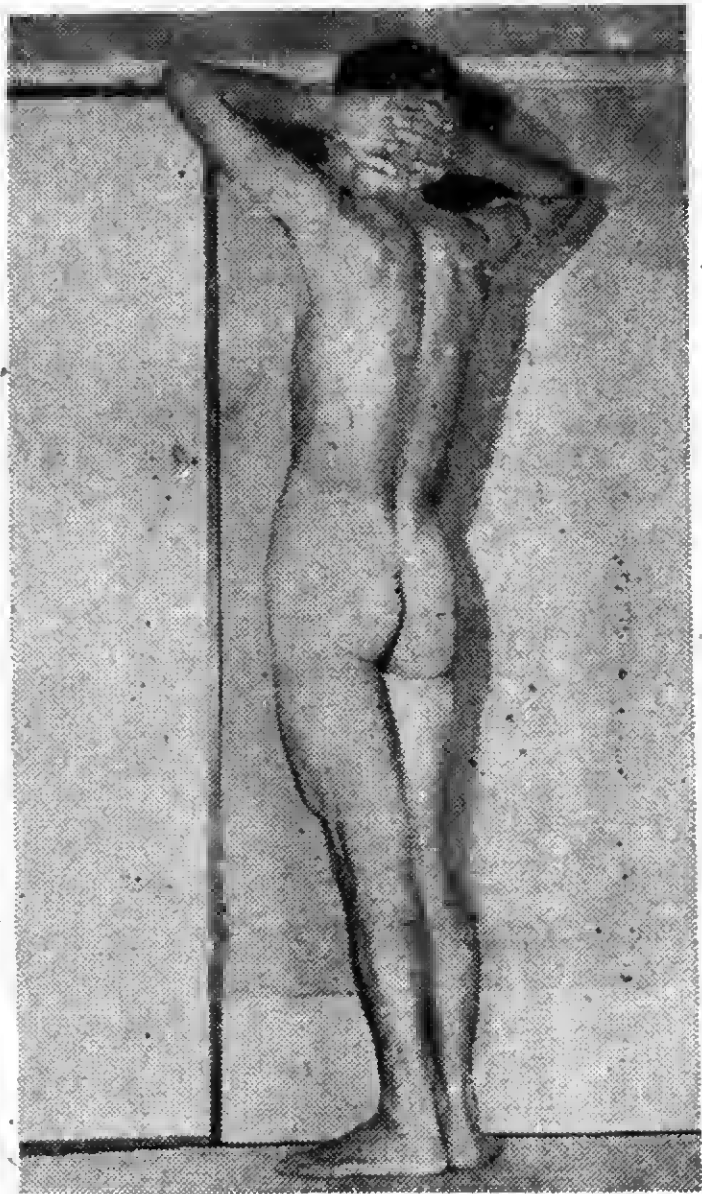
○月○日

本屋の店先で何気なく手にした雑誌の中に美しい男性のモードが目に入つた。

思わず次の瞬間にはカウンターに近づくそ

の雑誌を買い求めると釣銭をもらうのも待ち切れずとび出してしまった。しかし今は目の前に、その男性の姿があり誰はさがることなく眺めることが出来るのだ、わずかに小さな写真一葉だけのものではあるが、こんなものを手に入れることが出来たのは始めてであるだけに嬉しかった。後ろ向きに立った全裸の青年は両脚をわずかに開いてその美しい姿を僕の目の前にそらし僕の心をさそう。僕はその男に近づく。……しかし何と云つても写真は写真だ。家の人達は揃つて出かけたようだ。僕はふら／＼と立上つて、半裸体になると鏡の前に立つた。僕の肉体も決して欠けた所は無いのだ。彼と同じように筋肉のついた両肢が鏡にうつる。僕は更にシャツをも

かなぐり捨て、全裸となつた。そこにはあの写真のように一人の男の姿が写っている。僕は鏡に向つて色々な姿態をしかけて見る。いつか見た彫刻のように両腕を上げ全身に力を入れて筋肉をより上げて見る手足を運動させては変つた自分の姿にうつとりと時を過すのだつた。



私の日記帳にはこんな事が後から後から書き続けられている。私は二十四才で未だ女を知らない。いや女を知ろうとする欲望は持っていないのである。それでは何が私をこんな状態に陥し入れたのだろうか。私は五尺四寸一五貫の肉体を持ち、男性として何一つ不足するものはない。たゞ生れつきの性質から運動などはあまり好まないのだ、それだけ筋肉の発達は劣っているが、誰からもその身体について賞められてだけいる。

私の家庭は教員である厳格な父のために、性に関する知識を家庭で得ることは不可能であつた。それでも中学校に入つてからは世間

の子供達と同じように何時の間にか性に関することを聞かされるのであつたが、私は好奇心は持ちながら、恥しい事とされているその事に対して積極的に知識を広くするような事は出来なかつたので知らず知らずの中には仲間の者に較べては貧弱な知識しか持たなかつたようである。従つて私は仲間からも清教徒あつかいにされるのだつたが私の内心はそんな外見とは異なり、思春期の少年にありがちな

独りになると自らそれを処理することを知っていたのである。しかし私が自分の欲望が他の人達と多少異つていることは薄々感じていたが、それが何であるかは私自身気がつかなくかつた。私がその時に対象とするものは、異性の姿ではなく、自分の姿であり、私自身の次第に成長してくる肉体だつたのである。

然しそれは私だけに限つた事ではなく、世間の他の人達もそうであつたのかも知れないが、私がはつきりそれが異常であると気付いたのは次に述べる事件からであつた。

(未完)

暴帝イワン罪惡史

高 取 辰 治



惨虐と弾圧はロシア帝政支配の基礎であり、更にその国家組織の根本原則であつた。タンボフ県知事のムラトフは公然と、しかも政府の機関紙上で、革命防止の最良方法、人民統治の最善の策は、第一には先ず人口を絶對的に減少せしむることにあり、第二には專制政治を徹底することにより、第三には常に人民の中から人質を取つて置くことにあると主張した。この恐ろしい惨虐な言葉は、しかし、決して一県知事の主張ではなかつた。帝政ロシアは過去幾千年の間その外の方法で統治されたことがなかつたのである——虐殺と鞭答、それが統治のアルファでありオメガであつた。

ガであつた。民衆もとより然り、統治者自身さえがその運命を免れることが出来なかつた。廣大無辺の領土の統治者は相続によつて交代するといふよりも、むしろ弑逆によつて交代した。

一例を挙げると一七六六年、フセオロード三世として大公となつたグレゴリウイチはその甥の眼を抉つて帝位を奪い、ワシリ・ワシリエウイチはワシリ・コリイの眼を抉り、そのワシリ・ワシリエウイチも亦一四四六年に同じ方法で帝位を奪われた。眼を抉る——それはギリシヤ伝来の帝位剝奪の方法なのだつた。

惨虐は死んだ人間の遺骸をも逃がさなかつた。ロシアの支配者は人間の墓をさえ憎んだ。帝位剝奪者のボリス・ゴドノフはこれも亦王位を僭称したドミトリイの遺骸を墓から引き出してモスクワの空に撒き散らした。

この珍らしい事件の次第はこうだ。一六〇六年の三月、ロシアは猛烈な霜害に襲われた。それがボリス・ゴドノフのドミトリイをやつつけたばかりの時だつたので、人民の間ではドミトリイの怨が残つて仇を返しているにちがいない。ドミトリイの墓から何か又異変が起るだろうという噂が専らだつた。ネリ

ス・ゴドノフはこの地上からドミトリの遺物を一切抹殺する決心をした。

かくしてドミトリの死骸は墓から掘り出され、その死灰は火薬と一緒に大砲に充められて、公衆の面前、ドンと空中へ打ち上げられたのである。

ペートル大帝は帝位に即くや否や、妹ソフィアの一党全部を殺した上、その死骸をずらりとソフィアの部屋の窓に吊した。一六九七年、ペートルは西ヨーロッパの漫遊を思い立つたが、いざ出発しようとする時になつて突然大陰謀が曝露された。その一味というのはペートルの仇敵で今は故人になつてゐるイワン・ミロスタウスキーの生前の親友達であつた。

ツアーは出発を延期して恐ろしい復讐に取りかゝつた。もう十二年間も土に埋れて腐敗したミロスタウスキーの死骸が掘り出されて十二頭の豚の牽く轡によつてプレオブラシェンスクに送られ、断頭台上に置かれた棺桶に移された。棺の蓋が開かれ、断頭台上では次々と謀反人の首が飛んだ。謀反人の身体はずつた／＼に切り刻まれ、血しぶきが指導者の腐つた死骸を赤く染めた。ペートルの怨みはこゝろしてやつと晴れたのであつた。

パウロ帝は石をさへ憎んだ。彼は一七九八年一月十七日ヘルソンにあるバチヨムキンの記念碑を粉々に破壊し、このカタリナ帝が最愛の寵人の白骨を河へ投げ込んだ。

支配者が変わると新しい支配者は先ず自分より前にその最高の地位にあつた人間の姿を眼の前から除いてしまわねば安心出来ない。かくしてペートル二世の死後、その妃カタリナ・ドルゴルツキーはシベリヤ、トムスクの尼寺へ幽閉された。だが、それだけではまだ駄目だ。ペートル二世との婚約の記念として傷つけられた誇りと希望とを回顧する唯一の形身となつたエンゲージ・リングを奪わねばならない。一人の士官がその指輪を要求した時、妃は凜然とこう叫んだ。

「妾の指と一緒にとつておいで」

妃の家族全部、七十人に上る人々も亦トボルスクへ追放された。だが彼等も亦無事では落まなかつた。新帝の首斬り役人ウシヤコフとスウオロフとはこのドルゴルツキー一家の首をはねよとの命を受けた。そしてこの二人はその仕事を命令以上に遂行した。彼等はこゝの犠牲者達を氣絶するまで拷問し、拷問台上で勝手な自由をでつち上げた上、死刑の宣告を下した。イワン・ドルゴルツキーは車裂

きにせられて首を斬られ、その弟アレキサンデルは我と進んで切腹をした。

どんなに誇らかな人でも、いやしくもその人が支配者の寵愛を辱うしているかぎりには、支配者の交代が何を齎らすかを覚悟してゐなくてはならなかつた。支配者が變つた刹那、彼等は蒼白な顔を硬直させて来るべき恐ろしい運命の必然をただ待つより外なかつた。イワン・ドルゴルツキーは一撃又一撃、その手その足が折れる毎に、その恐ろしい響に合せて神への祈りを吟んだと云われている。一門中にたつた一人、ワシリイ・ウラジミロウイッチ・ドルゴルツキーだけは不思議にこの大虐殺を逃れた。その訳はこうである。宰相オステルマンとミニツヒ元帥とは新帝の裁判所で斬首の宣告を受けた。ところがそれに「反対する」人が一人出来て来て、オステルマンは車裂きに、ミニツヒ元帥は四つ裂きの刑ということになつた。この惨忍極まる反對者が今述べたワシリイ・ドルゴルツキーであつたのだ。

ワシリイ・ドルゴルツキーはエリザベータ——ペートル大帝の娘——によつて追放されていたが、赦免がかなうと自ら斬首役人の役目を務めることが一番大事な処世方針だと考

えていたのである。で、この場合に彼の意見が通された。慈悲王と呼ばれたエリザベートもその宣言に署名した。しかし彼女は最後の瞬間に慈悲を施そうと考えていた。その慈悲というのはいよく囚人が刑台に上つた時、車裂、八つ裂という複雑な刑を単純な斬首と代えたと云いきかせ、さてその首が落ちようとするとなんに慈悲深い女帝は死刑を赦すと告げるのである。この恐ろしい芝居の筋書はいかにも信心深かそうに行いすましたエリザベートのサジズムを満足させるのに充分だったのだ。

「ツァーに近いことは死に近いことだ」

帝政のロシアにはそういう諺があつた。惨虐性は英雄や支配者に附き物であつた。眼覚めなかつた民衆が、どこの国でも同じように人間の屠殺者を英雄とし聖者として尊崇した時代があつた。一将功成つて万骨枯る。ノウゴロド大公の聖アレクサンデル・ネウスキはロシアの土の生んだ最も非人間的な暴君の一人であつた。ノウゴロドに蒙古が押寄せた時のこと、市民は蒙古の支配に武器を以て反抗した。ところそる町の主人公たる肝腎のネウスキ自身は蒙古と同盟をして市民の大衆的虐殺を敢行したのであつた。そのネウス

キーが英雄であり聖者と呼ばれる！

イワン暴帝も亦然り、この男はカリグラヤネロに勝る怪物であつたが、この非人間的、というよりもむしろ反人間的な暴君は何十年間に亘つて人民を屠殺し、遂に誰一人にも復讐されることなく自然死を遂げて、それで一個の立派な英雄たり得た。イワン暴帝！我々はこの暴君のことを次に詳細に物語らねばならぬ。

二

イワン暴帝は絶対専制の暴君であつた。彼の前には何物も權威を主張し得なかつた。ペルシヤからモスクワへ送られた象は九拜の礼を知らなかつたために八つ裂きにせられたしイワンとトランプをする廷臣は一寸でも勝とうとする氣配を見せたら最後、惨忍極まる体刑を受けねばならなかつた。ロシアの歴史家はイワン四世、この暴帝を地獄のどん底からロシアを八つ裂きにするために地上へ上つて来た妖怪変化であつたと云う。彼の後半生は地獄の鬼ですら及び難い暴虐と悪虐に満たされていた。

イワン四世は一五三〇年に生まれ三才にして父を失い、一五四七年に帝位に上つた。若い時にはそれでも仲々の美少年で品行も正し

く、ロシアの開化に意を用いてドイツから職人や技術家や学者をモスクワへ招聘し、初めて印刷術を興しイギリスのエリザベス女帝と通商を結び、ストリエリツイと呼ばれた常備軍を創設し、カザン及びアストラハンを攻略した。イワンの善行はこれで終つた。この文明の指導者は魔女マリア事件で急転直下暴帝の名を後世に残す事となる。

マリア事件とはこういう事件である。或時イワンはマリアという女が彼を嫌う余り、魔法を使つて彼を呪い殺そうとしているという噂を耳にした。その刹那イワンは胸の底からむく／＼と湧き上る復讐の念が抑え切れない力を持つことを感じた。イワンは何等の訊問も行ふことなく直ちにマリアとその五人の子供を魔法使いの名の下に焚殺の刑に処した。マリア事件——この事件から恐ろしい地獄の絵巻物が展かれる。

イワンは先ずオブリチナという虐殺専門の新選組を編成した。オブリチナとは特権という意味である。この新選組はイワンの親衛兵として七千人の兵士から成り、高きも卑しきも思うままに弾圧虐殺する特権を持っていた。オブリチナを構成する兵士の身分は卑しかったがその特権は最高であつた。オブリチ



ナの兵士、オブリチュニキに睨まれたが最後である。オブリチュニキを悪罵することはツアーを悪罵することであつた。彼等は犬の首と轡のマークの入った鞍を馬に置いて横行した。オブリチュニキはツアーの敵に噛みついてロシアを掃除する役目を持つていると云う意味である。彼等はこの明らかなシンボルを高く掲げて昼といわず夜といわずロシアの民

衆を狩り立てゝ歩いた。

イワンの惨虐は先ずその年寄つた顧問達を血祭りに上げた。彼等は若い主君に善行を勧めただけのことで直ちに追放された。追放—しかも断頭台上へ！彼を取り巻く大臣達は彼の位置を固めてその支配を確実にした。彼は大臣達にその債務を負うている。彼はそれが氣になつた。それを首斬り役人によつて一氣

に支払つたのである。彼の身にとつては最も有難い人々がこうして血祭りに上げられるとイワンの心の底から猛然として野獸性が頭を抬げて來た。イワンは自身を偶像に祭り上げてそれに血まみれの犠牲を捧げた。全人民全臣下が自分の前に畏伏していた。自分は神の選んだ人間だ否、神それ自身で

ある。その神へ捧げる犠牲の屠殺は善であるにしても、断じて悪ではあり得ない。彼は血に餓えた屠刀を握つて立ち上る。

三

大規模な殺人時代は一五六〇年、イワン三十才にして開始された。ツアー・イワンは酒と女に耽溺し、その宮殿では日夜酒地肉林の饗宴が続いた。しかし、或るロシアの歴史家が書いてるように「歡樂は壁一重で悲慘に接している。モスクワへ流れる酒は血に變つた。」

或時のことツアー・イワンが馬鹿遊びの最中お氣に入りの家来と一緒に仮装して出て來たのを見て老藩王^{ポヤール}レブニンが乱行を目の前に思わず涙を流したことがあつた。酔つぱらつたイワンはそれを見て高々と打ち笑つた。「面白い、お主も面をかぶつたらどうじや、さあ、かぶれ、ツアーの命令じや！」

イワンはレブニンに道化の面を押しつけた。レブニンは面を地面にたたきつけて踏みにじり悲痛な声をしぼつた。

「道化師がツアー陛下の御役目でもござりますまい！」

ツアーは立ち止つたきり物が云えなかつ

た。レブニンは静かに宮中を退いてお寺へ行き、その祭壇の前で神にツアーの非行を許せと祈った。老いたレブニンは、その夜、祈の終らぬうちに、後をつけて来た兵卒のため冷たくなつて祭壇の前に横たわつてしまつた。

イワンの一番可愛がつた家来はテオドル・バスマノフである。(この男が後にどんな最後を遂げるか、読者はやがて知るであらう。) そのバスマノフがド・ミトリ・オボレンスキー・オウチニン大公に

「貴様はツアーに可愛がられて結構じや、汚い稚児さんの役目が上手じやからの。」と面罵されたことがある。

イワンは大公のため招宴を催して、自分の隣に座らせた。饗宴が始まつた、大公は何の不安をも感ぜずにワイン・グラスに手を触れようとした。その瞬間ツアーは短刀で大公の心臓を刺した。山海の珍品が温い血で彩られ歡樂の宴が修羅の巷となつた。ツアーは血だらけの手を挙げて叫んだ。

「皆の者、こいつの死に様を忘れるでないぞ！」

ツアーの乱倫非行は益々激しくなるばかりである。誰一人として身の安全を保証された者はない。そこには当然醜い誣告讒言が流行

する。恐怖時代の出現！誰も彼も身の安全を計るため、ツアーの惨忍性に媚びて他人を陥れるより外はない。家の中で話された秘かな話が何時の間にか嗅ぎつけられ、友は友を裏切つてツアーに密告した。言葉だけならまだいい、遂には眼付きや素振りまでが讒訴の種となる。ツアーはツアーで一から十まで讒訴という讒訴のことごとくを真に受け。裁判官は命たゞこれに従つて何等の証拠もなしに死刑の宣告を下し続けた。カシンの大公二人は何の罪もないのに訊問もされず斬首人に引き渡されクルレーテフ大公は一族全部が殺された。クレイメルの子エイレメチエフが拷問にかけられ、びしりと肉を裂く筈の下に血を流しているとき、ツアーはふらりと刑場に現れ笑いながらこの半分死んだ男に訊ねた。

「お前、金は何処へしまつた？」

だが、これはまだ始めに過ぎぬ。やがて貴族や民衆の血が滝つ瀬となつて流れて来る。

「モスクワは恐怖に剛直した」と云われた。

牢獄に僧院に犠牲者の呻き声が満ち、その声を聞く毎に三十才の暴君の心は益々荒んで行く。カラムジンはその有様をこう書いている。

「血の盃は渴を医やさずに反つて渴をはげし

くした。ツアーは自らほんとの筈に變つて行つた。」

しかしツアーにはまだ多少の人間らしさが残つていた。少くとも彼は自己の乱行に理屈をつけ、虐殺の正当な理由を拵えようと考へていた。彼は彼の犠牲者を反逆者、魔法使いキリストとロシアの敵と呼んでいた。そして多少は悔恨の念に打たれることもあつた。時として神前に跪いた彼がこう懺悔したと伝えられる。

「私は穢れた犬でございます。昼も夜も酒に溺れ女色に耽り、姦淫、男色、殺人、傷害、掠奪、強盜、ありとあらゆる惡事を致して参りました。」

だが其の所彼は神を人間と共に輕蔑していた。虐殺に疲れると教会へ行つたが、彼が神像の前で考えることは天上のことではなくて、実に新しい虐殺の方法であつた。彼は宮殿を僧院に、寵愛する臣下を坊主に変えて見ようとした。例のオブリチュニキから三百人の一番獐犷な分子を選び出し、これを修道士に仕立て、揃いの僧帽をかぶらせ黒い僧服を着せ自分はその修道院長となり、遂に自分を見習わせるのである。イワンは更に修道院生活の律則を拵えた。ツアーは先ず院長であり、朝

四時には朝食をとる、この時に遅れた者は一週間の禁錮だ。

朝の勤行は六時乃至七時まで続き、ツアーは「讚美歌を歌い熱心に祈禱を行い頭を地につけた。」そしてその祈禱中に思い出したように惨忍な命令を発した。十時に又御飯がある。オプリチュニキの修道士は座してツアーの説教を聴く。心靈の救いを求め云々の説教が済むと酒林が重ねられて修道院は毎日の乱痴氣騒ぎとなる。ツアーは修道院長として最後に一人で飯を食う。それから宗教上の雑談さてこうして腹が出来ると牢獄へ拷問に遠征する。一通り惨虐感を楽しんで帰ると夜になる。ツアーは十時に寢室に入つて三人の盲人からお伽噺をききながら静かに眠り、これで一日の仕事が済むという訳であつた。

四

では、このツアーの暴虐に対して抗議をした者はなかつたのか？少くはあつたがたしかに硬骨漢はいた。その第一の人はクルプスキー大公である。彼は遠方から使者を以つて抗議書をツアーへ捧呈した。その抗議文の冒頭を訳出するところである。

「嘗つては輝やかしかりし明君、今は異教徒を統ぶる君主にさえ見られざる癩病に憑かれた暴虐のツアーよ！おん身を裁く神なきや？無事の犠牲の涙は暴君に課するの刑を準備しつゝあり。死せる者を恐れよ！汝により屠られし人々は今最高の神の前に立ち、汝の帝位に対する復讐のことを進めつゝあり。汝が兵も汝を救う力なく、汝が身辺の阿諛の徒、汝が卑劣なる藩主、汝が饗宴と淫楽とを分ちたる者、その子汝が犠牲に捧げて汝の心靈を蝕みたる者共も亦汝に永生を保証すること能わす！」

イワンはこの書面を伝達した家来の足を鋭い刀でいきなり床に釘付けにし、その刀を杖にして怒氣満面、使者をして文書を読み上げさせた。クルプスキーの抗議を黙つて聞いていたツアーの答はこうだつた。

「朕は朕が臣民を朕が意のままに賞するの力あると共に朕は朕が臣民を意のままに処罰するの力あり。今日以後、ロシアの君主はその行為につき何人にも責任を負わざる事を銘記せよ。」

これを機として第二の虐殺時代が始まる。クルプスキー大公と苟しくも何等かの関係あり、又はあつた者は一族全部が殺された。そ

の第一の犠牲者は聖ウラジミールの直系の末裔たるゴル・パチー・シユイスキー大公とその十七才の息子ペートルであつた。二人は恐るゝ色もなく刑場に牽かれた。子が先ず刑吏に進みよつて刀の下に首を差し出した。父の死を見るに堪えなかつたのである。だが父は子を押し止めた。

「ペートル、僕にお前の死に顔を見せてくれるな！」

若者は勇ましくも父に順番を譲り、父の首を取り上げてキスした後、従容として死についた。何という悲劇であらう！

同じ日にゴルパチーの義兄と其他の多くの貴族が殺された。斬首ばかりでもあるまいとド・ミトリ・シユウエルフ大公は磔刑に処せられた。彼は「十字架の上で二日間生き通し、キリストの栄光を讃えた歌を歌いつづけた。」と伝記家が書いている。

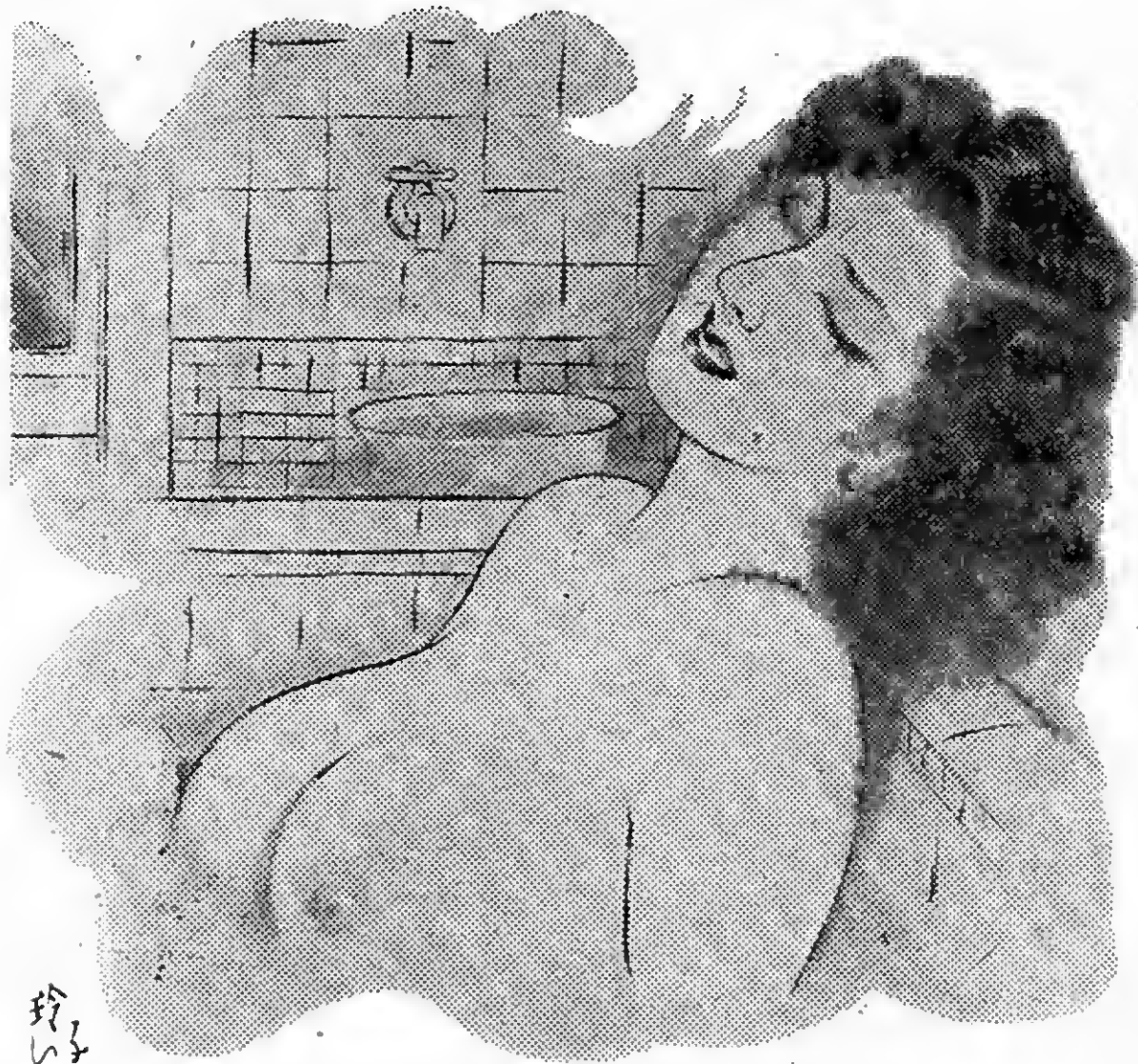
(未完)

淫

(みだらび)

火

(第五回)



玲子

松井 籟子

画 喜多 玲子

一

窓の外は道頓堀にあたるのか、対岸の灯が水にうつゝて、夜の川のあの妙な孤独感と情緒とが交錯して感じられた。

東京から来た女流画家だと紹介状には書いてあつた。小さな風呂敷包みとハンドバッグだけで、東京大阪を旅行出来る時代が再び来ている。画家という職業が女のひとり旅をあやしませなかつたらしい。ただ主人という中年の女将が片手に貴船一郎と名のつた男の紹介状を持ちながら、慇懃に部屋へ入つてくると、懐しそうな口調で彼のことをたずね出した。

しかし、小百合夫人が貴船一郎について知つているということはその外貌と、変つた性癖があるらしいということだけだつた。むしろ、逆に、彼と近い関係があるらしい女将に夫人の方から尋ねたい位だつた。

「大阪は不慣れなので友人の画家に旅館をききましたら、その友人が貴船さんの紹介状をいたゞいて下さつたので、私自身はよく存じ上げないのです」

夫人がそういうと、女将は失望したように

「では、そのあなたのお友達の画かきさんにうかがえば、一郎さん



「の消息がわかるでしようか」
と重ねて聞くので、夫人は又困
つて

「多分わかると思いますけれど、
あいにくその友達は私と入れ違い
に東京に展覧会があるといつて、
立つてしまつたので」
と、言葉をにごした。

女将はなおも、一郎さんに会つたか、どんな様子だつたかと、小
百合夫人に聞いては、一々溜息をした。その様子から推すと、貴船
一郎とこの家との関係は何か血縁につながらしかつた。しかし、
小百合夫人は人の秘密に属するようなことをさぐるのは、はしたな
いと思う氣持が強く、自然言葉数も少くなり、女将も知りたいこと
を知ることが出来なかつたと同時に、小百合夫人も貴船一郎という
人について、何にも知ることが出来なかつた。

チーンジャラジャラジャラと、パチンコの音が遠く聞こえてくる
どこかのキャバレーから流れてくるのか、ラジオから流れているの
か、哀調をおびた流行歌が聞こえている。

女将は小百合夫人に、貴船一郎の消息を友人の画家に聞いて、せ
めて住所なりとわかつたら知らせてほしいと念を押すと、静かに部
屋を出て行つた。

女中が床を敷きに来て、風呂をすすめていった。

この前、はじめて小百合夫人が新世界へ行つた時、夫人は何か自
分の体から汚濁を洗うつもりで風呂に入つた。今、小百合夫人は湯
舟につかりながら、自分の白い裸身の上にあの街の汚濁をむしろな
つかしんでえがいていた。村山も村山の情婦も、貴船も貴船の情婦

も、みんな生きて血の通つている人間に思えるのに引きくらべて、
自分の裸身は何と殺風景に冷たいのだろう。裸になつてまで、境遇
の匂いというものはどこかに残っているものなのだろうか。

曾つて夫人がまだ東京にいた時、同窓会で友達のひとりがこんな
話をしたことがある。その友達は花柳界の近くに住んでいて、毎日
芸者達のいく銭湯へ行くのだそうだが、素裸になつても、芸者とし
ろうとはすぐ見分けられると言つていた。妓達の話し振りにそう
いうものがあるのかと思つたが、何にも言わずに、だまつてタイ
張りの湯殿に座つて体を洗つていても、湯舟の中に浸つていても、
一目でその職業がわかるというのだ。昔のように髪を島田にしてい
るわけでもない、素人の娘と同じようにパーマネントをかけた髪型
でいながら、体にしみついた垢はお湯で洗つても抜けならしい。
小百合夫人はふとその話を思い出して、湯舟の中で自分の裸身を
つくづくながめた。何かしら香り高いものがあるのだろうか。も
し男が小百合夫人の裸身を見たら、その白い手を後へねじあげるよ
りは、むしろ、その白いやわらかい手で、男の手をねじ上げてもら
いたいと思うかもしれない。凌辱するには氣品がありすぎるといえ
ばいい。

彼女は半身お湯に浸りながら、自分で手を後にまわしてみる。浸
つて居るのは快よい湯なのだが、水責めにあつている状況を想像し
て居た。しかし、美しすぎる彫刻に淫らなもの感じないように、自
分で自分の裸身を見て、小百合夫人はみだらな妄想をおこされる汚
れがないのに気がついた。何か汚点が必要なのだ、責めの実感が湧
いてこないのだ。

彼女は急に自ら二の腕ををぐつと噛んだ。痛い……。それをこら

えて激しく吸つた。唇をはなすと、赤い歯型がのこつた。丁度村山富男の胸一杯にっいていたと同じ痕になつた。夫人の肌の香は甘く、石鹼の香料の匂いがしていたが、ふと、村山のチーズのような体臭が鼻のさきをかすめて通つた。彼女は片一方の腕にガクツと歯をたてた。そして次々に、唇のとどくかぎりの上半身に赤い歯型を点々と残していった。一つが二つになり、二つが三つになり白い肌に星型の痕がふえていくに従つて、夫人は狂はしく息がはずんでくる。それを静めるように、自分の手を後手に無理やり高く組んでみた。そして見えないう縄で首をうしろへ引かれたように胸をそらし、下目ずかいに自分で自分の姿を見る痛々しい痕が小百合夫人の裸体をさつきとは違つた感じに粉飾していた。彼女は自ら悶えるように体を動かす。すると、その痕が生き生きと動き出すのだ。あの新世界の宿屋で貴船の女の尻にうごめいたみみずの様な痕。……村山の背中にはついていた幾条の海蛇の様な痕……。そうしたもののが映画のフラッシュのように小百合夫人の頭をかすめて、いつしか彼女は背中で組んでいた自分の手が、前へまわり、体の中の一歩熱をもっている所を探すように動いていくのを知つた。

前号迄の梗概

夫婦の夜のいとなみとさえ、別々の寝室からオルゴールの音で求め合う程、つゞしき深い上流社会の、若く美しい人妻小百合の血の中に、鬼火の様にチロチロと燃える火があつた。生れる前からあつたものか、幼い日、乳兄弟とのあそびによつてつけられた火なのか小百合夫人の血がさわく。身なりを変えて、あてもなく新世界を歩いてみたのも、その焔に身を焦がされたからだつた。そこで彼女は村山富男という男に会う。村山は彼女の嘘をうのみにして、東京から流れて来た不良少女つる子として、彼女に心惹かれる。彼は自分を苛めてくれる美しい女を探し求めていたのだ。その為には泥棒さえしかならない。物を盗るのが目的ではなく、苛められる機会が欲しいのだ。偶然小百合夫人の邸に忍び入つた時村山は夫人の夫の雄作が若い美青年と庭の築山で、男同志接吻しているのを見てしまう。雄作も又、性の裏街道を歩く男なのだろうかしかし、村山は、小百合夫人とつる子が同一人だとは知らなかつた。

ある日小百合夫人はまるで見えない糸に引かれる様に再び新世界をおとずれて村山に会う。そして請われるまゝに旅館の一室で、彼の奇体な遊びの相手になつてゐる所へ、突然現われた村山の情婦によつて、スリッパ一枚の姿で廊下をひきずられ、玄関へ放り出されてしまふ。彼女を羞恥と困惑から救つてくれたのは、芸術家らしい青年だつた。しかし、村山の情婦から彼女の洋服をとつてくる間、待つてゐるようにと通された彼の部屋には、すでに恋人らしい女が布団にくるまつていた。女は夫人を見ると訳もきかずに激しく嫉妬して、布団から転り出してくる。その姿に夫人ははつと息をのんだ。全裸の身をひしひしと麻縄で縛られていたのだ。それこそ小百合夫人が常日頃、自分の血の異常さをおそれながらも、こわごわ夢みた自分自身の姿ではなかつたか！青年はあばれる女をさらに床柱へ縛りつけて、小百合夫人をミナミまで送つてくれた。そして貴船一郎という画家なのだとなつて、その夜夫人の泊る宿を紹介してくれた。しかし、自分は一緒に行こうともせず、ただ、来週の金曜日の夕方、もう一度会つてくれと切に求めて、新世界の女のもとへ歸つて行つたのだつた。

一一

寝苦しい一夜だつた。
浅い眠りでも夢をみてふと目を覚し、又とろとろつと眠つて又目を覚し、転々としてゐるうちに、いつしか朝の光が雨戸のすきまを

洩れているのに気がついた。

急には寢床から起き上る気力もない。二日酔いの胸の悪さに似たものが、かたまりのようにつかえていた。自分の血を自分で厭う暗さだった。頭が重い。神経衰弱かもしれないと小百合夫人は思った。今神経衰弱でないとしても、それにかかりそうなことだけはたしかだった。彼女は漠然と不安を感じる。何不自由なく育ち、幸福な結婚生活をして来た今までのあけくれが、砂が崩れていくようにさらさらとこぼれはじめて、そのうちボカツと穴があき、足元をさらわれて転落するのではないかという危険を感じるのだ、未知の世界を知ったということは、人間を幸福にするよりも不幸にすることの方が多い。禁断の果実はそつとしておくにかぎるのだ。

しかし小百合夫人はもうそれに手をふれてしまったのだ。匂いも嗅いでしまったのだ。ただ、今なら思いきつて捨てられるかもしれない、いや、今捨てなければいけないと思うのだ。

小百合夫人は自ら鞭打つように寢床をはなれた雨戸をあけると朝の光が体を浄めてくれるように明るくさしこんだ。

正常な生活に戻ろう。幸、夫はまだ何にも知らない、誰も小百合夫人が新世界で何人かの人の目にスリッパ一枚の半裸の姿を見られたと、夫に告げ口するはずもない、何日かにわたる長い夢を見たのだと思つてはつきり目を覚まそう、洗面所へ行くと女中がとつてくれたぬるま湯をあけて、冷たい水で顔を洗つた。そして幾度も幾度も「忘れるのだ、忘れるのだ」と自分で自分にかんでふくめるようにくりかえした。

しかし、旅館を出る時、又玄関先で女将から、貴船一郎の消息を教えてくださいと、再度念を押されると、急に心のすみに痛みのような

ものを感じるのに我ながら驚いた。彼女はもう貴船一郎には会うまいと思つていたのだ。

「金曜日の夕方……」と約束したのは、一郎の片約束で、夫人の方からは「たしかに来ます」とは言つていなかった。そのまゝすつぽかしてしまえば、そして、新世界の方面へ足を向けなければ再び貴船一郎に会うことも、村山富男に会うこともない。それなのに一郎の名を言われただけで、心に痛みを感じるのは、その人の印象が忘れるにはあまりに深く入りこみすぎたのだろうか。けれど、それにしては忘れてしまわなければいけないのだ。夢の中を通りすぎた人として、いつしか忘れていくことは出来るはずだ、もし人に忘却という智慧がなかつたら、世の中はどんなに苦しいことだろう。

外は明るい陽光がまぶしい程だった。誰もが幸福そうに見えた。小百合夫人はふと、海を見たいと思つた。そうだ。あの広い蒼い海を見たら、自分の心の病気が癒えるかもしれない。伊勢から志摩へ、志摩から和具、波切へ……。或いは紀州でもいい。船頭のかぐろにわけられる波が、まるで萌えはじめた草の様な色をしていて勝浦の海を思い出す。この辺の子供は海の色がブルーではなくグリーン色の絵具で画くだろうと思つたものだ。つた。

その夜、小百合夫人は夫の帰宅を待ちかねたように、週末の旅を誘つた。

ひとりでは何となく心許なかつたのだ。ひとり旅の心許なさではなく自分自身のさがに対して心許ない思いなのだ。正常な心になる為には、やはりそばに正常な人の存在が望ましいのだ。

「私、伊勢まで行きましたら、急に御一緒に旅がしたくなつて、一とまず帰つて参りましたの」

電話の嘘につじつまを合わせる為に、小百合夫人は雄作にそう言った。

すると雄作はさぐるように妻の顔を無言で見ていたが、「そうか、実は僕も少しの間大阪をはなれて休養がしたいと思つていたところだ」

と言う。それは妻の誘いに心よく応じている答えだったが、彼の頬にうかんでいる気嫌のよさそうな微笑に、何となく無理に作つていふような不自然さがあつた。

「何か厭なことでも？」

と、夫人は聞いた。顔の表情のわずかな動きで、かくされた言葉を感じるのも、夫婦というものの習慣かもしれない。

「君、誰かに何か聞いたの？」

雄作は問い返した。

「え？、何かあつたんですか？」

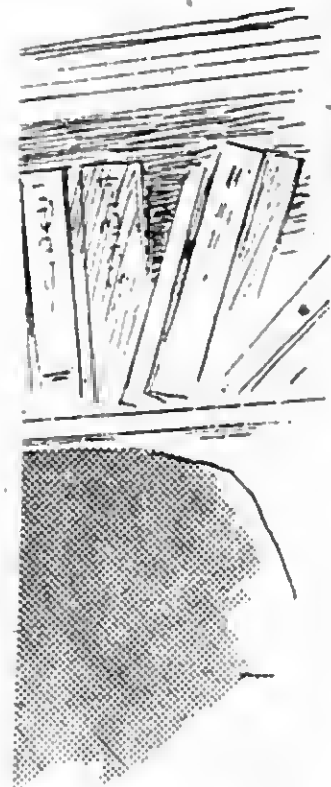
夫人は反つて驚いて問い返すと、雄作はあわてたように、

「いや、何。会社で一寸した盗難があつたのだが、それと旅行したいと思つたことは関係ないんだ」

と、言葉をにごした。

雄作は妻が南部邦彦のことを何か耳にして、それで急に夫人の方から旅行などに誘つたのかと案じる心があつたのだが、夫人が何にも知らなそうなので、「厭なこと」を盗難にしてみましたのだ。それは朝の新聞の小説の出来ごとが、ふと頭に浮かんだ言いぬけにすぎなかつた。

玲子



厭なこと。雄作は南部邦彦との交友を厭なことだと知つていた。彼の良識はそれを厭なことだと教えるのだが、彼の感情と肉体が、邦彦の誘いについて答えてしまう。少しの間、妻をとまなつて旅にでも出たらとは、この日頃、たえず雄作の頭をかすめる思いだつたのだ。

雄作と南部邦彦の奇妙な交渉がはじまつたのは学生時代のことだつた。

当時柔道部で黒帯を許されていた雄作が、青年というよりはまだ少年という方がふさわしい後輩達に代稽古をつける時、その少年達の手で首をしめられることにふと快感を覚えたのだ。特に邦彦は美しい少年だつた。にきびの出来る年頃なのに、女の様な美しい肌をしていた。そのくせ、女の体の様にただ柔らかいだけでなく、筋肉がひきしまつて、弾力をもっている。軽くあしらつて何度か転しているうちに、邦彦の体が紅潮し、息がはずみ、甘酸っぱい汗の匂いが鼻についてくる。すると、自分の衿へ両手をかけさせて、しめさせるのだ。自分が落ちてやるのだ。下手なものに首をしめられると、反つて苦しいものなのだが、雄作は邦彦にしめられると、その苦しさに不思議な陶酔をおぼえる。しかし、そんなことを邦彦に告げるには雄作はつつしみ深かつた。しいて知らん顔を作つていた。

けれど、邦彦の方にも雄作に惹かれるものがあつたのか、わざとのように用をこしらえて、雄作の家へたずねて来たりした。

その日も、夜になつて、不意に邦彦が本を借りに来た。紺がすり

のついの衾を着ていたが、ふだん着ない着物をひっぱり出して着てきたのか、折目の正しい和服のどこやらに、樟腦の匂いが漂っていた。それが何か清新な男の色気というようなものを雄作に感じさせた。

借りに来た本は専門の経済学の本だつたが、二人で一緒にそれを書棚から探している時、ふと同じ標題の本が二冊あるのを邦彦がみつけた。本の外がわのケースと、同じ背文字の革表紙の本が、書棚の段を違えて並んでいたのだ。

「これ、二冊あるのですか？」

何の気なしに邦彦がケースの方を書棚からとろうとすると、

「あつ、それはいけないんだ」

と、あわてて雄作が制した。その制し方がもし声に色があるとしたら、薄紅色のような感じにひびいたので、邦彦はかまわずケースをとり出すと、中は革表紙の経済書とは一目で違う、薄い和とじの本だつた。邦彦はケースからそれをぬき出した。

「駄目だつてば……」

雄作がそれを奪おうと手をのばすのを、するりとぬけて、邦彦は本をもつて逃げた。逃げながら、バラツと頁をめくる邦彦の顔に紅が散つた。

見られたと思う雄作の顔も、瞬間色を変えて、

「いけないってば」

と、叫ぶ声が上ずっていた。しかし邦彦は片手に本を持って雄作



の手を逃げまわる。書齋の中を机をはさんでぐるぐると追いかけられた末、とうとう邦彦は部屋のすみに追いつめられ、壁へ押しつけられてしまった。それでも後手に本をかくして返すまいとした。

「返えしてよ、君、駄目だよ、それ……」

雄作がとうとうとしたが、無理に奪つて、破いてしまつてはいけな
いと思う氣おくれがあつた。

「いや！返えさない」

邦彦は強情に両手を後にまわして、しつかり本を持っていた。その本にどんなことが書いてあり、どんな絵が載っているかというところを二人とも知っているだけに、その本を奪い合うだけで、すでに
もう妙な興奮が感じられていた。

「どうしても返えさないと、君の首しめてしまふよ」

とうとう雄作が言つた。邦彦の肩を両手で壁へ押しつけていると
彼の着物の樟脳の匂いが、女の香水の様な効果をもつて刺戟的だつ
た。

「しめてもいいよ」

邦彦が言つた。紺がすりの衿元の白さが、柔道着の時と違つて、
色つぼく、なまめかしく感じられた。

「本当にしめるよ」

「いいさ」

雄作は紺がすりの衿をぎゆうともつた。

邦彦の顔がふくらむように赤くなつた。そして、やがてがくつと
雄作の手に邦彦の体の重みが投げかけられた。

柔道のわざだつたから、カッを入れれば直ぐもとに復す。そのま
ゝにしておいても死ぬようなことはなかつた。雄作は美しい邦彦の

顔を見つめているうちに、その濡れたような唇に激しい力でひかれ
てしまつたのだ。誰も見ていないと承知しながら、思わずあた
りを見廻すと、雄作は自分の唇を邦彦の唇に近づけた。そして、今
自分のしめた咽喉にも、顎にも、頬にも、おそろく生れてはじめて
試みる接吻の雨をふらせてしまつたのだ。そして、もう一度、唇に
ふれた時、息を吹きかえした邦彦が、下から雄作の唇を激しく吸い
かえしたのだつた。

男同志の奇妙なあそびがはじまつたのはそれからのことだつた。

しかし、正常な結婚生活に入れば、そんな変な性の満足は求めな
いで済むものと雄作は思つていた。数多い見合いの写真の中から、
小百合をえらび出した時、雄作はすでに小百合の美しさに心惹かれ
る自分を、やつぱり正常なのだと安心する氣持で見直した。本当に
同性愛に溺れたら、異性を美しいと思わないということを書いてい
た。雄作は小百合を美しいと思ひ、見合して、話し合つて、話し合
つて、快くひびく自分に自信を深めた。正常な結婚生活
に入れると思つたのだ。

自無垢に打かけ姿の小百合の花嫁振は、この人を妻とよべる仕合
せを思わせるに充分だつた。

しかし、新婚旅行の白浜の宿で、雄作は何かしら充ち足りないも
のを感じた。それも結婚したばかりでは、小百合の方に本当に花開
くものがないせいだと思つてみた。

けれど、一年たち、二年たつても、夜の営みはただ夫婦であるこ
とのかための儀式みたいだつた。三年、四年とたつたが子供も出来
ない。それでも小百合夫人が一応は満足しているらしいので、夫婦
の間に喧嘩することなく、仲の良い似合いの夫婦と人にもいわれ

てすごして来た。

たまたま会社の旅行で、義理に出かけた温泉場で、偶然南部邦彦に再会するまで、どこやら充たされないものを残したまま、普通の夫婦生活をして来たのだった。けれど、ゆくりなく久し振りに会った邦彦から、彼がいまだに独身で、異性の恋人を持つても満足出来ない悩みをうったえられると、雄作は通り一べんにさよならと言って別れることは出来なかつた。

相手が男だということは、雄作の心に、妻に対する不貞の言いわけがたつた。そして、ああ、この欲びがあつたのだと、体が思い出した時、雄作と邦彦はお互いにその思いを旅先だけの軽いものでは済まされなくなつてしまつたのだ。

邦彦は手作りのバラの花を持つて、雄作の家へたずねて来た。いけない、いけないと思ひながら犯す肉体のあそびは甘美だつた。邦彦は雄作と小百合夫人の夫婦生活を嫉いて、たわむれに雄作の咽喉をしめたり、又、雄作にしめられることを望んだりした。男二人はどつちが受身ということもなく、たわむれ合い、全身でしめす愛情の表現に疲れると、はじめて邦彦が受身の態勢になつて、そして、最後の満足を得るのだつた。

妻にたいしては、つまましい愛し方しか出来ない雄作が邦彦を相手に痴態のかぎりをつくすのを、ふと我ながら浅間しく思う瞬間がある。燃えている心を体に、浮き雲がさつと影をなげて通りすぎる様に、ふと暗くなる瞬間、雄作は正常に復さなければいけないと思いつつも、妙に安堵する思いがあつた。溺れきつていない自分に、安心するのだ。火の様に燃えている邦彦に済まないと思ひながらもまだ自分は救われる、救われる余地があると思つたのだ。

しかし、この日頃、その反省が邦彦とたわむれている間に決して起らなくなつてしまつた。心も体も陶酔しきつてしまふのだ。ふと我と我を見る瞬間は邦彦に別れてからにかざられていた。

危い……。と、雄作は思い出した。今こそ無理に断ち切らなければ、いつしか自分という人間は駄目になつてしまうというおそれを感じ出したのだ。

かくて、正常になりたいと願う夫と妻は、相手こそ正常であると信頼して、それにすがるべく、はからずも一緒に旅を思つたのだつた。

四

「正常になりたい……」

同じ想いに悩んでいる者がもうひとりいる。貴船一郎という男だつた。

人間の心の中には誰にでも多少、サジズムやマゾヒズムの傾向はあるものだ。しかし、ではどこまでが正常で、どこまでが変態かという限界はなか／＼むずかしい。少くとも貴船一郎は自分を変態性慾者だとは思つていない。そのくせ、「正常になりたい」と思うのは、自分のサジズムがだん／＼に進んできて変態性慾者といわれるようになるのではないかという恐怖があつたからだ。本当のサジストになつてしまつてからではとりかえしがつかないと思うのだ。酒のみのお酒がだんだんに量を増すように、最初は女を縛るだけで満足出来たのが、同じ縛るにしても、たゞ後手にくくつた位では満足出来なくなつてくる。えびの様に体を曲げさせたり、反対にそり身に首と足を無理に結えたりするようになる。そして次には芋虫のよう

なる。

一郎の性癖が激しくなつていつたのは、一つには相手の順子のせいもある。ふと知り合つた女だつたが、お互いの体の中の虫が好き合つて深い仲になつてしまつた。順子の愛情が深まれば深まる程、彼女は一郎にひどいめにあわされることを望んだ。一郎が自分の性癖を平常に戻すには、順子と別れてしまわなければ出来ないことだつた。今のうちに切れなければ……とは、何度思つたか知れない。しかし、どうしても実行にうつすことが出来なかつたのだ。このまゝすすんでいつたら自分は順子を殺してしまふ所までいくのではないかと恐れる。そうなれば一郎の生涯はもうあと一二年で破れ去つてしまふに違いないのだ。それは順子の破滅であるとともに一郎の破滅だつた。愛し合う者にとつて心中程たのしいものはないのかもしれない。しかし一郎は順子を愛してはなかつた。順子を蔑み、憎み、自分の体に巣くう虫が順子に惹かれるのをやりきれなく思つていたのだ。

新世界の旅館で偶然小百合夫人の急場を救つた時、この人によつて救われるという気がしたのを、一郎は神の啓示の様に感じた。一目合つた瞬間から一郎の心に忘れていた清純なものが返えつてきたのだ。

小百合夫人と一緒に自動車に乗つてミナミまで送つて行きながらにも、汚れてしまった自分の青春が、再び洗われて新鮮に戻つてくるような喜びを感じた。

人家の建てこんだ下街に住んで、順子を情婦にして、貧しくその日を送っている貴船一郎も、曾つて、小百合夫人と同じような社会に生きていたこともあつたのだ。美校の学生のうちから展覧会に入

選し、将来を期待された幸福な時代、物質にも不自由せず、良家の息子として若々しい夢に心を一樣にふくらませていた頃もあつたのだ。

安い稿料のエロ小説を書いて、わずかに生計の足しにしていてもさし絵を書くころとしないのは、まだ絵に対する夢を本当に捨て切つていないからかもしれない。

しかし何にしても、偶然会つた小百合夫人から、彼は故郷の匂いをかいだような気がしたのだ。そしてそれは自分の若い日の清純さを思い出させ、再びその日に帰れなくとも、泥沼のような順子との生活からは、這い出したいと願う想いが泣きたい程に胸をしめつめたのだつた。

「金曜日の夕方」という約束が、とても金曜日まで待てなかつた

これはいつたい恋心なのだろうか――

と、一郎は思う。それすら忘れていた思いだつた。

夕暮が近づくと、一郎の足はミナミへ向いて、小百合夫人と一緒に入つて喫茶店へ行つてみたくなる。金曜日という約束さえ、本当に彼女が来るかどうかかわからないのに、どうしてもそれより前に来るだろう。しかし恋する者は奇蹟を願う。願えば奇蹟がおこりそうな気がする。

毎日、毎日、一郎はミナミの喫茶店まで通つた。通りを歩いてどこかに小百合夫人が居るのではないかと探した。救い道を求める心と、思慕の情が入り交つて、たび、たび小百合夫人に会いたいと思つた。

約束の金曜日には、もう心が苦しい程に張りつめた。

しかし、それ程待ちに待つた小百合夫人は来なかつたのだ。



ふくらみきつた
心に与えられた悲
しみは、憤りのよ
うな苛立たしさに
変った。

貴船一郎はせめ
て、村山に聞いた
ら、彼女の片鱗で
もうかがえるかと

思うと、もうやもたでもたまらず、新世界へ引き返えして「風流」
をのぞいた。それまでも幾度か村山に尋ねてみたいと思つたが、順
子に洩れるとあとが面倒だと、僅かに自分を制して、金曜日、金曜
日と我慢して来たのだ。

「風流をのぞくと、幸、村山はひとりで飲んでいた。

貴船一郎は彼女のことを尋ねるのに、何となく顔のあたりが硬ば
るのを、自分で自分に照れ臭く思つた。

「実は俺も知らねえんです」

そう村山が答えた時、得体のしれない憤りに声がふるえた。

「なめるな！」

思わず大きな声になつた。

「本当ですよ、先生」

と村山は貴船を先生と呼んで言つた。

「俺も会いていと思つていゝんです。つるちゃんという名だけしか
知らねえんで……間のぬけた話でさあ」

しかし一郎は村山がかくしているとしか思えなかつた。先生と言
われたことさえ馬鹿にされたような気がする。尤もお山はいつも一
郎を先生と呼んではいた。曾つて一度だけ村山をモデルに使つたこ
とがあつたからだ。

「本当に教えてくれ、頼むよ、この間君は
一緒に飲んでいただろう、どこのひとなん
だ？」

すると村山はしばらく何か考えているよう
だつたが、急にニヤツと頬をくずすと
「ようがす。どうも先生にあつちやかなさ

ねえ、これから一緒に行きましょう」

そう言つて立ち上つた。

あの人に会える……。

貴船一郎は村山の前でその喜びをかくすのに骨を折つた。一緒に行こうと言われた瞬間、今まで硬ばつていた自分の皮膚が急に生き生きと輝いたように思つたからだ。

五

地下鉄を昭和町でおりて、村山の行くところについて行つたが、一郎はそのあたりが、つる子というその人の印象には、あまりふさわしくないことさえ氣にとめなかつた。たゞ、会つたらどう言おう今たずねて行つて、はたして本当に会えるだろうか、どんな顔で自分を迎えてくれるだろう。そんな考えが次から次に湧いてきて、歩いている道順を覚えておこうと頭のすみで思いながら、それを押し流す程ただ彼女の面影で一杯だつた。

「ここです」

と、村山は一軒の家の前に足をとめた。二階家だが長屋らしい建て方で、傾いているような家だつた。

表札を見ると、村山富男としてある。

一郎はどきつとした。まだ村山が嘘をついてここまでつれて来たとは氣がつかなくかつた。それより村山に対する嫉妬のようなものの方がさきに胸にぐつとささつた。

「入つて下さい」村山が外から鍵をはずすのを、ふといぶかしく思つたが、もしかしたら、彼女を村山が監禁しているのではないかという危懼に緊張した。

しかし部屋の中は真暗でしいんとして人の氣配もしない。村山が上つて電氣をつけるのに、自分も靴をぬいで上つた。二階にいるのかと思う心があつたのだ。

座敷に入つたものの、座りもやらす立っている貴船一郎に、村山が言つた。

「先生、ここは俺の家でさあ、あの女がいると言つたのは、ありやあ嘘つばちなんですよ」

「なに？」

「ハハ、。一杯かけられましたね」

笑っている村山の頬に、いきなり一郎のこぶしがとんだ。

一日中、いやこの一週間張りつめ切つていた神経が、ブツツと音をたてて切れたような氣がした。

「こいつ！よくも俺を」

期待が大きかつただけに、悲しみも憤りも激しく、泣きそうな声で叫ぶと、一郎は村山を滅茶くになくつた。

「あつ！」

と、ひるんで腰をおとす村山を、一郎は蹴つた。

村山の手が一郎の足をつかんだ。その手を一郎は逆手にねじ上げた。

「ううっ！」

と、村山は呻いたが、とられた手をふりもどこうとする。

「くそ！」

一郎は自分のかけている絹マフラーをぬき出して、村山の手を後手に縛つてしまった。村山が本当に抵抗したら、体力からいつても貴船一郎を逆に押さえこむ位わけはなさそうなのに、村山は女の

力ぐらしいしか出さないのだ。苛めてもらいたい村山の芝居とは、一郎はまだ気がつかなかった。

「さあ、言え、本当に知らないのか。こんな所まで俺をつれて来てよくも嘘だなどと……こいつ！」

一郎はベルトをはずすと、それで村山の背をピシッと打った。

「つるちやんは俺の大切な女だ。そうやすやすは教えられねえ」

村山はなおも馬鹿にしたように言う。

「もう一度言ってみろ」

一郎は村山の髪をムンズとつかむと、咽喉の皮が破れそうに後へ強く引いた。

「何度でも言つてやる」

村山はとぎれとぎれにあえぎながら毒づくのだ。

一郎は部屋の中を見廻した。

壁には村山の着物が帯と一緒にぶら下っている。その黒い兵古帯をとつてくると、村山の首にかけて、後手に縛つてある結び目を通して、髪の毛と手がふれ合う程にきりきりと締めた。肩の骨がきしむような音をたてた。

村山は苦しそうに足を泳がせてあえいでいる。

「さあ、どうだ」

一郎も肩で息をする程呼吸をはずませている。長い髪が半分顔にかゝつて、青白い顔が能の面のようにみえた。

村山は満足そうな吐息をかくすと、なおも、自由のきく足であればれた。わざと下から一郎を蹴上げようとするのだ。

「よし！」

一郎は足まで縛つてしまうつもりで、何か紐はと見廻したが、何

にもないので、村山のズボンのベルトをはずそうとした。その細い革ベルトで足まで縛ろうとしたのだ。

そして、ふと、村山のズボンに目がつくと、思わずはつとして息をとめた。

村山が責められていることに歓びを感じている証拠が、そこに歴然としていたのだ。

ああ、そうだったのかー

はじめて一郎は気がついた。村山の性癖を前から知らないわけでもなかった。うつかりそれにのつてしまった自分が馬鹿だった。

浅間しい……。

そう思った。

一郎は急に縛つてあつた兵古帯をとくと、自分のマフラまでとく気力もなく、物も言わずに外へ出て行つてしまった。

後から追いつがるように村山の声が聞こえていたが、夜の海を泳ぐ魚のように、貴船一郎はいつしか見えなくなっていた。

【未完】

松井籟子女史の快心作

「淫火」について

新年号より連載しております淫火は回を追う毎に益々迫力を加え本誌愛読者の熱狂的な絶讃を受けて参りましたが、皆様の御支持が余りにも大きいのに一驚された松井先生は第六回以後、更に想を新にして絶大な御期待に副いたいと張切つておられますので、今後の淫火は必ずや皆様をあつと言わすことと信じます。小百合夫人は果して誰に縛られるでしょうか？どうか御期待下さい。

KK通信大增頁

見本一部二十円
半年分 百円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として昨年十月号より発足しましたKK通信は号を追って充実、第六号からは一躍倍に増頁、こゝに第八号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非KK通信も併せて御覧下さい。

特別會員募集

愛読者の強い要望に答えて特別會員制による諸行事を企画しました。詳細及び申込用紙はKK通信第七号に同封してあります。

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に相当と思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮て御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい。

- 一、縛られた女の写真に関して (塚本鉄三)
- 二、男子同性愛の件について (染田 玄)
- 三、縛られた女の絵について (喜多玲子)
- 四、編集方針の一般について (箕田京二)

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年八月号以降より毎号若干保有して居りますが、七月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の方は一部送共九十円、本年度の方は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信第四号以前品切れ。

◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封を願ひます。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尙理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願ひます。

先ず書店へ

御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買得のないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚一組一年分御申込の方には八枚一組サービス品として贈呈申し上げます。その外KK通信毎号贈呈

奇譚クラブ

第七巻 第五号
毎月一回一日発行

五月号

定価 百円

昭和二十八年四月三十日印刷
昭和二十八年五月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。